

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集

下 SHIMO	田 TA	畑 BATA	遺	跡
小 KO	山 YAMA	尻 JIRI	東 HIGASHI	遺 跡
田 TA		上 GAMI	遺	跡
赤 AKA		坂 SAKA	遺	跡
小 KO	山 YAMA	尻 JIRI	西 NISHI	遺 跡

1985

宮崎県教育委員会

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集

下 SHIIMO	田 TA	畑 BATA	遺	跡
小 KO	山 YAMA	尻 JIRI	東 HIGASHI	遺 跡
田 TA		上 GAMI	遺	跡
赤 AKA		坂 SAKA	遺	跡
小 KO	山 YAMA	尻 JIRI	西 NISHI	遺 跡

1985

宮崎県教育委員会

正 誤 表

ページ	行	誤	正
例 書	上から8行目	あった。	あった。
3~4	下から4行目	(アカシヤ境風)	(アカシヤ境風)
9	上から7行目	口縁は平口縁	口縁は平口縁
	下から5行目		石縁
10	下から3行目	輪郭	輪郭
	"	開所	起所
17		有紐	有紐
27	上から2行目	内蓋	内外蓋
"	上から3行目	無縁蓋	無縁蓋
"	下から10行目	形勢をなす	形勢をなす
"	下から9行目	立より	立より
"	下から4行目	底面付帯付足	底面付足
"	"	ものである。	ものもある。
28	上から7行目	表で蓋	表と蓋
"	下から12行目	口縁中	縁中
"	下から4行目	独立柱建物と主体	独立柱建物と主体
29	註①	織文・胡胡	織文ノ胡・胡胡
"	"	織文	織文
"	"	「るめん」	「どるめん」
"	註②	長厚茶蓋	長厚茶蓋
"	"	清武町教育委員会	清武町教育委員会
"	註④	「宮崎学園部守録	「宮崎学園部守録
34	番号28	地	地
43	上から3行目	れない。変則	れない。か光澤
"	下から7行目	深いヒビが入り	深いヒビが入り
46	上から17行目	1個蓋は	1個土蓋は
47	上から2行目	へう状土具	へう状土具
53	下から10行目	大塚2.85mを	大塚2.85mを
57	上から13~14行目		13~14行目を参照
58	上から4行目	蓋1	蓋1 (第11図1)
60	上から2行目	底面には開所	底面は開所
61	下から1行目	出土土器器身分属	出土土器器身分属
70	上から5行目	下縁は茶褐色	下縁は茶褐色
80	上から11行目	覆まざる	覆まざる

ページ	行	誤	正
80	上から17行目	上縁1基	上縁1基
"	下から11行目	北高蓋	北高蓋
83		第9図	第10図
94		第9図	第10図
"		第10図	第11図
"		第11図	第12図
"		第12図	第13図
"	下から8行目	石部の上縁状況	石部の上縁状況
95		第10図	第11図
"		第11図	第12図
96		第12図	第13図
"		第13図	第14図
97		第14図	第15図
"		第15図	第16図
98		第13図	第14図
99		第14図	第15図
"		第15図	第16図
100	下から1・2行目	土底	土底
101	上から1・2・4行目	土底	土底
"	上から7行目	還元	還元
108	上から4行目	蓋ノ神式	蓋ノ神式
112	上から2行目	(1, 11, 22等)	(1, 11, 22等)
114		V: 伊賀黄褐色土	
120	下から12行目	高台付ものか出土	高台付ものか出土
"	下から9行目	バリエーションなか	バリエーションなか
126		V層 暗褐色土	
130	上から20行目	(第4図V、VI、VII)	(第4図V、VI、VII)
	下から8行目	基部Vと	基部Vと
図版5		A 2	S A 2
図版10		左上の100	100
図版14		91	90
		98	91

序

宮崎県教育委員会では、地域振興整備公団の委託を受け、昭和55年から宮崎学園都市建設地における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施しています。

本書は、この調査のうち主として昭和58年2月から59年6月にかけて実施した遺跡について集録したものです。時代は旧石器、縄文、弥生、古代、中世と多岐にわたり、遺物にも本地方では出土例の少ない曾畑式土器、また本県では希少例の墨書土器も見られ、他地区の報告書と同様、貴重な資料が提供されたといえます。

本書が専門の研究だけでなく、学校教育や社会教育の面にも広く活用されると共に、文化財に対する認識と理解のために役立つことを期待しています。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を賜った公団や調査指導の先生方、地元清武町に対して衷心から御礼を申し上げます。

昭和60年2月

宮崎県教育長 後 藤 賢三郎

例 言

1. 本書は、昭和56・58・59年度に実施した宮崎学園都市建設事業に係るものの内、従来農業高校予定地とされた5遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託を受けて、宮崎県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、面高哲郎・永友良典・長津宗重・北郷泰道・近藤 協・菅付和樹・日高孝治・谷口武範が行った。
4. 執筆の分担は次のとおりであるが、文責については、各文末に明記した。また、総括編集には北郷があった。

第 I 章	北郷
第 II 章	北郷，日高
第 III 章	長津，近藤
第 IV 章	菅付，谷口
第 V 章	面高
第 VI 章	近藤

本文目次

第I章 序 説

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	1

第II章 下田畑遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境	5
第2節 調査の経過および概要	5
第3節 層 位	5
第4節 各時代の遺構と遺物	6
1. 旧石器時代	6
2. 縄文時代	6
3. 弥生時代	10
4. 平安時代	12
第5節 まとめ	28

第III章 小山尻東遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境	38
第2節 調査区の設定と概要	38
第3節 包含層の状態	38
第4節 縄文時代の遺構と遺物	38
I 集石遺構	38
1. 雑群の分布状況	38
2. 集石遺構	41
3. まとめ	46
II 遺 物	46
1. 土 器	46
2. 石 器	47
3. まとめ	55
第5節 弥生時代の遺構と遺物	58
第6節 古墳時代の遺構と遺物	58
第7節 平安時代の遺構と遺物	58
第8節 中世の遺構と遺物	70
第9節 まとめ	70

第IV章 田上遺跡の調査

第1節 調査の概要	80
第2節 遺跡の立地と環境	80
第3節 層 序	80
第4節 遺構と遺物	82

1. 遺構	82
2. 遺物	87
第5節 まとめ	97
第V章 赤坂遺跡の調査	
第1節 遺跡の立地	105
第2節 調査の経過及び概要	105
第3節 調査の記録	105
1. 縄文時代の遺構と遺物	105
2. 古墳時代の遺物	110
3. 平安時代の遺構と遺物	110
4. その他	112
第4節 まとめ	120
第VI章 小山尻西遺跡の調査	
第1節 遺跡の立地と環境	125
第2節 調査の方法	125
第3節 遺構と遺物	125
第4節 歴史的背景	134
第5節 まとめ	135

挿 図 目 次

下田畑遺跡

第1図 土層断面実測図	3~4	第16図 SB1・2・3 実測図	13
第2図 ナイフ形石器実測図	6	第17図 SB4・5 実測図	14
第3図 縄文土器実測図・拓影(1)	6	第18図 SB6・7 実測図	15
第4図 石鏃実測図	7~8	第19図 SA1 実測図	17
第5図 縄文土器実測図・拓影(2)	7~8	第20図 SA2 実測図	17
第6図 縄文土器実測図・拓影(3)	7~8	第21図 SA2 カマド実測図	17
第7図 縄文土器実測図・拓影(4)	7~8	第22図 SZ1 遺物出土状況	18
第8図 スクレイパー実測図	7~8	第23図 SA1 出土土器実測図	19~20
第9図 石斧実測図	7~8	第24図 SA1 山十須恵器実測図	19~20
第10図 石器実測図	7~8	第25図 SA2 出土土器実測図	19~20
第11図 SA4 出土弥生土器実測図・拓影(1)	11	第26図 SA2 出土土器実測図(2)	19~20
第12図 SA4 出土弥生土器実測図・拓影(2)	11	第27図 SZ1 出土土器・須恵器実測図	21
第13図 SA5 出土弥生土器実測図・拓影	11	第27図-2 SZ1 出土須恵器実測図	21
第14図 A区 出土弥生土器実測図	11	第28図 SB1 出土土器実測図	21
第15図 SA4 実測図	12	第29図 A区出土土器実測図	23~24
		第30図 A区出土土器実測図	23~24

第31図	A区出土布製土器実測図	23~24
第32図	SA1 出土十編実測図	23~24
第33図	SZ2 出土十編実測図	23~24
第34図	SZ1 出土土籠実測図	23~24
第35図	A区 出土土籠実測図	25~26
第36図	A区 出土須恵器実測図	25~26
第37図	石器実測図	25~26
第38図	砥石実測図	25~26
第39図	SA1 出土軽石製支脚	25~26
第40図	SA2 出土鉄製品実測図	25~26

小山尻東遺跡

第1図	グリッド配置図及び礎・集石遺構分布図	40
第2図	S12・3・4・5号	44
第3図	S16・7・8・9号	45
第4図	出土土器拓影(1)	48
第5図	出土土器拓影(2)	49
第6図	出土土器拓影(3)	50
第7図	出土土器拓影(4)	51
第8図	出土土器拓影(5)	52
第9図	出土石器1	54
第10図	出土石器2	56
第11図	A地区山上弥生土器実測図	58
第12図	1号土壇実測図	59
第13図	1号土壇出土土器実測図	59
第14図	SA1 実測図	60
第15図	SA1 出土土師器 (I)	63
第16図	SA1 出土土師器 (II)	64
第17図	SA1 出土土師器 (III)	65
第18図	SA1 出土土師器 (IV)	66
第19図	SA1 出土土師器・陶磁実測図 (V)	67
第20図	SA1 出土須恵器 (VI)	68
第21図	SA1 出土土籠	68
第22図	1号集石遺構	69
第23図	1号集石遺構実測図出土石臼・板碑実測図	70

田上遺跡

第1図	土層実測図	81
第2図	S11・2・3 遺構実測図	83
第3図	S14・5・6 遺構実測図	84

第4図	S17・8 遺構実測図	85
第5図	集石遺構分布図	86
第6図	出土縄文土器実測図・拓影(1)	89
第7図	出土縄文土器実測図・拓影(2)	90
第8図	出土縄文土器実測図・拓影(3)	91
第9図	土器分布図	91
第9図	石器実測図(1)	93
第10図	石器実測図(2)	95
第11図	石器実測図(3)	95
第12図	石器山上分布図	96
第13図	SC1 遺構実測図および出土器物実測図	98
第14図	その他の遺物実測図(1)	99
第15図	その他の遺物実測図(2)	99

赤坂遺跡

第1図	周辺の地形図	106
第2図	遺構分布図	107
第3図	S12実測図	108
第4図	縄文時代遺物分布状況図	108
第5図	縄文時代遺物実測図	109
第6図	石器実測図	110
第7図	古墳時代遺物実測図	111
第8図	平安時代遺物分布状況図	112
第9図	SA1実測図	113
第10図	SB1・2実測図	114
第11図	平安時代遺物実測図	115
第12図	平安時代遺物実測図	116
第13図	平安時代遺物実測図	117
第14図	平安時代遺物実測図	118
第15図	平安時代遺物実測図	119
第16図	SE1 土層実測図	120

小山尻西遺跡

第1図	土層断面図	126
第2図	大乗妙典供養塚周辺地形図	127
第3図	羽込部形状模式図	128
第4図	大乗妙典供養塚図	129
第5図	大乗妙典供養大永六年板碑実測図	130
第6図	II・III・IV板碑実測図	131
第7図	出土遺物実測図	133

図 版 目 次

- | | |
|---|--|
| <p>図版1 下田畑遺跡(1) 下田畑遺跡遠景(南東より)
A区遺物出土状況(北東より)</p> <p>図版2 下田畑遺跡(2) 東からSB2・SB3(南西より)
東からSB1・SB4・SB5
(南西より)</p> <p>図版3 下田畑遺跡(3) SB7(南東より)
SE1 セクション</p> <p>図版4 下田畑遺跡(4) SA2遺物出土状況(南西より)
SA2(北西より)</p> <p>図版5 下田畑遺跡(5) SA2 東カマド(西より)
SA2 東カマド(西より)</p> <p>図版6 下田畑遺跡(6) 縄文土器(1)</p> <p>図版7 下田畑遺跡(7) 縄文土器(2)</p> <p>図版8 下田畑遺跡(8) 縄文土器・石器・弥生土器</p> <p>図版9 下田畑遺跡(9) 弥生土器・土師器</p> <p>図版10 下田畑遺跡(10) 布痕土器・須恵器・碇石製支脚</p> <p>図版11 小山尻東遺跡(1) 小山尻東遺跡遠景
小山尻東遺跡近景</p> <p>図版12 小山尻東遺跡(2) 集石遺構写真(7・8・9号)</p> <p>図版13 小山尻東遺跡(3) 縄文土器写真1</p> <p>図版14 小山尻東遺跡(4) 縄文土器写真2</p> <p>図版15 小山尻東遺跡(5) 土器・石器</p> <p>図版16 小山尻東遺跡(6) 石器</p> <p>図版17 小山尻東遺跡(7) 環状石斧出土状況
SC1</p> <p>図版18 小山尻東遺跡(8) SA1
SI1</p> <p>図版19 小山尻東遺跡(9) SC1 出土土師器
SA1 出土土師器
SC1 出土石臼
SA1 出土土師</p> | <p>図版20 田上遺跡(1) 北 小山尻東遺跡・南 田上遺跡近景(西より)
SI2(南より)</p> <p>図版21 田上遺跡(2) A-1類出土状況
底2類出土状況</p> <p>図版22 田上遺跡(3) 出土縄文土器(1)</p> <p>図版23 田上遺跡(4) 出土縄文器(2)
出土石器
SC1 出土土師器</p> <p>図版24 赤坂遺跡(1) 襪分布状況(北西より)
SI1・2・3検出状況(北より)</p> <p>図版25 赤坂遺跡(2) SI2(東より)
古墳時代遺物出土状況(北より)</p> <p>図版26 赤坂遺跡(3) SB1・2(西より)
SA1 遺物出土状況(西より)</p> <p>図版27 赤坂遺跡(4) SA1 カマド(西より)
SA1 「大」の字刻のある土師器出土状況(北西より)</p> <p>図版28 赤坂遺跡(5) SE1(北より)
SE1 土層(南より)</p> <p>図版29 赤坂遺跡(6) 縄文・古墳・平安時代遺物</p> <p>図版30 赤坂遺跡(7) 平安時代遺物</p> <p>図版31 小山尻西遺跡(1) 大乗妙典供養塚近景
大乗妙典供養塚基部付近</p> <p>図版32 小山尻西遺跡(2) S2・N1トレンチ・遺物出土状況</p> <p>図版33 小山尻西遺跡(3) 出土遺物</p> |
|---|--|

表 目 次

下田畑遺跡

表1 縄文土器観察表	30
表2 弥生土器観察表	33
表3 土師器・須恵器観察表	34
表4 石器計測表	37
表5 掘立柱建物跡一覧表	37
表6 土鍬法量表	37

小山尻東遺跡

表1 土師器法量表	61
表2 SA1出土土器器形分類図	61

表3 縄文土器観察表	72
表4 SA1出土土器観察表	76
表5 SA1出土土師器観察表	79

田上遺跡

表1 石器計測表	93
表2 縄文土器観察表	102

赤坂遺跡

表1 土器観察表	121
----------	-----

小山尻西遺跡

表1 宮崎県内経典供養碑一覧表	136
-----------------	-----

付図1 下田畑・小山尻東・田上・小山尻西遺跡位置図

付図2 下田畑遺跡遺構分布図

第 I 章 序 説

第 1 節 調査に至る経緯と経過

昭和56年11月19日から昭和57年3月30日までの間、福祉施設建設予定地造成に先立ち工事用取り付け道路等の必要から赤坂遺跡（7号地）の発掘調査が要請され、県文化課において調査を実施したが、本報告に収録するその他の遺跡群は農業高校建設予定地として造成が計画された地域に所在するものである。造成に先立つ発掘調査を急ぐとの学園都市建設局及び地域振興整備公団の要請から、調査期間は昭和58年度から59年度にまたがり、第1期の調査は下田畑、小山尻東遺跡の一部を昭和59年2月29日から3月31日まで、第2期の調査で第1期の継続と田上遺跡、小山尻西石塔群の発掘を昭和59年4月5日から6月30日まで実施した。

第 2 節 調査の組織

発掘調査委員会および調査事務局の組織は、次のとおりである。

特別調査員 藤原宏志 宮崎大学助教授
町田洋 東京都立大学助教授

事務局 宮崎県教育委員会

教育長 後藤賢三郎（昭和56～59年度）

教育次長 甲斐俊則（昭和56年度）、内田琢也（昭和57・58年度）、兼田克己（昭和59年度）

教育次長 船木哲（昭和56～59年度）

文化課長 山本一麿（昭和56年度）、井上鉄哉（昭和57・58年度）、平田和彦（昭和59年度）

課長補佐 村田広則（昭和56年度）、佐野芳弘（昭和57・58年度）、成見実（昭和59年度）

庶務係長 島中勲（昭和56・57年度）、安部信宏（昭和58・59年度）

主任主事 穂之上昇（昭和56～58年度）、井野伸一（昭和59年度）

文化財係長 山下正明（昭和56年度まで）

主幹兼埋蔵文化財係長 田中茂（昭和57～59年度）

（調査員）

岩永哲夫（昭和56～58年度）、面高晋郎（昭和56～59年度）、永友良典（昭和56～59年度）、長津宗重（昭和57～59年度）、北郷泰道（昭和56～59年度）、近藤協（昭和59年度）、菅付和樹（昭和56～59年度）、日高孝治（昭和57～59年度）、谷口武範（昭和57～59年度）

調査協力 清武町教育委員会

調査補助員 永友加奈子、長友三千夫

埋蔵文化財センター整理専門員 津隈久美子

整理補助員 堀田慈子、酒井晴子、日野美智子（昭和58年度まで）

整理員 藤丸美代子、渡辺祥子、菊野悦子、鳥越智子、荒武望忠、荒木慶子、荒木真由美、加藤泰子、富永優子、橋本真智子、松岡邦子、清水玲子、永峰まり子、竹島典江、川崎法子、高山幸子、田原辰子、金丸琴路、西洋子、丸山直子、佐々木ゆみ子、

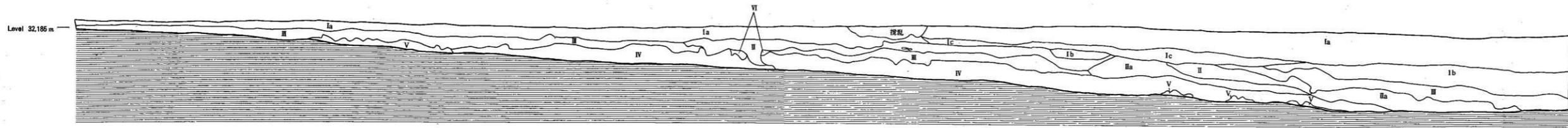
溝口ふさ子, 野村 涼子, 長沼 幸子, 斉藤 保子, 追坪千代子, 金井 裕子, 東 えり子

(北郷泰道)

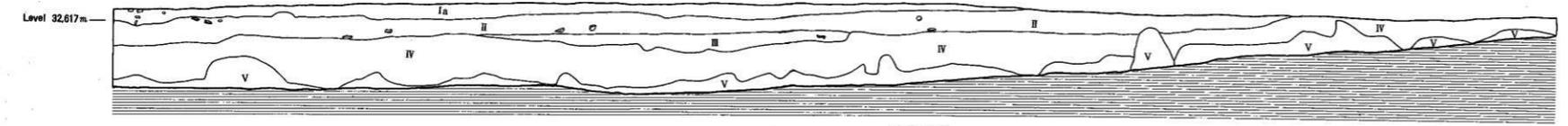
1. 山内石塔群 (23号地)
2. 下田畑遺跡 (1号地)
3. 赤坂遺跡 (7号地)
4. 小山尻西石塔群 (8号地)
5. 浦田遺跡 (4号地)
6. 入料遺跡 (5号地)
7. 小山尻東遺跡 (2号地)
8. 田上遺跡 (3号地)
9. 堂地西遺跡 (9号地)
10. 平畑遺跡 (10号地)
11. 堂地東遺跡 (11号地)
12. 熊野原遺跡 (14号地)
13. 犬馬埜遺跡 (13号地)
14. 前原西遺跡 (15・16号地)
15. 前原北遺跡 (20号地)
16. 前原南遺跡 (19号地)
17. 陣ノ内遺跡 (18号地)
18. 車坂城跡
19. 木花遺跡 (21号地)
20. 今江城 (仮称) 跡



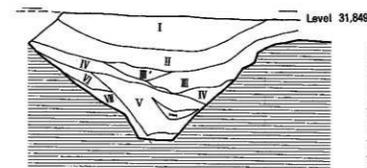
Fig. 1 研究範囲遺跡分布位置図



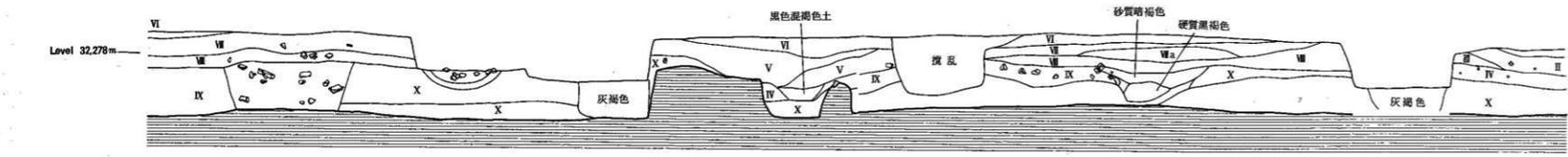
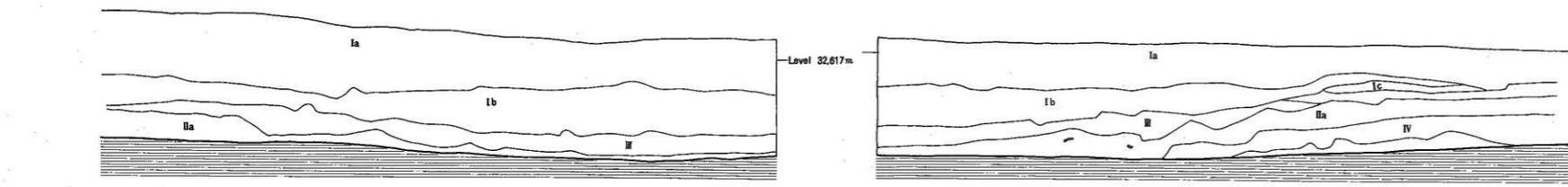
- Ia ……黒褐色土層 (火山灰粒を全体的に含む, やや明るい砂質)
- Ib …… " (火山灰粒をIaより多く含む, 密度が高い)
- Ic …… " (部分的に火山灰粒の乗りブロック状をもつ)
- II ……暗褐色土層 (しまっている)
- III ……暗褐色土層 (やわらかくやや粘質)
- IIIa ……暗褐色土層 (やわらかく粘質)
- IV ……黒色土層 (IIIよりやわらかく粘質性が強い)
- V ……赤土層
- VI ……固くしまった黒褐色の土



- Ia ……黒褐色土層 (火山灰粒を全体的に含む)
- II ……黒褐色土層 (やや明るいごくわずかの火山灰粒を含む)
- III ……黒色土層 (やや明るい, 固くしまっている)
- IV ……黒色土層 (やわらかくて, 粘質性をもつ)
- V ……アカホヤ混入



- I ……やや褐色おびた黒色土層 (砂質)(アカホヤ粒 (2~3 cm) 少量混入)
- II ……黒褐色土層 (アカホヤ粒 (1 mm) を少量混入)
- III ……赤黒を帯びた黒色土層
- IV ……黒色土層 (アカホヤ混入)
- V ……暗褐色土層 (アカホヤ塊混)
- VI ……アカホヤ塊粒を主体とする攪乱土
- VII ……暗褐色土層 (アカホヤ塊混)
- VIII ……褐色土層 (アカホヤ粒少量混入)



- VI ……アカホヤ
- VII ……硬質黒色層
- VIIIa ……砂質黒色土層 (アカホヤを少し含む)
- VIII ……硬質黒褐色層
- IX ……硬質褐色層
- X ……黄褐色層

第1図 土層断面実測図

第II章 下田畑遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境

下田畑遺跡は、学園都市建設予定地内の北西端部に位置し、標高35mから32mの丘陵縁辺に営まれた縄文時代早・前期、弥生時代、平安時代に及ぶ複合遺跡である。地形的には、西に隣接する宮崎医科大学敷地と一連で北に傾斜をもち、現況は段々畑に開削され、遺構、遺物の検出はその最上段部に限られた形となったが、最下段の現水田面に至る傾斜面上に遺跡は広がっていたものと思われる。

(北郷泰道)

第2節 調査の経過および概要

下田畑遺跡は宮崎郡清武町大字木原字下田畑に所在する。宮崎学園都市遺跡群内の農業高校開発予定地内の調査として昭和59年2月29日より6月30日まで発掘調査を行った。

本遺跡は昭和56年に行なわれた事前調査や近接地における道路拡幅工事の立会い調査等によりアカホヤ層上位に黒色土層が存在し、また下位の硬質褐色土層よりは焼石が出土することが確認されていた。

調査は調査区内をA・Bに分けて行った。A区においてはまず重機により表土を除去した後、土層確認の為の土手を2ヶ所南北方向に残しながら掘り下げを行った。その結果アカホヤ層の上層より縄文時代前期の曾畑式土器の包含層、その上位には古代(平安時代)を主とする包含層が確認されたが、同様な黒色土層内であったため平面的に識別することは困難であった。そのため、遺物の分布状況を平板測量で実測を行いながら、遺構検出面(アカホヤ層)まで掘り下げを行った。その結果A区において、遺構としては古代(平安時代)の独立柱建物跡7軒、カマド付竪穴住居跡2軒、土坑1基及び土器集積遺構と弥生時代の土坑1基が確認された。また主な遺物としては、土師器、須恵器、弥生土器および縄文時代前期の曾畑式土器が出土している。

また、アカホヤ層上面の遺構確認後、アカホヤ層下位の遺構、遺物に関する調査を行った。まず、重機により無遺物層であるアカホヤ層を除去した後、掘り下げを行った。アカホヤ層直下には、硬質黒色土層が存在したが無遺物層であった。その下位の硬質褐色土層より、焼石と縄文土器(塞ノ神式土器)および石器等の散布が見られた。しかし焼石の散布状況は集石として確認しえるものではなかった。またその他の遺構は平面的には確認しえなかったが、土層断面より数ヶ所の掘り込みが確認されている。またその下層よりはナイフ形石器が1点出土している。

B区は原地形が東から西へ傾斜しており、西側の部分ではかなりの量の黒色土層の堆積が認められたが、遺構、遺物は少量確認された程度であった。しかし東側の部分において若干の削平は受けていたが、アカホヤ層上面において弥生時代の竪穴住居跡が1軒確認されている。

(日高孝治)

第3節 層位

約20cmの表土層を除去した後の、下田畑遺跡における基本層序は次のとおりである(第1図)。

土層は、黒褐色土層で文明の火山灰に起源すると思われる白黄色の火山灰を含み、その混入の状態によってさらに細分出来る。Ⅱ層は、暗褐色土層で土器片を包含しはじめ、Ⅲ層は、黒褐色土層でこの層から竪穴住居跡及び掘立柱建物跡の掘り込みが存在するが、その明瞭な把握は困難であった。Ⅳ層の黒色土層は、縄文時代から古代にかけての土層といえるが、本遺跡においては、縄文前期の曾畑式土器を下層に包含しただけである。Ⅴ層からアカホヤの混入がはじまり、Ⅵ層が6,300 B. P.年といわれるアカホヤ火山灰層である。

アカホヤ火山灰層下のⅦ層は、硬質黒色土層で中にはほとんど遺物が混入されることがない。塞ノ神式土器を包含するのは、Ⅶ層の硬質黒褐色土層であり、集石遺構等のこの時期の遺構はⅧ層の硬質褐色土層に掘り込まれる。

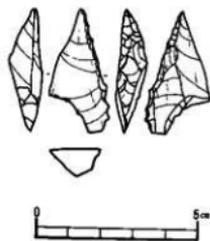
X層の黄褐色土層が旧石器時代の層といえるが、その面的な遺物の広がりとはとらえられている。さらに、その下のXI層は、始良Tn火山灰層に相当するようである。

(北郷泰道)

第4節 各時代の遺構と遺物

1. 旧石器時代

明確な旧石器時代の包含層は確認されなかったが、ナイフ形石器が、IX層下層で出土している。ナイフ形石器は、硬砂岩を素材とする横長薄片を使用した長さ3.7cm最大厚0.9cmのものである。刃部の背面には刃澁し加工が施されている。



第2図 ナイフ形石器実測図

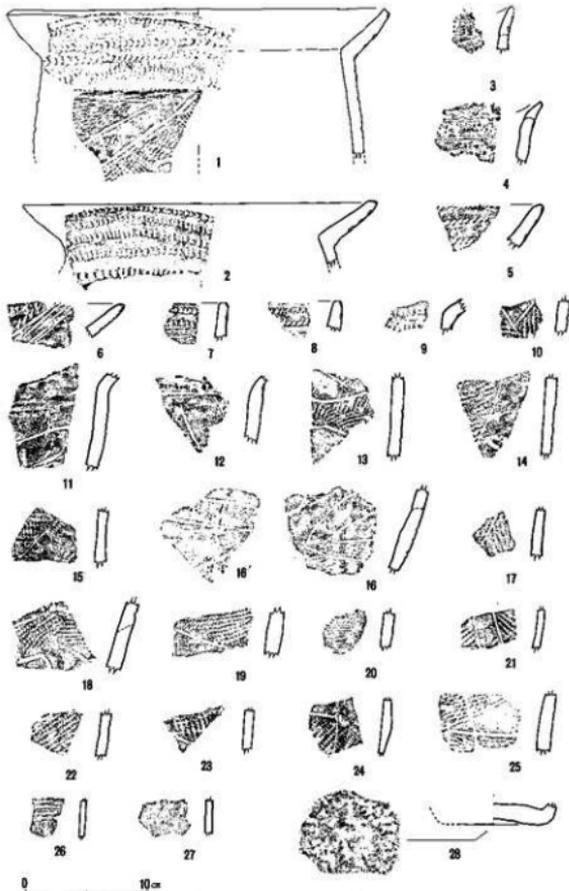
2. 縄文時代

縄文時代の遺物は、アカホヤ火山灰層を挟む上下層から出土している。アカホヤ層の下層から出土したものは壺ノ神式土器を中心とするもので、上層から出土したものは曾畑式土器を中心とするものである。他に石器類として石鏃、スクレイパー、磨石などがある。

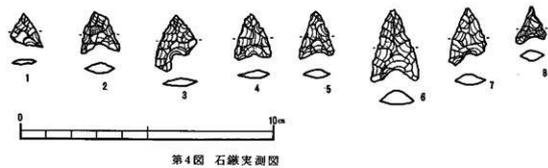
壺ノ神式土器 (第3図)

VI層からVII層に伴って出土しているが、VII層中には明確な集石遺構といわれるものは確認されていない。壺ノ神式土器は、熱糸文・縄紋施文を中心とするもので貝殻文系のもは含まれていない。

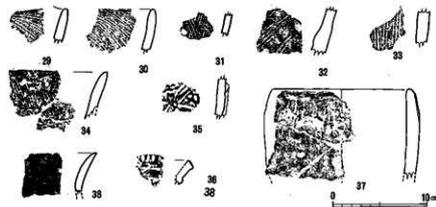
1・2・5・6などは大きく「く」字形に外反する口縁部をもち、口縁部の文様帯は刺突文を主体としている。3・4・12は同一個体と思われるが、全体に作りは粗く16・16'と共に他の土器類と異なる印象を与えるものである。それは、文様の施文にも指摘されることで、沈線文で区画された中に縄紋を施文するが、同じ文様構成をもつ13・14・18などの沈線の区画線が直線的にはっきりしている



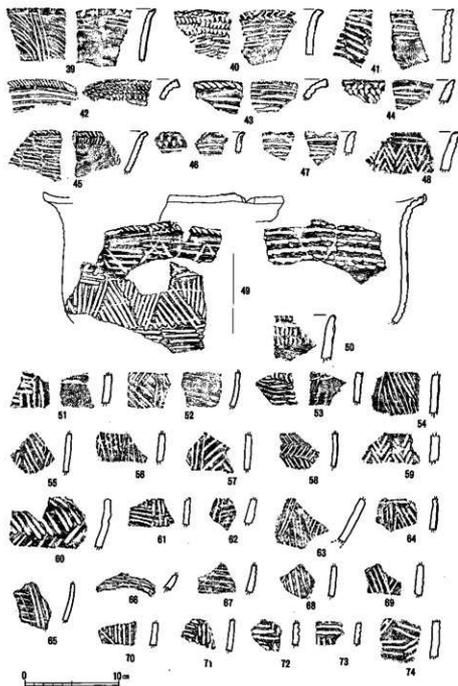
第3図 縄文土器実測図・拓影(1)



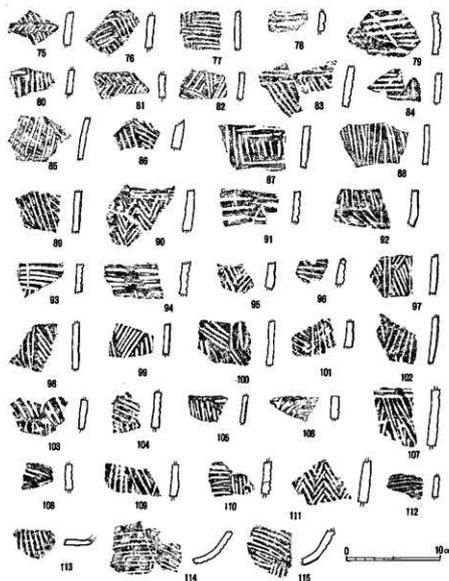
第4図 石器実測図



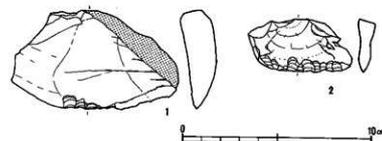
第5図 織文土器実測図・拓影(2)



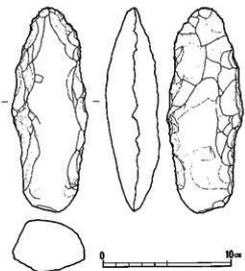
第6図 織文土器実測図・拓影(3)



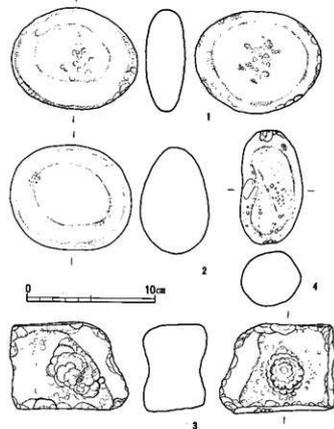
第7図 織文実測図・拓影(4)



第8図 スクレイバー実測図



第9図 石斧実測図



第10図 石器実測図

のに対し、曲線を帯び粗雑な施文となっている。

これらに対し24・26は、捺紋・縄紋を地文とし、その上に沈線文を重ねるもので、この類は少ない。

一方、胎土については、14・15・19に金雲母が含まれるほかは、長石・石英を中心とするものに角閃石が半数の土器片に含まれるというのが全体的な傾向といえる。

貝殻条痕土器（第5図29～34）

同じくアカホヤ下層から少数であるが貝殻条痕土器が出土している。29は山形口縁を成すと思われる口縁部片である。他の口縁は平口縁である。胎土には、塞ノ神式土器でみられた金雲母を含むものはみられない。

平柄式土器（第5図35・36）

貼付け突帯文あるいは刺突文をもつ類で、わずか2点の出土である。他の施文は、沈線文、刺突文の組み合わせで、突帯文を貼り付け、その上にも刺突を施している。

円筒土器（第5図37）

砂質の強い胎土を用いた脆い土器で、風化が進んでいるが、長さ約4cmのへら先による極細の沈線を縦方向に1cm程の間隔で施文する。復元口径は14cmを測る。

曾畑式土器（第6・7図）

アカホヤ火山灰層上層から出土し、包含された層はアカホヤの土壌化した土層である。

また、SB4の北東に長軸約1.9m、短軸約0.9mのやや輪郭のくずれた掘り込みが検出され、曾畑式土器の集中した出土がみられた。

口縁部の形状は、おおむね二類に分けることが出来、短かく「く」字形に外反する42・43・49と、口縁端部まで直線的ないしは端部のみが小さく屈曲するものと分けられる。また、口縁部に施文される文様要素は、刺突文と短線列文で、50を除き表裏面に施文はみられる。49はこの類の破片としては最も大きく全体形をうかがい知ることの出来る資料であるが、外反する口縁から胴部は直立し、その下部で屈曲し底部を形成するものと思われ、丸底の底部が推定される。底部の資料は、113～115に見ることが出来る。

胴部への文様の構成は、短かい沈線文を鋸歯状、綾杉状、菱形状、「口」字状に施すなど単一の施文要素を用いての多様性が示されているといえる。

全体に焼成は悪く、色調も褐色系のものを中心としている。胎土については、43・63・67に金雲母が含まれ、その他は長石・石英・角閃石を含むもので、胎土の様相としては塞ノ神式土器に共通しているといえる。

石器

（第4図）

石鏃は8点出土している。1が正三角形を呈するほかは、おおむね二等辺三角形を呈する。3が基部の挟りが狭く特徴的な脚部を整形するのに対し、ほかは基部が両端からゆるやかに挟りを整形するものとなっている。

素材とする石は、チャートと黒曜石に二分されるが、黒曜石はさらに気泡の多い白濁したもの（2、5）と透明度のあるもの（8）とを判別することが出来る。

スクレイパー (第8図)

1は硬砂岩、2は白濁した黒曜石を素材としている。1には表裏の剝離の際の打撃面にはさまれた箇所自然面が残されており、剝離によって形成された鋭利な部分をそのまま刃部として使用している。長軸5.4cm、2.8cm、厚さ0.9cmを測る。

2は表裏とも同じ面を打撃面に使用し、ポジティブな面とネガティブな面が表裏を成している。刃部にはさらに細かい調整剝離が加えられている。長軸8.8cm、短軸5.3cm、厚さ1.9cmを測る。

石斧 (第9図)

長さ16.0cm、幅5.9cm、厚さ4.0cmを測る打製石斧である。片面には一部自然面を残している。

凹石・磨石・敲石 (第10図)

3の凹石は、SB1のピットから出土している。長軸9.1cm、短軸6.8cm、厚さ4.9cmを測り、両側に凹みがつけられている。1は長軸9.7cm、2は長軸9.5cmをおのおの測る磨石で、4は長軸8.8cmを測る敲石で長軸両端が使用されている。

3. 弥生時代

遺跡地の東半B区では、弥生時代の遺構が検出されたが、北に続いたであろう丘陵は早くから開削されており、まだ多くの遺構が北に延びる丘陵上に存在した可能性がある。現況地形の中で確認されたのは、竪穴住居跡1と掘り込みの全体は削平のため不明瞭であったが竪穴住居跡の床面の残存と思われる土器片の集中した箇所が1箇所認められた。前者をSA4後者をSA5として記述を進める。

SA4 (第15図)

南辺に約1mの幅広の住居跡内部への張り出し部を掘り残すタイプの竪穴住居跡である。全体形は長方形を呈し、東西の長辺で6.3m、南北の短辺で4.3mを測る。現在の壁面での最深は35cmを測る。柱穴は明確ではないが東西の2本柱が考えられ、東側の1穴は確実であるが、西側の柱穴ははっきりとした掘り込みを作らなかったものとみられる。

弥生土器 (第11・12図)

壺形土器が主なもので、突帯文土器が特徴である。1はタガ状の突出した大きめの突帯を貼り付けるもので、突帯端は上向きに成形されている。口縁部への屈曲はルーズで、内面にも腰を作らない。口唇部は中凹みを呈する。こうした大型の壺形土器に対して、10・11は小型の屈折する口縁部をもつ突帯文土器で、14~18は下城式の刻目突帯文土器である。

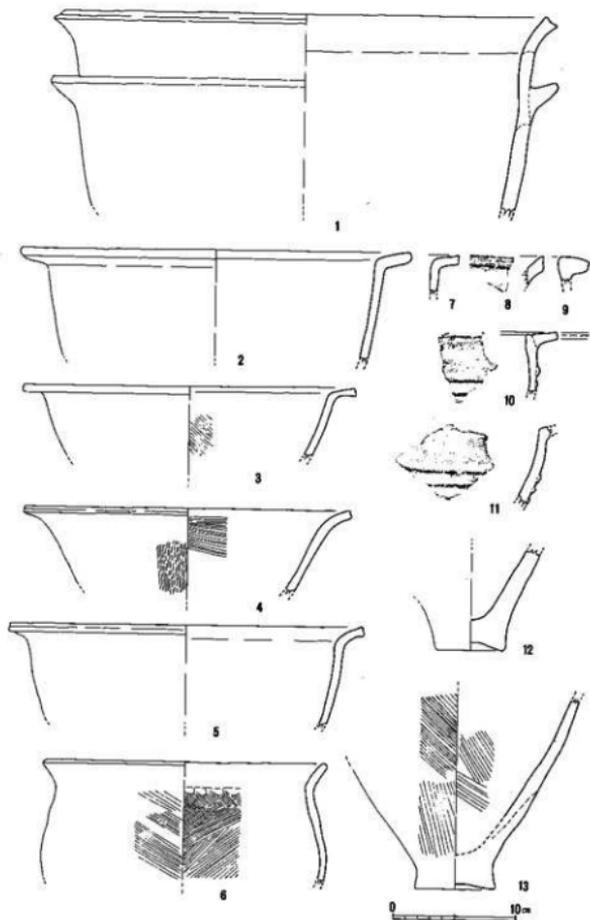
9の口縁端に突帯を貼り付けるタイプは1点のみ出土している。

また、19は壺形土器の胴部の突帯文部と思われる。

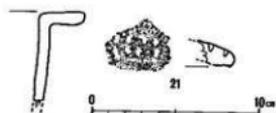
その他の弥生土器 (第13・14図)

SA4の南西に輪部が不明ながら弥生土器の若干の集中がみられた。第13図20は、ほぼ直角に屈折する壺形土器の口縁で、21は刺突をもつ脚部片である。

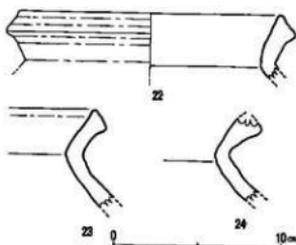
また、A区SB3の西方に、攪乱された掘り込みがあり、第14図22~24が出土したが、22に明確にみるように二



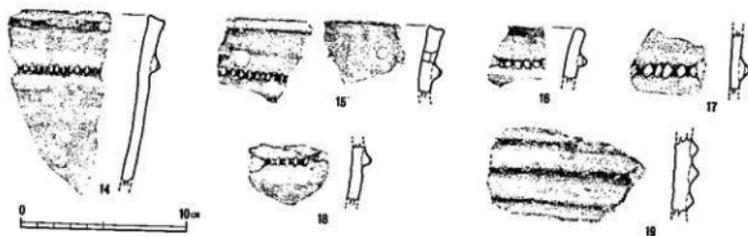
第11图 SA4 出土弥生土器实测图·拓影(1)



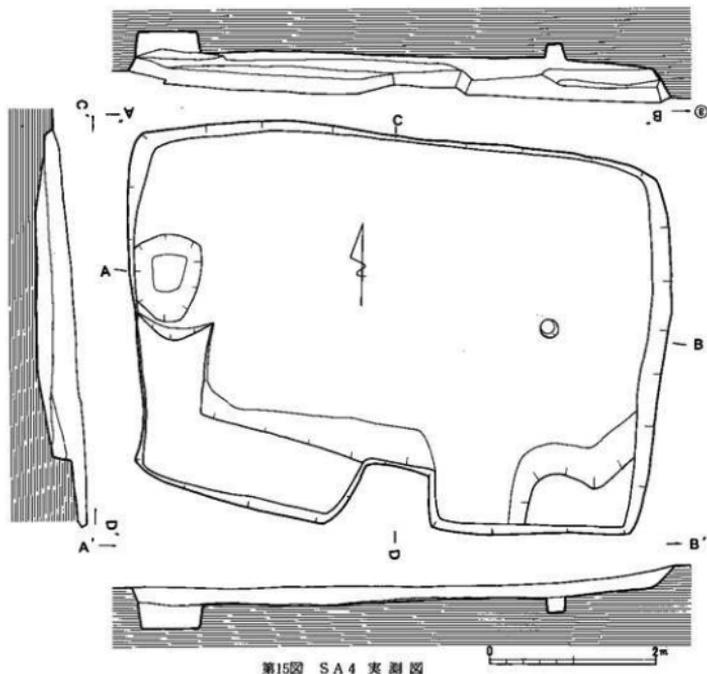
第13图 SA5 出土弥生土器实测图·拓影



第14图 A区 出土弥生土器实测图



第12图 SA4 出土弥生土器实测图·拓影(2)



条の凹線を口唇部に施す口縁部片である。

(北郷泰道)

4. 平安時代

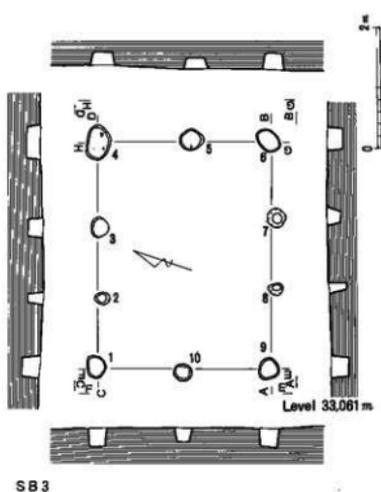
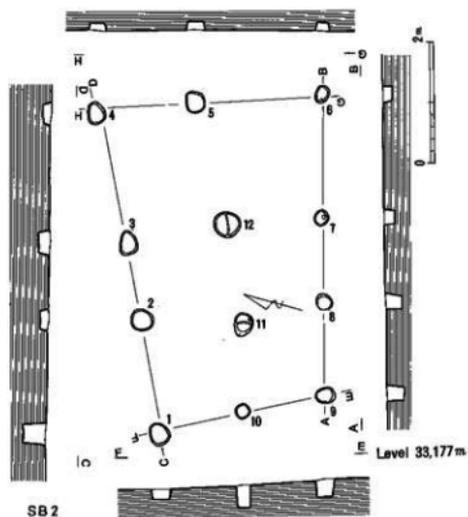
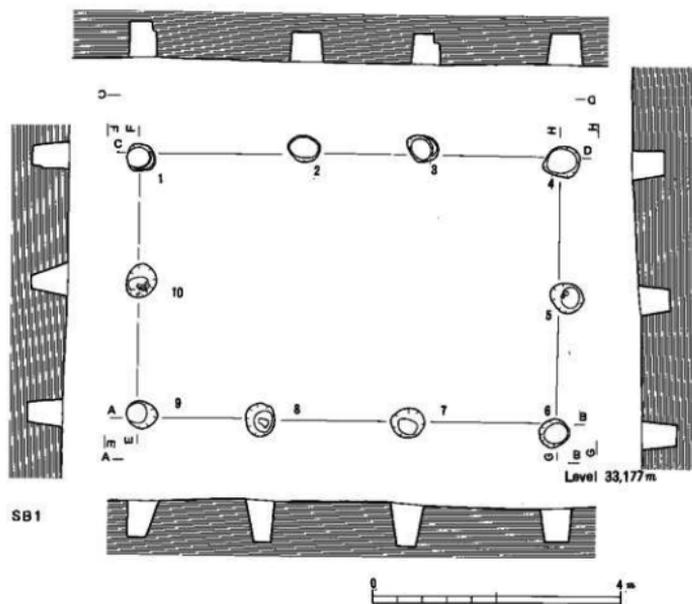
本遺跡においては、A区でアカホヤの上層より平安時代に相当する遺構および遺物が確認された。層位的にはアカホヤ上層より出土した首畑式土器の包含層より上層に包含層があると考えられるが、黒色土層内での識別は困難であったため、包含層内出土遺物については、平板測量により分布状況を実測しながら掘り下げアカホヤ面において遺構確認を行った。

遺 構

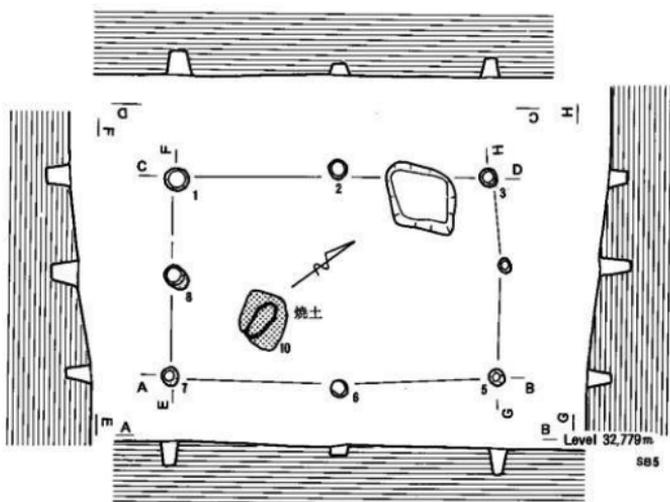
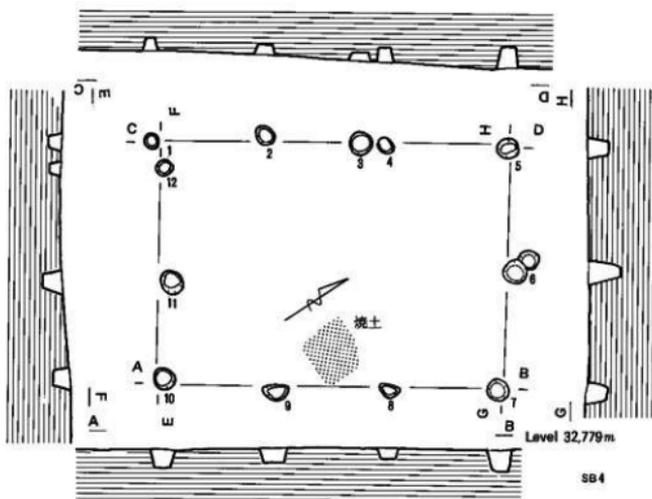
遺構としては、掘立柱建物跡(SB)～7軒、カマド付壁穴住居跡(SA)～2軒、土竪(SC)1基、溝状遺構(SE)、性格不明(土器集積)(SZ)およびピット群が確認されている。

掘立柱建物跡 (第16～第18図)

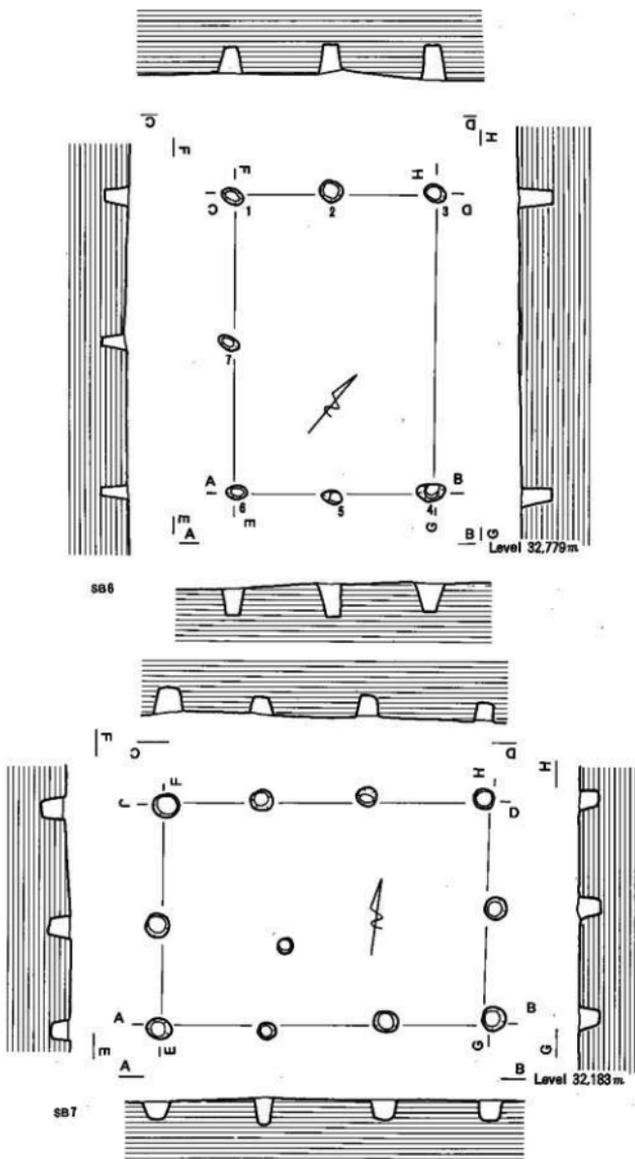
掘立柱建物跡は全部で7軒確認されている。規模及び主軸方向は表5にしめす通りである。全体的に見ると規格は3間×2間と2間×2間の2種類があり、規模としてはSB1が7.0m×4.4mと最大でSB3が3.8m×2.8mで最小となり、その他は桁行5m前後×梁行3.5mが前後に集約される。また柱間寸法は2.6m(約9尺)～1.2m(約



第16图 SB1·2·3 实测图



第17图 SB4・5 实测图



第18图 SB6·7 实测图

4尺)まで各種存在している。主軸方向はSB6を除いて東へ向いている。またSB2は総柱建物であり、廂を有する建物は存在していない。SB4・5には建物内にカマドまたは炉になると思われる焼土の盛上った遺構が存在した。全体的に調査区内の中央部に広場を設ける格好でやや周辺部に分布しているという状況である。尚、掘立柱建物の切り合い関係は認められなかった。

竪穴住居跡

SA1 (第19図)

SA1は調査区の北東、SB2・3とSB7のほぼ中間に位置する竪穴住居跡である。方形プランを呈し、規模は5m(南北)×4.5m(東西)を計る。検出面からの深さは約30cmである。東・西・北壁にそれぞれカマドを有し屋外に煙道が延びている。

西カマドは西壁のほぼ中央部に位置し、カマド部分は直径80cmの浅い掘り込みを有し、長さ1m、幅50cmの煙道が屋外へ延びており煙道の先端には直径45cm深さ70cmの煙出し部分を有する。

北カマドは北壁のほぼ中央部に位置する。カマド部分は直径1mの浅い掘り込みを有し、掘り込み内には両側に直径25cm程度の浅いピットが存在する。これは、北カマド付近より出土している軽石製支脚を立てるためのものであろうと思われる。煙道は長さ1m、幅50cmを計りその先端に直径40cm深さ70cmの煙出し部分を有する。

東カマドは東壁の中央からやや北よりに位置しており、カマド部分は50cm×70cmの楕円形状の掘り込みを有しており煙道入口付近には両側より軽石製の支脚が出土している。煙道は長さ1.1m、幅50cmを計りその先端には直径40cm、深さ60cmの煙出し部分を有する。これは西・北カマドと同様であるが、東カマドは煙道の両壁に沿って扁平な石が立ててあり、1ヶ所の上から扁平な石で蓋をしている状態が検出されたので、もともとは煙道には石蓋がなされていたものと思われる。その構造や検出状況から考えて、北カマドを廃棄した後に東カマドを構築したものと思われる。住居跡内にはピットは4個確認されている。

住居内からは、土師器(坏・甕)・布痕土器・須恵器・石製品(軽石製支脚・砥石)が出土している。分布は東カマド付近に集中している。遺物の中には坏の外底に「宅」の字を墨書してある土器が出土している。

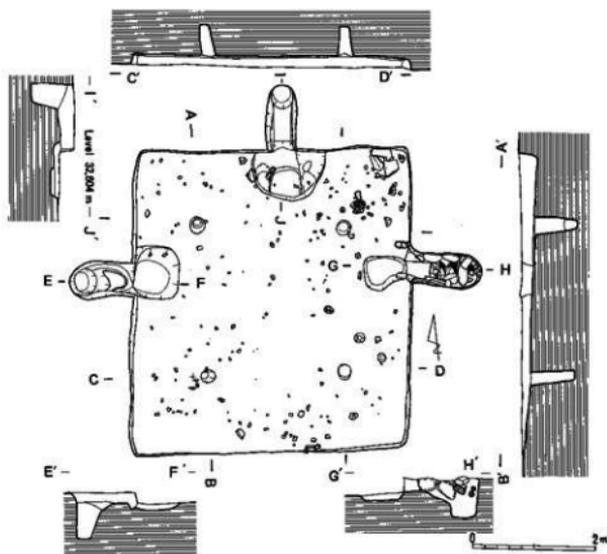
SA2 (第20図)

SA2は調査区の南端に検出された竪穴住居跡である。方形プランを呈し4.4m(南北)×4.5m(東西)を計り、検出面からの深さは約50cmである。ピットは全部で6個確認されている。

この住居跡はSA1と同様に北と東の壁にカマドを有するものである。

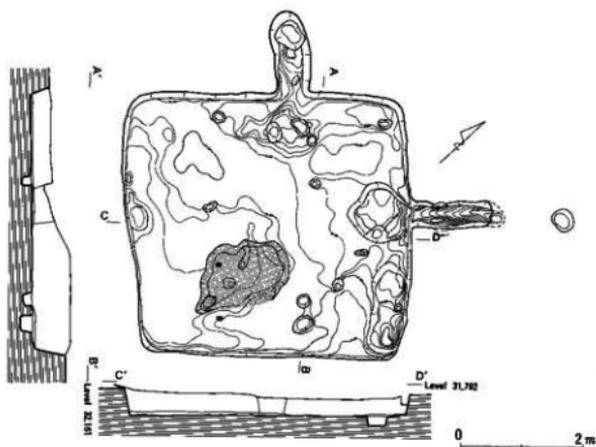
北カマドは北壁の中央よりやや東側に位置しており、カマド部分には直径60cmの浅い掘り込みがある。その両側には直径10cm程度のピットが存在する。屋外には長さ1.4m幅60cmの煙道が延びており、その先端には直径60cmの煙出し部分がある。煙出しはSA1で見られるようなピット状に深くほりこんだものではなく、煙道より若干凹む程度のものである。埋土は明灰白色粘質土で床面付近は明茶褐色の焼土が存在した。

東カマドは東壁の中央よりやや北に位置する。カマド部分は直径90cmの浅い掘り込みを呈しその両側には直径30cmのピットが存在する。屋外には長さ1.5m、幅50cmの煙道がのびている。煙道は入り口部分よりなだらかに下降しながら煙出し部分に至る。またその間は両側に扁平な石を立てその上を同様な石で蓋をする構造である。また煙突部には底部が欠如した土師器(甕)を3つ重ねた状態で使用していた。その中には、使用時から入っていたものであるが廃棄時に入れられたものか不明であるが、第21図にみられるように石が詰っていた。また煙道部の最先端には、煙突に使用された同様の甕が横倒しにして置かれていた。灰だまりであったと思われる甕の内面には多量のススの付着が見られた。また、煙道の石蓋の上面や煙突の周囲には明灰白色粘質土が薄くではあるが確認できた。

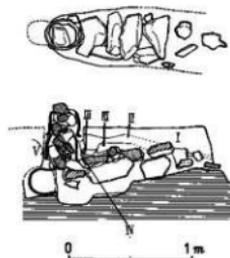


第19図 SA1 実測図

- I 層～暗褐色土層
- II 層～暗褐色土層（軟質）
- III 層～暗褐色土層（粘性あり）
- VI 層～明灰白色土層（粘質土）
- V 層～明灰白色土層（アカホヤ混）



第20図 SA2 実測図



第21図 SA2 カマド実測図

カマドの構造としては北・東カマドともSA1とはほぼ同様の形態を示すと思われるが、SA1のような軽石製支脚は出土しておらず、他になんらかの支脚を用いたと思われる。

北カマドと東カマドはその残存状況より見て、北カマドが廃棄された後東カマドが構築され使用されたものと思われる。

また、住居内の西南の部分において焼土の集中がみられたが、浅い掘り込みを呈するのみで構造は不明である。

出土遺物としては、煙突として使用されていた土師器・甕をはじめとして、皿や黒色土器（内黒）や布痕土器、須恵器及び鉄器等が出土している。（第25・26図）なかでも28の黒色土器は鉢形を呈している。

SZ1（土器集積）（第22図）

A区の東端、すなわちSB1の東側には土器が集中して出土している箇所が存在した。直径2mの範囲に土師器・須恵器が集中して出土しておりその中央部には扁平な石が立った状態で出土している。土器を取り上げると数ヶ所の焼土の集中がみられたが、明確な掘り込み等は確認できなかった。SB1に付随する平カマドの可能性が考えられる。出土遺物には土師器・須恵器などがある。また須恵器の中には気泡が入りこんだようなものも見られ、周辺からは黒塗の付着した同様の須恵器（143）も出土している。

溝状遺構

調査区の西端を南北に走る溝状遺構が1本検出されている。幅1.5m、を計り検出面からの深さは約50cmである。断面は台形状を呈す。

溝内よりは、土師器、須恵器、縄文土器等が出土している。掘立柱建物、竪穴住居にともなうものと思われる。

遺物

遺物としては、土師器・須恵器・布痕土器・土鏝・石製品及び鉄製品が出土している。

土師器 坏

坏は全てヘラ切り底である。ほとんどのものが切り離しの後底部を再調整しており、ヘラ切り痕が明瞭に残っているものは少なかった。形態的特徴（底部より体部への立上りや口縁部の形態）によって数類に分けることができる。尚形態分類は「山内石塔群」の分類に準拠しI類をヘラ切り、A類を坏とし、細分を行う。

I-A-1類

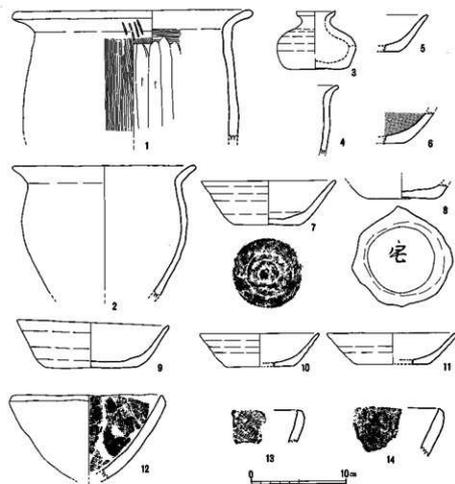
底部と体部の境が明瞭なタイプである。底部は平底で口径12.5cm～14.5cm、器高3.5cm～4.6cm底径7cm～8.6cmを計る。口縁部の形態によりさらに2類に細分できる。

1a～直線的ないしは内湾ぎみに立上りそのまま口縁部へ至るもの。（52, 69, 73, 75, 76, 78, 83, 88, 90）

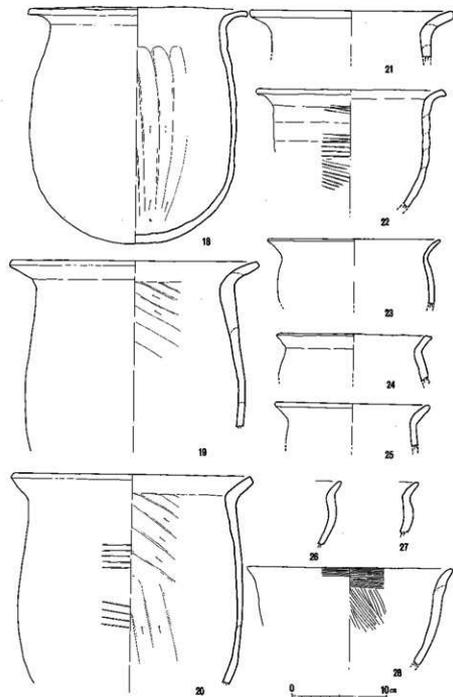
1b～直線的に立上り口縁部付近で外反するもの。（39, 46, 55, 70, 72, 77, 85）



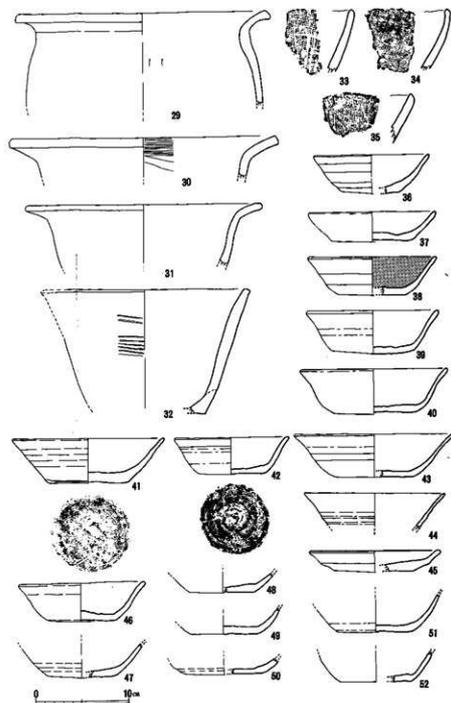
第22図 SZ1 遺物出土状況



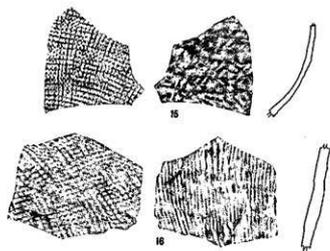
第23图 SA1 出土土师器实测图



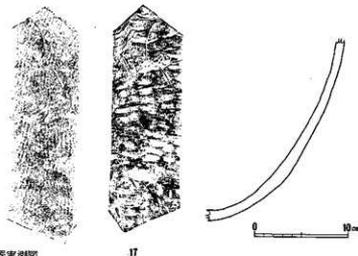
第25图 SA 2 出土土师器实测图(1)



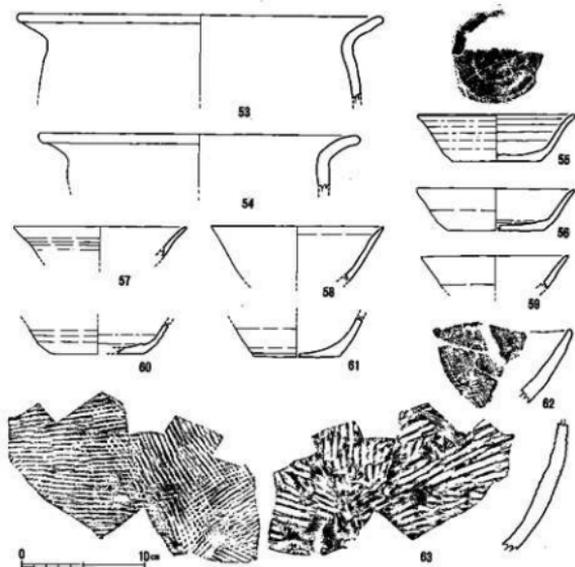
第26图 SA 2 出土土师器实测图(2)



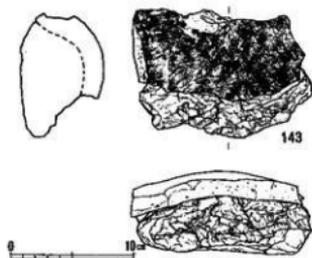
第24图 SA1 出土须惠器实测图



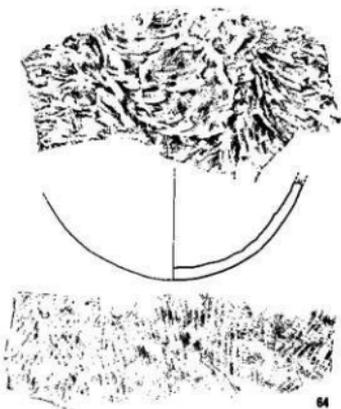
17



第27图 SZ1 出土土器・須惠器実測図



第27图-2 SZ1 出土須惠器実測図



第28图 SB1 出土土器実測図

a・b 類ともに焼成・胎土及び内面の形態によりさらに細分される可能性がある。

I-A-2 類

底部と体部の境が丸味を持つタイプである。底部は平底で口径 17.0 cm～12.4 cm、器高 3.6 cm～4.8 cm、底部 7 cm～8.5 cm を計る。これも 1 類同様口縁部の形態により 2 類に細分できる。

2a～直線的ないしは内湾ぎみに立上りそのまま口縁部へ至るもの。(7, 8, 9, 10, 11, 37, 41, 61, 66, 68, 71, 74, 84, 87, 91)

2b～直線的に立上り口縁部付近で外反するもの。(40, 65)

さらに、2a 類は法量的に 2 類に細分できる。

土師器・皿 (45, 80, 81)

坏以外に皿と呼べるものが出土している。法量的にいうと器高が 3 cm 以下で口径 13.4 cm～13.8 cm を計る。56 は S A 3 出土である。底部がいていねいに仕上げられている。体部の中半で段を持ちそれから外反するタイプである。79, 80 は同タイプである。若干丸味をもった底部より直線的に口縁部まで立上るタイプである。焼成は良好で堅く焼き締まっている。

甕 類

土師器の甕類は、坏について多くの出土があった。これらの甕は口縁部片が多いため全体的な器形は不明な部分が多いが、口縁部や胴部の形態等によって分類を行いたい。

まず口縁部の径の大きさによって、口径 20 cm 以下を小型 (I 類)、20 cm 以上を大型 (II 類) として分け、それぞれに対して分類を行った。

I-a 類 (2, 23)

頸部がくびれ胴部が張り口縁部ないしは胴部中半に最大径を有するタイプ。口縁部はシャープで内外面ともナデ調整である。薄手である。

I-b 類 (24, 101)

胴部の張りは a 類と同様であるが、頸部が丸味をおびて外反し口縁部は丸ないし角を呈する。内側へラケズリが施されている。薄手である。

I-c 類 (22, 25)

頸部が丸味をおびて外反する。胴部は直線的に下降する。口縁部は丸ないし角を呈する。内面はへラケズリが施され、外面はタキを行った後その上をナデ消している。厚手である。

II-a 類 (53, 54, 93, 99)

頸部がくびれ胴部が張り、口縁部ないしは胴部中半に最大径を有するタイプである。内外面ともナデ調整である。

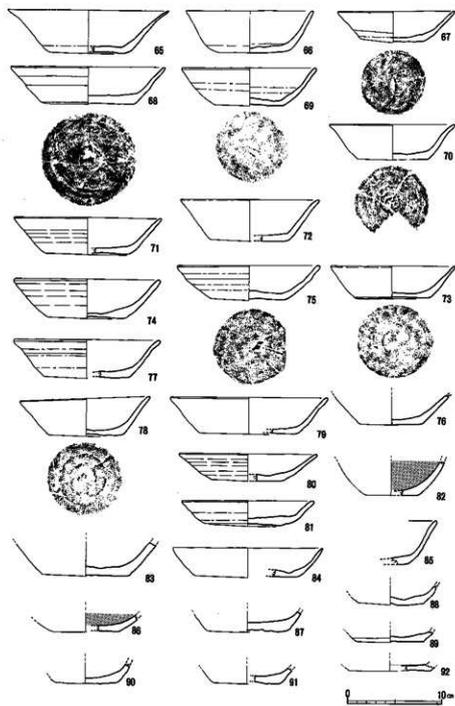
II-a' 類 (95)

II-a 類と同類と思われるが頸部がくびれず外湾するタイプ

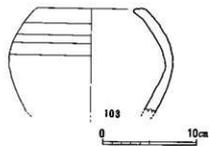
II-b 類 (1, 18, 19, 20, 29, 94, 97, 98, 100)

頸部が丸味をおびて外反し、胴部は直線的にやや開きながら下降し最大径を胴部中半ないしそれ以下にもつタイプである。外面はハケ、ナデと各種ある。内面へラケズリを施す。

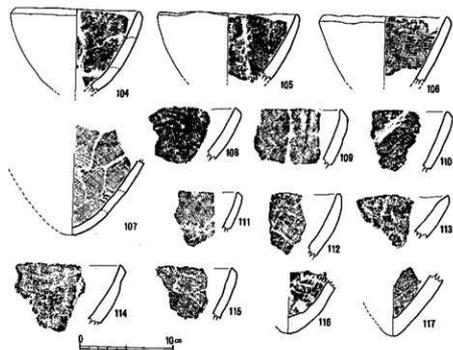
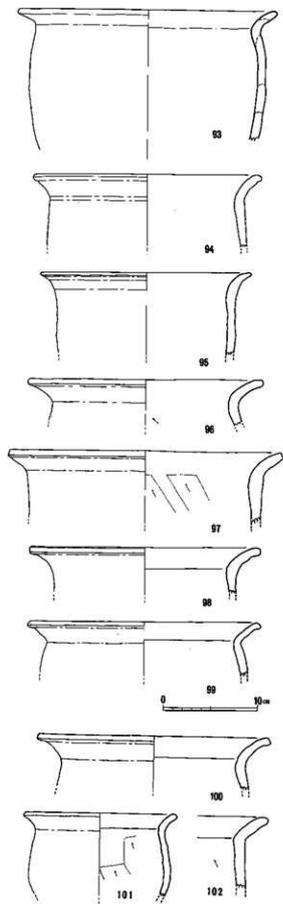
以上おおまかな形態分類を行った。まだ口縁部の形態などの細部の技法等によって細分は可能であると思われるが S A 2 の煙突部に使用された一括資料として扱える土器にも若干の形態・技法の違いが見られたので、ここでは同じ形態内によるバリエーションとして理解しておきたい。



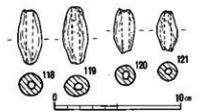
第29图 A区出土土钵器类测图



第30图 A区出土土钵器类测图



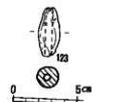
第31图 A区出土布痕土器类测图



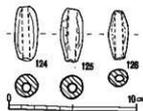
第32图 SA1 出土土钵类测图



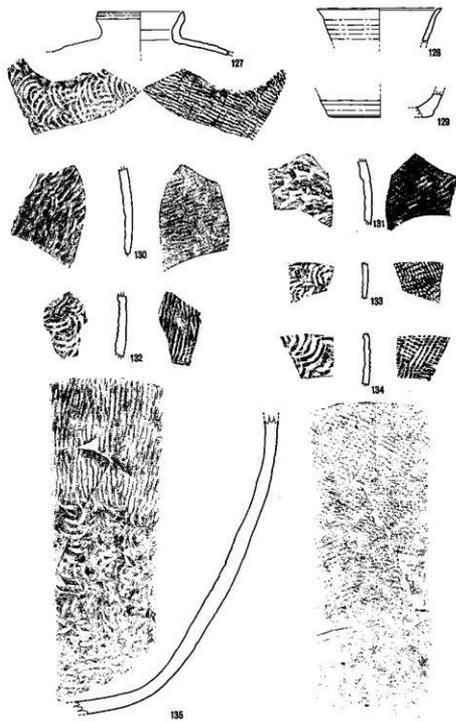
第33图 SA2 出土土钵类测图



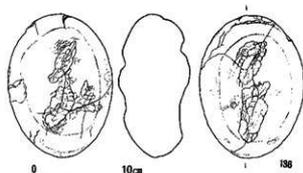
第34图 SZ1 出土土钵类测图



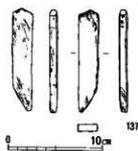
第35图 A区出土土钵类测图



第36图 出土须惠器实测图·拓影



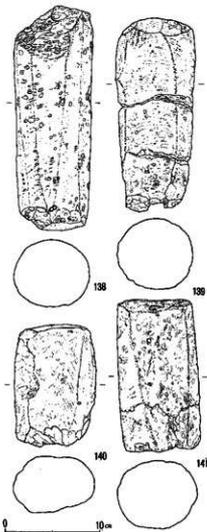
第37图 石器实测图



第38图 砾石实测图



第40图 SA2 出土铁製品实测图



第39图 SA1 出土砾石製支脚

また、S A 2よりは32の鉢形土器も出土している。口径22cm器高12cmを計り平底である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、外面ともナデ調整である。S A 1においては3のミニチュア壺も出土している。また 103のような球形胴部をした無頭壺も出土している。

黒色土器（内黒）

本遺跡において出土している黒色土器は全て内黒である。1軒の住居跡より1～2点の出土で量的には少ない。S A 1よりは環の破片（6）が1点、S A 2よりは28, 38が出土している。28は環・塊が多い黒色土器の中では珍らしく口径21cmを計る鉢形土器である。内外面とも研磨されており、内面は部分的に黒色を呈していない所も存在する。38は環の破片である。内面に炭素が吸着しているが研磨があまり施されておらず光沢がない。黒色部分が剝落している所も存在した。82, 86は包含層内よりの出土である。両者とも環であるが外面は、荒い研磨しか施されていない。82は立ち上がり丸味を持つタイプで、86は底部と体部の境目が明瞭なタイプである。

布痕土器

本遺跡においては、土師器とともに内面に布目瓦痕のある土器が出土している。S A f・2より数点出土しているが、その他は包含層内よりの出土である。完形品はないが、口径は12～15cm程度で底部は尖底かそれに近い丸底を呈す。全体的な器形は円錐形の胴部を若干膨ませたような砲弾型となっている。型づくりされた土器らしく、内面は型はずしを容易にするために型にまかれていた布が瓦痕として残り、外面は指頭痕が残る荒い作りであり、口縁部は型よりはみだした粘土を取るためであろうか、ヘラ状工具によって外方はそぎ落されている。胎土は荒く、焼成は良好である。二次焼成を施したものは認められなかった。容量は420～480ccを計る。

土 甕

土甕は全部で9個出土している。その半分は遺構よりの出土である。また法量については、表6に示す通りである。全て土師質で小型粘土筒状をしたものである。焼成も良好で調整はナデ調整が行なわれている。その法量によって大型（118, 119, 123, 124）と小型（120, 121, 122, 125, 126）の2種類に大別できる。

須 恵 器

須恵器は環および甕が出土している。

環は土師器環とはほぼ同様な形態となす。全てヘラ切り底である。その形態によって底部から体部へ丸味をもって内湾気味に立上るタイプ（43, 48, 51）と偏平な底部より直線的に立上り口縁部で少し外反するタイプ（42, 77）、偏平な底部より丸味をおびて直線的に立上るもので器高が低いタイプ（68）に分けられる。色調は灰白色～灰色を呈し内外面ともナデ調整であり、焼成は良好である。また焼成の際に生じたと思われる線状をなした黒斑を有するものが存在する。

甕はほとんどが胴部片である、その器壁には外面～格子目文、平行線文、内面～平行線文、同心円文の各種の叩き目が施されている。135の甕の底部付部付近のように内面に2種類のアテ具を部位を違えて使用しているものである。また中には131のように内面を板状工具によって荒く仕上げた例もある。

またS Z 1では焼き歪んだようなものや、器壁に気泡を多く含んだような不良品と思われるものが出土したり、その周辺よりは窯壁の付着した須恵器が出土したりしている。

石製品

138～141は、軽石製の支脚である。いずれもSA1よりの出土である。最も完全に残存しているのは138で、長さ23.5cm、幅8cmを計る側面はていねいに加工されている。出土状況等から考えて細い部分を下にして立てたものと想定される。上端部は斜めに加工されておりその部分で土器を支えたものと思われる。139～141も同様な形態をなすものと思われる。

137のような砥石も出土している。長さ10.5cm、幅2cm、厚さ0.8cmを計る四面とも使用されており擦痕が存在する。136は15cm×11cmの楕円形を呈し厚さ7.5cmの砂岩である。表で裏両面に2ヶ所ずつ凹みが見られる。

砥石の一種ではないかと思われる。

鉄製品

142はSA2出土の鉄器である。残存長9.5cm、幅3cmを計る。先端がおれているため全体形は不明であるが、基部が曲っており、鎌の一部ではないかと思われる。

(日高孝治)

第5節 まとめ

旧石器時代の遺物と思われるものはナイフ形石器があるが、その面的な広がりについては不明である。

縄文時代の早期土器としては、貝殻痕文土器などがあるが、その量は少ない。主体となるのは壱ノ神式土器で、いわゆるA式といわれるものに限られる。壱ノ神式土器を早期土器とすべきか否かについては、ここでは新東晃一氏⁽²⁾の説を支持しておきたい。アカホヤ下の土層形成については、かつて辻遺跡の調査結果をふまえた問題点を指摘したが、それについては、まだ地質学的な面からの十分な検証を経していない。その問題点とは、アカホヤ下の土層が黒色土を形成している地域と、褐色土を形成している地域との二つに別けられることである。辻遺跡の場合、隣接した二つの丘陵は黒色土が層を成す丘陵と、褐色土が層を成す丘陵に分れ、前者は壱ノ神式土器を中心に、後者は前平・吉田式土器を中心に包含していた。第1の問題点はこうした土層形成の画然とした違いについてである。さらに、同じく黒色土層でありながら、硬質の黒色土層の場合遺物が包含されることがないことである。下田畑の場合その硬質黒色土層下の褐色土層に壱ノ神式土器を中心とする遺物は包含されていた。学園都市内においても、アカホヤ下に黒色土が形成される地域と、されない地域とがあり、こうした早期文化層の在り方については一考される必要がある。

アカホヤ層上において検出された曾畑式土器は、県下においても貴重な調査例といえるし、性格不明ながら曾畑式土器の集中した掘り込みは、十分に注目されるべきであろう。しかし、その掘り込みは、アカホヤと黒色土層との漸く層中に浅く掘り込まれており、輪郭も不明瞭さらにピット等も認められず、柱を用する上屋が乗る規模とも思えない。ここでは単に土坑と呼んでおくしかないが、類例がふえることを待ちたい。一方、土器については、口縁部が小さく山形を成すものがみられ、かつ短線列文を主とした文様もやや粗く、曾畑式土器の終りに近く位置付けるべき資料と思われる。

弥生時代に属する竪穴住居跡は1棟のみであったが、南辺に幅約1mの突出した掘り残し部をもつもので、住居跡の主軸に直交するこの部分は入り口部と考えられ、いわゆる日向型間仕切り住居の間仕切りとは役割りを異にするものとみておきたい。出土した下城式土器から中期に位置付けられるべきものであるが、共伴の大型壺形土器の口縁部の屈曲がややルーズになるあたりから中期末に比定しておきたい。

また、時代が下って古代に入ると、カマド付竪穴住居・掘立柱建物と主体とする集落が営まれる。

カマド付竪穴住居2軒、掘立柱建物跡7軒が確認されている。カマド付竪穴住居は屋外に煙道を延ばすタイプのもので、県内においては、宮崎市浄土江遺跡304号住居跡が初見である。学園都市遺跡群内においては、本遺跡の南約100mに位置する赤坂遺跡で確認されたのをはじめとして、前原南・平畑・浦田の各遺跡で発見される現在の

所5遺跡9軒が確認されている。これらの住居跡は浄土江304号住居跡で見られるようなくり抜き式の煙道ではなく掘り込み式の煙道を持っている。その形態も煙出し部分にピット状の掘り込みを有するものとしてないものの2種類に分けられる。これは本遺跡において煙道に石蓋を施す同タイプの煙道に併存しているので、時期差とともに、何らかの機能差も考えられるのではなからうか。またカマドは2～3回作り変えられている。

掘立柱建物は7軒確認されているが、廂を有するものは存在せず、2間×2間・3間×2間のみである。またSB2は総柱建物であり倉庫の可能性があり、それに近接するSB3もその規模等から考えて倉庫の可能性があると思われる。主軸方向はSB6を除いて東へ傾いている。SB4、SB5には建物内に焼土が存在する。

これらの竪穴住居および掘立柱建物はその出土遺物等から考えて、あまり隔差がないので、ほぼ同時期に併存していたのではないかと考えられる。この様相は神奈川県向原遺跡⁽⁶⁾で復元された村落景観に類似するものではないかと考えられる。

また本遺跡出土の土師器は、その法量のみから見ると大形の傾向を示すものが存在している。これは学園都市遺跡群内の浦田遺跡のカマド付竪穴住居より出土している坏に類似している⁽⁷⁾。浦田遺跡ではこの時期より後出する段階で脚台を有する坏が出土している。なおこの時期の坏は小山尻東遺跡において10世紀中頃に比定される越州窯系青磁とともに出土している⁽⁸⁾。これらの関係から考えると本遺跡出土の土師器は概ね10世紀前半代に位置づけることができると考えられる。

SZ1よりは窯壁の付着した須恵器や、焼きひずんだ須恵器等が出土していることから本遺跡は須恵器生産に何らかの形でたざざわった人々によって営まれた集落であろうと思われる。その場合の須恵器窯であるが、場所や胎土分析等の結果より見て清武川をはさんで約3kmの所に位置する松ヶ追窯跡⁽⁹⁾が考えられる。

以上のことから下田畑遺跡は、平安時代(10世紀前半代)に営まれた一般的な集落形態をなしているものと考えられる。また土師器の全体的な編年や、カマド付竪穴住居の変遷および掘立柱建物との機能差等については、他遺跡との詳細な比較検討がなされるべきである。

(北郷泰道・日高孝治)

註 (1) 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文・前期土器の様相」

『鐘山猛先生稀記念古文化論叢』(1980年)

同 『南九州の火山灰と土器形式』『るめん』No19(1978年)

(2) 北郷泰道・長津京重「辻遺跡」清武町教育委員会(1980年)

(3) 宮崎市教育委員会 宮崎市文化財調査報告書 第6集「浄土江遺跡」1981

(4) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」1981

(5) " " " "Ⅲ」1982

(6) 神奈川県教育委員会、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1「向原遺跡」1983

(7) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集・浦田遺跡」1985

(8) 長津宗重氏の御教示による(本書掲載～小山尻東遺跡)

(9) 宮崎県教育委員会 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集」1985

(10) 石川恒太郎 「宮崎県の考古学」吉川弘文館昭和43年

表1 縄文土器観察表

図録番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調査		文様		粘土	色		調	底成	備考
					表	裏	横	縦		表	裏			
1	A	深鉢	口縁部-残存	十字	十字	無文	正刷	—	石灰、灰砂多く含む	黒	黒	—	不良	
2	—	—	口縁部	—	—	正刷	正刷	—	多量石灰、石英、角閃石	明赤	黒	—	良好	又ス付着
3	—	—	—	—	—	無文	正刷	—	砂質石灰、長石	紅	黒	—	—	同一個体
4	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	不良	
5	—	—	—	—	—	—	—	—	石灰、長石、角閃石多く含む	紅	黒	—	—	
6	—	—	—	—	—	—	—	—	砂質微細石灰	明赤	黒	—	—	
7	—	—	—	—	—	—	—	—	角閃石、長石	明赤	黒	—	良好	
8	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英	紅	黒	—	不良	
9	—	—	胴部	—	—	—	—	—	石灰、長石	明赤	黒	—	良好	
10	—	—	胴部	—	—	—	—	—	長石、角閃石、石英	紅	黒	—	—	
11	—	—	胴部-胴部	—	—	—	—	—	長石、石英や砂質	明赤	黒	—	不良	
12	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	—	3,4同一個体
13	—	—	胴部	—	—	—	—	—	石灰、長石、角閃石	明赤	黒	—	不良	
14	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石、金雲母	紅	黒	—	良好	又ス付着
15	—	—	—	—	—	—	—	—	石灰、長石、角閃石、金雲母	明赤	黒	—	—	
16	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	—	又ス付着
17	—	—	—	—	—	—	—	—	微細石英、長石	明赤	黒	—	—	
18	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、金雲母	明赤	黒	—	不良	又ス付着
19	—	—	—	—	—	—	—	—	砂質石灰、長石、金雲母	明赤	黒	—	良好	
20	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英	紅	黒	—	—	
21	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英	明赤	黒	—	—	

図録番号	地区名	遺構名	器形	器部及び残存	調査		文様		粘土	色		調	底成	備考
					表	裏	横	縦		表	裏			
22	A	深鉢	胴部	十字	十字	無文	正刷	—	砂質微細、長石、石英	明赤	黒	—	良好	
23	—	—	—	—	—	—	—	—	微細石灰、長石	明赤	黒	—	良好	又ス付着
24	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英	明赤	黒	—	不良	
25	—	—	—	—	—	—	—	—	砂質石灰、長石少量	紅	黒	—	—	
26	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	良好	
27	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	—	
28	—	—	底部	—	—	—	—	—	砂質1-2mm大長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	不良	
29	—	—	口縁部	十字	十字	無文	正刷	—	角閃石、石英、長石	明赤	黒	—	良好	山形口縁
30	—	—	—	—	—	—	—	—	角閃石、石英、長石	紅	黒	—	—	
31	—	—	胴部	—	—	—	—	—	石灰も含む	紅	黒	—	良好	
32	—	—	底部付添	—	—	—	—	—	砂質角閃石、長石、石英	紅	黒	—	不良	
33	—	—	胴部	—	—	—	—	—	長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	—	
34	—	—	口縁部	—	—	—	—	—	砂質6-5mm長石、石英、角閃石	明赤	黒	—	不良	
35	—	—	胴部	—	—	—	—	—	石英、長石	紅	黒	—	良好	
36	—	—	口縁部	—	—	—	—	—	微細	紅	黒	—	不良	
37	—	—	円筒土器	—	—	—	—	—	砂質、石灰、長石、角閃石	明赤	黒	—	良好	
38	—	—	—	十字	十字	—	—	—	砂質、微細粒	明赤	黒	—	不良	
39	—	—	—	—	—	—	—	—	微細個人少ない	明赤	黒	—	—	
40	—	—	—	—	—	—	—	—	微細個人少ない	明赤	黒	—	良好	
41	—	—	—	—	—	—	—	—	砂質多量	紅	黒	—	—	又ス付着
42	—	—	—	—	—	—	—	—	微細砂質少含む、石英、長石	明赤	黒	—	良好	

図面番号	地区名	道標名	部 形	部類及び 残 存	測 量		文 様		土 質	色 調		施 成	備 考	
					表	裏	表	裏		表	裏			
43	A	-	-	脚 部	-	-	短縮列文	-	長石、石英、金雲母	明 赤 緑 2.5YR 3/2	良 好	スス付層		
44	"	-	-	ナ ナ	-	-	短縮列文	×	角閃石、長石、石英	灰 黄 7.5YR4/2-3/2	良 好	スス付層		
45	"	-	-	-	-	-	短縮列文 口唇部内 短縮列文	×	微細長石、石英	黒 黄 5YR 4/2	良 好	スス付層		
46	"	-	-	-	-	ヨコナテ	短縮列文	×	角閃石、石英、長石	黒 5YR 4/2	良 好	スス付層		
47	"	-	-	-	-	-	比 較 文	×	石英、長石	明 赤 緑 5YR 6/2	不 良	スス付層		
48	"	-	-	-	-	-	短縮列文 比 較 文	×	砂質土	に ぶ い 黄 明 赤 緑 5YR 5/2	良 好	風化が激しい		
49	"	-	-	-	-	-	短縮列文 短縮列文	×	長石、石英	明 赤 緑 5YR 5/2	に ぶ い 黄	良 好	スス付層	
50	"	-	-	-	-	-	口唇部内 短縮列文	×	砂質微細粒	に ぶ い 黄 明 赤 緑 5YR 6/2	不 良	スス付層		
51	"	-	-	脚 部	-	-	短縮列文	-	長石、石英、角閃石	明 赤 緑 3.5YR4/2-5/2	良 好	スス付層		
52	"	-	-	-	-	上 部(1-2)	×	-	角閃石、長石	明 赤 緑 7.5YR4/2-5/2	不 良	スス付層		
53	"	-	-	-	-	-	短縮列文 短縮列文	×	微細粒入少ない	明 赤 緑 10YR 3/1	に ぶ い 黄	良 好	スス付層	
54	"	-	-	-	-	-	短縮列文	-	長石、角閃石	明 赤 緑 10YR 5/1	良 好	スス付層		
55	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、石英、長石砂質多し	明 赤 緑 7.5YR4/2-5/2	良 好	スス付層		
56	"	-	-	-	-	-	-	-	石英、長石、角閃石	明 赤 緑 7.5YR 6/2	不 良	スス付層		
57	"	-	-	-	-	-	-	-	石英、長石	明 赤 緑 7.5YR 6/2	不 良	スス付層		
58	"	-	-	-	-	ヨコナテ	×	-	石英、長石	明 赤 緑 10YR 7/6	良 好	スス付層		
59	"	-	-	-	-	-	-	-	石英、長石、角閃石	明 赤 緑 10YR 7/6	不 良	スス付層		
60	"	-	-	-	-	-	-	-	中々砂質石英、長石多(まじ)	明 赤 緑 5YR 5/2	良 好	スス付層		
61	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、長石、石英	に ぶ い 黄 明 赤 緑 5YR 5/2	良 好	スス付層		
62	"	-	-	-	-	-	-	-	砂質長石、石英	明 赤 緑 10YR 7/6	不 良	スス付層		
63	"	-	-	-	-	ヨコナテ	×	-	石英、長石、金雲母	明 赤 緑 10YR 7/6	良 好	スス付層		

図面番号	地区名	道標名	部 形	部類及び 残 存	測 量		文 様		土 質	色 調		施 成	備 考
					表	裏	表	裏		表	裏		
64	A	-	-	脚 部	-	ヨコナテ	短縮列文	-	角閃石、長石、石英	に ぶ い 黄 明 赤 緑 7.5YR 5/3	良 好	スス付層	
65	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、長石	に ぶ い 黄 7.5YR 5/3	不 良	スス付層	
66	"	-	-	底部付近	-	-	-	-	長石、石英	灰 黄 明 赤 緑 7.5YR 5/3	不 良	スス付層	
67	"	-	-	脚 部	-	-	-	-	角閃石、長石、金雲母	明 赤 緑 明 赤 緑 7.5YR4/2-3/2	良 好	スス付層	
68	"	-	-	-	-	-	-	-	石英、長石	明 赤 緑 7.5YR4/2-3/2	良 好	スス付層	
69	"	-	-	-	-	ナ ナ	×	-	石英、長石、角閃石	明 赤 緑 10YR 6/2	良 好	スス付層	
70	"	-	-	-	-	ヨコナテ	×	-	角閃石、長石	明 赤 緑 5YR 5/6	不 良	スス付層	
71	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、長石	に ぶ い 黄 7.5YR 5/3	良 好	スス付層	
72	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、長石、石英	明 赤 緑 明 赤 緑 7.5YR 5/3	良 好	スス付層	
73	"	-	-	-	-	-	-	-	長石	に ぶ い 黄 明 赤 緑 5YR 5/6	不 良	スス付層	
74	"	-	-	-	-	-	-	-	微細石英、長石	に ぶ い 黄 明 赤 緑 5YR 5/6	良 好	スス付層	
75	"	-	-	-	-	-	-	-	長石、石英	明 赤 緑 明 赤 緑 5YR 6/2	良 好	スス付層	
76	"	-	-	-	-	-	-	-	微細長石、石英	明 赤 緑 10YR 6/2	不 良	スス付層	
77	"	-	-	-	-	-	-	-	長石、石英、角閃石	明 赤 緑 明 赤 緑 7.5YR 5/3	良 好	スス付層	
78	"	-	-	-	-	-	-	-	長石、角閃石、石英	明 赤 緑 7.5YR 5/3	良 好	スス付層	
79	"	-	-	-	-	ヨコナテ	×	-	石英、長石多(まじ)	明 赤 緑 10YR 7/6	良 好	スス付層	
80	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、石英、長石	明 赤 緑 5YR 6/6	良 好	スス付層	
81	"	-	-	-	-	-	-	-	微細長石、石英	明 赤 緑 7.5YR 4/2	不 良	スス付層	
82	"	-	-	-	-	-	-	-	長石、石英	明 赤 緑 明 赤 緑 5YR 5/6	良 好	スス付層	
83	"	-	-	-	-	ヨコナテ	×	-	石英、長石多量(まじ)	明 赤 緑 明 赤 緑 10YR 7/6	良 好	スス付層	
84	"	-	-	-	-	-	-	-	角閃石、長石	明 赤 緑 明 赤 緑 10YR 7/6	良 好	スス付層	

国番号	地区名	産地名	産形	産部及び 現存	調整		文様		胎土	色調		地成	備考
					表裏	裏表	表裏	裏表		表裏	裏表		
85	A	-	-	胴部	-	ヨコナテ	縦線列文	-	砂質石英、長石は少ない	灰 7.5YR4/2-3/2	黒 5YR	-	-
86	#	-	-	#	-	#	#	-	石英、長石は少ない	灰 7.5YR4/2-3/2	黒 5YR	-	-
87	#	-	-	#	-	#	#	-	石英、長石多く含む	灰 7.5YR4/2-3/2	黒 5YR	良好	スス付層
88	#	-	-	#	-	ヨコナテ	#	-	石英、長石少量含む	黒 10YR	灰 5/1	#	#
89	#	-	-	#	-	ナテ	#	-	砂質、石英、長石	にぶい 灰	洗 灰 黒	不良	-
90	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質、石英、長石を含む	にぶい 灰	洗 灰 黒	#	-
91	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質1-2mm大長石、石英多く含む	明 赤 黒 10YR	灰 6/2	-	-
92	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質やや細粒、微細石英砂	明 赤 黒 5YR	6/6	良好	-
93	#	-	-	#	-	#	#	-	精練、微細石砂岩を含む	明 赤 黒 2.5YR	3/2	-	-
94	#	-	-	#	-	#	#	-	精練、微細、石英、長石多く含む	黒	洗 灰 黒	良好	-
95	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質、長石、石英多く含む	洗 灰 黒	洗 灰 黒	不良	-
96	#	-	-	#	-	#	#	-	石英、長石、角閃石砂質	灰 10YR	灰 5/1	#	-
97	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質、長石	明 赤 黒 10YR	6/2	良好	-
98	#	-	-	#	-	ヨコナテ	#	-	今中砂質石英	灰 洗	洗 灰 黒	#	-
99	#	-	-	#	-	ナテ	#	-	砂質、精練	明 赤 黒	洗 灰 黒	#	-
100	#	-	-	#	-	#	#	-	石英1-2mm大、火山岩を含む	明 赤 黒	洗 灰 黒	#	-
101	#	-	-	#	-	#	#	-	石英、長石、砂少量	にぶい 灰	洗 灰 黒	#	-
102	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質、長石、石英	黒	にぶい 灰	#	-
103	#	-	-	#	-	#	#	-	石英、長石、角閃石	灰 洗	にぶい 灰	#	スス付層
104	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質長石、石英、角閃石	にぶい 灰 洗	10YR 6/3	#	-
105	#	-	-	#	-	#	#	-	角閃石、長石、石英	にぶい 灰	洗 灰 黒	#	-

国番号	地区名	産地名	産形	産部及び 現存	調整		文様		胎土	色調		地成	備考	
					表裏	裏表	表裏	裏表		表裏	裏表			
106	A	-	-	胴部	ナテ	-	縦線列文	-	角閃、石英、長石	明 赤 黒 5YR	5/6	良好	-	
107	#	-	-	#	-	#	#	-	微細長石など	黒 7.5YR	4/3	不良	-	
108	#	-	-	#	-	#	#	-	微細長石など	黒 7.5YR	4/3	#	スス付層	
109	#	-	-	#	-	ヨコナテ	#	-	石英、長石、角閃石	黒 7.5YR	4/3	#	#	
110	#	-	-	#	-	#	#	-	長石、石英	黒 洗	明 赤 黒 洗 灰 黒	良好	-	
111	#	-	-	#	-	#	#	-	砂質長石、石英、角閃石	にぶい 灰	洗 灰 黒	不良	-	
112	#	-	-	#	-	細い 32-7長ナテ	#	-	長石、角閃石、石英	明 赤 黒 10YR	7/6	洗 灰 黒 10YR	6/2	良好
113	#	-	-	底部付近	-	#	#	-	微細長石、石英	洗 灰 黒 10YR	3/2	不良	-	
114	#	-	-	#	-	ヨコナテ	#	-	精練石英、長石、少量	明 赤 黒	洗 灰 黒	良好	-	
115	#	-	-	#	-	#	#	-	長石、石英	にぶい 灰	洗 灰 黒	不良	-	

表2 弥生土器調査表

図面番号	地区名	遺跡名	形 式	器種及び 残 存	調 査				土 質	色	調 査	焼 成	備 考				
					表	裏	表	裏						表	裏		
1	B	SA4	竪	口縁部	ナ	テ	ココナテ	突	帯	文	—	—	1-3mm大の石粒多量に含む	浅 黄 褐色 7.5YR 8/4	7.5YR 6/6	良好	
2	#	#	#	#	#	#	—	—	—	—	—	—	石粒含む	浅 黄 褐色 7.5YR 7/4		不良	
3	#	#	#	#	ココナテ	ココナテ	ココナテ	—	—	—	—	—	微細、石英砂	紅 土 色 7.5YR 7/4		良好	スス付着
4	#	#	#	#	チナハクサ ココナテ	ココナテ	ココナテ	—	—	—	—	—	微細少ない	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
5	#	#	#	#	ナ	テ	ナ	テ	—	—	—	—	微細、石英砂、石粒も含む	紅 土 色 7.5YR 7/4		#	スス付着
6	#	#	#	#	#	ココナテ	—	—	—	—	—	—	5mm石粒多く含む	紅 土 色 7.5YR 6/2		#	
7	#	#	#	#	ココナテ	#	—	—	—	—	—	—	石粒、石英	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
8	#	#	#	#	ナ	テ	—	—	—	—	—	—	1mm石粒含む	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
9	#	#	#	#	#	ナ	テ	—	—	—	—	—	微細、石英、砂1mm大石粒	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	スス付着
10	#	#	#	#	#	#	#	突	帯	文	—	—	石英、長石、黄雲母、多く含む	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	#
11	#	#	#	#	腹部-胴部	#	#	#	#	—	—	—	微細、石英砂	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	#
12	#	#	#	#	底部	ココナテ	ココナテ	—	—	—	—	—	石砂粒、多量混	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
13	#	#	#	#	狭いナテ	狭いナテ	—	—	—	—	—	—	石砂粒ほどほどに含む	黄 褐色 7.5YR 6/4		#	
14	#	#	#	#	口縁部	ココナテ	ナナノハクサ	貝片黄雲母	—	—	—	—	長石、石英多く含む	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	同一部位 縦溝孔あり
15	#	#	#	#	—	—	—	—	—	—	—	—	#	#		#	スス付着
16	#	#	#	#	ココナテ	ココナテ	#	—	—	—	—	—	微細動物粉少量	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
17	#	#	#	#	胴部	#	#	#	—	—	—	—	微細、石英砂	浅 黄 褐色 7.5YR 8/4		#	
18	#	#	#	#	#	ナナノハクサ	#	—	—	—	—	—	石英、長石含む	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
19	#	#	#	#	出	—	—	突	帯	文	—	—	石英、長石、黄雲母を多量に含む	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	
20	#	SA5	#	口縁部	ココナテ	ココナテ	—	—	—	—	—	—	緑石粒、やや多く	浅 黄 褐色 7.5YR 7/4		#	不良
21	#	#	#	#	胴部	ナ	テ	—	—	—	—	—	石砂、多量	黄 褐色 7.5YR 6/2		#	良好

図面番号	地区名	遺跡名	形 式	器種及び 残 存	調 査				土 質	色	調 査	焼 成	備 考				
					表	裏	表	裏						表	裏		
22	A	SC2	竪	口縁-胴部	ココナテ	ナ	テ	—	—	—	—	—	0.1-1.5mm大の石粒を多く含む 赤黒、緑石を含む	紅 土 色 7.5YR 7/4		#	やや不良
23	#	#	#	#	ナ	テ	ナ	テ	—	—	—	—	0.1-1.5mm大の石粒を多く含む 長石を含む	黄 褐色 7.5YR 7/4		#	良好
24	#	#	#	#	ココナテ	ナ	テ	—	—	—	—	—	0.1-1mm大の石粒を多く含む	黄 褐色 7.5YR 7/4	浅 黄 褐色 8/4	#	やや不良

表3 土部器・須恵製煉灰表

図面番号	地区名	遺構名	形状	器部及び 残存	測定		法量	胎土	色		焼成	備考
					表	裏			表	裏		
1	A	SA1	甕	口縁部-胴部	ナリヤナ ココナテ	ココナテ ナ	円形-20.4cm	石粒多く含む	灰 黒 2.5YR 8/2	灰 黒 10YR 7/2	良好	
2	#	#	#	#	#	ココナテ	円形-19.0cm	2-5mm粒含む	灰 黒 10YR 7/2	灰 黒 10YR 7/2	#	スス付着
3	#	#	小壺	完形	#	#	円形-4.0cm 胴径-4.0cm 高さ-6.0cm	砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	硬質に焼成
4	#	#	甕	口縁部	ココナテ ナ	ココナテ	-	石粒多く含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	不良	
5	#	#	坪	口縁部-底部	-	-	-	砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
6	#	#	#	#	#	#	-	微細粒	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	内装土師
7	#	#	#	完形	ココナテ	ココナテ	円形-14.0cm 胴径-4.0cm 高さ-7.0cm	微細砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
8	#	#	#	底部	-	-	胴径-7.0cm	砂質強	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	「地」文字有り
9	#	#	#	完形	ナ	ナ	円形-18.0cm 胴径-4.0cm 高さ-3.5cm	砂質、表面風化	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
10	#	#	#	口縁部-底部	-	-	円形-17.0cm 胴径-3.5cm 高さ-3.5cm	砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
11	#	#	#	#	-	-	円形-13.0cm 胴径-3.5cm 高さ-3.5cm	砂質多量	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
12	#	#	#	畚斗	半完形	畚斗	円形-15.7cm	砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
13	#	#	#	口縁部	ナ	ナ	ナ	0.1-2mm大の粗粒を含む 1.5mm大の黒色の粒を含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
14	#	#	#	#	-	-	-	0.1-2mm大の砂粒を含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
15	#	#	竈	口縁部	-	ココナテ	-	風乾	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
16	#	#	#	#	-	-	-	1mm石粒、少し含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
17	#	#	#	胴部-底部	-	-	-	風乾	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	スス付着
18	#	SA2	甕	完形	ココナテ	ココナテ	円形-23.0cm 胴径-4.0cm 高さ-20.0cm	3-5mm大の石粒多量を含む	灰 黒 7.5YR 8/4	灰 黒 7.5YR 8/4	良好	スス付着
19	#	#	#	口縁部-胴部	ココナテ ナ	ナ	円形-25.6cm	3-8mm大の石粒多く含む	灰 黒 7.5YR 8/4	灰 黒 7.5YR 8/4	#	
20	#	#	#	#	ココナテ ナ	ナ	円形-25.5cm	3mm石粒を多量に含む	灰 黒 10YR 7/2	灰 黒 10YR 7/2	#	
21	#	#	#	口縁部	ココナテ	ココナテ	円形-20.8cm	2-5mm大石粒砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	

図面番号	地区名	遺構名	形状	器部及び 残存	測定		法量	胎土	色		焼成	備考
					表	裏			表	裏		
22	A	SA2	甕	口縁部-胴部	ナ	ナ	円形-19.0cm	1-5mm大石粒、多く含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
23	#	#	#	口縁部	ココナテ	ココナテ	円形-17.6cm	3-4mm大石粒、多量に混入	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	不良	スス付着
24	#	#	#	#	-	ナリ、ナ	円形-15.5cm	2-3mm大石粒	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	スス付着
25	#	#	#	#	-	-	円形-16.1cm	1-2mm大石粒含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
26	#	#	#	#	-	ナリ、ナ	-	3mm大石粒含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	不良	スス付着
27	#	#	#	#	-	ナリ	-	4mm大石	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
28	#	#	坪	口縁部-胴部	ヘリ磨き ナ	ナ	円形-21.2cm	精緻な胎土	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
29	#	#	甕	口縁部	ココナテ	ナ	円形-26.0cm	1-5mm大石粒含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	不良	
30	#	#	#	口縁部	-	-	-	0.5mm大石粒含む、やや砂質	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
31	#	#	#	#	-	-	-	2-5mm大石粒多く含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	風乾
32	#	#	甕	口縁部-底部	-	-	円形-21.0cm	砂質、4mm大石粒多く含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	良好	
33	#	#	布目	口縁部	-	-	-	砂質、1-2mm大石	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
34	#	#	#	#	-	布目	-	5mm大、石粒	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
35	#	#	#	#	-	-	-	砂質強、石粒少量	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
36	#	#	坪	口縁部-底部	ナ	ナ	円形-11.5cm 胴径-4.0cm 高さ-4.0cm	3mmが細かい 0.5mm以下の砂粒及び黒色の粒を含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
37	#	#	#	完形	#	#	円形-18.7cm 胴径-4.0cm 高さ-8.0cm	きめが細かい、砂粒を含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
38	#	#	#	口縁部-底部	ココナテ	ココナテ	円形-13.2cm 胴径-4.0cm 高さ-4.0cm	きめが細かい 0.5-1mm大の砂粒を含む	灰 黒 7.5YR 6/8	灰 黒 7.5YR 6/8	#	内黒
39	#	#	#	#	#	#	円形-13.0cm 胴径-4.0cm 高さ-4.0cm	きめが細かい 0.1-1mm大の砂粒を含む	灰 黒 7.5YR 8/4	灰 黒 7.5YR 8/4	#	
40	#	#	#	#	#	#	円形-18.1cm 胴径-4.0cm 高さ-4.0cm	0.1-1.5mm大の砂粒を多く含む	灰 黒 7.5YR 6/8	灰 黒 7.5YR 6/8	#	
41	#	#	#	#	ココナテ ココナテ	ココナテ	円形-18.0cm 胴径-4.0cm 高さ-4.0cm	精製、白色の細砂粒を含む	灰 黒 7.5YR 7/8	灰 黒 7.5YR 7/8	#	
42	#	#	#	#	ココナテ	#	円形-11.0cm 胴径-3.5cm 高さ-4.0cm	砂質約0.5mm大の砂粒少々を含む	灰 黒 7.5YR 7/2	灰 黒 7.5YR 7/2	#	

図号	地区名	遺構名	形	部及び存	測 定		法 量	土 質	色 調		見 状	備 考
					表	裏			表	裏		
43	A	SA2	環	口縁部-直縁	ココナテ	ココナテ	11層-12.0m 直縁-4.0m 裏面-6.1m	きめが細かい砂粒を含む	灰 2.5Y 黄 7/2		良好	
44	#	#	#	口縁部	#	#	口縁-14.3m	解離、石、砂粒少ない	洗 黄 橙		#	
45	#	#	#	口縁部-直縁	#	#	内径-15.0m 直縁-2.3m 裏面-9.0m	黒く乾くと3mm以下の小石、透明な粒を含む。0.1-1mm大の砂粒を多量に含む	黄 2.5YR 橙 7/2		#	
46	#	#	#	底 形	#	#	内径-15.0m 直縁-2.3m 裏面-7.0m	1-5mm大の褐色の砂粒を含む	灰 2.5YR 黄 7/2		#	
47	#	#	#	底 部	ナ	ナ	裏面-7.0m	きめが細かい砂粒及び小石を含む	黄 2.5YR 橙 7/2		#	
48	#	#	#	#	ココナテ	ココナテ	裏面-7.0m	きめが細かい砂粒及び小石を含む	灰 2.5Y 黄 7/2		#	
49	#	#	#	#	#	#	裏面-7.0m	砂質、1-2mm大石	に ぶ い 黄		#	
50	#	#	#	#	#	ナ	裏面-8.2m	0.1mm以下の粒及び5mm以下の小石を含む。きめが細かい	黄 2.5Y 橙 7/2		#	
51	#	#	#	#	#	ココナテ	裏面-8.0m	砂粒(約0.5mm大の砂粒)を含む	灰 2.5Y 黄 7/2		#	
52	#	#	#	#	#	#	裏面-7.0m	5mm大石多量、堅緻	に ぶ い 黄		#	
53	#	SZ1	壁	口縁部	#	#	口縁-19.0m	3-4mm大石粒を含む	洗 赤 黄		#	不良
54	#	#	#	#	#	#	口縁-24.3m	2-6mm大石粒を含む	洗 赤 黄		#	良好
55	#	#	#	半 底 形	ココナテ	ココナテ	内径-22.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	きめが細かい砂粒を含む	洗 黄 橙 2.5YR 8/4		#	
56	#	#	#	口縁部-直縁	ナ	ナ	内径-17.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	砂質	灰 2.5YR 黄 7/2		#	
57	#	#	#	口縁部	ココナテ	ココナテ	口縁-13.0m	腐植層、灰石など	洗 黄 橙		#	
58	#	#	#	#	#	#	口縁-13.0m	腐植、砂質、1-2mm大、砂質	洗 赤 黄		#	
59	#	#	#	#	ココナテ	ココナテ	口縁-11.0m	砂質	洗 2.5YR 黄 7/2		#	黒腐層有り
60	#	#	#	底 部	-	-	裏面-7.0m	中々砂質、全体に堅緻	洗 赤 黄		#	
61	#	#	#	#	-	-	裏面-7.0m	1mm大石粒を含む、砂質	#		#	
62	#	#	#	半 底 形	-	-	-	砂質、砂粒多い	黄		#	
63	#	#	#	横置型 胴 部	-	-	-	堅緻	灰 黄		#	中々不良

図号	地区名	遺構名	形	部及び存	測 定		法 量	土 質	色 調		見 状	備 考
					表	裏			表	裏		
64	A	SB1	深淵部	底 部	タ	タ	タ	粘土	赤 2.5Y 黄 5YR 灰 4/7		良好	
65	#	-	環	口縁部-直縁	-	-	内径-17.0m 直縁-4.0m 裏面-6.1m	透明な粒を含む。0.1mm-1mm大の砂粒を多く含む	に ぶ い 黄 2.5YR 7/4		#	風化著しい
66	#	-	半 底 形	ナ	ナ	ナ	内径-15.0m 直縁-2.3m 裏面-7.0m	砂質	黄 5YR 橙 7/2		#	
67	#	-	#	#	ココナテ	ココナテ	内径-12.0m 直縁-3.2m 裏面-6.1m	きめが細かい砂粒を含む	黄 2.5Y 橙 7/2		#	
68	#	-	#	#	#	#	12層-16.1m 直縁-4.0m 裏面-6.0m	砂粒(白く光る粒)を含む	洗 2.5Y 黄 8/3		#	スズ付層
69	#	-	#	#	#	#	12層-12.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	0.1-2mm大の砂粒を多く含む。透明な粒及び3mm以下の小石を含む	洗 黄 橙 2.5Y 8/3		#	風化著しい
70	#	-	#	半 底 形	ココナテ	ココナテ	内径-13.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	きめが細かい砂粒を含む	洗 赤 黄 2.5Y 7/4		#	風化著しい
71	#	-	#	口縁部-直縁	#	#	内径-15.0m 直縁-2.3m 裏面-9.0m	きめが細かい砂粒を含む	に ぶ い 黄 2.5YR 7/4		#	ウツ風化著しいスズ付層
72	#	-	#	#	#	#	内径-14.0m 直縁-4.0m 裏面-9.0m	0.1mm-1mm大の砂粒を含む	黄 5YR 橙 6/3		#	風化が著しい
73	#	-	#	底 形	ココナテ	ココナテ	内径-12.0m 直縁-3.0m 裏面-7.0m	粘土(白色の砂粒を含む)	に ぶ い 黄 2.5YR 7/4		#	
74	#	-	#	口縁部-直縁	#	#	内径-15.0m 直縁-4.0m 裏面-9.0m	透明な粒、光る粒を含む。0.1mm-0.5mm大の砂粒を含む	に ぶ い 黄 2.5Y 7/4		#	
75	#	-	#	底 形	#	#	内径-14.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	0.1-1mm大の砂粒を多く含む。半透明な粒及び5mm以下の小石を含む	黄 2.5YR 橙 6/3		#	風化著しい
76	#	-	#	底 部	#	#	裏面-6.0m	0.1mm-1mm大の砂粒を多く含む	灰 2.5YR 黄 7/2		#	
77	#	-	#	口縁部-直縁	ココナテ	ココナテ	内径-15.0m 直縁-2.5m 裏面-9.0m	0.2-1mm大の砂粒を多く含む	洗 黄 灰 2.5Y 6/2		#	
78	#	-	#	底 形	#	#	内径-13.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	きめが細かい砂粒を含む	洗 黄 灰 2.5YR 7/2		#	風化著しい
79	#	-	#	口縁部-直縁	-	ナ	直縁-7.2m	きめが細かい砂粒及び5mm以下の小石を含む	洗 黄 灰 2.5Y 7/3		#	
80	#	-	#	#	ココナテ	ココナテ	内径-14.0m 直縁-2.5m 裏面-7.0m	きめが細かい砂粒を含む	#		#	
81	#	-	#	底 部	#	#	内径-13.0m 直縁-2.5m 裏面-9.0m	粘土	#		#	横置型
82	#	-	#	底 部	-	-	直縁-5.0m	腐植	#		#	内照土層
83	#	-	#	#	-	-	直縁-9.3m	光る粒及び砂粒を多量に含む	洗 2.5Y 黄 A/3		#	
84	#	-	#	口縁部-直縁	ナ	ナ	ナ	灰石、石膏を含む。砂粒を含む	に ぶ い 黄 2.5YR 7/4		#	

国庫番号	地区名	道標名	形	形	築	築	築	築	築	築	築	築		築	築	築	
												築	築				
85	A	-	球	口縁部-直形	ヨコナテ	ヨコナテ	-	きめが細かい砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
86	*	-	*	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底
87	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
88	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
89	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
90	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
91	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
92	*	-	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
93	*	-	*	口縁部-直形	ヨコナテ	ヨコナテ	口縁	1-2mm石粒多量を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
94	*	-	*	口縁部-直形	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
95	*	-	*	*	*	*	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
96	*	-	*	*	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
97	*	-	*	*	*	*	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
98	*	-	*	*	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
99	*	-	*	*	*	*	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
100	*	-	*	*	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
101	*	-	*	*	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
102	*	-	*	ナ	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
103	*	-	*	口縁部-直形	ナ	ナ	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
104	*	-	*	*	*	*	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤
105	*	-	*	*	*	*	口縁	0.1-2mm大の砂粒及び3mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤	赤	赤

国庫番号	地区名	道標名	形	形	築	築	築	築	築	築	築	築		築	築	築
												築	築			
106	A	-	布目	口縁部-直形	-	-	口縁	13.0mm	砂質、1mm大の砂粒を多く含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
107	*	-	*	底	-	-	底	1-2mm大	硬質、微細粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
108	*	-	*	口縁部	-	-	口縁	3-4mm大の石粒	砂質	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
109	*	-	*	*	-	-	口縁	-	砂質	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
110	*	-	*	*	-	-	口縁	-	1mm-5mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
111	*	-	*	*	-	-	口縁	-	3mm大の石粒	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
112	*	-	*	*	-	-	口縁	-	8mm大の石粒	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
113	*	-	*	*	-	-	口縁	-	5mm大の石粒、8mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
114	*	-	*	*	-	-	口縁	-	砂質、1mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
115	*	-	*	*	-	-	口縁	-	5mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
116	*	-	*	*	-	-	口縁	-	砂質、1mm-2mm大の石粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
117	*	-	*	*	-	-	口縁	-	硬質	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤

土壌観察表

127	A	-	原土	口縁部	ナ	ナ	口縁	8.5mm	0.5-1mmの砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
128	*	-	原土	口縁部	ナ	ナ	口縁	13.0mm	0.5mm前後の砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
129	*	-	原土	底	ナ	ナ	底	10.7mm	0.5-1mmの砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
130	*	-	原土	底	ナ	ナ	底	-	0.5mm前後の砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
131	*	-	*	*	ナ	ナ	底	-	微細粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
132	*	-	*	*	ナ	ナ	底	-	0.5mm前後の砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
133	*	-	*	*	ナ	ナ	底	-	細砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
134	*	-	*	*	ナ	ナ	底	-	0.5mm前後の砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤
135	A	-	原土	底	ナ	ナ	底	-	0.5-3mmの砂粒を含む	赤	黄	赤	赤	赤	赤	赤

表4 石墩計測表

番号	出土地区	型式	全長 (m)	幅 (m)	厚さ (m)	扶 り		先角 傾度 (度)	重さ (kg)	石 材	破損状態	備 考
						幅 (m)	深さ (m)					
1	A	正三角形	1.39 (1.59)	(1.21)	0.28	—	0.12	60	0.4	チャート	片脚部	
2	"	二等角形	(1.59)	(1.55)	0.44	0.79	0.39	(41)	0.6	黒曜石	先端部	
3	"	"	2.17	(1.73)	0.37	(0.52)	0.68	70	0.9	チャート	片脚部	
4	"	"	1.78	(1.45)	0.35	0.89	0.18	49	0.8	"	—	
5	"	"	1.78	(1.44)	0.40	—	0.21	42	0.7	黒曜石	片脚部	
6	"	"	2.86	1.88	0.56	1.21	0.49	36	1.9	"	—	
7	"	"	2.28	(1.58)	0.49	(0.49)	0.39	44	1.3	チャート	片脚部	
8	"	"	1.48	(1.17)	0.43	(0.84)	0.28	50	0.4	黒曜石	"	

表5 掘立柱建物跡一覧表

建物No	柱 間	桁 行	梁 行	柱 間 寸 法		主軸方向	備 考
				桁 行	梁 行		
S B 1	3 間 × 2 間	7.0 m	4.4 m	2.05 m (2~2.7 m)	2.15 (2.1~2.2 m)	N-62°-E	
S B 2	3 間 × 2 間	5.1 m	2.8~3.7 m	1.7 m (1.3~2.2 m)	1.6 m (1.4~2 m)	N-59°-E	総柱建物
S B 3	3 間 × 2 間	3.8 m	2.8 m	1.2 m (1.1~1.4 m)	1.4 m	N-66°-E	
S B 4	3 間 × 2 間	5.8 m	3.9 m	1.8 m	1.8 m (1.1~2.3 m)	N-35°-E	焼土有
S B 5	2 間 × 2 間	5.1 m	3.2 m	2.6 m	1.6 m (1.5~1.8 m)	N-34°-E	焼土有
S B 6	2 間 × 2 間	4.8 m	3.2 m	2.4 m	1.6 m	N-40°-W	
S B 7	3 間 × 2 間	5.2 m	3.7 m	1.8 m (1.6~2 m)	1.8 m (1.7~2 m)	N-79°-E	

表6 土鐘法量表

No	出土区	長 さ	径	孔 径	重	備 考
118	SA1	4.12	1.92	0.49	11.9	
119	SA1	4.43	1.88	0.45	13.3	
120	SA1	3.42	1.64	0.49	6.65	
121	SA1	3.08	1.48	0.43	4.9	
122	SA3	3.32	1.69	0.37	6.7	
123	SZ	3.84	1.73	0.48	8.35	
124	A	4.24	1.76	0.52	12.95	
125	A	4.14	1.84	0.54	8.3	
126	A	3.85	1.33	0.45	5.75	

第三章 小山尻東遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境

小山尻東遺跡は、学園都市遺跡群が集中する清武川と加江田川に挟まれた丘陵の北側の小丘陵の東端に位置する。標高約25mの丘陵平坦部の南面に立地し、下位面の谷底低地との比高差は15mである。当遺跡に對面して南に縄文時代早期の集石遺構10基を検出した田上遺跡が、西の山の頂上には大永6(1526)年銘の板碑がある小山尻西石塔群が、山を隔てて南西に弥生終末の竪穴住居6軒や土壇10基、10世紀のカマド付竪穴住居1軒、11世紀の2間×3間の獨立柱建物1棟で構成された浦田遺跡がある。

第2節 調査区の設定と概要

トレンチ調査を行なったところ、アカホヤ層以上は畑の耕作によってほとんど攪乱されていたため、アカホヤ層下位の文化層を中心に調査することにした。北側に東からN1グリッド(2×6m)、N2グリッド(6×7.5m)、N3グリッド(7×7.5m)、N4グリッド(2×8m)、N5グリッド(5×5m)、N6グリッド(2×7m)、N7グリッド(4×5m)、中央部に東からM1グリッド(8×2m)、M2グリッド(6×2m)、M3グリッド(5×2m)、M4グリッド(7.5×2m)、南側に東からS1グリッド(6×5m)、S2グリッド(7.5×4.5m)、S3グリッド(9×8m)、S4グリッド(8×9m)、S5グリッド(2×8m)を設定してアカホヤ層下の集石を検出した。N2・5・6・7、M1・2、S2～5グリッドには焼石が集中している。N2グリッドに4基、N7グリッドに1基、S2グリッドに1基、S3グリッドに2基、S4グリッドに1基の計9基の集石遺構が検出された。集石遺構・焼石間から前平式・押型文・塞ノ神式・貝殻条痕文の早期の土器群が出土し、共伴して環状石斧・打製石斧などが出土した。特に早期の磨製環状石斧が出土したのは注目された。

B地区では、平安時代(10世紀)の竪穴住居が検出され、へら切りの土師器の坏・高台付埴・布痕土器に共伴して緑釉皿・越州窯系青磁焼などが出土している。

中世の集石遺構がS-1グリッドで検出され、4.85m×2.40m×0.45mの土壇の上層に焼けた河原石・角礫が充填していた。

第3節 包含層の状態

当遺跡の基本層序は、I 耕作土、II 黒色土層、III アカホヤ層、IV 明褐色土、V 褐色土層である。A地区は耕作によって黒色土層がほとんど削平されていた。B地区は黒色土層がA地区よりは残っていた。

(長津 宗重)

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 集石遺構

本遺跡においては10基の集石遺構が確認された。そのうちの1基は出土遺物から中世に比定されるものであり、残りの9基が縄文時代に比定されるものと思われる。これらの9基の集石遺構はすべて隣群中より確認されたものである。集石を含むこの焼礫群は、上層のI暗褐色表土層、II赤褐色層(アカホヤ層)下に位置する明褐色土層中に包含されていた。先にこの隣群の広がりを各グリッドごとに見てゆきたい。

1. 隣群の分布状況(第1図)

(1) N1グリッド

3ヶ所のトレンチが残るグリッドである。3ヶ所のトレンチは礫層を包含する明褐色土層より深く掘り込まれているために当然のことながら礫の分布はみられない。このグリッドでは全体にわたり礫の分布がみられ、とくに南端の100×80cmの範囲に集中していた。しかし、これは人為的な集石ではない。

(2) N2グリッド

濃密な集石をみるグリッドで、北側に一部散慢な分布範囲がある。礫層は平均30cmほどの重なりをもち、その礫上、礫間に多数の土器片、石器の出土をみた。グリッド中央より東側に2基(4号、5号)、同じく南西に2基(6号、7号)の集石遺構を確認した。

(3) N3グリッド

グリッド中央より東側に不定形に広がる濃密な分布帯をもつほか、南西方向に弓状の分布帯、南端に不定形に広がる分布範囲をもつ、出土遺物はグリッドの南東端に集中し、このグリッドは、必ずしも礫群の分布範囲と一致していなかった。

(4) N4グリッド

全体にやや疎に礫の分布をみる。中央より北に100×50cm内外の楕円状の濃い分布域をみるが、これも人為的集石ではなかった。

(5) N5グリッド

南東の一面にはほとんど礫のない範囲をみるほかは、全面にわたって濃密な分布をみるグリッドである。礫層の幅は平均20cmから25cmに及び、出土する遺物はほぼこの礫層分布域に一致している。

(6) N6グリッド

濃密な礫の分布がみられるわりには出土遺物点数が6点とひじょうに少なかった。

(7) N7グリッド

グリッド中央より南西方向に集石遺構(8号)を確認した。南東の隅、北東の隅、集石より北側1mのところには不定形の礫のほとんどない範囲がある。その他の範囲は濃密に礫が分布している。

(8) M1グリッド

グリッド東側の3分の1ほどにまったく礫のない範囲がある他は濃密な分布域である。出土遺物は礫群の分布範囲と一致している。このグリッドの礫層はN2グリッドの礫層に続くものと考えられる。

(9) M2グリッド

全体に濃密に分布するが、西側の3分の1の範囲はやや散慢に分布する。散慢に分布する範囲には、石器1点の他は遺物の出土がなかった。濃密に分布する範囲は、N2、N3グリッドの礫層に続くものと思われる。



第1図 グリッド配置図及び礫・集石遺構分布図

00 M3グリッド

グリッド中央より北側の100cm×50cmの楕円状の小範囲に礫の集石がみられたほかは、全く礫の分布がみられなかった。礫の集石は人為的になされたものではない。

01 M4グリッド

グリッド中央より西側2分の1の範囲、南東の隅に礫の全くみられない範囲がある他は、比較的濃密に分布するグリッドである。ただ、遺物の出土は4点と数少ない。

02 S1グリッド

中世に構築されたと考えられる大きな集石遺構(S11)を確認した。

03 S2グリッド

全域にわたって礫の分布をみるが南へ行くにしたがい散慢となる。中央付近の1m×1.5mの楕円形の範囲と南東隅の1.5m×2mの不定形の範囲に礫の分布をみなかった。中央付近から北東方向に集石遺構(S110)を確認した。N2 M1グリッドと続く礫層がこのS2グリッドへも続き終了するものと思われる。S1・2・3・4・5グリッドから南は深い谷となる。

04 S3グリッド

S2グリッドと同様に南へ行くにしたがい散慢な分布となる。不定形の濃密で大きな礫群がみられる。濃密な分布域のなかに、さらに礫の集中した1m×1m、50cm×50cmの小範囲がある。単に礫の集中したものに思え、人為的なものではない。北東の隅に集石遺構2基(S12、S13)を確認した。この2基は近接している。

05 S4グリッド

N2グリッドと共にもっとも濃密な分布を示し、礫層は平均30cmほどの重なりをもつ。

南東の隅、南西の隅、北の中央付近にほとんど礫のみられない範囲がある。南側の中央付近に集石遺構(S19)を確認した。出土遺物は多数に及び、とくに石皿はこのグリッドのみに出土している。出土範囲は礫の分布範囲に一致している。

06 S5グリッド

南側3分の1は散慢に分布するが、北側に向うにしたがい分布が多くなる。

2. 集石遺構

S12 (第2図)

S3グリッドの南東に位置し、東側ベルトに接している。S13と近接しており、集石中心間の距離はS12から西にほぼ130cmを測る。集石の範囲は南北110cm、東西90cmを測り南北にやや長い楕円形を呈する。集石を構成する礫は総数72個を数え、火成岩系の河原礫、砂岩質の河原礫により構成される。割れているもの、丸礫のものがあがるが、割れているものが数量的には多い。丸礫のものは比較的大型である。割れているものは、熱を受けて割れたものではなく、丸礫を人工的に打ち欠いており鋭利なカット面を残している。集石中央付近に、20.2×14cm、25×15cm、

22×12cmを測る比較的大型で扁平な丸礫3個を配する。礫を取りのぞくと集石の範囲とはば一致する南北93cm×東西85cmを測るほぼ円形の土壌を検出した。土壌の深さは約11cmを測り、断面は皿状を呈す。土壌底部に非常に扁平な板石を数枚ひいている。各礫は比較的密に集石しており、S3グリッドの散乱する礫群のなから集石遺構として確認するのに困難はなかった。集石の南端において、貝殻痕文を施す小土器片が出土した。(第6図・97)・全体に色調赤褐色を呈し、胎土に0.5～1mmの石英粒を含み焼成は堅く焼きしめられ良好である。色調赤褐色を呈するのは二次的な熱を受けたものと思える。

S13

S3グリッドの南東に位置し、S12と隣接している。集石の範囲は南北95cm、東西80cmを測り、これもS12と同様に南北にやや長い楕円形状を呈する。S13はS12に比べ、やや散漫な集石となっている。集石を構成する礫は総数60個を数え、S12同様火成岩系の河原礫、砂岩質の河原礫である。丸礫と角礫で構成されるが、丸礫は比較的大型で、角礫は小型の丸礫を打ちかいて半懐したものや、数回打ちかいて角礫としたものがある。

丸礫の大型のものは、集石の中心部付近に配されている。最も大型の丸礫で20×17cmを測る。

集石の範囲にはば一致して、深さ約20cm、南北90×東西80cmを測る土壌を検出した。土壌の底部にはS12と同じく、扁平な板石を土壌面にそって配石している。

S12、S13はほぼ同じレベル上にあり、しかも近接して位置する。集石端部は極めて接近し30cmを測る。

S14

N2グリッドの南東に位置し、S15と中心距離で約1.4mと近接している。集石の範囲は南北約1m、東西約90cmを測りほぼ円形に広がる。この集石は角礫が多く、また中央より南側は散漫な集石となっている。南北75cm×東西72cm、深さ9cm～12cmを測る不定形の土壌を検出し、土壌底は南側で約5cm上がっていた。土壌検出の際、炭化粒の出土をみている。また、土壌底にこの集石では板状の礫を敷いたり、立てたりしたようすはなかった。

S15

N2グリッドのほぼ中央に位置して、S14に近接している。集石の範囲は南北約1.2m、東西約1.2mでほぼ円形に広がる。半懐、あるいは数回割られたと思われるものが多いが、丸礫も若干含まれている。全体に2号、3号に比べて礫が小さいが、比較的形はそろっている。この集石では重なり合った二重の土壌を検出した。外側の土壌は南北約1m×東西約70cm、内側は南北約65cm×東西60cmを測る。北側の土壌壁を共有している。外側の土壌は集石の範囲と一致するから、内側の土壌がまず掘り込まれ、後に広げられたものと考えられる。

内側土壌の範囲により大きな礫が集石していた。また土壌底に礫は敷かれておらず、炭火粒を含む暗褐色土がつまっていた。集石中より剥片二点(第10図21, 22)が出土している。

S16

N2グリッドの西側に位置し、S17に近接している。集石の範囲は南北1.3m×東西40cmで南北に長い不定形を呈している。この集石は破片といえるくらいの小角礫が多く、土壌を共にならなかつた。

S17

N2グリッドの西端に位置し、南北に1.3m広がるが、東西はグリッドベルトにかかり確認し得なかつた。比較的

形の揃った集石であり、また土壌は深く掘りこまれ、約28cmを測る。集石の東端部、暗褐色土層中より環状石片（第10図18）が出土した。礫は土壌底までつまっており、底に敷きつめたようであった。土壌は方形を呈していたかもしれない、完掘できなかったことがおしまれる。

S 1 8

N 7グリッドの南東隅に位置し、他の集石からかなり離れている。S 1 7から西に約22m、S 1 9から北西に約16mを測る。集石の範囲は南北110cm、東西125cmを測るが東西方向にかけ離れて小集石がある。他の集石に比べ小礫を乱雑に組んだ印象を受ける。小礫は丸礫がほとんどなく、打ちかいた角礫がほとんどを占める。他の集石が丸礫を中心部付近に配したり、板石を底に敷いたりするのに対して、S 1 8は比較的大きさのそろった角礫を無雑作に組み込んで構成している。このS 1 8もまた周辺に同じ大きさの礫が散乱していたため、また上記のように無雑作に組まれていたがため一見しただけでは集石遺構として判断し得なかった。礫を取り除く過程で土壌をともなっていたので集石遺構として確定し得た。土壌は南北100cm、東西95cmの不定形であった。集石底より土壌底まで厚さ10cmほどの黒褐色土層がつまっており、その中に炭化粒を確認することができた。同時に第4図18に掲載している前平吉田系の貝殻文土器片を採取しえたことから最終的に集石遺構と断定するに至った。貝殻文土器片にはススが附着していた。

S 1 9

S 4グリッドの南側に位置する南北70cm、東西55cmの広がりをもつ小さな集石である。礫総数は角礫、丸礫合わせて25個を数える。24×24cm、18×25cm、15×23cmの3個の扁平な丸礫を土壌の縁にそって立てかけて炉を組むように構成している。集石のほぼ中央の底の部分にはこの集石中最も大型の22×26cmを測る不定形の扁平な丸礫を敷いている。S 1 9は集石自体の広がり小さいが、集石を構成する礫自体は比較的大型であり、人為的な意図が明確に感じられる。集石下に50×50cmに広がるほぼ円形の土壌を検出した。深さは20cmを測り比較的深い、ただし集石は土壌底まで及んでいない。土壌を検出する際炭化粒を検出した。土壌内の土は明らかに床面である第2層とは異なり、黒褐色を呈していた。

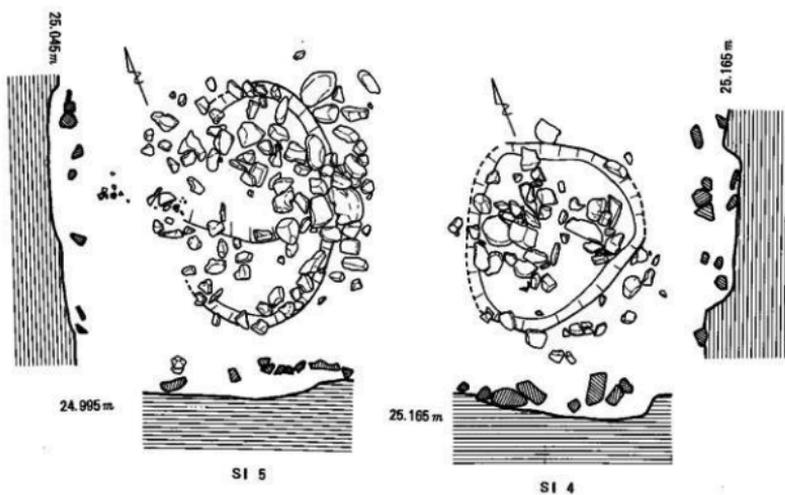
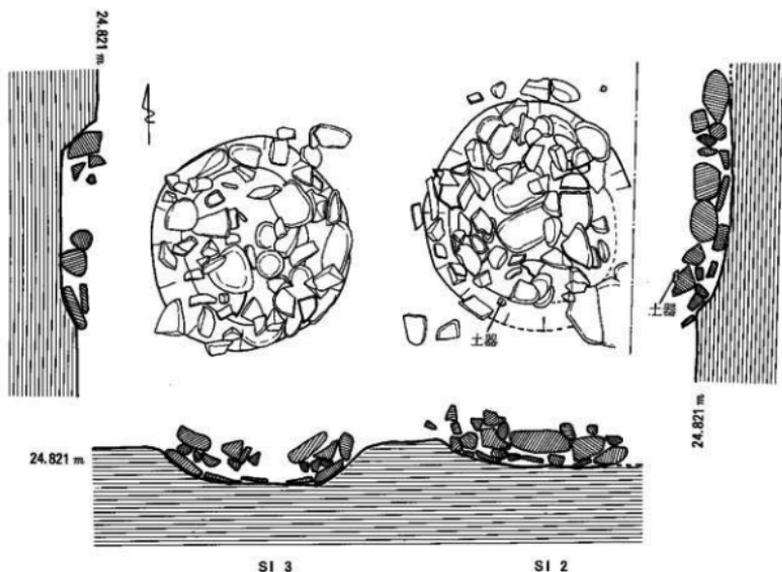
S 1 10

S 1グリッド北西に位置し、南北75cm×東西70cmを測るほぼ円形の集石で、比較形的揃った人頭大の角礫よりなる。深さ約10cm程度の浅い土壌を伴っている。

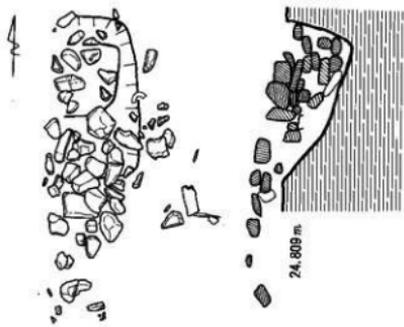
3. ま と め

本遺跡の集石遺構は、発掘区一面の礫群のなかよりの発見であった。集石遺構と確定する過程には、礫層が現われた段階ですぐに集石と認められるもの、（それとて、礫が周辺に散乱して範囲が明確ではなかったが）礫層を取り除く過程においてそれと認知するものがあり、必ずしも容易ではなかった。集石遺構を含む礫群のなかには赤色、あるいは赤褐色を呈して深いヒビ入り、一見して熱を受けたと思われるものがあったが、すべてが熱を受けているかどうかは判然としなかった。集石遺構と礫群との関係は明確ではないが、あるいは、焼石礫は集石遺構の廃棄礫である可能性がある。礫群中より磨石、石皿が出土しているがこれらも部分的、あるいは全面に赤化して加熱されていた。ただ、これらは集石遺構に組み込まれていた確証はない。なお、熊本県菊池郡大津町中後迫遺跡で、磨石7点、石皿3点⁽¹⁾が集石内より出土した例がある。

本遺跡の集石遺構を人別すると次のようである。(1)比較的大く、浅い土壌をもち、土壌底に扁平な板石を敷く。また中央付近に比較的扁平に近い丸礫を置く。(S 1 2, S 1 3) (2)比較的大く浅い土壌をもち、集石礫が土壌底に接しない



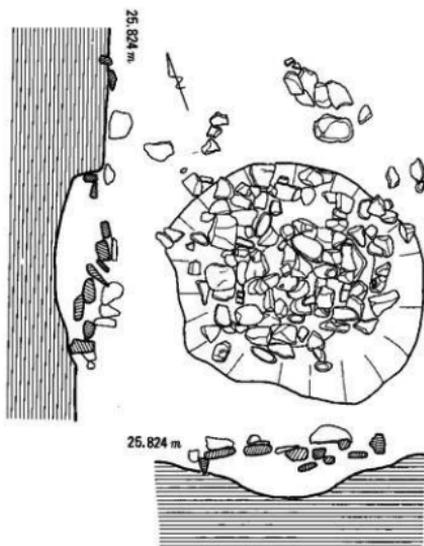
第2図 集石遺構 2・3・4・5号



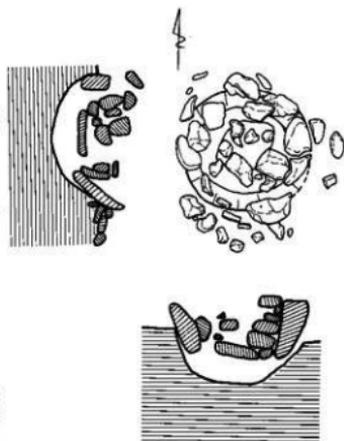
SI 7



SI 6



SI 8



SI 9

第3図 集石遺構6・7・8・9号

もの。(S15, S18), ③土壌を持たず平面上に集積するもの。(S16), ④比較的径は小さいが、深い土壌をもち土壌側壁にそって扁平な大型礫を立て、底にも扁平な板石を敷くもの。集石礫は土壌底に接しない。(S19), ⑤方形に近い土壌を有するもの(S17)以上である。使用目的の相違、あるいは時期的な相違があるものと思われる。集石を含む礫群は、赤ホヤ層直下に層をなしていたものであり、また集石遺構中からは貝殻条痕文土器片、前平・吉田系土器片が出土していることから縄文早期に比定したい。集石遺構の機能としては、earthoven としての使用が推定されることが多いようであるがなかには遺骸の埋葬時における墓標的機能をもつものもあるという。本遺跡の集石遺構の場合は、礫に加熱された形跡が窺われたこと、炭化粒の出土、ヌスの付着した土器片の出土などからしてやはりearthoven 的機能を果たしたのかと思われる。

註 (1) 中後追跡調査報告 熊本県菊池郡大津町 1978

(2) 「大分県地方史」34号—稲荷岩遺跡 大分県大野郡朝地町大恩寺稲荷 1964

II 遺物

1. 土器 (第4・5・6・7・8図)

本遺跡出土の土器は、破片がほとんどをしめ、完形に近く復元できたものはなかった。

器形は深鉢がほとんどで、浅鉢、円筒、角筒土器が混在する。

押型文土器、貝殻文土器、その他があり、文様器形等からI類からXII類に大別した。

I類

I類器は貝殻条痕を横位、斜位に施して地文とし、その上に貝殻複線刺突線文を施すものである。円筒と角筒の器形をもっている。

I a—円筒形を呈するもの。(1~13, 17~26)

I b—角筒形を呈するもの。(14・15・16)

II類

II類土器は押型文土器である。

II a—山形押型文を施文するもの (27~38)

II b—楕円押型文を施文するもの (39)

III類

III類土器は凹線と燃糸文を組み合わせたもの (40~46)

IV類

IV類土器は貝殻による条痕を斜位に施す土器である。

IV a—口唇を丸くおさめる口縁部。(47~54)

IV b—口唇を平坦にして角をもつ口縁部。(55~60)

IV c—口唇部端に刻目などの模様を施すもの (61~66)

IV d—貝殻条痕をもつ胴部 (67~107)

V類

V類土器は、器体外面に浅い擦痕が数条みられるもので、板状のもので調整したものである、外面はきれいに磨かれている。(108~110)

VI類

VI類土器は、器体外面に細い条痕をもつもので、先のとがった串状のものでひっかいている。

VII類

VII類土器は、器体外面に深い条痕を密に施しているもので、ヘラ状土具によるものかと思われる。

VIII類

VIII類土器は、縄文を施すもの、115は口唇部、胴部に斜行縄文を施す。116は縄文を施す文様帯上に二条の隆帯をもっている。

IX類

IX類土器は、器体外面に刺突列点文を施すもの。(117・118)

X類

X類土器は、太い貝殻条痕を横位に施すもの。(119～122)

XI類

XI類土器は、3ないし4の波状口縁で縄目突帯を口縁と頸部にめぐらし、縄目突帯のつなぎ目は突瘤文となる下部突帯下は縦位のヘラ描きによる刻文を地文として、菱形、あるいは情円に近い刻文を3条にわたって施している。(123～126)

XII類(底部)

XIIa 一平底で、胴部へゆるく立ち上がるもの。(133～136)

XIIb 一平底で、胴部へ比較的急に立ち上がるもの。(137～140)

XIIc 一平底で、胴部へ垂直に近く立ち上がるもので、細刻線をもつもの。(141～144)

XIId 一平底で、底に貝殻条痕をもつもの。(145)

XIIf 一比較的強い上げ底で、胴部へと立ち上がるもの。(146)

XIIe 一比較的ゆるやかな上げ底で、底部近くに貝殻表圧痕文をもつもの。(147)

XIII類

XIII類は、上記のI～XII類と明らかに時期が異なるものである。

ヘラ状土具による数条の沈線がある。(148)

図版に掲載している土器の器形・調整・文様については土器観察表に一括している。

2. 石器

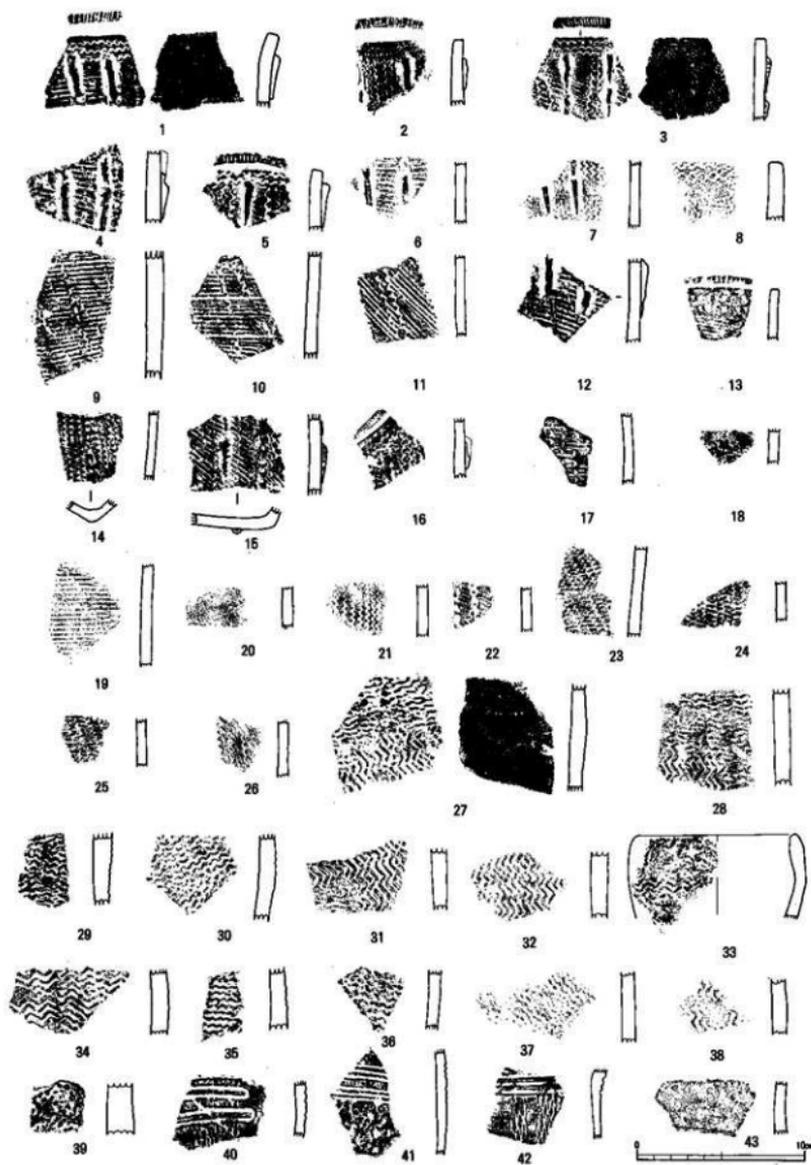
本遺跡では礫の散乱する中に各種の石器が出土した。

磨石7点、敲石2点、凹石1点、石皿2点、石鎌2点、打製石斧2点、磨製石斧1点、環状石斧1点、剥片石器2点である。

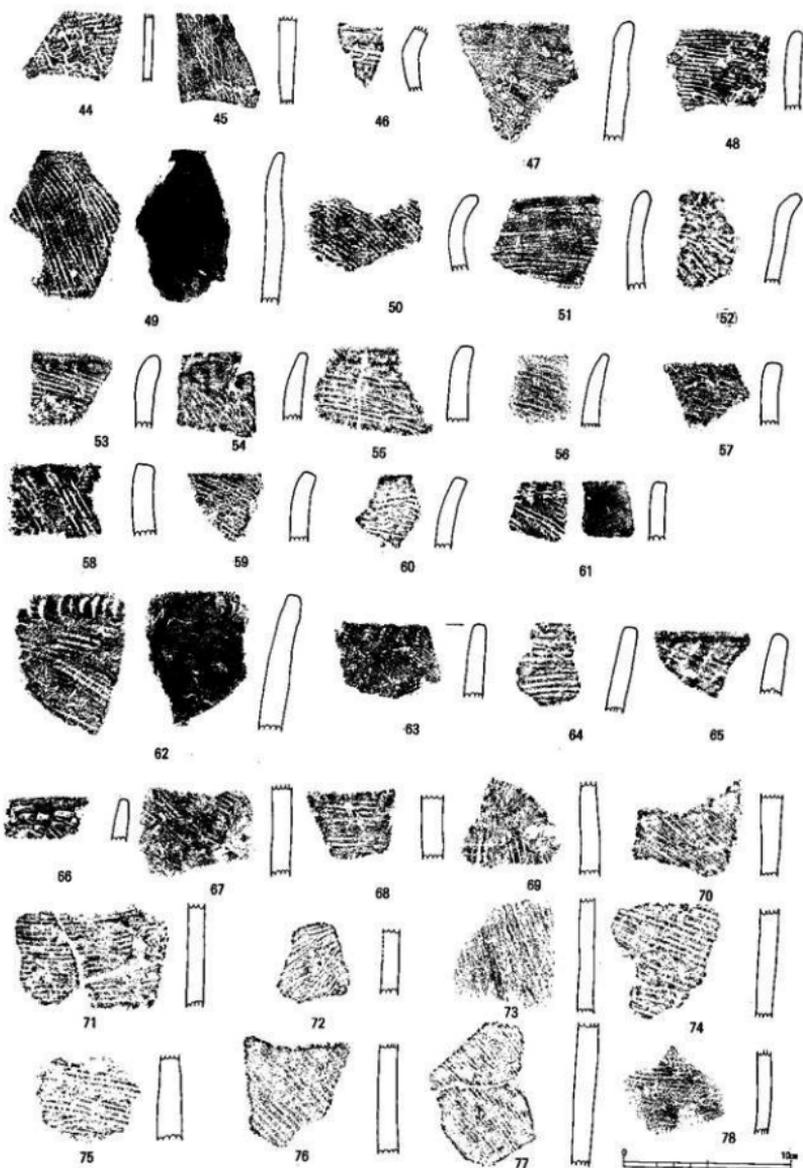
(1) 磨石(第9図1～7)

第9図1～7は磨石である。1・2・3は円形の礫を用い、比較的厚い断面形をもっている。1はとくに平坦な面をもっておらず、球に近い形状をしている。熱をうけたと思われ広範囲にわたってヒビが入っている。2は片面に小範囲の平坦面をもっている。3は平坦面が中心軸より一方にかたより、しかも緩傾斜がついている。平坦面は裏面、側面に比較して平滑である。1・2・3ともに砂岩製、1はやや軟質、3は硬質である。

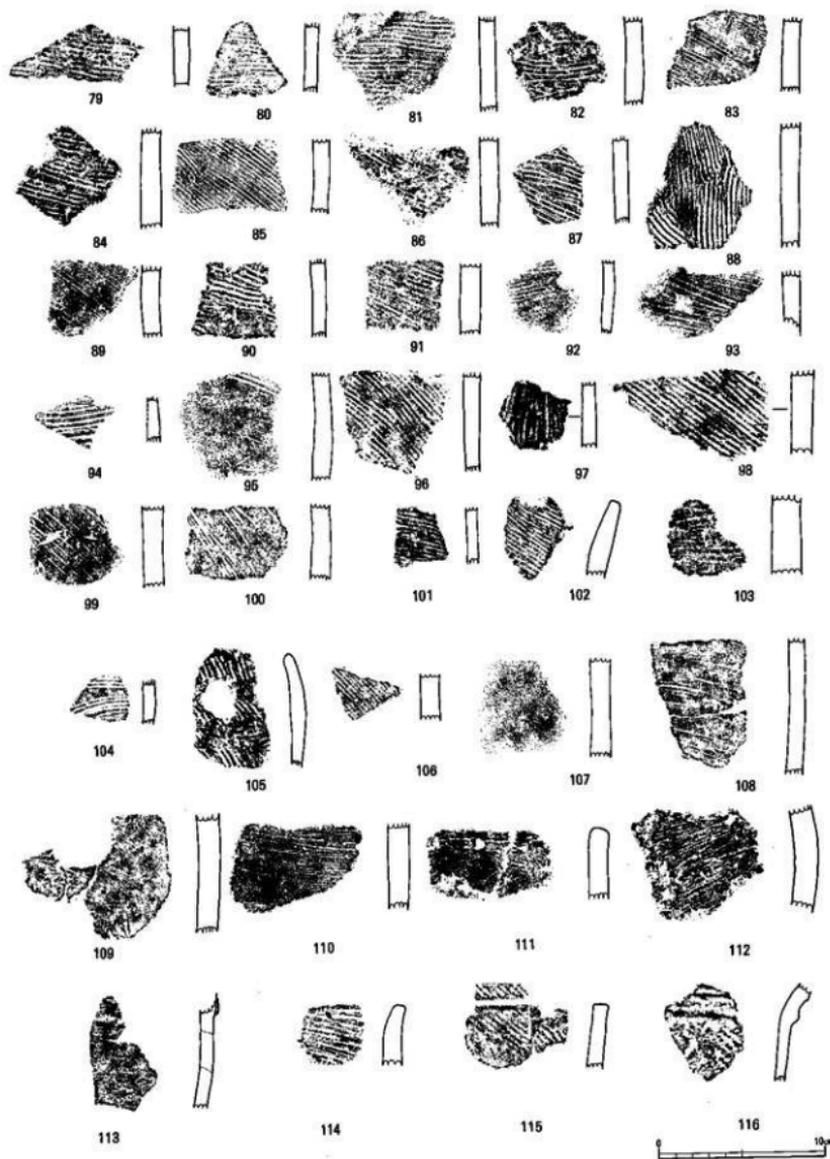
4・5は縦長の丸礫を用いた磨石である。4の平坦面はそれほど顕著ではない。これも熱をうけて深いヒビ割れがある。5は片面に顕著な平坦で平滑な面をもっている。下端には潰痕が残り敲石としても使用された形跡がある。4・5ともに砂岩製、やや硬質である。



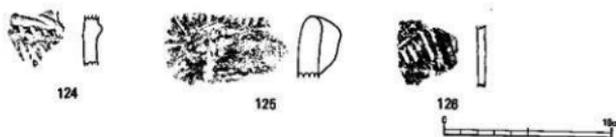
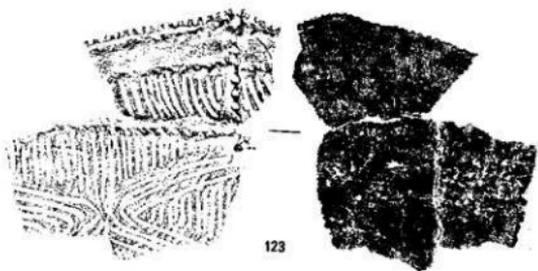
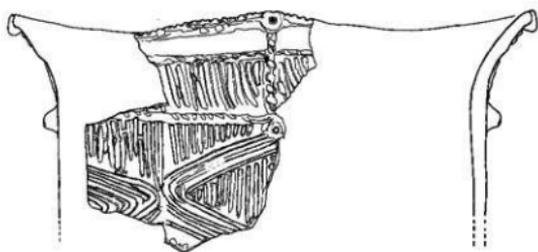
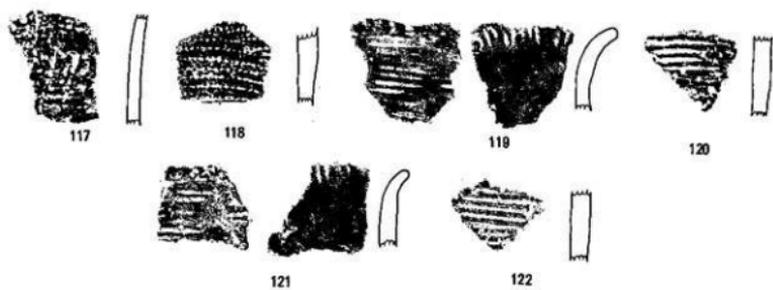
第4图 出土土器拓影(1)



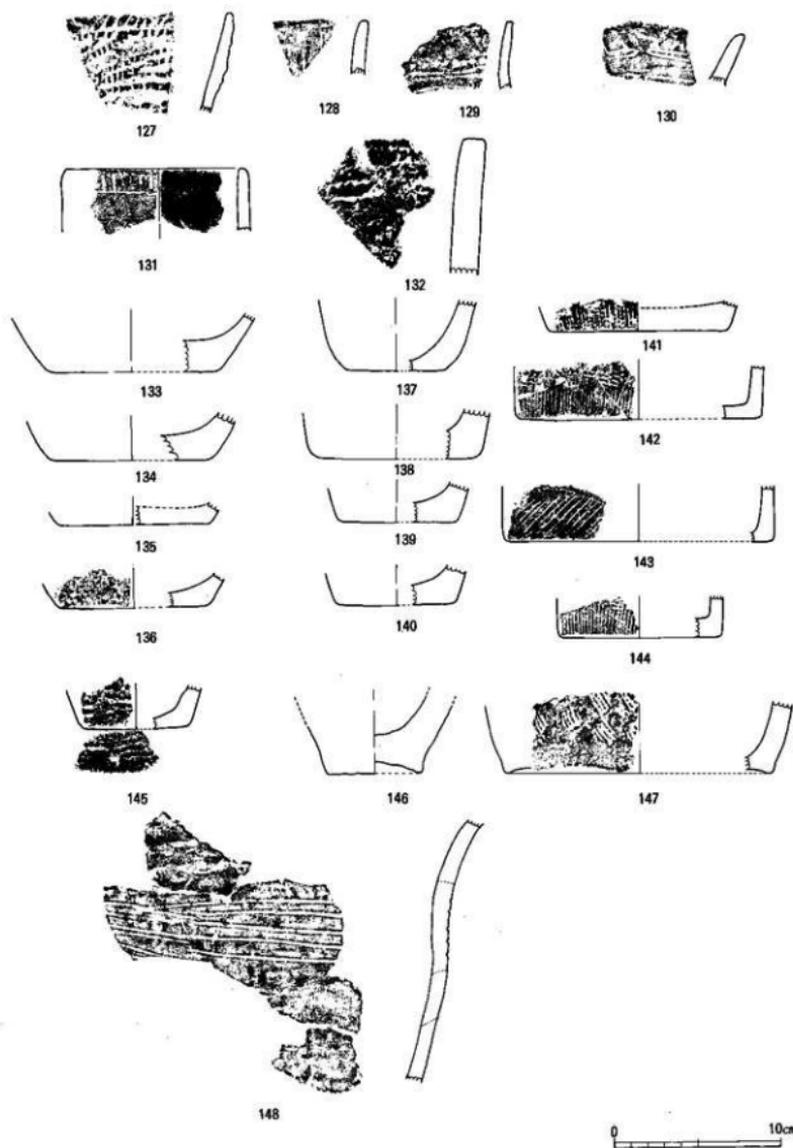
第5圖 山土土器拓影(2)



第 6 图 出土土器拓影(3)



第 7 图 出土土器拓影(4)



第8图 (川上土器拓影15)

6・7は円形、あるいは楕円形の丸礫を用いる扁平な磨石である。6・7とも広範囲の平坦で平滑な面をもつ。7には中央付近に凹みがあり台石としても使用された形跡が残る。6・7とも砂岩製、7は硬質である。

(2) 敲石(第9図8・9)

第9図8・9は砂岩製の敲石である。8は敲石としては特異な形状をもつ。全体にゆるく湾曲し、上端内湾部と下端に潰痕を有する。下端の潰痕部は平坦ではなく、これも曲面である。潰痕は上端、下端ばかりでなく、湾曲部内部の一面と外面にも連続した潰痕が残る。

これは敲石として使用されるまえに他の目的のために使用された石器の一部のように思える。これは、N7グリッド中のS18中より出土しており、焼けてやや赤褐色を帯びている。9は楕円形の丸礫を半壊したもので、下面に潰痕を残している。また石器中央部にゆるやかな角度の稜があり、両縁に向って平坦、かつ平滑に加工してある。

(3) 凹石(第9図10)

第9図10は楕円形を呈する凹石である。最大長8.1cm、横幅5cm、最大厚3.8cmを測る中央部に円形の凹みを有する。凹みは小さな潰痕からなり、2mm～3mmの深さである。背面にも潰痕を有するが不定形で、表面のような明確な円形は呈していない。

(4) 石皿(第10図11・12)

第10図11・12は石皿である。11は最大長26.8cm、最大幅17.6cm、最大厚4.7cmを測る。中央部付近がわずかに凹むが、石皿の表面としてはフラットな面で構成される平坦磨面の石皿である。二次的な加熱を受けており、赤化している。12は最大長29.2cm、最大幅23.5cm、最大厚4.9cmを測る。これは隅丸の三角形を呈して両辺に縁を残し、中央部で弓状に強く凹んでいる。これも、二次的な熱を受けたとみえ部分的に赤褐色を呈している。11・12とも砂岩質である。11は、安達厚三氏(注1.)によるIa(扁平な転石を利用した全体に浅く凹むもの)、12はIIb(不定形の石塊を利用して、縁を残して中央が弓状に凹むもの)にあたる。

(5) 石鏃(第9図13・14)

第9図13・14は石鏃である。本遺跡からはわずかにこの2点が出土したにすぎない。2点とも非常に小型の打製石鏃である。13はチャート製の基部がやや決れる凹茎無茎鏃である。両側縁と基部の長さがほぼ同じで正三角形を呈する。計測値は最大長11mm、最大幅10mm、最大厚2mmである。14は珪石製の11とは逆に基部中央にふくらみをもつ無茎鏃である。脚の片方は欠けている。側面からみるとわずかに左右方向にゆがみがみられる。現存の計測値で最大長14mm、最大幅12mm、最大厚25mmをそれぞれ測る。

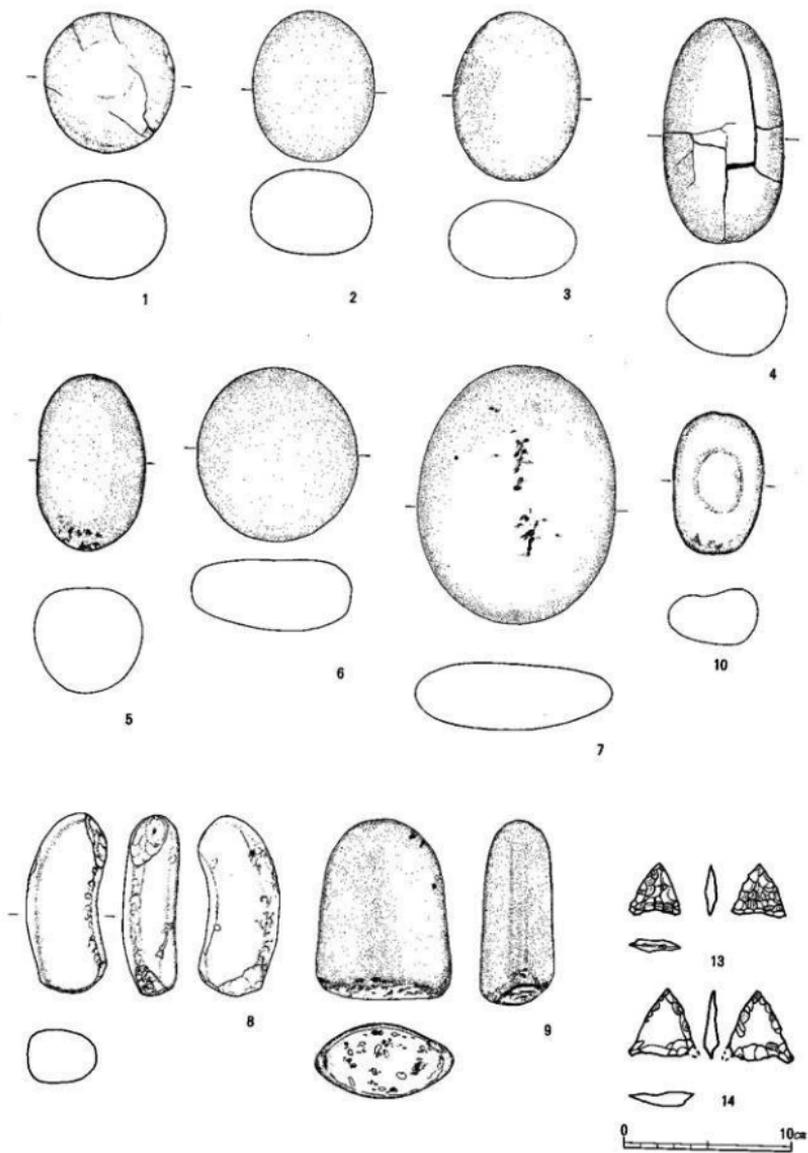
(6) 石斧(第10図15・16・17)

第10図15・16・17は石斧である。15・16は打製、17は磨製である。15は現長で最大長12.2cm、最大幅4.85cm、最大厚2.85cmを測る。片面により多く調整剝離を行っているが、全体に磨耗が著しく明確に剝離面を残していない。両刃の石斧であったと思われるが刃先端を欠損している。しかし、一度折れたものをそのまま使用し続けたと思われる、使用痕を残している。断面をみると肥厚しており、全体は乳棒状を呈している。石質は極めて粒子の粗い火山岩質で暗青灰色を呈する。16は現長で最大長8.8cm、最大幅3.75cmを測る小型の片刃短冊形石斧である。全周縁に調整剝離を行っているが両縁均等でなく片縁に丁寧に施す。刃部に磨耗痕を残している。基部片側は欠損している。砂岩質で明青灰色を呈する。

17は両刃の磨製石斧の刃部で上部を欠いている。現長で最大長6.2cm、最大幅5.5cm、最大厚2.6cmを測るが、おそらく13cm～15cmほどの長さがあったものと思われる。刃部は極めて鋭利であり、使用痕として刃こぼれが観察できる。

表面はよく磨かれている。断面はやや厚めの凸レンズ状を呈している。石質は硬質砂岩である。

(7) 環状石斧(第10図18)



第9图 出土石器(1)

第10図18は環状石斧である。これはN2グリッドS I 7下、暗褐色土層中より出土した磨製の環状石斧である。視覚した限りでは熱を受けた形跡はない。円盤状を呈して中高であり、復元径10.7cm、孔径(外孔径3.2cm、内孔径2.2cm)、厚さ2.1cmを測る日下部善己氏の分類によるA I aにあたるものと思われる。すなわち中央孔の周囲に隆帯や凹帯を持たず、中央孔の断面形が珠玉状〔>〕を呈する両刃のものである。硬質の砂岩を素材として全面にわたって丁寧に研磨されている。刃部には使用痕と思われる細かな剥落痕が観察できる。孔は両方向より均等に穿孔され、孔面は磨かれたように平滑で、回転運動を主とする穿孔具により穿孔されたものと思われる。なお、穿孔具を確認することはできなかった。

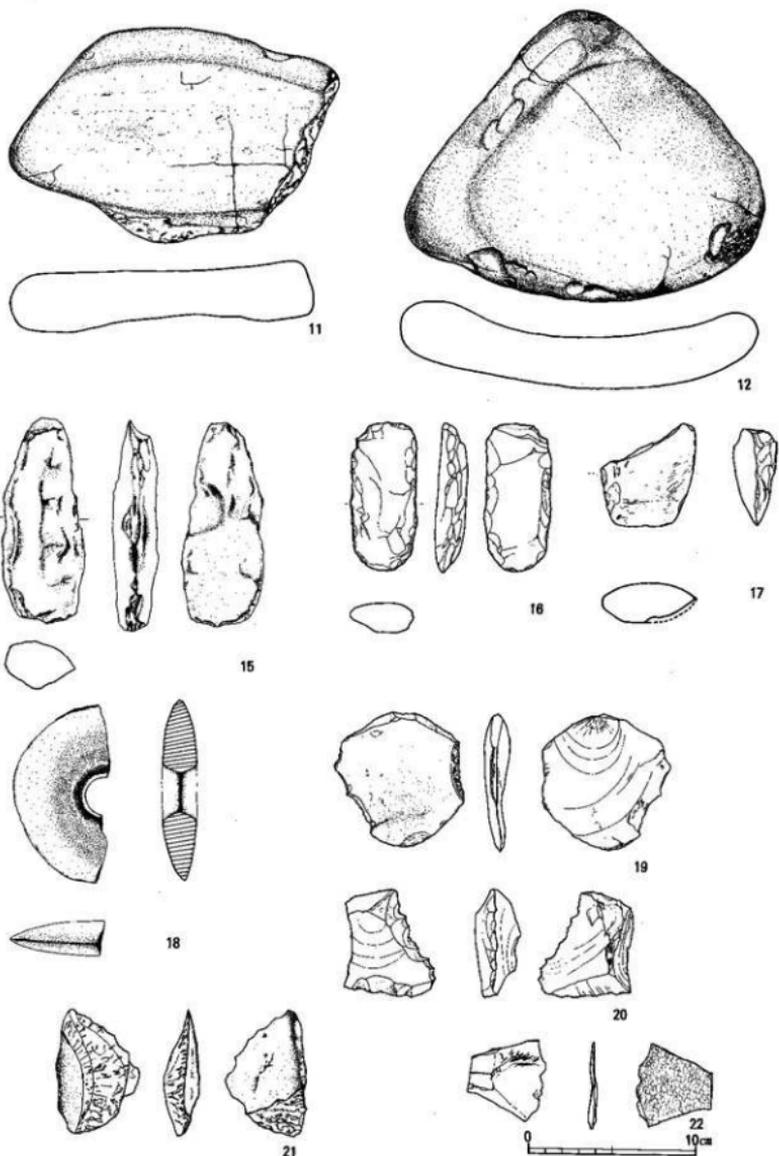
(8) 剥片石器(第10図19・20・21・22)

第10図19は未加工の自然面を片面に残す円形石器である。全周にわたって片面縁部調整が施され、一部に剥落痕をみる。20は片面よりの粗い剝離の後、細かい調整剝離を施した剥片である。21・22はS I 5中より出土した剥片で視覚したかぎりでは熱を受けた形跡はなかった。

3. まとめ

本遺跡出土の石器は、縄文早期において出土が指摘されているものほとんどを確認し得た。ただ、石鏝の出土が他の石器と比較して極めて少なかった。各石器は礫群に伴って出土し、礫石の分布が疎である範囲には当然のことながら極めて希であった。同様のことは土器片についてもいえる。特に密に礫石が集積されていたS4グリッドからは、磨石のほとんどと石皿が出土した。石皿は床に置かれたように出土していたので、この範囲は何らかの遺構の存在を思わせたが、礫群を取り去っても何らの遺構も確認できなかった。また、この磨石と石皿は明らかに熱を受けたあとがあり、集石中に組み込まれた後、廃棄されたものかと思われる。実際、岐阜県堂之上遺跡⁽³⁾で、集石遺構の床面に石皿を配した例が知られている。また礫石と環状石斧が集石遺構中より出土している。環状石斧は日下部善己氏⁽²⁾によって算出されている外径、厚さの平均値内にほぼ合致しており、西日本では希な出土である縄文早期の磨製品ということで特に注目される。県内では近年、もう一例縄文早期の磨製環状石斧が出土している。宮崎郡田野町芳ヶ迫遺跡⁽⁴⁾のものがそれで、本遺跡のものよりひとまわり小型であり、復元径8.4cm、孔径2.5cm、厚さ1.6cmを測る。全面に丁寧に研磨された硬砂岩製のもので、本遺跡と同様に集石遺構をとまなう礫石群中よりの出土である。ただ、本遺跡の環状石斧の場合は集石中からの出土であり、極めて希な例である。この環状石斧は損壊したために集石中に投入、廃棄されたのか、あるいは人為的に半壊して何らかの儀礼のために投入したものか、集石遺構の機能と共に検討すべき課題である。ただ、石器の本来的な機能を喪失して、集石遺構という二次的なものへ転用されたことは疑う余地がない。

出土した縄文土器はⅡ類の一点を除き、アカホヤ土壌下の褐色土層より、礫と混在しながら得られた。よって、土器の出土範囲は礫群の分布範囲とはほぼ一致している。Ⅰ類土器は前平・吉田系土器で、底部Ⅱcに組合わせると考えられる。うち一点は集石遺構中よりの出土であった。Ⅱ類の押型土器はわずか13点の出土で、うち12点が山形押型文、残りの1点のみが楕円押型土器片であった。Ⅲ類土器は凹線文と撫糸文を組合わせた河口定義氏の分類における塞ノ神A式bにあたる。これもわずか7点の出土であった。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、いずれも縄文早期に比定できるものである。量的に本遺跡の主流を占めるのはⅣ類土器で、116点が出土している。うち1点は集石遺構中からの出土であった。Ⅳ類は口縁部から胴部にかけて貝殻条痕文を斜位に浅い角度で施し、内面は磨かれていて丁寧なつくりである。口縁部は角がつくか丸くおさめられ、心もち外反している。刻目などの模様があるものは少ない。器形は深鉢形を呈すると思われる。色調、胎土、焼成からみて底部Ⅱa(平底)タイプと組合わせられると考えられる。同種のもは宮崎学園都市遺跡内の田上遺跡のほか、宮崎郡田野町芳ヶ迫遺跡でも同様のものが出土している。いずれも集石遺構をとまない



第10图 出土石器(2)

性格のよく似た縄文早期の遺跡である。このIV類の他、施文原体がIV類の二枚貝より大型で、もっと深くて太い貝殻条痕を施すX類がある。この土器では条痕は口縁にはほぼ平行、横位に施される。底部Ⅱaに太い貝殻条痕をもつものが出土しているが、あるいはこれと組合わさる可能性がある。

XI類土器は4点を数え、N6グリッドより出土した2点とS4グリッド出土の1点は接合している(第7図、124)。

この種の土器は初見であり、口縁は三ないし四の低い山形で、口縁に沿って縄目突帯を巡し、突帯文で結ばれる。胴部はヘラ状施文具で縦位に刻文を施している。器体下部の出土がなかったため、全体の器形は明らかではないが、そのまま少しふくらみながら底部へ続くのか、あるいは胴部「く」の字形に屈折して底部へと続く深鉢形を呈すると思われる。県内の出土例では宮崎市跡江貝塚出土の、器体上部細形刻文、下部山形押型文を斜走または縦走させる跡江式土器にもっとも近いものである。跡江式は手向山式と称される土器群の一つで、手向山式の要素のなかにこのXI類土器に類似するものをみると「Ⅲ式一平行線、鋸歯文、弧線文を描き曾畑式とI勝山式の文様を踏襲する」⁽⁵⁾ものがある。XI類の場合は刻線が縦方向に施される点が異なるが、手向山のなかに縦位に施するものが知られている。⁽⁶⁾また手向山式の口縁は通常直行するが、これもなかに山形口縁を早するものがあるという。⁽⁷⁾また曾畑系の細形刻文は縄文早期の押型文土器に共存することがしばしばであるといい、四本遺跡の共存土器との関連で、このXI類土器の出土は興味をひく。

細形刻文は縄文早期の押型文土器に共存することがしばしばであるといい、本遺跡の共存土器との関連で、このXI類土器の出土は興味をひく。⁽⁸⁾

XIII類はI～X類の出土状況と異なり、赤ホヤ土層上の暗褐色土層中からの出土で明らかに時期が異なるものである。いかなる系統に属するか明らかではないが、ヘラ状工具による数条の沈線は後期の土器をおもわせる。以上、本遺跡の主な出土土器について概観したが、ここで各土器の編年関係を岡本勇氏の編年でみてゆく。氏によれば、前平式吉田式(本遺跡ではI類に相当するものと考えられる。)を早期中葉に、塞ノ神式(本遺跡でのIII類)を早期後半に位置づけ、手向山式(本遺跡ではXI類に相当すると考えている)を平椀式と共に、前平式、吉田式よりは新しい早期中葉に位置づけられている。本遺跡ではI～X類土器のほとんどが散乱する確間中より混在して出土し、この編年を明確に確認し得るような層位的発掘をなし得なかった。

また、本遺跡の主流をなしているIV類の貝殻条痕を施す土器も他種と混在しての出土で、層位関係を明らかに出来なかった。しかし、S12中より出土したものが1点あり、同じくS18から出土したI類土器との関連から、ここでは早期中葉に位置づけておきたい。IV類土器は現在のところ明確な系譜をたどれないようであるが、近年その出土例が徐々に増えつつあり、今後その成果から明確な位置づけを期待したい。尚、XI類土器については乙益重隆氏に御教示をうけた。厚く感謝申し上げます。

(近藤 協)

註 (1)「縄文文化の研究」7.道具と技術、安達厚三氏筆、石皿。

(2) 同上 7.道具と技術 口下部善己氏筆、環状石斧。

(3)「堂之上遺跡」岐阜県大野郡久々野町教育委員会、1978年

(4)「芳ヶ迫第1遺跡」概報、宮崎県宮崎郡田野町教育委員会、1984年

(5)「日本の考古学」、縄文時代、九州東南部 河出書房

(6) 乙益重隆氏の御教示による。

(7) 乙益重隆氏の御教示による。

(8)「日本の考古学」、縄文時代、九州東南部 河出書房

(9)「縄文土器大成1～早・前期」講談社 1982

第5節 弥生時代の遺構と遺物

耕作によって削平されていた点もあるが、弥生土器はわずか2点である。

遺物

甕1

短い逆し字状口縁で、口唇部は凹気味であり、三条の三角形突帯を有する。胎土には1mm大の砂粒（雲母・石英など）を多量に含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

甕2（第11図2）

斜目下方へ垂れ下がる口縁部を有する口径20.5cmの甕で、内外面ともナデを施す。胎土には0.5～1mm大の砂粒（黒雲母など）を含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄橙～褐灰色を呈する。

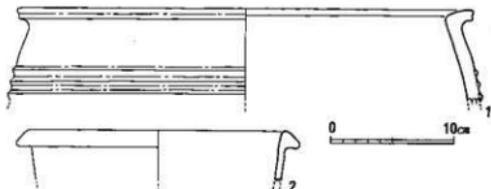
第6節 古墳時代の遺構と遺物

1号土壇（第12図）

1号土壇はS-5グリッドに位置する。1号土壇は、主軸長157cm、幅124cm、深さ42cmで、長方形プランを呈している。主軸は東西方向で、中央部の床面より若干浮いた形で、甕・壺が各1個ずつ出土した。甕は横位に、壺は倒位でほぼ完形で出土している。

甕（第13図1）

端部がやや平坦な口縁部がやや直立気味に真っすぐ伸び、胴部最大径がやや上位になる。底部は丸底で厚い。口径16.0cm、胴部最大径20.8cm、器高22.2cm。



第11図 A地区 出土弥生土器実測図

甕（第13図2）

端部がやや平坦な口縁部がくの字に外反し、長胴の上げ底である。胴部最大径が上位にある。口径27.5cm、胴部最大径26.7cm、器高33.5cm。

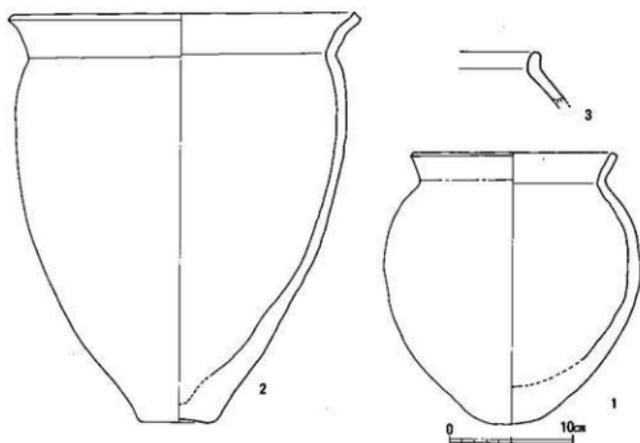
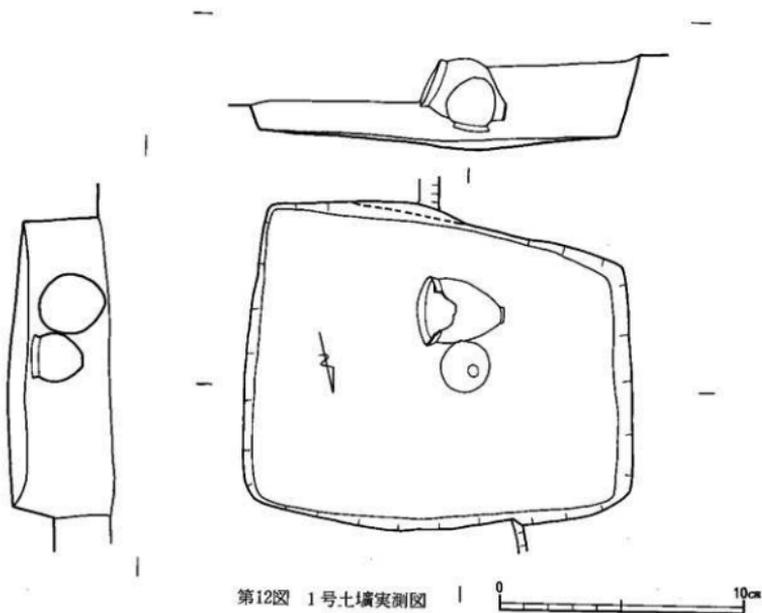
第7節 平安時代の遺構と遺物

SA1

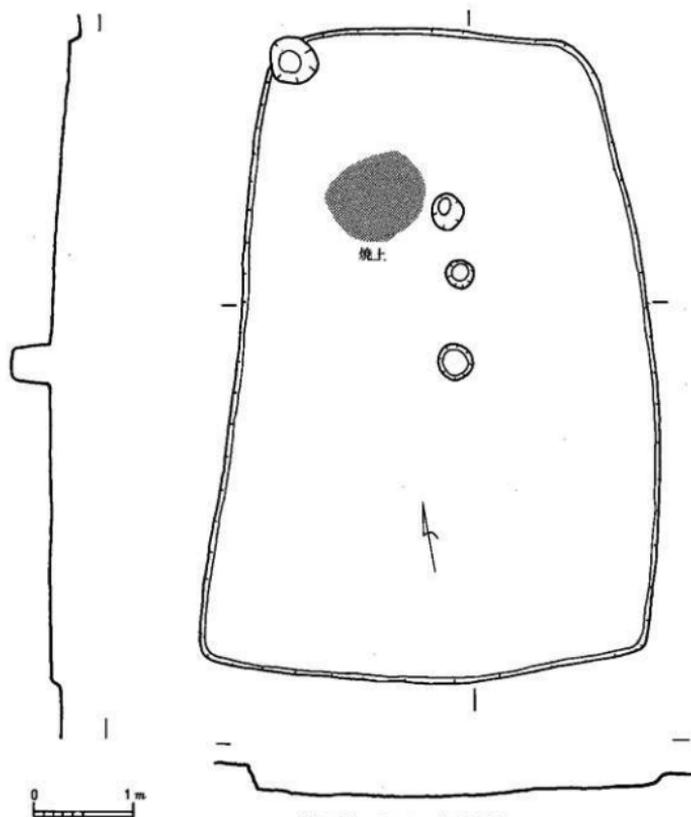
1号竪穴式住居は、調査区の西部B地区に位置する。長軸6.64m、幅4.38mの楕円形プランを呈し、主軸は南北方向である。主柱穴は南北方向の2本である。

土師器

土師器はほとんど1号竪穴式住居から出土した。ヘラ切りの坏・高台付壺が主で、糸切りの坏や皿は出土していない。土師器に共伴して、緑釉皿・越州窯系青磁碗が出土している。当遺跡の土師器の坏を底部の切り離し技法によってヘラ切りのⅠ類、糸切りのⅡ類に分けるが、Ⅱ類は出土していない。Ⅰ類を底部の形態によってA～E類に分け、底部の器壁の仕上げ方によって薄手のa類と厚手のb類に分ける。更に底径の法量によって7.5cm～8.0cmのⅠ類、6.8cm～7.2cmのⅡ類、4.2cm～6.2cmのⅢ類に分ける。上述した3要素による土師器の形態分類を次のように行ないたい。



第13图 1号土坑出土土器实测图



第14図 SA1 実測図

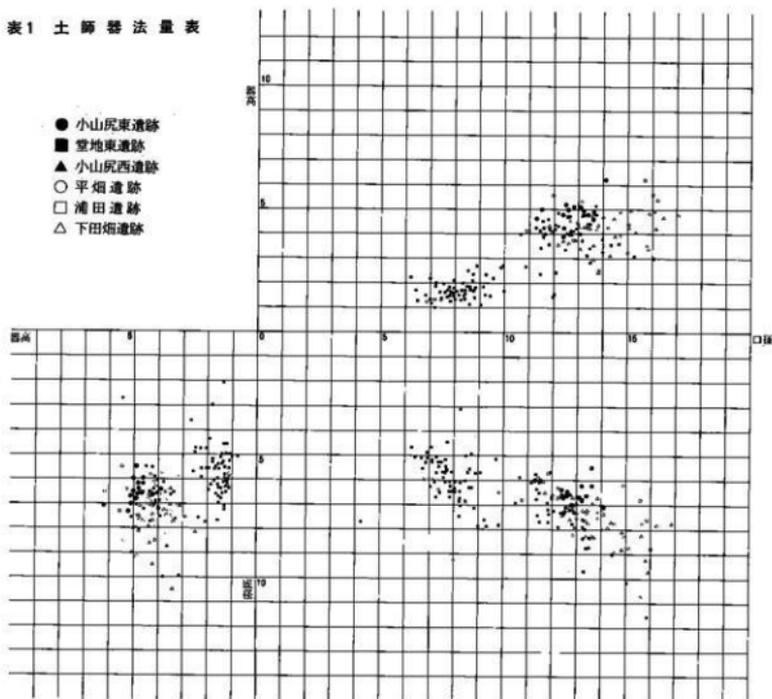
緑釉皿 (第17図138)

口縁部以外の外面をへら削りし、全面にへら磨き調整する。暗灰色の硬い素地に緑褐色の釉を施す。底部には削ゆ出しによる蛇の目高台である。口径14.8cm、底径6.9cm、器高3.2cm。

越州窯系青磁碗 (第17図140)

釉は淡緑灰色で、体部下方から底部にかけて露胎のままで茶褐色に発色している。底部の内面、側面に重ね焼きの目跡を残す。胎土には小砂粒を含む。高台底面がやや上げ底状を呈するもので、底面端部をへら削りし、底部から体部が直線的に伸びる。口径15.8cm、底径6.6cm、器高5.1cm。

表1 土師器法量表



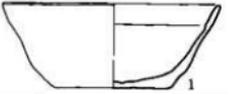
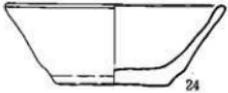
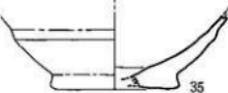
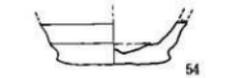
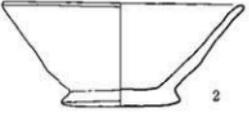
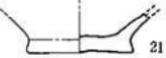
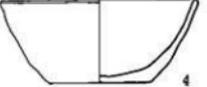
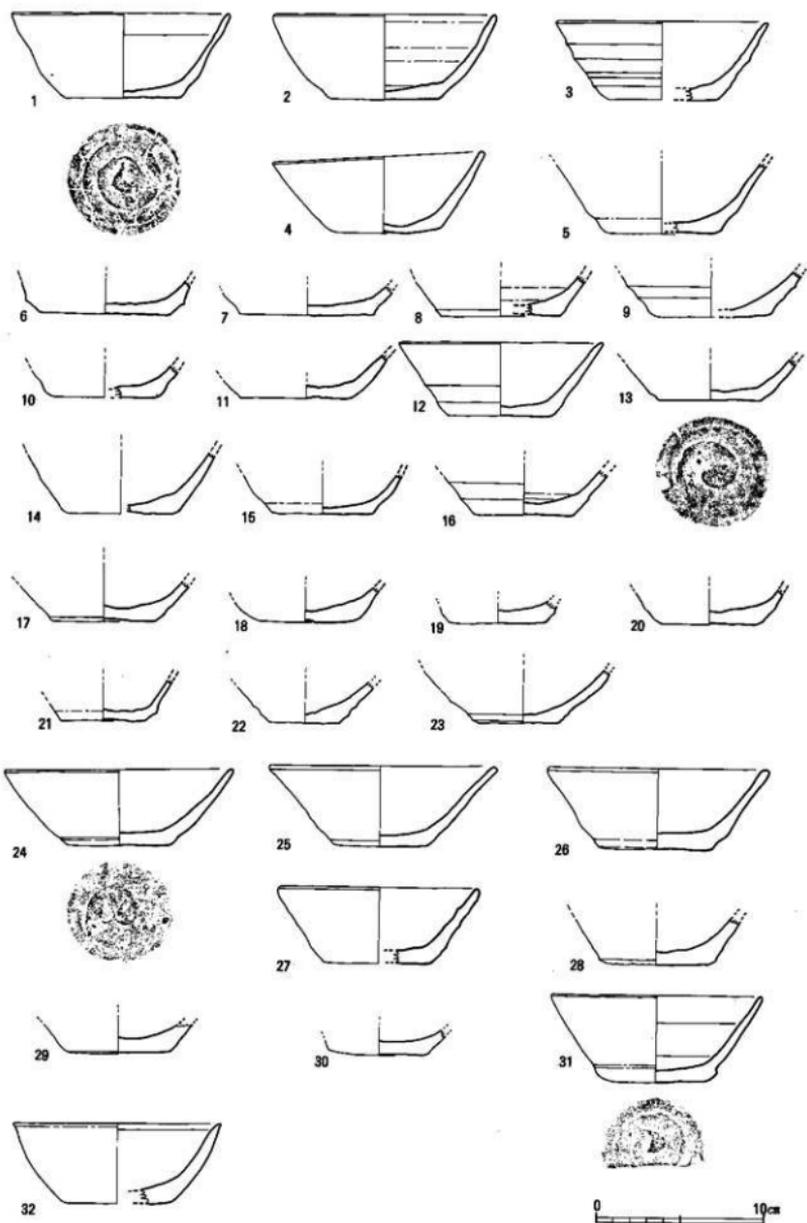
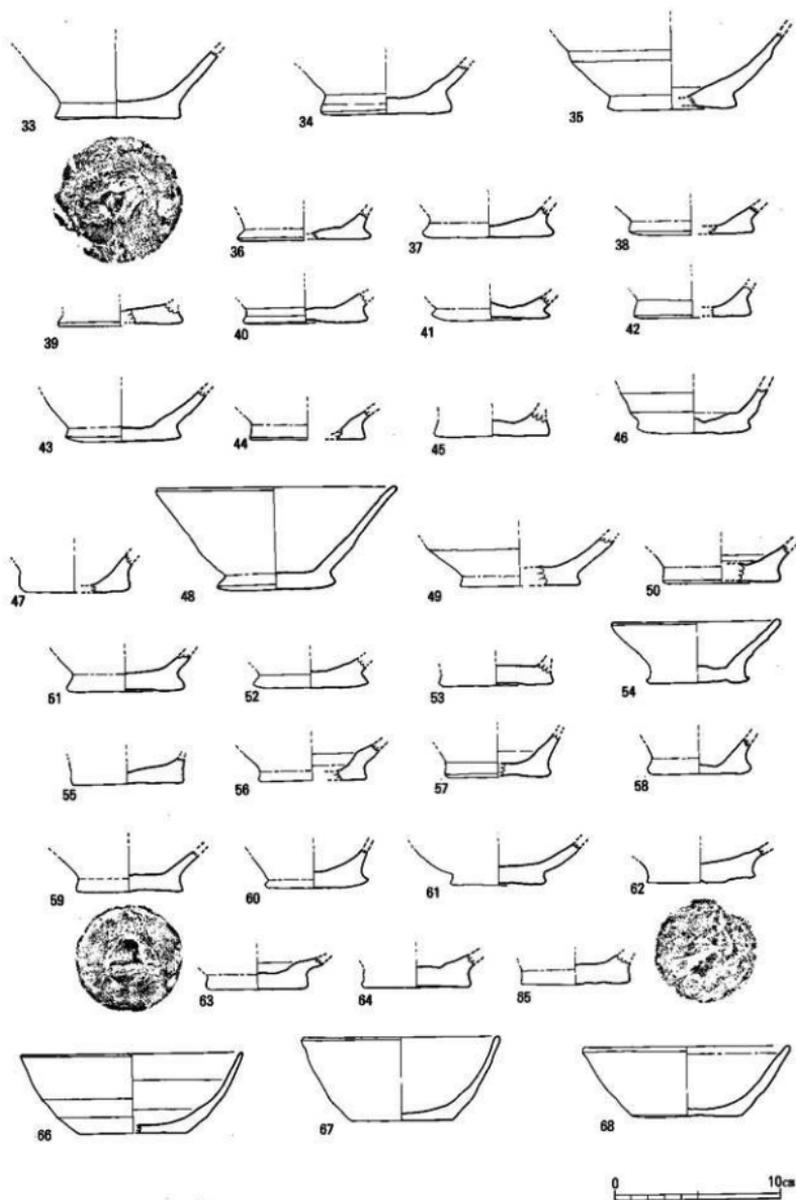
		形態の特徴	法量 _{cm}	特徴	
A	a		口径 12.6~13.1 底径 6.5~7.0 器高 4.7~5.1	<ul style="list-style-type: none"> 底部と体部の境は明瞭である。 体部の斜目上方に直線的に伸びる。 底部は平底で薄手である。 口唇部は丸い。 	
	b		口径 11.7~13.6 底径 5.5~6.8 器高 4.2~4.9	<ul style="list-style-type: none"> 底部は平底で厚手である。 口唇部は丸いものと鋭いものがある。 	
I	B	1		底径 7.5~8.0	<ul style="list-style-type: none"> 底部と体部の境が明瞭で、底部は斜目下方へ強く張り出す。 口唇部は丸い。 底部は平底で薄手である。 底径の法量によって7.5~8.0cmの1類、6.8~7.2cmの2類、5.7~6.4cmの3類に分かれる。
		a	2		
		3		口径 10.1前後 底径 5.7~6.4 器高 3.7前後	

表2 SA1 出土土師器垣分類図(1)

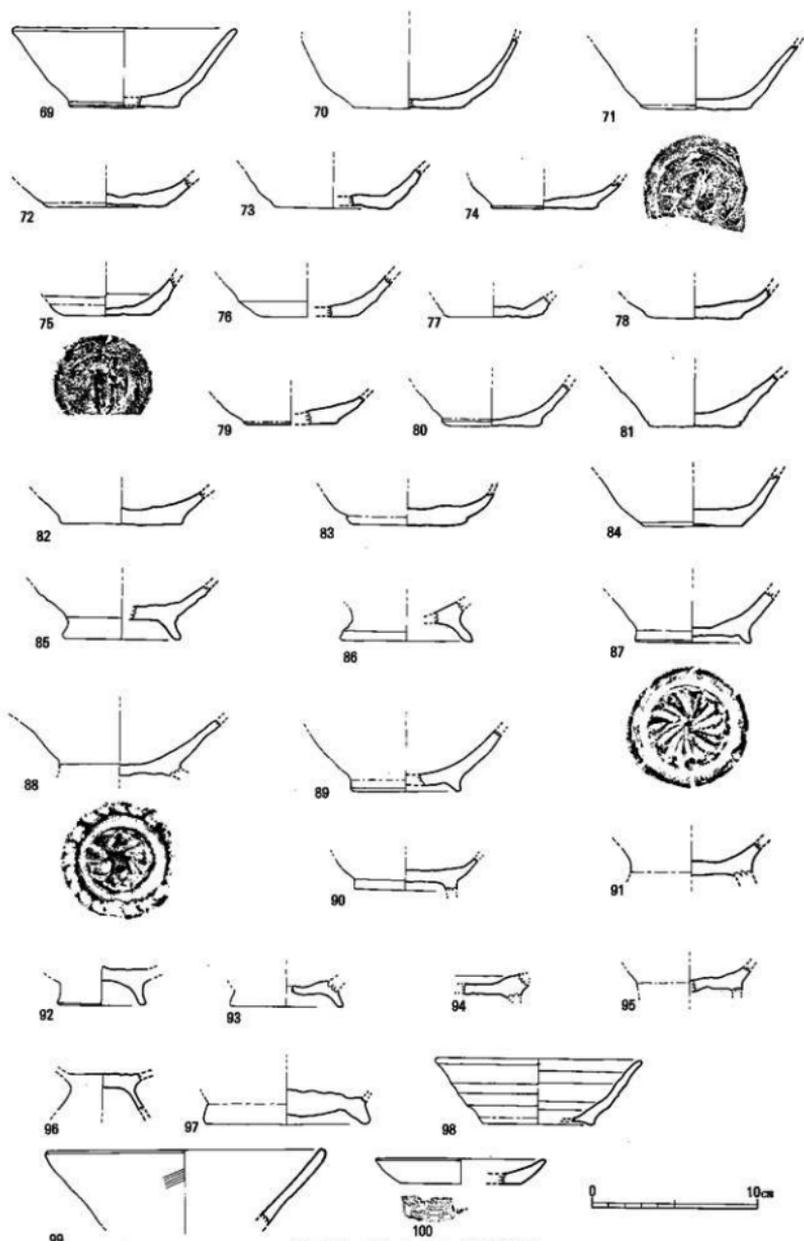
		形態の特徴	法量 _{cm}	特徴
B	b	1 	底径 7.5~8.0	◦ 底部は平底で厚手である。
	b	2 	口径 14.1 前後 底径 6.8~7.2 器高 3.2 前後	
	b	3 	底径 5.7~6.4	
I	C	b 	口径 11.5~13.2 底径 6.0~6.6 器高 4.2~5.0	◦ 底部と体部の境があまり明瞭でない。 ◦ 底部は平底で丁寧なナデ調整を施し、薄手である。 ◦ 口唇部は丸いものと鋭いものがある。
	D	a 	底径 5.6~7.4	◦ 底部と体部の境がやや甘くなり、ヘラ切後の調整が難である。 ◦ 口唇部は丸い。 ◦ 底部は平底で薄手である。
E	b 	口径 13.4 前後 底径 6.6~6.7 器高 4.8 前後	◦ 底部は平底で厚手である。	
	b 	底径 6.0~7.0	◦ 外方へ伸びる高台を有し、端部は丸い。 ◦ 高台の内面をヘラ状工具で放射状に削る。	
F	1 	底径 6.5 前後	◦ 外方へ伸びる短い高台を有し、端部は丸い。 ◦ 高台の内面はヘラ切りの後、ナデを施す。	
	2 	底径 6.5~7.0	◦ 外方へ伸びる長い高台を有し、端部は丸い。	



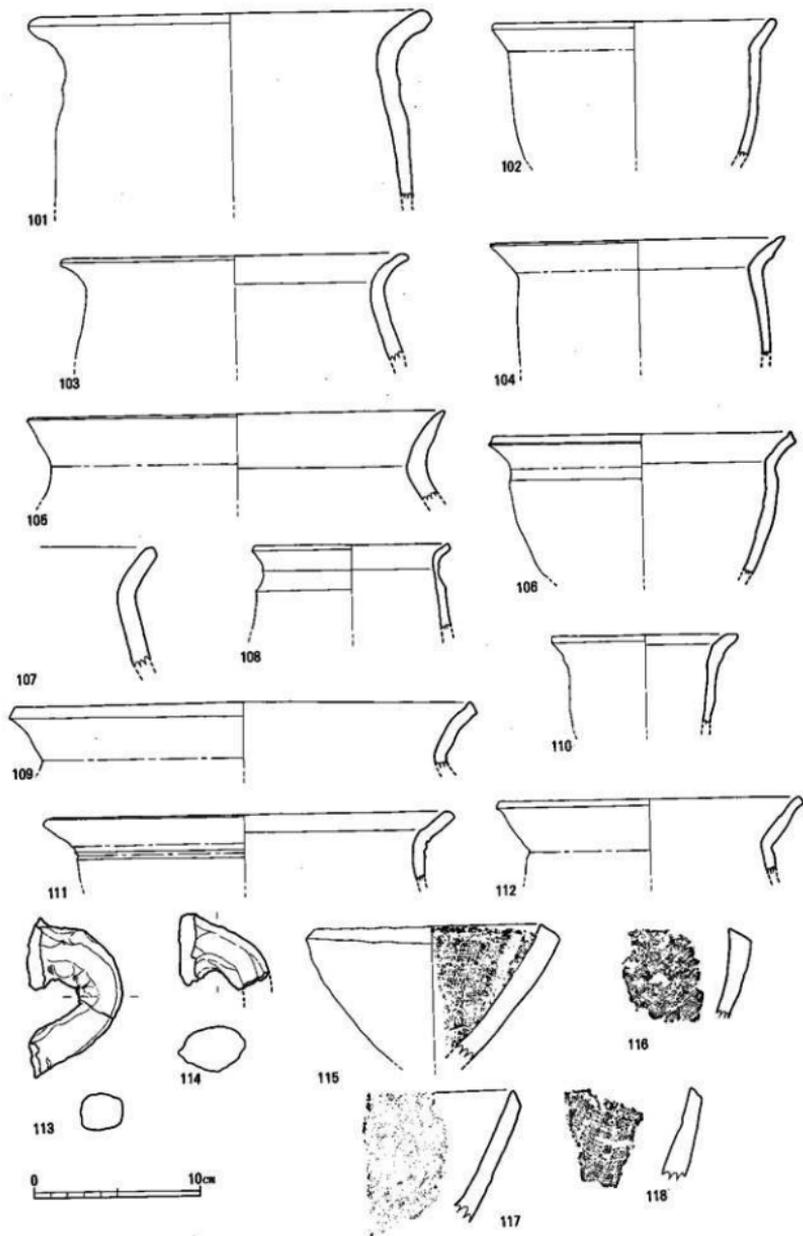
第15图 SA 1 出土土師器(1)



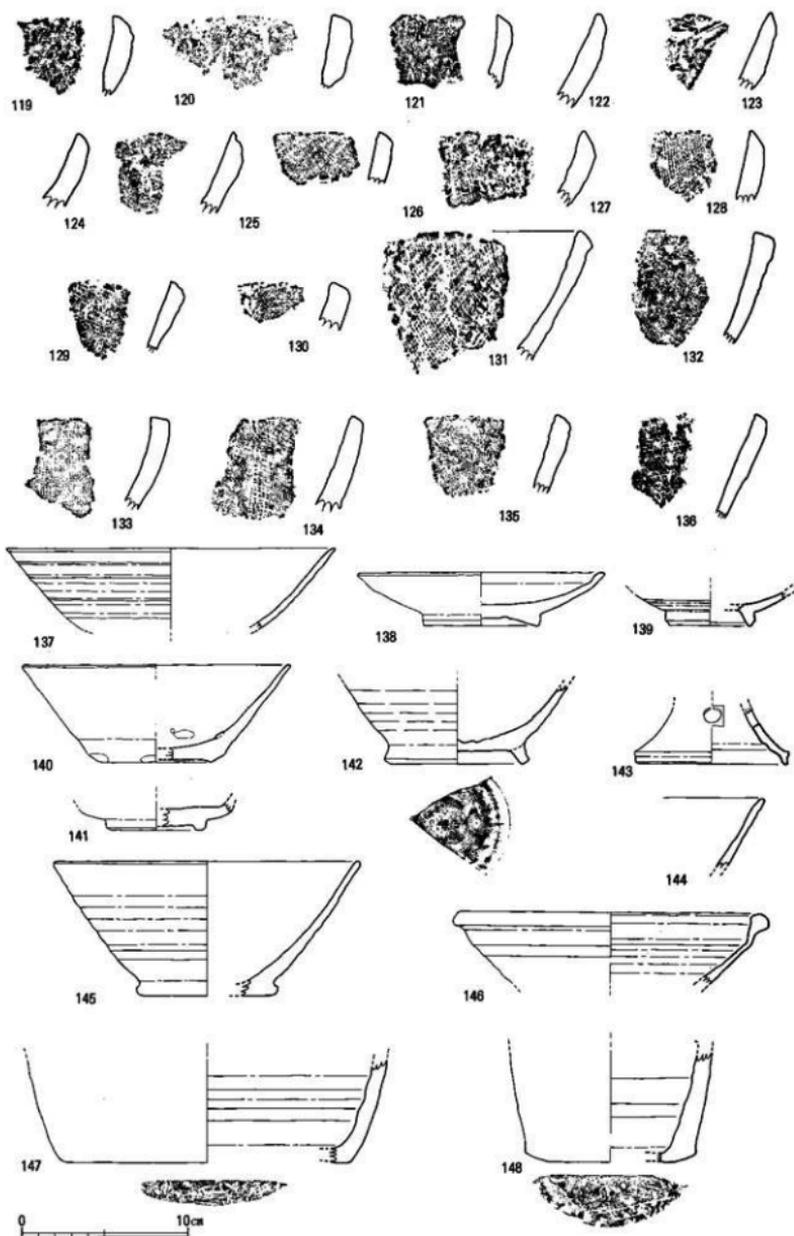
第16图 SA 1 出土土師器(Ⅱ)



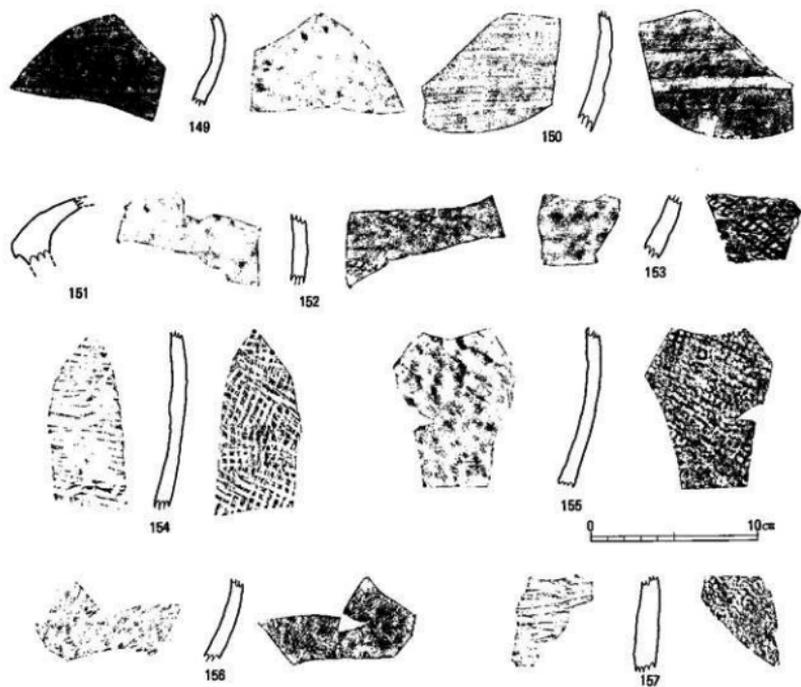
第17图 SA 1 出土土師器(單)



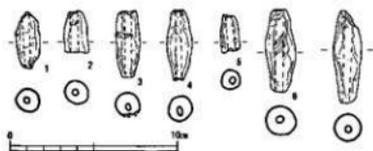
第18图 SA 1 出土土器(IV)



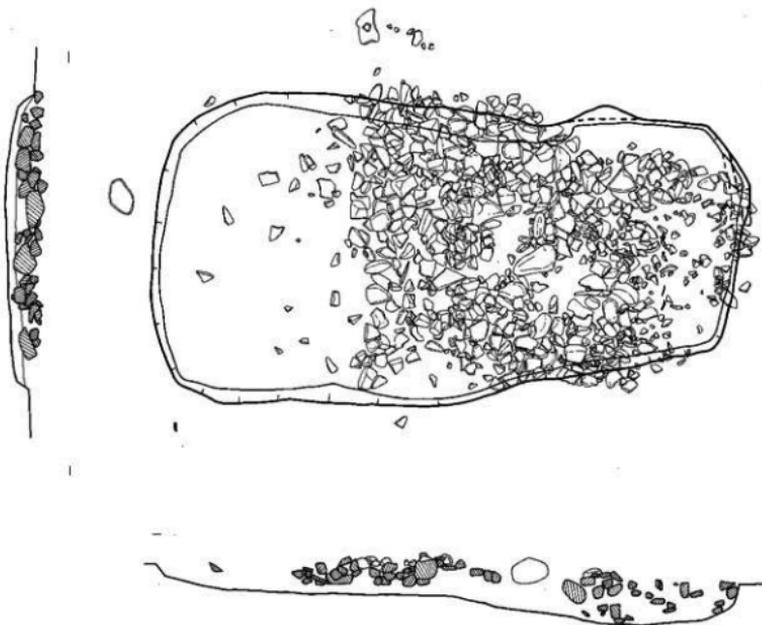
第19图 SA.1 出土土師器・陶磁器実測図(V)



第20图 SA 1 出上須惠器(VI)



第21图 SA 1 出土土罐



第22図 1号集石遺構

当遺跡出土の土師器坏はヘラ切りの底部の形態によってA～E類に分類した。特にA類・B類は1号住居の主体を占めている。土師器坏を決定するには在地の土師器の編年の中で行なう方法と、共伴する陶磁器で行なう方法がある。

在地の編年は、学園都市遺跡群の調査によって資料が蓄積されつつあるが、編年を提示するまでには至っていない。一部、ヘラ切りから糸切への転換時期以降について「山内石塔群」で型式変化から編年試案が提示されたが、石塔群という遺構の性格のために時期決定が困難であった。学園都市遺跡群では10世紀代の平畑遺跡⁽²⁾、12・13世紀の堂地東遺跡⁽³⁾が調査され、その時期の土師器が解明されつつある。当遺跡のIA類の法量は口径11.7cm～13.6cm、底径5.5cm～7.0cm、器高4.2cm～5.1cmであり、御笠川南条坊遺跡出土の土師器の法量と比較すると、3つの法量とも合致するものではなく、口径ではIIA以前・IIA・I3B・I3C、底径ではIIA以前～II2B、底径は合致するものはない。高台付碗・内黒土器を共伴することから10世紀が妥当であると考えられる。

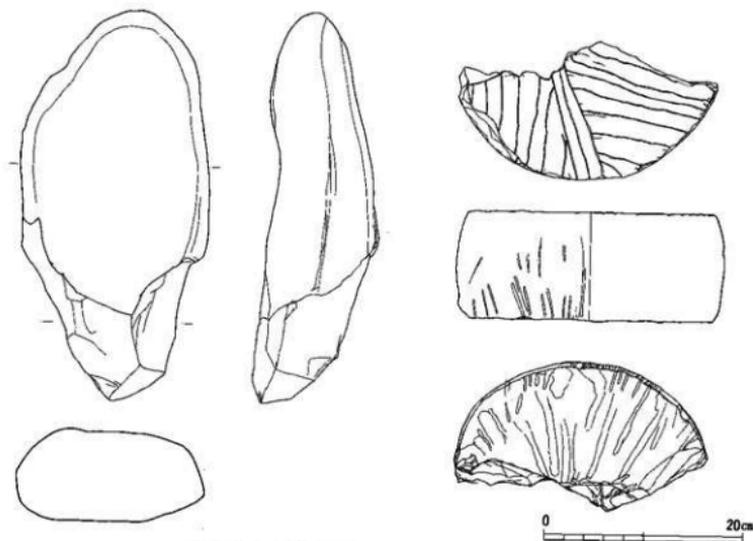
共伴した中国陶磁器としては越州窯系青磁碗が出土しており、亀井明德氏分類のB類碗Ⅲ類、横田賢次郎・森田勉両氏分類の碗Ⅱ類⁽⁶⁾に相当し、大宰府遺跡のSK 674の10世紀中頃に比定される。

土師器坏・高台付碗の形態・調整、内黒土器、須恵器、緑釉、越州窯系青磁の組み合わせから平安時代中頃前後(10世紀前半)に比定される。

第8節 中世の遺構と遺物

1号集石遺構

1号集石遺構はS-1グリッドに位置し、長さ485cm、幅240cm、深さ20~45cmの楕円形プランの土壇を伴なう。土壇の埋土は2層に分かれ、土層には焼けた河原石や角礫がぎっしりつまっており、石臼・自然石板碑が混入していた。下層は茶褐色土で、木炭粒やアカホヤの微粒子が混じっており、石はほとんどない。遺物としては、土師小片がある。



第23図 1号集石遺構実測図出土石臼・板碑実測図

石 臼

1号集石遺構の上層で出土した。復元径30cm、厚さ11.1cmの半欠の下門で、磨歯は幅0.2cm、深さ0.2cmである。その他の面には幅0.7cmのみで整形した痕跡をそのまま残している。石材は凝灰岩である。

板 碑

長さ40.0cm、幅19.0cm、厚さ9.2cmの河原石製の自然石板碑である。荒く割って基部を製作しているが、墨書などはない。

第9節 ま と め

当遺跡は丘陵の先端部の幅の狭い所に立地しながらも縄文時代早期から人間の営みが行なわれたことが明らかになった。

アカホヤ層下位で縄文時代早期の集石遺構が9基検出された。当遺跡の全面に礫石が分布していたが、分布に濃淡の差があり、集石遺構として使用された後の最終段階を示していた。集石炉としての機能が考えられる集石遺構が形態から5タイプに分かれるが、形態差が機能差になるのか、或いは集石遺構としての使用段階差なのかは、不明である。

る。磨製の環状石斧の県内の発掘調査例としては芳ヶ迫第一遺跡⁽⁷⁾(田野町)に次いで2例目であり、両者とも縄文早期の遺物として注目される。縄文土器は12類に分類され、早期の前平式・塞ノ神式・押型文が出土している。

縄文時代後期の土器はわずか1点で、晩期の土器はなく、早期と比較すると非常に希薄になっている。この現象は平畑遺跡が平坦地中位面Ⅰ～Ⅱに立地し、55軒の堅穴住居が検出されたことを鑑みると、集落を形成するには立地が非常に悪いのに起因すると思われる。

弥生時代中期後半の土器が2点検出されたことは、その時期に人間の営みが行なわれたことを示しているが、残念ながらアカホヤ層以上が耕作によって削平されていたために遺構は検出されなかった。遺物の量からすれば前代と同様に住居が営まれた可能性は少ないと考えられる。

古墳時代になると丘陵の南の源に1号土壇が形成される。土壇の中央部に竈と甕が各1個ずつ置かれていたが、土壇の掘り込み面が削平されているので、土壇の性格は不明である。

古墳時代後期～奈良時代の遺物は検出されていないので人間の営みが行なわれた可能性は非常に少ない。

平安時代中頃になると、B地区に堅穴住居が1軒営まれる。この時期、赤坂遺跡・前原南遺跡では長い煙道を有するカマド付きの堅穴住居が存在する。遺物としては土師器の坏、高台付埴に共伴して緑釉皿・越州窯系青磁碗⁽⁸⁾が出土したことで、10世紀前半に比定したが、土師器の時期を決定する上で重要である。土師器の詳細な時期について学園都市遺跡群の平畑遺跡・堂地東遺跡が整理されていく中で明らかになろう。

当遺跡の発掘は、縄文早期の環状石斧を層的的に捉えたことと、平安時代中頃の土師器の様相が明らかになった点で大きな成果があった。

(長津 宗重)

註 (1) 宮崎県教育委員会「山内石塔群」1984

(2) 宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」1983

(3) (2)に同じ

(4) 前川威洋他「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2～8集 1975～79

(5) 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『九州歴史資料館研究論集』1975

(6) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978

(7) 田野町教育委員会「芳ヶ迫第一遺跡調査報告書」1984

(8) 県内で越州窯系青磁碗が土師器と共伴した例としては、高崎町東霧島出土例があり10世紀前後に比定されている。面高哲郎「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」『宮崎考古』第6号 1980

表3 縄文土器観察表

図番番号	地区名 (遺構名)	器形	器部	外面調整		文様		土	色		焼成	備考		
				外器面	内器面 (底面)	外器面	内器面		外器面	内器面				
1	M-4	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	赤灰, 0.5mm, 黒炭母	焼 7.5YR6/5	焼 7.5YR6/5	良		
2	S-4	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	0.1~0.15mmの石灰片	焼 7.5YR6/6	焼 7.5YR6/6	良		
3	A	円筒	口縁	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰, 長径0.1~0.5mm	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	良		
4	N-5	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰, 長石	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	良		
5	N-3	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰, 長石	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	良		
6	N-2	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	細かい 石灰, 長石	焼 7.5YR6/6	焼 7.5YR6/2	良		
7	N-4	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰, 砂鉄も多少	焼 7.5YR6/5	焼 7.5YR6/3	良		
8	N-7	円筒	口縁	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい, 長石(少々)	焼 5YR6/6	焼 7.5YR6/6	極良		
9	S-4	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	石灰, 長石	焼 7.5YR6/6	焼 7.5YR6/3	良		
10	N-5	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	0.05~0.1mmの黒炭母 0.05mm長石	焼 7.5YR6/5	焼 7.5YR6/3	良		
11	N-2	円筒	口縁	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 二列	—	0.1mm前後の石灰 0.1mm前後の黒炭母	焼 7.5YR6/5	焼 7.5YR6/3	良		
12	N-5	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	良		
13	S-4	円筒	口縁	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい, 石灰	焼 5YR6/6	焼 7.5YR6/3	良		
14	M-2	円筒	胴の角部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	0.5~1.0mm長石 0.1~0.2mm黒炭母	焼 5YR6/6	焼 7.5YR6/3	良	入付層	
15	N-2	角筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	0.1~1.0mmの石灰 黒炭母	焼 7.5YR6/6	焼 7.5YR6/3	良		
16	N-5	角筒	山形口縁	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文 彫刻付文	—	石灰, 長石	焼 10YR6/1	焼 7.5YR6/3	良		
17	N-2	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	石灰(僅少), 鉄さかい	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	良		
18	4号墓中	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	石灰1.0mm, 小石5mm	焼 7.5YR7/5	焼 5YR6/5	良	入付層	
19	A	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かく, 粗めだが多い	焼 7.5YR6/3	焼 5YR6/6	極良		
20	N-2	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい, 石灰	焼 7.5YR6/3	焼 5YR6/6	極良		
21	S-3	円筒	胴部	ナ	ナ	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	長石, 石灰0.5~1mm	焼 5YR6/6	焼 5YR6/6	良	

図番番号	地区名 (遺構名)	器形	器部	外面調整		文様		土	色		焼成	備考	
				外器面	内器面 (底面)	外器面	内器面		外器面	内器面			
22	S-4	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい	焼 7.5YR6/3	焼 10YR6/4	極良	
23	M-2	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい	焼 7.5YR6/3	焼 10YR6/6	極良	
24	M-2	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい	焼 7.5YR6/3	焼 10YR6/6	極良	
25	A	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい	焼 10YR6/2	焼 10YR6/2	極良	
26	M-1	円筒	胴部	片敷赤灰	ヘナケズリ	—	片敷緑文	—	細かい	焼 7.5YR6/3	焼 5YR6/6	極良	
27	N-2	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	細かい	焼 7.5YR6/3	焼 2.5Y7/5	中々不良	
28	N-7	深鉢	胴部	山形文	ヘナケズリ	—	山形文	—	長石, 黒炭母多い	焼 2.5YR/4	焼 2.5Y7/3	中々不良	
29	A	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	長石, 石灰	焼 2.5YR/4	焼 1.5Y7/4	中々不良	
30	N-2	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	長石, 石灰	焼 10YR6/1	焼 10YR6/4	良	
31	S-4	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	長石, 長石	焼 10YR6/2	焼 1.5Y7/4	中々不良	
32	A	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	長石, 石灰	焼 2.5Y7/1	焼 2.5Y7/3	中々不良	
33	A	浅鉢	口縁	山形文	ヘナケズリ	—	山形文	—	石灰	焼 5YR7/6	焼 7.5YR7/6	中々不良	
34	S-2	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	長石, 石灰0.1~0.2mm	焼 2.5YR/4	焼 1.5Y7/4	中々不良	
35	A	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	石灰	焼 7.5YR6/4	焼 2.5YR/4	中々不良	
36	S-4	深鉢	口縁	山形文	ミダキ	—	山形文	—	石灰, 黒炭母石灰	焼 2.5YR/3	焼 2.5YR/4	良	
37	A	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	石灰	焼 2.5YR/3	焼 1.5Y7/4	中々不良	入付層
38	N-7	深鉢	胴部	山形文	黒化	—	山形文	—	石灰, 長石 黒炭母	焼 7.5YR6/4	焼 2.5Y7/4	良	
39	A	深鉢	胴部	山形文	ミダキ	—	山形文	—	石灰, 長石 黒炭母	焼 5YR6/5	焼 2.5YR/4	良	
40	S-2	深鉢	胴部	ナ	ナ	ヘナケズリ	—	片敷 赤灰	細かい 長石, 石灰(0.1mm)	焼 10YR6/1	焼 10YR6/1	極良	
41	S-2	深鉢	胴部	ナ	ナ	ヘナケズリ	—	片敷 赤灰	細かい 長石, 石灰(0.1mm)	焼 7.5YR6/3	焼 7.5YR6/3	極良	
42	M-1	深鉢	胴部	ナ	ナ	ナ	—	片敷 赤灰	細かい 長石, 石灰(0.1mm)	焼 10YR6/1	焼 7.5YR6/3	極良	入付層

図面番号	地区名 (漢字)	図形	部	断面調整		文様		色調		焼成	備考	
				外表面	内表面 (底面)	外表面	内表面	外表面	内表面			
43	M-1	深鉢	胴部	外表面	ヘラツクリ	—	無染文	細かい 黒石(石高10.1mm)	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	良	又付替
44	M-1	深鉢	胴部	内表面	ヘラツクリ	—	無染文	細かい 赤心、石高(0.1mm)	浅黄緑 10YR7/2	浅黄緑 10YR6/4	良	
45	N-5	深鉢	胴部	外表面	ヘラツクリ	—	無染文	細かい 黒石、石高(10.1mm)	浅黄緑 10YR7/2	浅黄緑 10YR7/4	良	又付替
46	A	深鉢	胴部	外表面	ナシ	—	無染文	ひよこし細かい 黒石、石高(10.1mm)	浅黄緑 10YR7/2	浅黄緑 7.5YR6/4	極良	
47	M-1	深鉢	口縁	内表面	ヘラツクリ	—	無染文	石高、赤心 片断多し	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	良	
48	S-4	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤心(多し) 片断多し 2.2-0.3mm	浅黄緑 10YR6/6	浅黄緑 10YR6/6	良	
49	N-5	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤心(多し) 片断多し 2.2-0.3mm	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 10YR6/4	良	
50	S-3	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤心(多し) 片断多し 2.2-0.3mm	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	良	
51	N-2	深鉢	口縁	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	石高 7.5YR6/4	灰白 7.5YR6/1	灰白 7.5YR6/1	良	
52	N-4	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤心(多し) 小片(A)	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 2.5YR/4	中々不良	
53	A	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高	浅黄緑 2.2Y/3	浅黄緑 10YR6/4	良	
54	N-2	深鉢	口縁	内表面	2ゴキ	—	片断染文	赤心(多し)	浅黄緑 2YR5/4	灰白 5YR6/6	良	又付替
55	N-2	深鉢	口縁	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	赤心、石高	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	中々不良	
56	M-2	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 2.5YR/4	良	
57	S-4	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 2.5YR/3	灰白 7.5YR6/1	中々不良	
58	M-2	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 2.5YR/3	灰白 7.5YR6/1	中々不良	
59	S-2	深鉢	口縁	内表面	2ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 2.5YR/3	灰白 7.5YR6/1	中々不良	
60	S-3	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ (底面)	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 2.5Y/3	灰白 7.5YR6/1	中々不良	
61	N-3	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	不良	
62	S-5	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤心(多し) 赤心片断多し	灰白 2.5YR/2	灰白 2.5YR/2	不良	
63	S-1	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高(赤心) 赤心(多し)	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/2	中々不良	

図面番号	地区名 (漢字)	図形	部	断面調整		文様		色調		焼成	備考	
				外表面	内表面 (底面)	外表面	内表面	外表面	内表面			
64	N-2	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高(赤心多し)	浅黄緑 7.5YR7/6	浅黄緑 10YR6/4	中々不良	
65	N-2	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤石	浅黄緑 5YR7/6	浅黄緑 5YR6/6	良	
66	S-2	深鉢	口縁	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤石	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 10YR7/3	中々不良	
67	N-3	深鉢	口縁	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	赤石(赤心) 赤心(多し)	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 2.5YR/2	中々不良	
68	S-3	深鉢	胴部	内表面	無染	—	片断染文	石高(赤心)	浅黄緑 7.5YR6/4	浅黄緑 7.5YR6/4	良	
69	S-4	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高	浅黄緑 7.5YR6/4	浅黄緑 2.5YR/4	中々不良	
70	S-4	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高	浅黄緑 10YR7/4	浅黄緑 10YR7/4	中々不良	
71	S-4	深鉢	胴部	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	細かい 赤石、赤心	浅黄緑 7.5YR6/4	浅黄緑 5YR6/6	中々不良	
72	S-3	深鉢	胴部	内表面	無染	—	片断染文	細かい 赤石(赤心)	浅黄緑 7.5YR7/6	浅黄緑 5YR6/6	良	
73	M-1	深鉢	胴部	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	赤石、赤心	浅黄緑 2.5YR/6	浅黄緑 5YR6/6	良	
74	S-3	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高(多し)	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 2.5YR/1	不良 (赤心多し)	
75	N-5	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	細い、細多し、石高	浅黄緑 2.5YR/4	浅黄緑 10YR6/4	中々不良	
76	M-2	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	細い、赤心、石高(多し) 赤心多し	浅黄緑 10YR7/6	浅黄緑 7.5YR6/4	不良	
77	N-5	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤石、赤心	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 2.5YR/3	中々不良	
78	S-5	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤石、赤心、石高	浅黄緑 10YR7/6	浅黄緑 2.5YR/4	不良	
79	M-2	深鉢	胴部	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	細かい 赤石、赤心、赤心多し	浅黄緑 7.5YR6/4	浅黄緑 5YR6/6	良	
80	N-2	深鉢	胴部	内表面	ヘラツクリ	—	片断染文	細かい、赤石(赤心) 赤心多し	浅黄緑 10YR7/6	浅黄緑 5YR6/6	良	
81	N-2	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤心多し	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 10YR6/4	中々不良	
82	S-4	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高、赤石	浅黄緑 10YR6/4	浅黄緑 2.5YR/4	良	
83	N-2	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	石高(0.1-1mm、多し)	浅黄緑 2.5YR/4	灰白 7.5YR6/1	良	
84	N-5	深鉢	胴部	内表面	1ゴキ	—	片断染文	赤石、赤石、赤心多し	浅黄緑 10YR7/6	浅黄緑 2.5YR/3	中々不良	

図面番号	地区名 (通称名)	地形	部形	部形調整		文種	陸上	色調		構成	備考
				外部面	内部面			外部面	内部面		
85	N-4	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
86	N-2	深鉢	胴部	具線条線	4.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
87	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
88	S-4	深鉢	胴部	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
89	N-1	深鉢	胴部	具線条線	4.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
90	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
91	N-3	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
92	N-3	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
93	S-3	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
94	S-4	深鉢	胴部	具線条線	黒化	—	具線条線文	—	—	—	—
95	S-5	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
96	M-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
97	2号墓石	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
98	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
99	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
100	S-2	深鉢	胴部	具線条線	3.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
101	N-2	深鉢	胴部	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
102	N-3	深鉢	胴部	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
103	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
104	S-4	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
105	M-1	浅鉢	口縁	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—

図面番号	地区名 (通称名)	地形	部形	部形調整		文種	陸上	色調		構成	備考
				外部面	内部面			外部面	内部面		
106	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
107	M-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
108	S-3	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
109	N-2	深鉢	胴部	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
110	N-2	深鉢	胴部	具線条線	黒化	—	具線条線文	—	—	—	—
111	N-2	深鉢	胴部	ナデ	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
112	N-6	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
113	N-2	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
114	N-2	深鉢	口縁	具線条線	1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
115	N-2	深鉢	口縁	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
116	S-2	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
117	N-1	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
118	N-3	深鉢	胴部	ナデ	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
119	N-5	深鉢	口縁	具線条線	(A) 1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
120	N-7	深鉢	口縁	具線条線	(A) 1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
121	N-7	深鉢	胴部	具線条線	(A) 1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
122	S-4	深鉢	胴部	具線条線	(A) 1.0ギキ	—	具線条線文	—	—	—	—
123	N-6 S-2	深鉢	液状口縁	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
124	S-4	深鉢	胴部	具線条線	ヘラケズリ	—	具線条線文	—	—	—	—
125	N-7	深鉢	口縁	具線条線	黒化	ヘラケズリ	具線条線文	—	—	—	—
126	S-2	深鉢	胴部	具線条線	黒化	具線条線文	具線条線文	—	—	—	—

図面番号	地区名 (通稱名)	器形	器部	器 面 調 整		文 様	胎 土	色 調		焼 成	備 考		
				外器面	内器面			外器面	内器面				
127	N-7	深鉢	口縁	ナ ア	ヘラナズリ	—	割目文様	—	赤土多し	洗 青 緑 10YR5/3	洗 青 緑 10YR7/4	良	
128	N-6	浅鉢	口縁	遠く7割い 赤黒(12.7)	ヘラナズリ	—	遠く7割い 赤黒(12.7)	—	石灰質多し	洗 青 緑 5YR5/6	洗 青 緑 5YR5/6	極不良	
129	S-3	深鉢	口縁	黒 灰	ヘラナズリ	—	洗 青 緑	—	赤土多し、赤黒	洗 青 緑 7.5YR5/4	洗 青 緑 7.5YR5/6	良	
130	S-2	深鉢	口縁	ナ ア	1ゴキ	—	洗 青 緑	—	石灰、内器面	洗 青 緑 7.5YR5/6	洗 青 緑 7.5YR5/6	良	
131	M-1	浅鉢	口縁	ナ ア	ヘラナズリ	—	洗 青 緑	—	石灰、赤黒	洗 青 緑 7.5YR7/6	洗 青 緑 10YR7/4	良	
132	N-2	深鉢	口縁	ナ ア	1ゴキ	—	洗 青 緑	—	石灰質多し	洗 青 緑 10YR5/4	洗 青 緑 10YR5/4	極不良	
133	M-2	深鉢	底部	ナ ア	黒 灰	ナ ア	—	—	赤土多し	洗 青 緑 10YR5/6	洗 青 緑 10YR5/6	良	
134	N-5	深鉢	底部	黒 灰	ナ ア	ヘラナズリ	—	—	石灰多し、石灰、赤黒	洗 青 緑 10YR5/4	洗 青 緑 2.5YR/3	不良	
135	N-2	深鉢	底部	1ゴキ	黒 灰	1ゴキ	—	—	石灰、赤石、赤黒	洗 青 緑 7.5YR5/6	洗 青 緑 7.5YR5/6	やや不良	
136	N-2	深鉢	底部	ヘラナズリ	ナズリ	ヘラナズリ	割目文	—	石灰、赤石、赤黒	洗 青 緑 5YR5/6	明 赤 褐 5YR5/6	良	
137	N 2	浅鉢	底部	ナ ア	1ゴキ	1ゴキ	—	—	石灰、赤石、赤黒	洗 青 緑 7.5YR5/6	洗 青 緑 10YR5/2	不良	
138	N-2	深鉢	底部	1ゴキ	ナ ア	1ゴキ	—	—	石灰、石灰、割目特に多し	洗 青 緑 7.5YR5/6	洗 青 緑 10YR5/2	極不良	
139	N-2	深鉢	底部	ナ ア	ナ ア	1ゴキ	—	—	赤石、石灰、小石、割目多し	洗 青 緑 10YR5/2	洗 青 緑 10YR5/2	不良	
140	S-1	深鉢	底部	ナ ア	ナ ア	ナ ア	—	—	赤石、赤黒	洗 青 緑 2.5YR5/6	洗 青 緑 10YR5/4	良	
141	S-3	深鉢	底部	割目線	黒 灰	ナ ア	割目線	—	赤石、赤黒	明 赤 褐 2.5YR5/6	明 赤 褐 2.5YR5/6	良	
142	S-3	深鉢	底部	割目線	ナ ア	ナ ア	割目線	—	0.1mm程度の赤石	洗 青 緑 10YR5/4	洗 青 緑 2.5Y7/3	良	
143	S-4	深鉢	底部	割目線	ナズリ	ナズリ	割目線	—	石灰	洗 青 緑 7.5YR5/6	洗 青 緑 7.5YR5/3	良	
144	S-2	深鉢	底部	割目線	ナ ア	ナ ア	割目線	—	0.1mm程度の赤石	洗 青 緑 10YR5/4	洗 青 緑 2.5Y7/3	良	
145	S-4	深鉢	底部	洗 青 緑	ヘラナズリ	洗 青 緑	洗 青 緑	—	石灰、赤石	洗 青 緑 7.5YR5/3	洗 青 緑 7.5YR5/3	良	
146	S-3	深鉢	底部	ナ ア	ナ ア	ナ ア	—	—	3-5mmの 小石多し	洗 青 緑 10YR5/2	洗 青 緑 5YR5/6	不良	
147	S-4	深鉢	底部	ナ ア	ナズリ	ナ ア	洗 青 緑	—	石灰、赤石	洗 青 緑 5YR5/6	洗 青 緑 7.5YR5/3	良	

図面番号	地区名 (通稱名)	器形	器部	器 面 調 整		文 様	胎 土	色 調		焼 成	備 考		
				外器面	内器面			外器面	内器面				
148	M-2	深鉢	胴部	ナ ア	黒 灰	—	割目(5条)	—	石灰、赤黒	洗 青 緑 5YR5/6	明 赤 褐 5YR5/6	やや不良	

表4 SAI 出土土器観察表

番号	出土位置	器種	口径	高さ	色			胎土	装飾				分類	備考
					内面	外面	胎土		内面	外面	胎土			
1	MG25A1	土師器	径 12.8	7.0	5.1	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	1.17以下の帯粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	IA*	
2	*	土師器	径 13.1	6.7	5.3	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5-2ミリ以下の黒褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
3	*	土師器	径 13.6	6.6	4.7	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5ミリ前後の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
4	*	土師器	径 13.4	6.5	5.0	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの茶褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
5	*	土師器	径 7.3	7.0	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5-1ミリの砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
6	*	土師器	径 7.8	7.0	6.0	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	0.1-2ミリの茶褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
8	*	土師器	径 7.2	7.0	6.0	洗 炭 焼 (2.5YR 5/6)	左に同じ	赤みを帯びた 洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
9	*	土師器	径 7.0	7.0	6.0	洗 炭 焼 (2.5YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 2-3ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
10	*	土師器	径 6.4	6.4	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
11	*	土師器	径 6.5	6.5	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
12	*	土師器	径 12.1	4.2	4.4	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	洗 炭 焼 (5YR 5/6)	赤みの強い 0.5-1ミリの茶褐色の砂粒を含む また内面・外面に赤土を塗り たものがある	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
13	*	土師器	径 6.3	6.3	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5-2ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
14	*	土師器	径 6.2	6.2	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 洗炭焼を含む	中程度	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
15	*	土師器	径 6.1	6.1	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの砂粒を含む また内面	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
16	*	土師器	径 6.1	6.1	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.2-1ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
17	*	土師器	径 6.0	6.0	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの砂粒を含む 胎土赤土を塗り たものがある	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
18	*	土師器	径 5.9	5.9	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
19	*	土師器	径 6.2	6.2	6.0	C赤い洗炭焼 (10YR 5/6)	左に同じ	洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
20	*	土師器	径 5.6	5.6	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
21	*	土師器	径 5.1	5.1	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	

番号	出土位置	器種	口径	高さ	色			胎土	装飾				分類	備考
					内面	外面	胎土		内面	外面	胎土			
22	MG25A1	土師器	径 6.8	6.8	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.1-1ミリの茶褐色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	IA*	
23	*	土師器	径 5.0	5.0	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5-1ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
24	*	土師器	径 13.6	4.1	4.4	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	1.5-2.0ミリの赤土を塗り たものがある また胎土赤土を塗り たものがある	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	IA*	
25	*	土師器	径 13.6	5.3	4.9	C赤い洗炭焼 (10YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 1-2ミリ前後の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
26	*	土師器	径 13.2	6.8	4.9	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの茶褐色の砂粒を含む また胎土赤土を塗り たものがある	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
27	*	土師器	径 11.3	6.0	4.6	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	洗炭焼と1ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
28	*	土師器	径 6.0	6.0	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
29	*	土師器	径 6.2	6.2	6.0	C赤い洗炭焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5ミリ以下の洗炭焼を含む 赤土・黒土を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
30	*	土師器	径 6.3	6.3	6.0	洗 炭 焼 (2.5YR 5/6)	C赤い洗炭焼 (2.5YR 5/6)	赤みの強い 0.1-1ミリの茶褐色の砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
31	*	土師器	径 12.1	7.3	4.2	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.2-0.5ミリの砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
32	*	土師器	径 12.4	6.4	4.8	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	赤みの強い 洗炭焼を含む	中程度	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
33	*	土師器	径 7.5	7.5	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	赤みの強い 0.5-1ミリ前後の茶褐色の砂粒を含む また胎土赤土を塗り たものがある	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	IB*	
34	*	土師器	径 7.8	7.8	6.0	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリ前後の白土の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
35	*	土師器	径 6.7	6.7	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	1-3ミリの砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	IB*	
36	*	土師器	径 8.0	8.0	6.0	C赤い洗炭焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	0.5-1ミリの砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
37	*	土師器	径 7.8	7.8	6.0	洗 炭 焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	赤みの強い 0.5-1ミリの茶褐色の砂粒と 洗炭焼を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
38	*	土師器	径 7.5	7.5	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	C赤い洗炭焼 (7.5YR 5/6)	赤みの強い 0.5-1ミリの茶褐色の砂粒 を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
39	*	土師器	径 7.2	7.2	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.1-1ミリの砂粒を多く含む 洗炭焼・赤土を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
40	*	土師器	径 7.2	7.2	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	0.5ミリ以下の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
41	*	土師器	径 7.1	7.1	6.0	C赤い洗炭焼 (7.5YR 5/6)	左に同じ	0.5-2ミリの砂粒を少し含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	
42	*	土師器	径 7.0	7.0	6.0	洗 炭 焼 (10YR 5/6)	左に同じ	1.1ミリの茶・黒色の砂粒を含む	良好	横ナデ	横ナデ	ヘラ破り	*	

番号	地上位置	型	形	材	法			色		調	土	機	調			分	備	考	
					口	径	深	内	外				内	外	部				
43	MG 25A	土降器	円	円	6.5			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
44	*	土降器	円	円	6.9			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
45	*	土降器	円	円	6.9			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
46	*	土降器	円	円	6.9			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
47	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
48	*	土降器	円	円	14.1	7.1	6.2	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
49	*	土降器	円	円	6.5			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
50	*	土降器	円	円	7.0			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
51	*	土降器	円	円	7.0			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
52	*	土降器	円	円	6.9			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
53	*	土降器	円	円	6.8			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
54	*	土降器	円	円	9.9	6.7	5.7	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
55	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
56	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
57	*	土降器	円	円	6.3			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
58	*	土降器	円	円	6.2			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
59	*	土降器	円	円	6.2			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
60	*	土降器	円	円	6.1			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
61	*	土降器	円	円	5.8			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
62	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
63	*	土降器	円	円	6.0			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗

番号	地上位置	型	形	材	法			色		調	土	機	調			分	備	考	
					口	径	深	内	外				内	外	部				
64	MG 25A	土降器	円	円	6.5			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
65	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
66	*	土降器	円	円	13.2	6.3	4.8	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
67	*	土降器	円	円	11.5	6.0	5.0	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
68	*	土降器	円	円	12.4	6.6	6.2	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
69	*	土降器	円	円	13.4	6.6	5.8	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
70	*	土降器	円	円	6.6			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
71	*	土降器	円	円	6.7			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
72	*	土降器	円	円	7.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
73	*	土降器	円	円	7.0			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
74	*	土降器	円	円	6.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
75	*	土降器	円	円	5.7			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
76	*	土降器	円	円	6.2			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
77	*	土降器	円	円	6.0			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
78	*	土降器	円	円	5.8			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
79	*	土降器	円	円	5.4			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
80	*	土降器	円	円	5.6			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
81	*	土降器	円	円	5.5			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
82	*	土降器	円	円	7.1			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
83	*	土降器	円	円	6.7			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗
84	*	土降器	円	円	5.9			洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗	洗

番号	出仕作業	品	形	法		色		防	土	地	質			分	備	考	
				口径	距離	高さ	内				外	内	外				内
95	S A 1	土砂	高台付塊	99	7.5	1.0	清 黄 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	1 F 1
96	*	土砂	高台付塊		7.5		清 黄 濁 (2.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 0.5-1.1リ前後の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
97	*	土砂	高台付塊		7.0		清 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	1.1リ以下の砂粒を含む 不潔を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	1 E
98	*	土砂	高台付塊				濁 (5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 石片等の砂・灰・塊の砂粒 も含まれる	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
99	*	土砂	高台付塊		6.4		濁 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
100	*	土砂	高台付塊		6.1		濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 0.1-0.2リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	1 F
101	*	土砂	高台付塊				濁 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい 0.5リ前後の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
102	*	土砂	高台付塊		5.4		清 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	0.5リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
103	*	土砂	高台付塊		6.4		濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 多ばり0.5リ前後の砂粒を含む	やや不良	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
104	*	土砂	高台付塊				濁 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい 砂粒及び石を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
105	*	土砂	高台付塊		9.6		濁 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい 石片等の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
106	*	土砂	塊	12.4	8.4	3.8	清 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい 砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
107	*	土砂	塊	16.3			濁 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	多め細かい 1.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	内黒土部
108	A	土砂	小豆	10.2	7.2	1.5	清 黄 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 1.1リ前後の砂粒を含む	やや不良	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	水切り
109	S A 1	土砂	塊				清 黄 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 0.5-2.1リ前後の砂粒多(含む)	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
110	*	土砂	塊				濁 黄 濁 (5Y R/J)	左に同じ	多め細かい 0.5-2.1リ前後の砂粒と3-5.1 リ前後の心殻を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
111	*	土砂	塊	20.3			濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	1-2.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
112	*	土砂	塊	17.5			清 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	黄砂を少々含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
113	*	土砂	塊	24.6			清 黄 濁 (2.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒、1.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	

番号	出仕作業	品	形	法		色		防	土	地	質			分	備	考	
				口径	距離	高さ	内				外	内	外				内
106	S A 1	土砂	塊	18.2			に ぶ い 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	1-2.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
107	*	土砂	塊				清 黄 濁 (0Y R/J)	左に同じ	0.5-2.1リ前後の砂粒と 3-4.1リ以下の石殻多(含む)	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
108	*	土砂	塊	11.5			濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	1-3.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
109	*	土砂	塊	37.0			濁 (5Y R/J)	左に同じ	2-5.1リ以下の砂粒を多く含む 石殻・黄砂を少し含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
110	*	土砂	塊	21.1			に ぶ い 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	黄砂等・黒砂を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
111	*	土砂	塊	24.0			に ぶ い 濁 (0Y R/J)	左に同じ	1-2.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
112	*	土砂	塊	17.8			に ぶ い 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	1-3.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
113	*	土砂	塊				濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	0.1-0.5リ以下の細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	水
114	*	土砂	塊				濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	1-2.1リ以下の赤褐色・褐色の砂粒 を多く含む	やや不良	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	水
115	*	黒土部		13.6			濁 (5Y R/J)	左に同じ	細砂粒、1.1リ以下の砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
116	*	黒土部					濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
117	*	黒土部					濁 黄 濁 (5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
118	*	黒土部					濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
119	*	黒土部					濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
120	*	黒土部					濁(1.5Y R/J) 黄濁(0.5Y R/J)	左に同じ	2-4.1リ以下の小石を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
121	*	黒土部					濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
122	*	黒土部					濁 黄 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
123	*	黒土部					濁 黄 濁 (2.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
124	*	黒土部					に ぶ い 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
125	*	黒土部					に ぶ い 濁 (1.5Y R/J)	左に同じ	2-7.1リ以下の小石を含む	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	
126	*	黒土部					濁 (5Y R/J)	左に同じ	細砂粒を含む (細かい黄砂も含まれている)	良好	好	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	

第IV章 田上遺跡の調査

第1節 調査の概要

田上遺跡は宮崎学園都市建設計画の農高予定地のなかの比較的平坦な標高約27mの場所に確認された。当初、かなりの範囲に広がると予想されたが試掘の結果、西側部分はすでにアカホヤ層以下まで削平されており遺構・遺物は検出することはできなかった。そこでアカホヤ層が残存していた東側部分約2,500㎡を調査の対象とした。調査区は座標北にあわせて10mグリッドをもとに北南をA～F、東西を1～6として設定し発掘調査を行った。

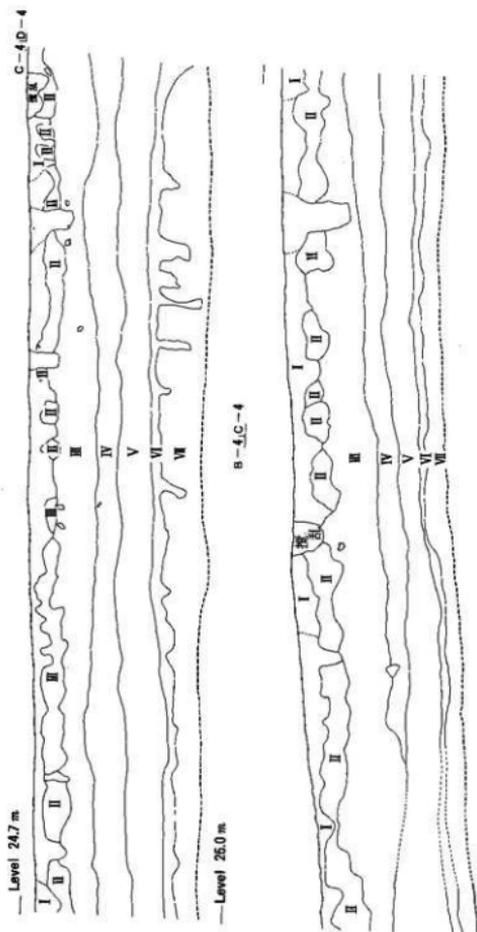
検出された遺構・遺物のほとんどが縄文時代早期のもので、集石遺構8基、縄文土器約120点、石鏃11点、石皿片1点、磨石3点と黒曜石やチャートの剥片、チップが出土した。集石遺構は、他の同時期の遺跡にみられるものと同様に掘り込みをもたないものが多かった。掘り込みをもつものは2基(SI4、SI6)であった。縄文土器は、条痕文土器、貝殻文土器、寒之神式土器、隆起線文土器など多岐にわたる。条痕文土器、貝殻文土器は、従来いわれている前平式土器、吉田式土器の範疇にはいるものであるが、そのほとんどが破片で相対的な編年を決定づけられるものではなかった。その他の土器もこの時期の資料の蓄積に留まざるをえない程度のものである。石器は少なく石鏃が主体をなしている。磨石、石皿はさらに少なくなる。なお、先土器時代の遺物である細石核が1点表土中から出土した。弥生時代の遺構はみられなかったが弥生土器片が数点出土している。当遺跡の立地する小丘陵上の遺跡では、弥生時代中期の住居跡1軒が下田畑遺跡で、中期の土器片が小山尻東遺跡から検出されており、弥生時代の生活の場があったことを窺せるものである。その他に青磁片、摺鉢片、糸切り底をもつ土師器の小皿等が出土したがそれに伴う遺構はまったく検出されず、当地は縄文時代早期以後の遺構・遺物は希薄である。また西側部分で土取りによって土器が出土し急掘発掘を行ない、土掘1基とそれに伴う土師器壺1個体を検出した。その周辺も広げたがそれ以上の遺構・遺物はなかった。(谷口武範)

第2節 遺跡の立地と環境 (付図)

田上遺跡は宮崎郡清武町大字木原に所在する。学園都市遺跡群の多くが点在する舌状台地の北西の付根から東へ分岐する小丘陵地帯の東端部に位置する。此高差約15mの谷底低地を挟んで南に舌状台地が広がり、東は清武川へ開けた谷底低地の出口を見渡せる。その先には、清武川、そして日向灘が見える。田上遺跡の北には、小さな開析谷を挟んで標高26mの小山尻東遺跡が隣合っている。そして、急傾斜で下る丘陵の北には、東流する清武川の河岸段丘や自然堤防、沖積地が広がっている。また、北西の尾根上に板碑が数基確認された小山尻西石塔群、さらに南西、尾根を越えた所にはテラス状の緩斜面に弥生時代の住居跡や土壇、縄文早期の集石遺構等を検出した浦田遺跡が位置している。そして、この丘陵地帯の頂部を越えた西の平坦地には、下田畑遺跡、その南西に赤坂遺跡等が存在している。このような環境の下、田上遺跡は標高約25mの北東へ傾斜したならかな地形にあって、三方を急崖に囲まれていた。そして、小山尻東遺跡との間の開析谷には湧水点も見られ、縄文時代早期の遺跡に共通した高台状のめぐまれた立地条件にあるといえよう。(菅付和樹)

第3節 層序 (第1図)

4・5列の境で南北に土層観察を行った。I層は黄褐色土でアカホヤ層として対比されるが従来のもよりガラス質が少なく、褐色が強い。風化あるいは流れ込みのアカホヤ層とも考えられる。II層は固くしまった黄褐色土となる。I層下部のバミス状のものである。層をなすものが少なく、ブロックとしてはいるものがほとんどである。I、II層は無遺物層である。III層はやや粘質をおびる茶褐色土で、集石遺構および縄文早期の土器や石器類が出土し



- I 黒褐色土 砂質
- II 褐色土 やや粘質を帯びる
- III 黒褐色土 やや粘質を帯びる (シルト質)
- IV 褐色土 粘質を帯びる
- V 褐色土 粘質を帯びる
- VI 黒褐色土 粘質を帯びる
- VII 黒褐色粘板土

アからア層と対比できるが、それは往へると層位に近く、若干層が少くない。対比あるいは、流れ込みの層としてらんられよう。

アからア層である。1. 土質の異なる層とされる。層をなしているものもあるがアからア層に似ているものが、層より厚くしている。

黒褐色粘板土。

黒褐色土、腐食層の上層部は、この層より出している。

黒褐色土、アからアのシルト質。

黒褐色土、粘質を帯びる、黒褐色粘板土。

黒褐色土、粘質を帯びる。1-2mで50%の粘質。

V層より粘質を帯び、黒褐色粘板土。

V層より粘質を帯び、黒褐色粘板土。

水まるとしてとらえらる。

水まるとしてとらえらる。小石層、砂質(1-2m)を帯びる。



第1図 田上遺跡十層実測図

ている。IV層は褐色土でⅢ層より粘質をもつ。当遺跡では無遺物層であったが、耕作土中から頁岩製の細石核が出土していることから先土器時代の文化層の存在が考えられ、それは他の浦田遺跡、下田畑遺跡の調査結果からこのIV層と対比できるものであろう。V層は褐色土となる。IV層より固くしまり粘質をおびる、小白斑あるいは石英を含む。VI層は淡褐色土である。V層よりは軟質で、砂粒を多く含む。砂粒も2~5mmと大きくなる。VII層は黒褐色土となり非常に固く小白斑を含む。当遺跡ではIV層~VII層は無遺物層である。

対面の小山尻東遺跡でも同様な層序をなし、当遺跡におけるⅢ層と対比できる層から集石遺構や縄文時代早期の土器や石器が検出されている。これらの遺跡の尾根の向こう側の北斜面に立地する下田畑遺跡では若干層序の様相を異にし、I層(黒褐色土)、II層(アカホヤ層)、III層(黒褐色土)、IV層(褐色土)となる。I層からは縄文前期の首細式土器、IV層から塞之神式土器、IV層下部においてナイフ形石器が出土しており、先土器時代から縄文時代前期までの一連の文化層を把握でき良好な資料として注目される。なお、III層は無遺物層となっている。

(谷口武範)

第4節 遺構と遺物

1. 遺構

集石遺構 (第2図~第4図)

S I 1

E-4グリッドの北西端で検出された。約80×55cmの範囲で南北に長い楕円形に礫が集中する。礫は、15~20cm大の大きめの自然礫を中心に10cm以下の割れた礫が東側から北側に多くみられる。いずれもわずかに変色し、加火されたと思われる。これらは平面的な堆積状態を示し、礫面下約5cmの深さまで検出されたが、明確な掘り込みは確認できなかった。また、周辺及び礫群中には炭化物等はみられず、土色の変化も認められなかった。

S I 2

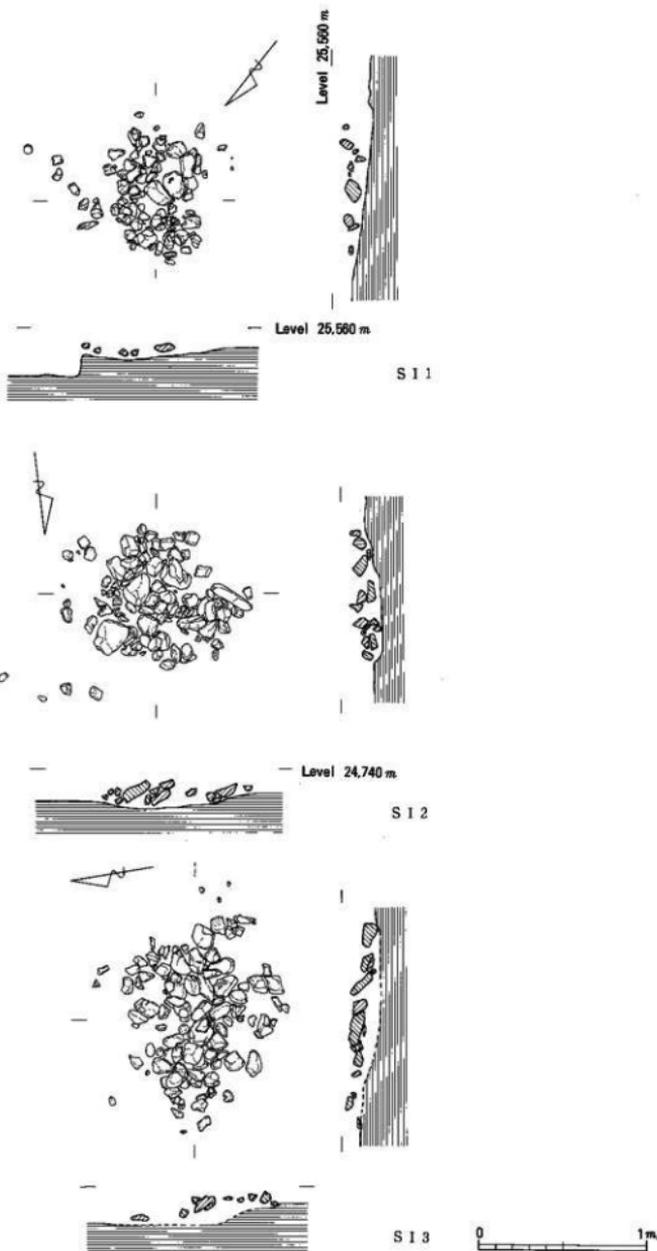
C-4グリッド南端やや東よりの位置で検出された。S I 1の北東約14.5mにあたる。大小の礫が平面的に広がる部分の東端で、約100×90cmの略円形に礫が集中していた。20数cmの大きめの礫も含まれるが、多くは10cm大の礫で、割れているものが多い。北西側はやや希薄な分布状態を示す。礫のうち少量は、やや黒っぽく変色しているが、炭化物や焼土等は確認されていない。礫群は約15cmの厚さに堆積し、深さ5cm前後の掘り込みを有していたと思われるが、埋土と周囲の検出面との土色の違いはみられなかった。

S I 3

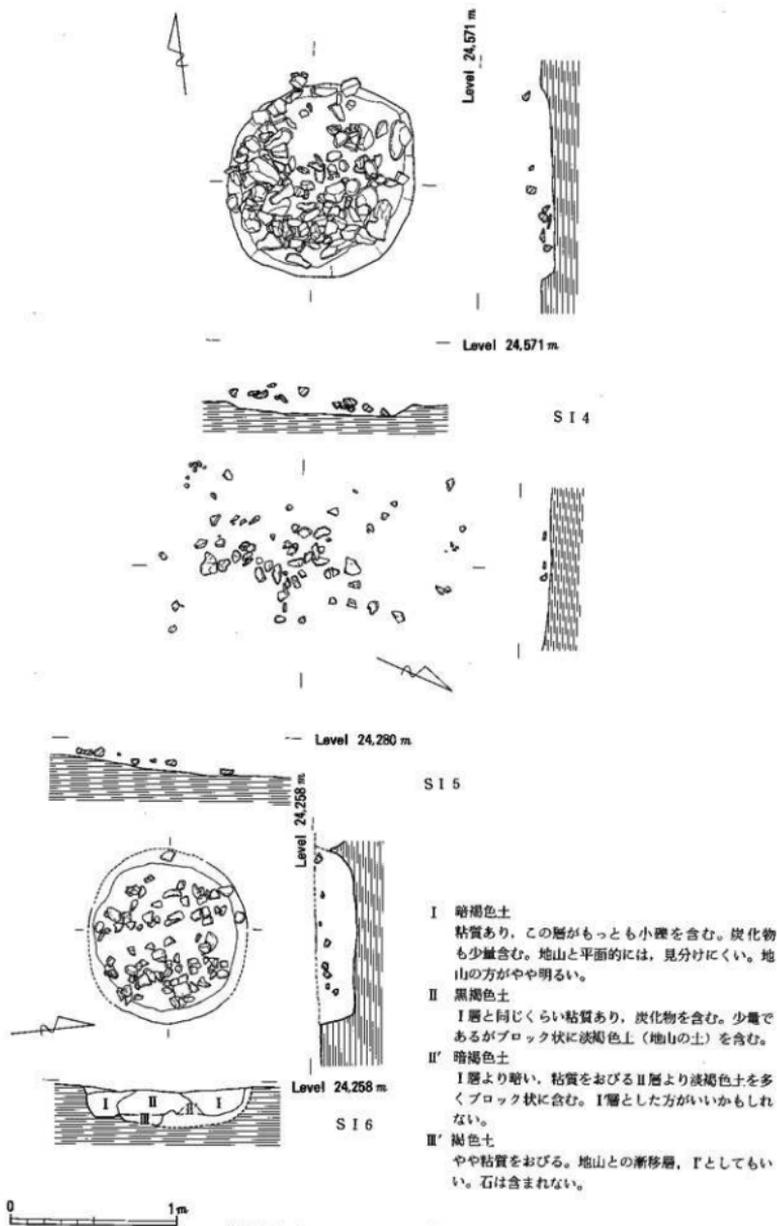
C-3グリッド西端やや北よりで検出された。S I 2の北西約7mの傾斜地にある。礫群は約120×100cmの範囲に集中し、東西に若干長い楕円形を呈す。中央には15~20cm程度の大きめの礫があり、周囲には10cm未満の割れた礫がみられる。礫群は平面的に堆積し、傾斜に沿う様に北東方向へ傾いていた。礫群中には貝殻条痕文土器が1点混在し、また、変色した礫はあまり見られなかった。そして、礫群中あるいは礫群下の土色にも変化はみられず、掘り込みは確認できなかった。しかし、小さな炭化物が礫群下の土に混入しており、約5cm程の深さまでみられた。焼土等は確認していない。

S I 4

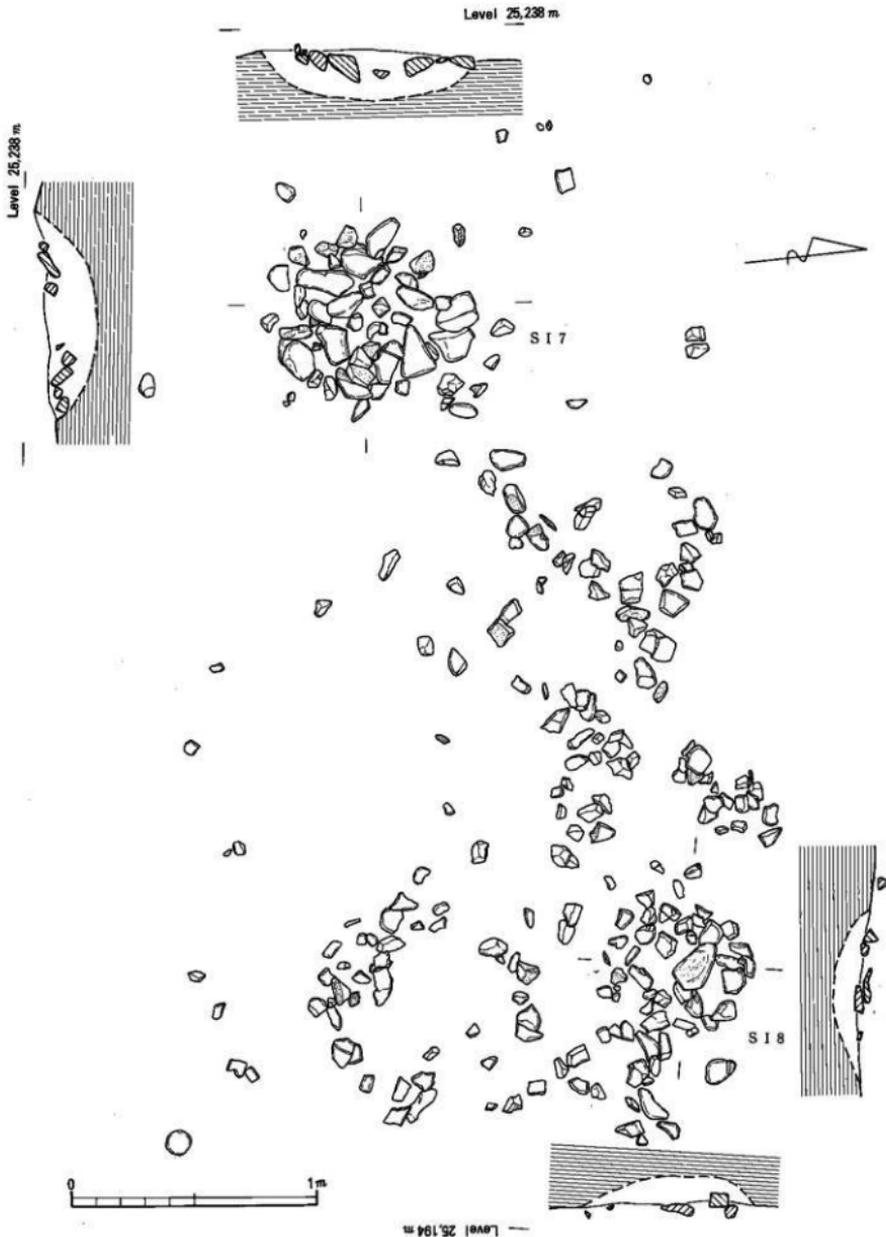
C-5グリッドの北西端で検出された。周囲にも2基確認され、計3基が集中している。礫は約120×110cmの略円形の範囲に集中し、北側がやや希薄であった。周囲に約20cm大の大きめの礫が、中央には10cm未満の礫がみられ、殆ど割れていた。変色の度合は低い。割れた礫の中には接合可能なものも見られた。礫群は約15cmの厚さに堆積し、礫面下に浅い掘り込みを持つと思われるが、明確には検出できなかった。また、小さな炭化物が少量含まれていたが



第2図 S11・2・3 遺構実測図



第3図 S14・5・6 遺構実測図



第4图 SI7·8 遺構実測図

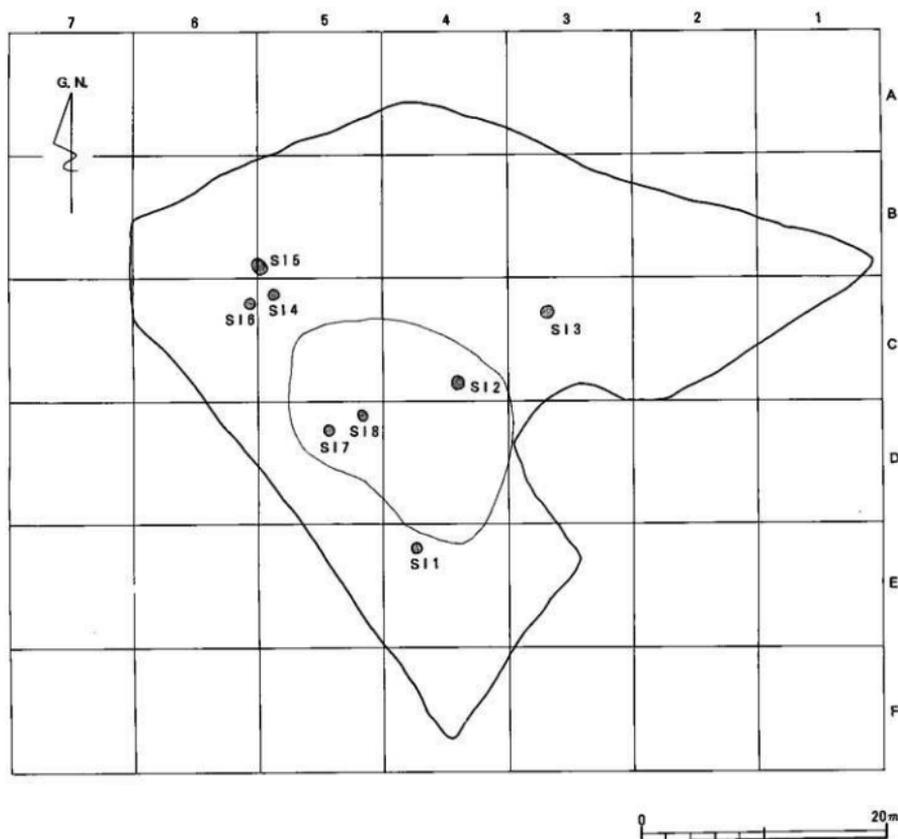
焼土等はみられず、埋土の変色・変質もみられなかった。

S 1 5

B-5・6グリッドのグリッド境南端で検出された。S 1 4の北西約2.5 mに位置するが、検出面の高さはほぼ同じである。10～5 cm程度の礫が傾斜面に沿って散在する状態で確認され、そのうち、やや大きめの礫があいまいなまとまりをみせている。殆どが割れていて、火を受けた様な赤っぽい色を呈していた。この礫面下及び礫間には炭化物等はみられず、掘り込みも確認できなかった。

S 1 6

C-6グリッド北東端で検出された。S 1 4の南西約2 mと近接しており、礫面中央の高さはS 1 4より約8 cm程低い。S 1 6は、検出時から掘り込みが確認された唯一のものである。遺構面は、中央が黒褐色、周囲が暗褐色を呈し、検出層の茶褐色土とは、輪郭こそ不明瞭であったが、明らかに識別できる状態にあった。掘り込み内には3 cm大



第5図 集石遺構分布図

から10cm大の割合小さめの礫が、量的には少ないが全面にみられ、中央部は多少希薄であった。これらは、割れたような角礫であり、遺構内上層から中層に集中していた。また、掘り込みは、検出面で105×95cmの東西に長い略円形で、床面は、88×86cmの円形である。検出面からの深さは、端部で約15~20cm、中央で約25cmを計る。床面の中央部は、堅くしまっていた。そして、やや粘質を帯びた埋土の中には炭化物がみられ、中央の黒褐色土中に最も多く、床面近くが少なかった。焼土は確認されていない。

S 17

S 18とともにD-5グリッド北側で検出された。検出時、10cm前後の礫が面的に広がる中で、西端にS 17が、北東端にS 18が、周囲より多少礫が集中した状態で確認されている。S 17は約80×85cmの略円形に15~20cm大の礫及び10cm未満の礫で構成されている。小さな礫は殆ど割れているが、全体的に礫自体の変色はなく、礫間の土色・土質ともに変化はみられない。また、礫群は地形に沿ってやや北東方向に傾斜している。周周及び礫群中に焼土は確認できなかったが、礫群下には小さな炭化物が含まれており、約86×88cmのほぼ礫群と同じ範囲で深さ約20cmまで検出された。掘り込みは明確でなく、礫も若干すり鉢状になるものの、ほぼ平面的な状況を示していた。

S 18

D-5グリッド内、S 17の北東約3mに近接している。S 17と一連の礫層面にあるもので、22×13cmの石皿状の礫を中心として、まわりに約55×65cmのほぼ円形に10cm未満の礫が集中している。しかし、密度は周囲に比べてやや集中している程度のものであり、礫は平面的に検出され、礫群下に明確な掘り込みはみられない。小礫は殆ど割れているが、礫自体の変色や礫間の土色・土質に変化は確認できず、ただ、小さな炭化物の含まれる範囲を約72×70cm、約12cmの深さまで確認できた。焼土等はみられなかったが、東端付近の礫のひとつに、スズ状の黒い炭化物の付着しているのが確認された。このS 18も、S 17同様地形に沿って北東方向へ傾いている。

集石遺構の検出状況 (第5図)

当遺跡では、先ず礫群が面的に層をなす状態が確認された。ほぼ、C-4・5グリッド及びD-4・5グリッドの範囲にみられたが、C-6グリッド西側やC-4グリッド中央では既に遺跡の北側の開析谷の方向へ傾斜する状況をみせ、礫群の範囲も、礫量もさほど広くもまた多くもなかった。このような中で、S 11・3・4・5・6は、礫層の縁辺部に検出されている。また、礫群層中で確認されたS 12は、既に傾斜しはじめた礫の不安定な出土状況の中において、礫が集中している状況ではあったが、単に礫が積重なっているとの印象を受ける出土状態であり、甚だ感覚的ではあるが、下部に掘り込みを有する種類のものとは異なる印象を受けた。S 17・8は前述のとおり、礫群の中にややまとまりをみせる程度の集中状況が観察できた。

2. 遺物

縄文土器 (第6図~第8図)

田上遺跡出土の縄文土器は、貝殻条痕文・貝殻線紋を用いる貝殻(条痕)文系土器が主体を占め、その外に無文・沈線文・撚糸文・押型文土器等が少量みられる。土器は全般に出土量が少なく、主体をしめる貝殻文系土器も個体数としては少ないと考えられる。これらの土器の出土層位は、殆どアカホヤ火山灰層下の茶褐色シルト質土層中である。文様や口縁部形態により分類を行った。また、個々の土器については、別に観察表を作成した。

(1) 貝殻(条痕)文系土器

器面調整に二枚貝条痕を用いる土器群である。施文形態により2類に細分した。

A. 貝殻条痕の外に、貝殻線刺線文や楔形貼付文を特徴とする土器群。角筒と思われる土器が少量出土してい

るので、さらに2類に細分した。

A-1 円筒土器。口唇部にきざみを有し、口縁部はわずかに外反する。外器面はナデ調整され、地文の貝殻条痕が一部痕跡として残っている。口唇部直下に1~1.5cm幅の文様帯を持ち、その下に縦位の平行腹縁刺突線文、そして、横間隔約2cm前後で楔形貼付文を縦位に施すが、胴部以下接合するものがなく、個数は不明である。楔形貼付文の横押さえはへう状またはクシ状施文具によると思われる。縦位の貝殻腹縁刺突線文は手法に2類みられる。

- a 貝殻腹縁刺突文が縁状に続けて施文されるもの。口唇部直下の文様が横位のもの(1~2)と斜位のもの(5)がある。1は貝殻肋かクシ状施文具によると思われる。
- b 続けて施文されないもの(3~4)。口唇部直下の文様は斜位に施される。同一個体と考えられる。

胴部1. 縦位の楔形貼付文及び貝殻腹縁刺突線文、へうきざみのみられるもの。

- a 腹縁刺突文が続けてされるもの(6~9・13~27・32~35)。このうち32~35は底部付近と考えられる。
- b 腹縁刺突文を間隔をおいて施したもの(10~12・28~31)。

胴部2. 貝殻腹縁以外の施文具によると思われる縦位の刺突文(36~38)。貝殻肋かクシ状施文具によるものと思われる。

A-2 角筒土器。口縁部は出土していないため全体器形は不明である。外器面は浅い貝殻条痕がみられ、その上に楔形貼付文と斜位の貝殻腹縁刺突線文を施す。胴部の屈曲部に刺突文のみられるもの(40~41)とみられないもの(42)がある。斜位の腹縁刺突線文は交差し、菱形になるものと思われる。39~41は同一個体と思われる。また、43も角筒土器の胴部片と思われる。

B. 外器面に貝殻条痕のみみられる土器群。胴部以下は不明であるが、口縁部形態により2種に細分できる。

B-1 口縁端部が肥厚し外反気味になるもの(44)。

B-2 口縁部が直行するもの。

- a 貝殻条痕文以外に施文がないもの(45~47)。47は口唇部直下に波状の貝殻条痕文が施される。
- b 貝殻条痕文以外に口縁端部にへう状施文具によるきざみを有するもの(48~50)。

胴部3. 貝殻条痕が地文にみられるもの。

- a. 横あるいは斜め方向に乱れた調整のみられるもの(51~52)。
- b. 斜方向の規則的な調整のみられるもの(53~80)。
- c. 横方向の太い条痕がみられるもの(81)。
- d. 縦方向に条痕と思われるものがみられるが、風化のためわかりにくい(82)。

(2) その他の土器

文様形態の異なる少量出土のものを一括した。

C. 斜方向の貝殻条痕の地文に刺突列点文を施すもの。口縁部は内湾気味に直行する(83)。

D. 口唇部にきざみを有し、刺突列点文か押圧文状の文様を施すもの(84)。口縁部は直行する。

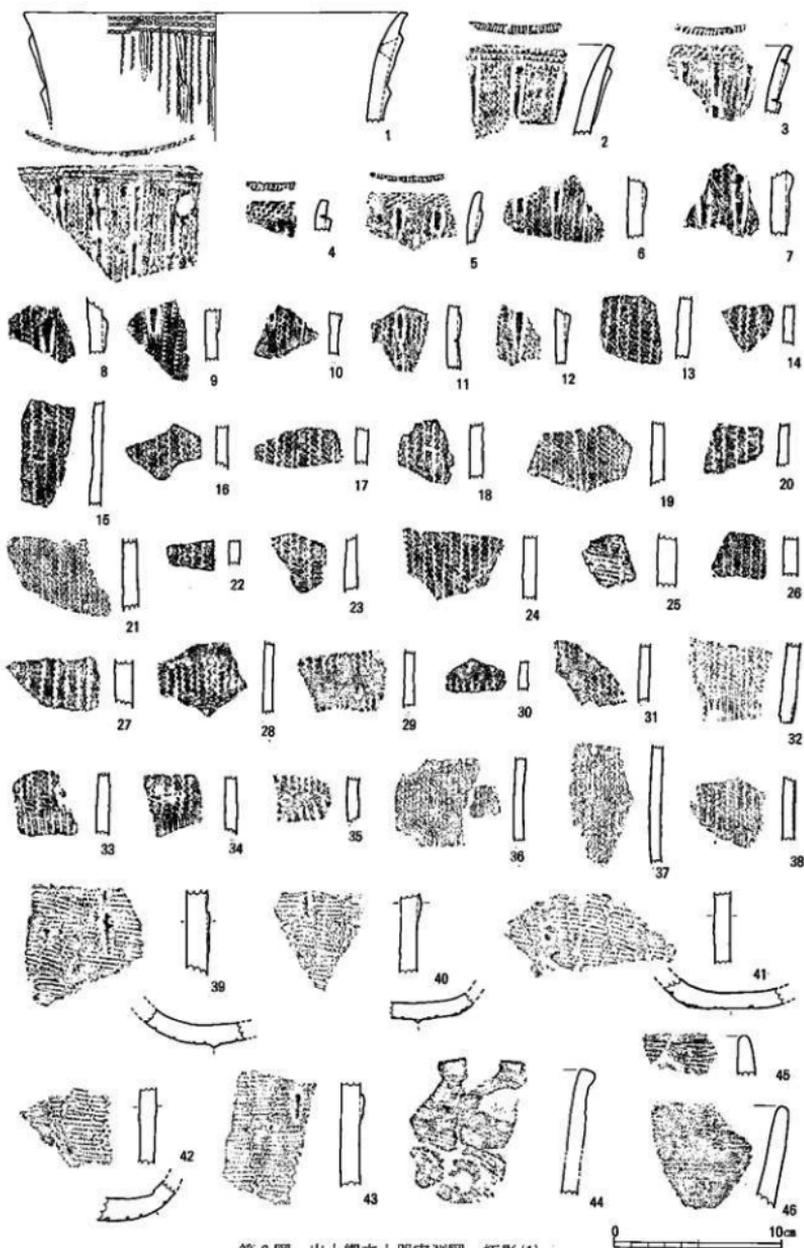
E. 横方向の条痕状の文様を施すもの。器面が風化していてわかりにくい。口縁部は内湾気味に内傾するとと思われる(85)。

F. 無文の土器。口縁部形態により2種に細分できる。

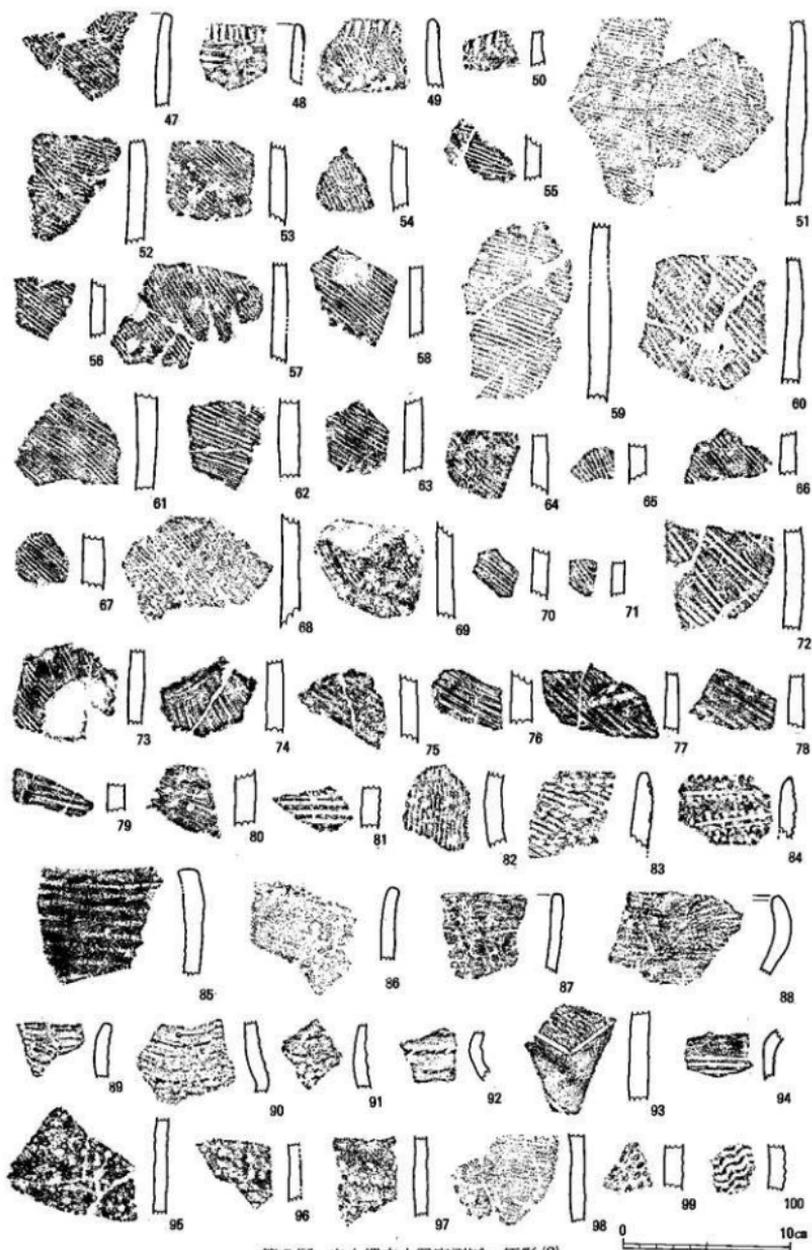
F-1 口縁部が外傾し、端部が外反するもの(86)。

F-2 口縁部が直立し、端部が内湾するもの(87)。

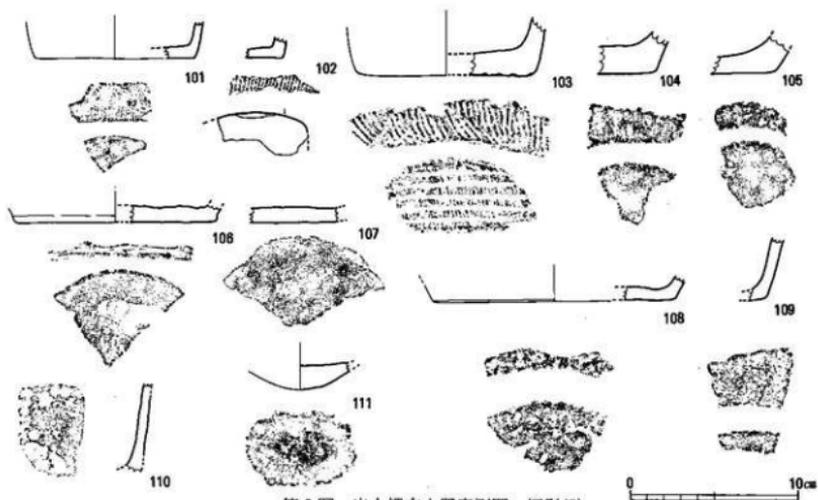
G. 貝殻肋によると思われる刺突文が横あるいは斜方向に施される。口縁部は大きく内湾し、キャリパー状になる



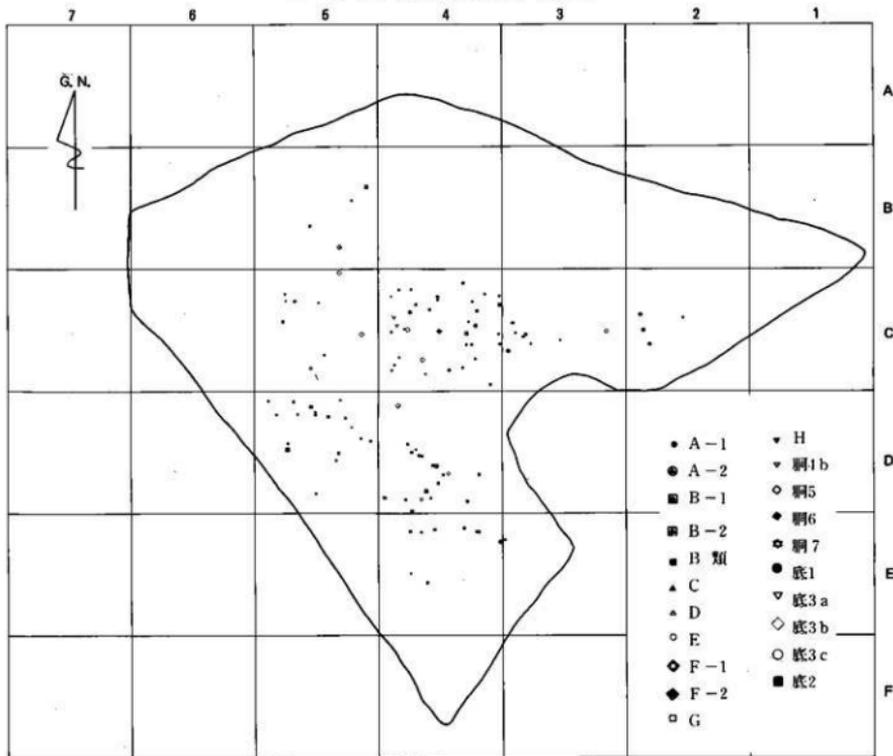
第6图 出上繩文土器実測図・拓影(1)



第7図 出土縄文土器実測図・拓影(2)



第8圖 出土繩文土器実測図・拓影(3)



第9圖 土器分布圖

と思われる(88)。

H. ヘラ状具による押し引きの結果、微隆起線文状の文様をなす(89)。

胴部4. 隆起線文のみられるもの。

- a. ヘラ状具による押し引きの結果、微隆起線文状の文様をなすもの(90~91)。
- b. 細隆起線文状の貼付の上きざみを有するもの(92)。

胴部5. 沈線文のみられるもの

- a. 沈線で囲まれた所に燃糸文を施すもの(93)。
- b. 横方向に平行沈線を施すもの(94)。

胴部6. 無文のもの(95~98)。

胴部7. 押型文の施されるもの。

- a. 楕円押型文(99)。
- b. 山形押型文(100)。

底部1. 端部にきざみ目のみられるもの。

- a. 円筒土器の底部と思われる、貝殻腹縁刺突文を縦位に多条施す(101)。
- b. 角筒土器の底部と思われるもの(102)。

底部2. 側面に貝殻条痕が縦方向にみられ、底面に網代痕がある(103)。

底部3. 無文のもの。

- a. 丁寧な調整の行われているもの(104~105)。
- b. ナデ調整を用いた特徴のないもの(106~110)。
- c. 底が丸くなると思われるもの(111)。

縄文土器の出土状況(第9図)

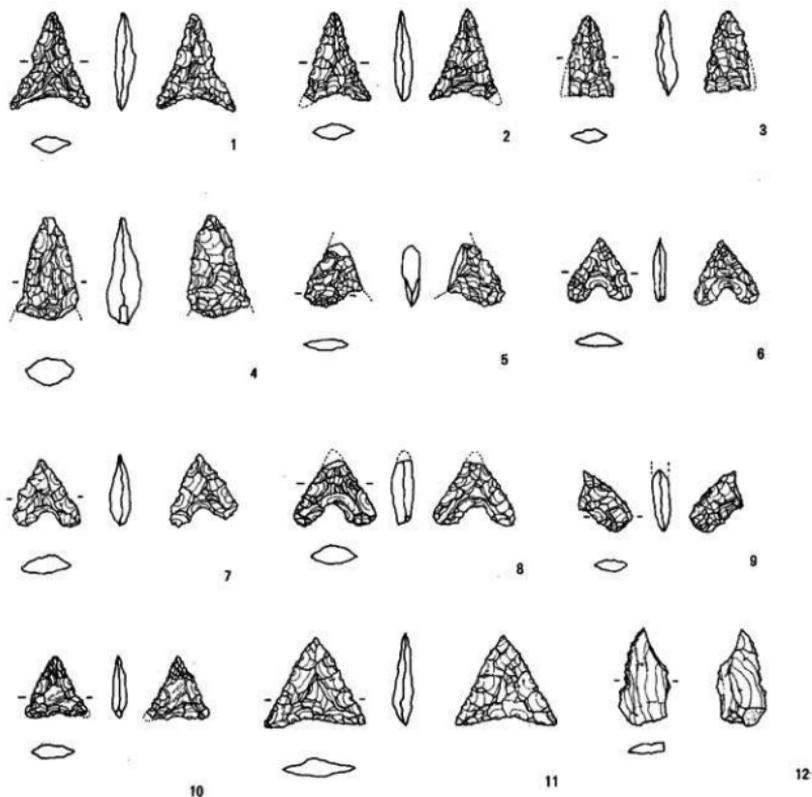
出土縄文土器は、全体的にみるとC-4グリッドとD-4・5グリッドを中心に分布する。これは、築石遺構の障層の分布範囲内には含まれるものであり、土器も障間に混在して出土している。また、土器は発掘区中央から北側にかけて、全体的に地形の傾斜に沿って出土しているが、北端では明らかに流れ落ちたと考えられる状況のものもみられた。主体を占めるA類・B類については、A類土器がC-4・D-5グリッドに集中するのに対し、B類土器は主にD-4グリッド及びE-4グリッドに出土するという傾向がみられる。

(菅付和樹)

石器

石器は土器に比べ出土量は少なく石鏃11点、磨石3点、石皿片1点、小型のスクレパー様石器1点、不明石器1点である。これらはC・D-4・5グリッド周辺に集中する。その他黒曜石、チャート等のチップ、剝片もみられる。石材は黒曜石、砂岩、チャート、安山岩などある。黒曜石は次のA~D類の4にわかれる。

- A類— 透明度があるが少量の気泡を含む。霧島産のものと思われる。
- B類— 濃い鉛色をなす。気泡は含まれない。
- C類— 不透明な黒色を呈す。気泡を多量に含む。
- D類— 乳灰色をなす。一般に姫島産といわれるものである。



第9図 石器表面図(1)

表1 石 鏃 計 測 表

番号	出土地区	型式	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	扶 幅		先端角 (度)	重 さ (g)	石 材	破損状態	備 考
						深さ	り					
1	C-5	I-a	2.0	1.6	0.4	1.4	0.3	46	0.6	ob-A	完形	
2	C-4	I-a	1.8	1.4	0.4	1.1	0.2	47	0.5	ob-B	脚端部欠損	第2ブロック
3	E-4	I-b	1.7	1.1	0.4	—	—	62	0.4	ob-A	脚部欠損	
4	D-4	I-a	—	1.2	0.7	—	—	48	1.2	ob-A	脚部欠損	第1ブロック
5	D-4	I-a	—	—	—	—	—	—	—	ob-A	脚部のみ	第1ブロック
6	C-4	II-a	1.3	1.3	0.3	0.8	0.3	68	0.3	ob-B	完形	第2ブロック
7	C-3	II-a	1.3	1.3	0.4	0.9	0.3	67	0.45	ob-D	完形	
8	D-4	II-a	—	1.7	0.5	1.1	0.5	—	0.7	ob-C	先端部欠損	第1ブロック
9	D-4	II-a	—	—	—	—	—	—	0.3	ob-A	脚部のみ	第1ブロック
10	D-4	II-b	1.2	1.3	0.3	0.9	0.1	69	0.3	ob-A	脚端部欠損	第1ブロック
11	C-4	II-b	1.8	2.1	0.4	1.6	0.2	64	0.7	Sn	完形	第1ブロック

石 鏃 (第9図1~11)

石鏃は形態が二等辺三角形をなすもの(I類)、正三角形をなすもの(II類)がある。また、それは浅い袂りのあるもの(a類)とU字状に深く袂りのはいるもの(b類)に細分できる。I-a類(1・2・4・5)、I-b類3、II-a類(6・7・8・9)、II-b類(10・11)となる。石材からみるとob-A類は全タイプにあり、ob-B類はI-a・II-a類、ob-C類はII-a類(8)のみ、ob-D類はII-a類(7)のみである。11は安山岩製のもので全長1.8cm、幅2.1cmと大型であるが厚さは0.4cmと普通である。完形で出土しているものは4点で、先端部欠損のもの1点、脚部欠損のもの4点である。10は表裏に剝離が残されている。

スクレイパー・擦石器 (第9図12)

12は剥片を利用したもので、左側辺に表面から約1.2cmにわたってリタッチが施されている。表面右側基部には自然面が残る。長さ2.1cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmを測る。ob-A類に含まれる。D-5グリッド出土である。

不明石器 (第10図)

不整形の十字形を呈す。左側辺は自然面が残され、基部は表裏からいねいな基部調整がなされる。右側辺は裏面からの調整だけで、裏面上半には主要剝離面を、表面中央部に剝離面を残す。硬質砂岩製である。長さ7.5cm、幅4.1cm、厚さ1.2cmを測る。D-5グリッド出土である。

石 皿 (第11図1)

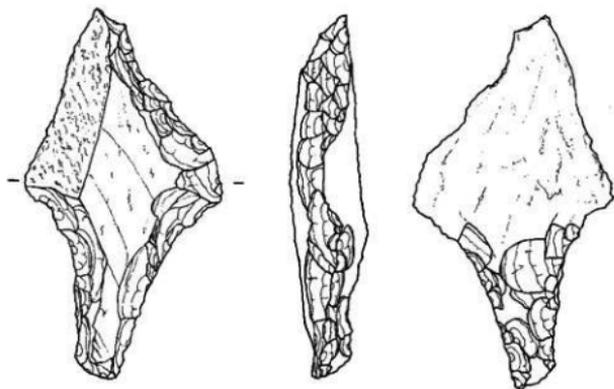
砂岩製のもので $\frac{2}{3}$ ほどの残存である。表裏とも凹みがあり捺痕が観察できる。S18から出土しており集石遺構に伴うものかもしれない。あるいは集石遺構に使用された可能性もある。

磨 石 (第11図2~4)

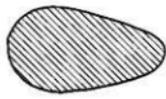
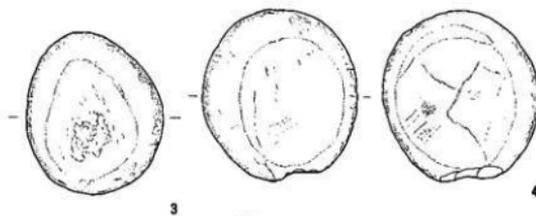
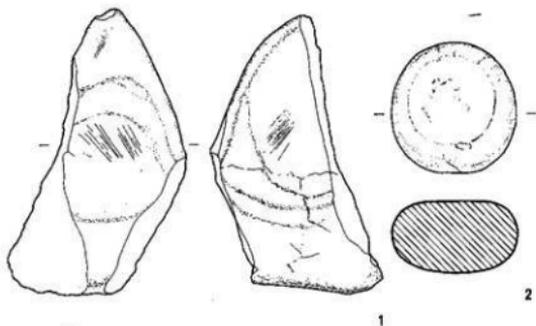
2は円形をなし、表面のみに5.5×5.1cmの幅で磨痕が観察できる。砂岩製のもので長さ7.8cm、幅7.5cm、厚さ4.3cmを測る。C-4グリッド出土である。3は表面のみに磨痕があり、一部中央が凹んでいる。平面は卵形をなす砂岩製のものである。長さ9.8cm、幅8.2cm、厚さ5.0cm。B-5グリッド出土。4は砂岩製の磨石である。表裏に磨痕が観察できる。裏面にヒビが入る。下部が一部欠損している。長さ10.4cm、幅9.5cm、厚さは一様でなく左が5.1cmで右にいくにつれて薄くなっている。C-5グリッド出土である。

石器の出土状況 (第12図)

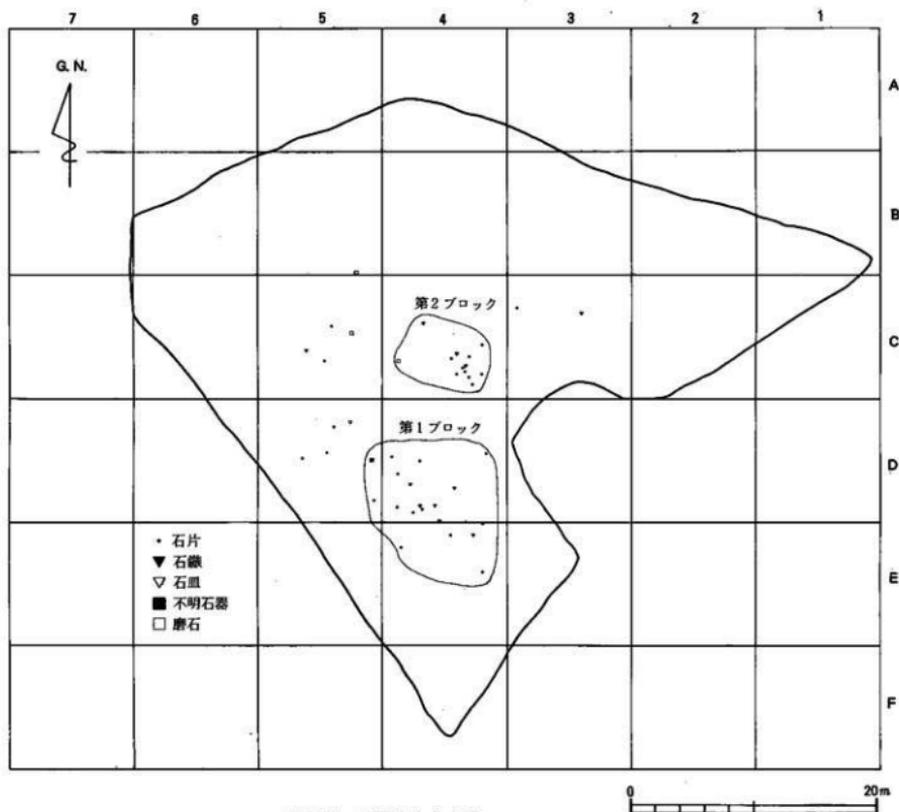
石器および石片は発掘区の中央から南寄りにかけて分布する。その中で小さく2つのブロックに分けることができる。第1ブロックはS11、S12、S17、S18に囲まれた広い範囲で分布する。石鏃5点、不明石器1点、石皿片1点、石片15点である。石鏃はS11周辺に集中する。石材はob-A類が4点を占める。不明石器はS17・8付近の散石に混じってまた、石皿片はS18の中から出土した。第2ブロックはS12周辺に分布する。石鏃3点、磨石1点、石片9点からなる。石材はob-B類が2点、安山岩製が1点である。S12に伴う可能性が大きい。そのほかに、第2ブロックとS14の間に磨石2点、石鏃1点、石片2点がみられる。またS12の東側にはob-D類の石鏃1点と石片1点が分布している。



第10图 石器实测图(2)



第11图 石器实测图(3)



第12図 石器出土分布図

SC1 (第13図)

(1) 遺構

発掘区の西側約60mのところから土取り作業中に発見された。そのため東側の約 $\frac{1}{4}$ 程度が削平されていた。長さ2.5m、幅1.9m(推定)、深さ約35cmを測る。埋土は粘質をおびた褐色土である。中央やや北寄りの部分から壺1個体分が出土した。レベルは遺構の中位よりやや下方であった。その他の出土遺物はみられない。発掘後周辺にまで下げたが、その他遺構は確認できなかった。

(2) 遺物

1は土師器壺である。SC1からの出土遺物はこれだけである。口縁はかるく外反し短い。端部は細くなり丸味をおびると思われる。胴部はやや長胴気味で最大径が胴部中央となる。底部は丸底を呈すと思われる。内外面とも風化が著しい。胎土はきめ細かいが0.5～4mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は内外面とも浅黄橙(7.5 YR%)をなす。2～9は須恵器の甕片でSC1周辺出土のものである。2は頸部片で外面は格子目叩き、内面は口縁部が横ナズ、頸部は平行条線叩きである。焼成は良好。外面には自然釉が被る。内面は淡青灰色をなす。3は外面が格子目叩き、内面

に平行条線叩きが施される。外面は黒褐色をなし自然軸が被る。内面は暗青灰色をなす。2次の焼成を受けた可能性がある。4は外面が格子目叩きで一部ナデ消される。内面は同心円文叩きである。焼成は良好。外面は青緑色をなし自然軸が被る。内面は青灰色を呈す。5は外面が格子目叩きで一部ナデ消される。内面は同心円文の叩きが施される。焼成は良好。外面には薄く自然軸が被る。内面は青灰色をなす。4、5は同一個体と考えられる。6は外面に格子目叩き、内面には平行条線の叩きが施される。内面の平行条線の原体は長さ約2.0cm、幅 $(3+a)$ cmと考えられ施文法は縦方向のあと斜方向という順に調整が行なわれている。焼成は良好。外面は自然軸が被り暗青緑色、内面が青灰色を呈す。7は外面が格子目叩き、内面は外面より大きい樹目の格子目叩きでその後ナデ消されている。焼成は良好。外面が淡青灰色、内面が灰色を呈す。8は甕の底部である。外面は格子目叩きで一部ナデ消される。胴部内面は平行条線叩き、底部内面は指による調整で部分的に平行条線の叩きが入る。内面の叩きは幅3.4cm、長さ $(3+a)$ cmで左回りに下から上へ施されている。焼成は良好。外面は暗青緑色、胴部内面は暗青灰色、底部内面が黄褐色をなす。9は外面は格子目叩きで一部ナデ消される。内面は平行条線の叩きである。焼成は良好。外面が暗青緑色、内面が暗青灰色を呈す。3・6・8・9は同一個体と考えられる。

その他の遺物 (第14図, 第15図)

1は流紋岩系の細石核である。正面観が幅広いU字形、底面が舟底形を呈す。底縁および背面に自然面が残されている。このことから母岩の一隅を剝離後、その剝離面を利用して1度ないし2度の調整によって打面が作られる。側面の調整は粗く平面形が三角錐状をなす。全長4.7cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測る。表採資料である。

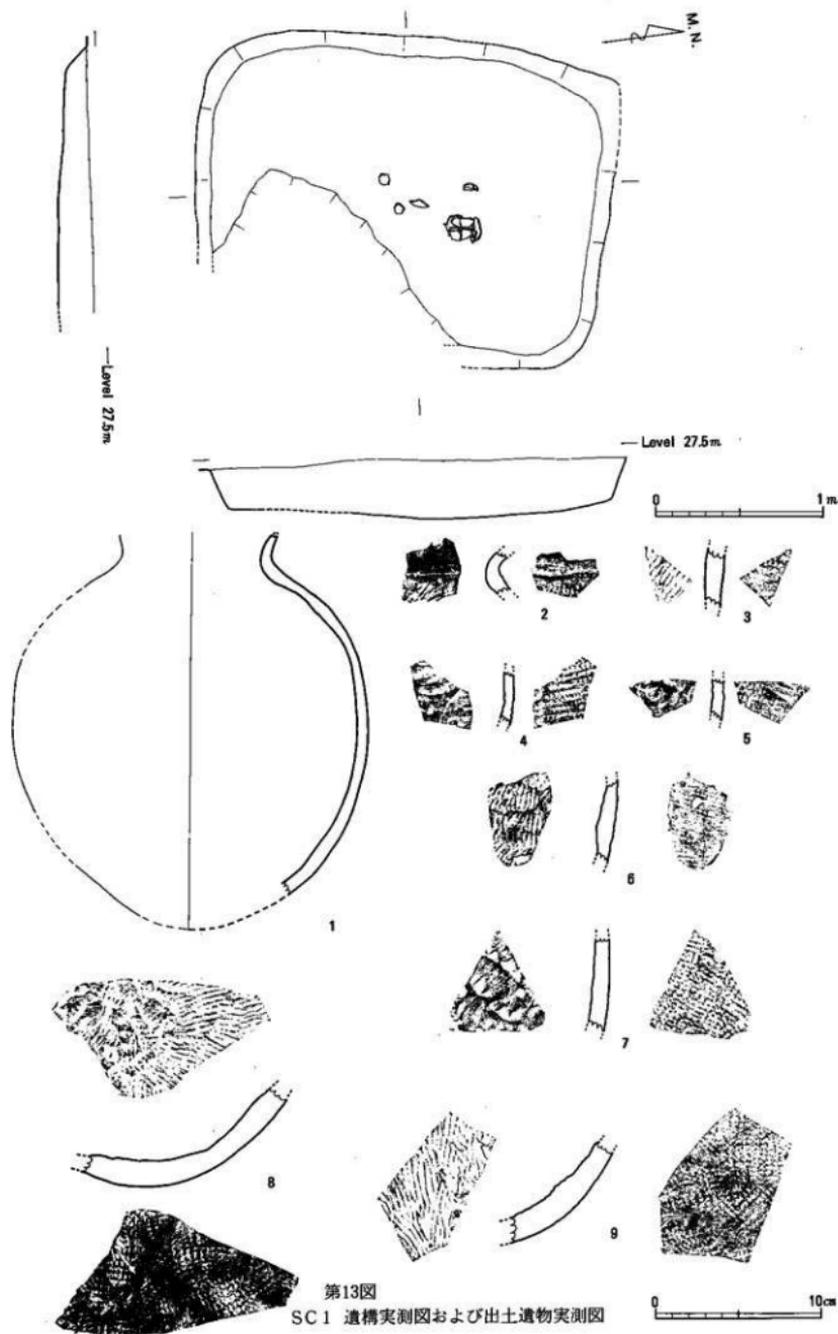
1~4は弥生壺形土器の底部である。1は平底で厚さ約0.9cmと比較的薄手である。胴部下半は指による押さえとされるが風化が著しく明確でない。胎土には1~3mmの小石を多量に含む、焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が淡黄褐色をなす。B-6グリッド出土である。2は1に比べ1.8cmと厚手の底部で底径も7.1cmと小さい。やや上げ底気味である。胴部はハケ調整と思われる。底部付近は指による押さえ。胎土には1~2mm大の石を多量に含む。焼成は良好。色調は内外面とも淡黄褐色を呈す。B-6グリッド出土である。5は土師器鉢である。口縁部は外反し端部は丸く収められる。屈曲部は外面は不明瞭であるが内面は明瞭に残る。外面は横ナデ、内面は口縁部が横ナデ、胴部が斜方向のナデの調整が施される。胎土には1~2mm大の石を含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が淡黄褐色を呈す。口径24.3cmを測る。6は摺鉢片と思われる。内外面とも横ナデ。内面には条線はみられない。2~3mmの石を含む。焼成は良好。色調は外面の口縁部が青灰色、体部が灰黄褐色、内面が暗黄褐色を呈す。B-6グリッド出土である。7は底部が回転糸切りの手法をもつ土師器小皿である。底部はやや上げ底気味で、体部はほぼ直線的に外上方にのびる。口縁端部は丸く収められる。口径8.3cm、器高2.3cm、底径5.3cmを測る。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が淡赤褐色を呈す。C-5グリッド出土である。

(谷口武範)

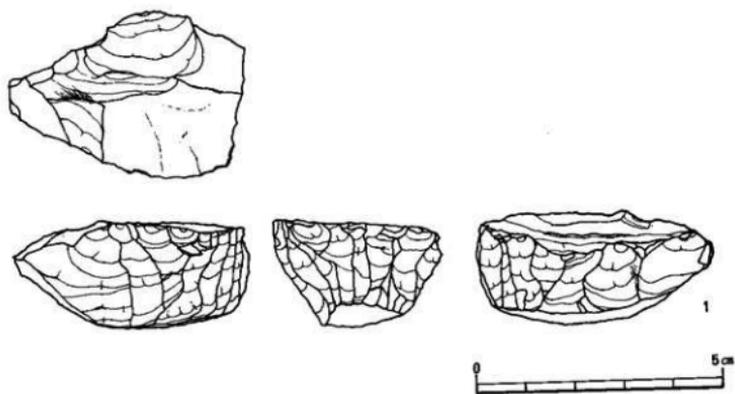
第5節 まとめ

田上遺跡は、前述した如くアカホヤ上面まで削平されていたため、それに掘り込まれた遺構とそれ以前に営まれた縄文時代早期あるいは先土器時代のものに限られる結果となった。特に縄文時代早期のものが中心で集石遺構8基、遺物(土器、石器)約200点を検出した。先土器時代の遺物としては細石核が1点表採資料としてあるだけであった。

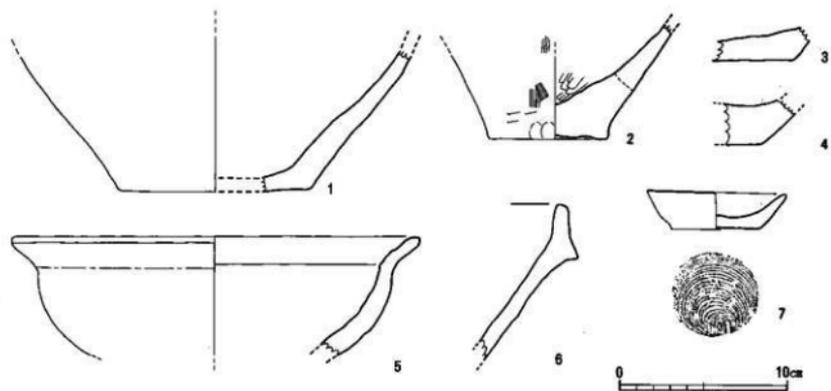
細石核は形態および調整から船野型細石核と考えられる。⁽¹⁾宮崎学園都市遺跡群内での細石核の出土は前原西遺跡に次いで2例目となる。前原西遺跡の細石核は黒曜石(本遺跡分類のob-A類)製で第IV層黒褐色土(小白斑を含む)から出土している。背面に自然面を残し、正面、両側面が細石刃剝離作業面となり、下部が一部欠失する。このように同じ遺跡群内でも形態のちがいがみられ、出土層位、調整技術などの詳細な検討が必要である。⁽²⁾ししては、県内でも畦原型細石核、⁽⁴⁾船野型細石核といった技法が存在しそれとの関連も考えなければならない。



第13図
SC 1 遺構実測図および出土遺物実測図



第14図 その他の遺物実測図(1)



第15図 その他の遺物実測図(2)

さて、縄文時代の田上遺跡は、一定範囲の礫群や集石遺構の存在によって、単に早期の包含層としてではなく、人間の生活の場としての意義が認められる。当遺跡で出土した縄文土器は、少量の口縁部とやや多めの胴部、少量の底部のみであったが、このうち、A-1類に胴1類・底1a類が、A-2類に底1b類が、そしてB類に胴3類・底2類の土器がそれぞれ対応関係にあると考えられる。また、従来の型式内容に相当すると考えられるものに、C・D類、⁽⁵⁾胴5類が塞之神式土器に、B-2類の48・49、胴3a・b類が桑之丸遺跡2類土器や永野遺跡X類土器タイプの前平式土器に相当するものと思われる。そして、当遺跡でA類としたものは、A-1類が加栗山遺跡IV A類に、A-2類が同V A類に相当するもので、前平式土器であるか吉田式土器であるかその帰属が問題になったものである。このうちA-1類は、地文の貝殻条痕を殆どナデ消している点及び口縁部直下の文様が横位の腹縁刺突線文のほかに斜位の腹縁刺突文を施した例がみられる点、加栗山タイプと多少異なる様である。また、A-1b類・胴1b類としたものは縦位の腹縁刺突線文が短く途切れたように施文されるものであった。これは、腹縁を一定の間隔をおいて縦位に刺突したものか、あるいは、刺突線文を後に一定間隔にナデ消したものの様であったが、破片が小さいため不明である。ただ、28の胴部片は1単位の長さがわかるものであるが、器表面に残る腹縁端部は風化を受けていて、ナデ消しか一回の刺突によるものか微妙なところである。この種のものも加栗山タイプにはみられない様である。

集石遺構を含む礫群と出土遺物との分布上の関係は、土器・石器それぞれの項で述べたとおりである。即ち、主体をなしたA類・B類土器及び、石器の主体をなした石鏃・チップ等の分布状況が、礫群の範囲内に集中しているということ。そして、土器ではC-4・D-5グリッドにA類が集中し、B類は主にD-4グリッド南半に集中しているということ。石器はS I 1とS I 8との間、主としてD-4グリッド南半とC-4グリッドS I 2の周辺に分布の集中がみられることなどである。また、礫が集中した状態で出土する集石遺構の分布も、S I 1・3・4・5・6が礫群の周辺で、S I 2・7・8が礫群の中に他と判別できる状況で検出されている。この遺物の分布と密接な関係にあった礫群については、最近県内各地の遺跡で集石遺構と共に検出されている。特に宮崎郡田野町の芳ヶ道第1遺跡⁽⁹⁾では、焼石が厚さ10cm前後に層をなして確認され、それらが集石遺構上あるいは近接して検出されるという分布状況から調査担当者は、焼石が「廃棄礫」である可能性を指摘している。このような分布状況は近くでは、学園都市遺跡群内の赤坂遺跡や北隣の小山尻東遺跡でも確認され、次第に例を増している。当遺跡の礫群においては、肉眼で識別できる程顕著な赤変を示す礫は多くはなかったが、殆ど全ての礫が打ち割られた様な角礫状であり、使用後廃棄された礫である可能性が高い。そして、これら礫群中には遺物が集中していたが、礫面上で生活が営まれたとは考え難く、あるいは、礫群中の3基の集石遺構を含むこの空間は、遺物や使用後の礫等を破棄した空間であった可能性もある。礫群周辺にみられた5基の集石遺構のうち、S I 5は加火されたと思われる少量の礫が弱いまとまりをみせ、その下部には炭化物や掘り込み等は確認できなかったが、一方、S I 4とS I 6は礫が下部は平坦で上方へ積み重ねられた状態のS I 4と、炭化物の混入した明確な土坩に少量の礫が確認できたS I 6という対称的な集石遺構であった。これらは集石遺構の機能を考える上でひとつの意義を有すると思われる。S I 6におけるearth ovenの機能と、それに使用し或いは再び使用するために、近くに積まれたS I 4、そして、使用に耐えなくなった廃棄礫としてのS I 5というひとつの可能性であるが、他の礫群周辺の明確な掘り込みを持たない集石遺構の性格など今後の課題は多く、さらに種類の増加を待ち検討してゆきたい。また、これら集石遺構・礫群・遺物相互間の関係を有機的に考えることによ

って、田上遺跡ひいては北隣の小山尻東遺跡との相互の生活圏の問題を解くことができるものと考えられる。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾
宮崎学園都市遺跡群内の古墳時代遺跡は、非常に少なく前原北遺跡、前原南遺跡、熊野原遺跡C地区の3例⁽¹³⁾だけである。いずれも古墳時代初頭のもので5世紀から6世紀にかけての遺跡の調査は行なわれていない。県内でも上別府遺跡⁽¹⁴⁾、浄土江遺跡⁽¹⁵⁾、藤掛遺跡と少なくともどれも集落址で、当遺跡出土類似の土坩は検出されていない。ただ、谷を隔てた北隣の小山尻東遺跡には同時期と思われる土坩がある。いずれも単独で存在し、壺、甕などの日常

容器が1～2個体出土している。土坑の性格は不明である。また、時的には上るが同規模の土坑が熊野原遺跡B地区から検出され墓塚も単独で存在している点は、当遺跡、小山尻東遺跡出土の土坑と類似する。もしこれらが墓だとすれば、丘陵北東部の低地にある木花古墳群との関連が興味深いものとなる。

以上の如く田上遺跡では、縄文時代早期の遺構・遺物を中心に細石核、弥生土器片、古墳時代の土坑とそれに伴う遺物、陶磁器などを確認した。すでに遺跡は小範囲にしかり残存しておらず遺跡自体の性格づけをすところまで至らなかったのは残念である。しかし、県内でもこうして行なわれてきた発掘調査結果も膨大な量に達し集大成する時期にきていると思われる。それが「歴史」に近づくものであつかう地域の人たちへの環元となりうるものであろう。

(菅付和樹、谷口武範)

- 註1) 橋 昌信「九州地方の細石器文化」畿台史学 47 1979
- ② 「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅲ 宮崎県教育委員会 1982
- ③ 同上
- ④ 茂山 義・大野寅夫「児湯郡下の旧石器」宮崎考古3 1977
- ⑤ 新東晃一他「桑之丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 鹿児島県教育委員会 1977
- ⑥ 青崎和憲他「永野遺跡」知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 鹿児島県知覧町教育委員会 1983
- ⑦ 青崎和憲他「加栗山遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書⑬ 鹿児島県教育委員会 1981
- ⑧ 最近、これらの土器について長野真一氏が再度検討され新しいグループに整理されておられる。いわゆる、仮称「加栗山タイプ」である。
- 長野真一他「く上抜川遺跡」上植原遺跡・水ノ谷遺跡・丸岡遺跡」鹿屋市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 鹿屋市教育委員会 1984
- ⑨ 面高哲郎「芳ヶ追第1遺跡 県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」田野町文化財調査報告書第1集 田野町教育委員会 1984
- ⑩ ②と同じ
- ⑪ 同上
- ⑫ 面高哲郎「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985
- ⑬ 日高正晴他「上別府遺跡」宮崎県教育委員会 1979
- ⑭ 野間重孝「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第6集 宮崎市教育委員会 1981
- ⑮ 岩永哲夫他「藤掛遺跡」『鑑遺跡・藤掛遺跡』新富町文化財調査報告書 第2集 1983
- ⑯ ②と同じ

表2 縄文土器観察表

■ 捺形捺付文の観察は「備考」に記入

図番番号	アット名	形	部	器面調整		文様		土色		調	焼成	備考
				外器面	内器面(底面)	外器面	内器面	外器面	内器面			
1	C-4	円筒	口縁部	肌色裏面への ヘラツクリ	ヘラツクリ	肌色裏面への ヘラツクリ	ヘラツクリ	黄褐色・灰赤・黄(10.5m以下) 下の粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR7/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR7/4)	良好	甲丸み へう跡なし
2	E-3,4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤・黄(10.5m以下) 下の粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR7/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR7/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
3	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と1m以下の 粉砂を含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	黄褐色 (2.5Y7/4)	*	へう跡なし
4	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と1m以下の 粉砂を含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	黄褐色 (2.5Y7/4)	*	へう跡なし 土に黄褐色と赤褐色
5	C-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と1m以下の 粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
6	C-4	*	胴部	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と黄褐色・ 灰赤・黄を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
7	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と0.5m 以下の粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
8	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と0.5m以下の 粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	縦押さえずなし
9	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と0.5m以下の 粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
10	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と0.5m以下の 粉砂を含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	黄褐色 (2.5Y7/4)	*	へう跡なし
11	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と0.5m以下の 粉砂を含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
12	C-3	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	へう跡なし
13	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし
14	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
15	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
16	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	不明	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
17	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし
18	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	黄褐色 (2.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
19	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
20	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
21	B-5	*	*	ヘラツクリ のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	黄褐色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし

図番番号	アット名	形	部	器面調整		文様		土色		調	焼成	備考
				外器面	内器面(底面)	外器面	内器面	外器面	内器面			
22	C-4	円筒	胴部	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	良好	
23	E-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
24	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし
25	C-3	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
26	E-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
27	C-3	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
28	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	黄褐色 (2.5Y7/4)	*	
29	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	29と同一個体か
30	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
31	D-5	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	
32	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤・黄(10.5m以下) 下の粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	縦押さえずなし
33	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤・黄(10.5m以下) 下の粉砂を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし
34	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	横押さえずなし
35	C-2	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	黄褐色 (2.5Y7/3)	黄褐色 (2.5Y7/4)	*	横押さえずなし
36	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
37	C-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色 (2.5Y7/3)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
38	D-4	*	*	ナ	ナ	ナ	ナ	黄褐色 (2.5Y7/3)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
39	C-2	角筒	肌色裏面	ヘラツクリ	ナ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と10m以下の 石灰を少量含む(横線)を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
40	C-2	*	*	肌色裏面	ヘラツクリ	ナ	ナ	黄褐色・灰赤と10m以下の 石灰を少量含む(横線)を含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	フシ状横線に2本 押さえる
41	C-4	*	*	肌色裏面	ヘラツクリ	ナ	ナ	0.5m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	黄褐色 (2.5Y7/3)	*	40と同一個体か
42	C-4	*	*	肌色裏面 のあとナ	ヘラツクリ	ナ	ナ	1m以下の粉砂と灰赤・黄 褐色を少量含む	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	2.0-1.0黄色 (5.5YR/4)	*	

図面番号	グリッド名	彫影	彫形	器面調整		文様		胎上	色調		焼成	備考	
				外面	内面	(底面)	外面		内面	外面			内面
43	C-3	角削	彫部	貝殻色紙	ヘラナゲリ	—	—	—	0.1~3mmの彫粒、小石と彫粒を混、黒染めを含む	淡黄褐色 (10YR 4/2)	淡黄褐色 (5YR 6/3)	良好	ナシに施すことによる弊害なし
44	D-4	—	口縁部	貝殻色紙	ヘラナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、黒色彫粒を含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
45	C-4	—	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	—	彫粒を多く含む、1mm前後の彫粒と石屑、黒染めを含む	黄褐色 (2.5Y 5/1)	黄褐色 (2.5Y 5/1)	#	
46	D-4	—	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	—	0.1~3mmの彫粒、小石と彫粒を混、黒染めを含む	淡黄褐色 (10YR 6/2)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	#	
47	D-4	—	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	—	0.5mm以下の彫粒と彫屑、彫屑を多く含む	淡黄褐色 (7.5YR 7/3)	淡黄褐色 (7.5YR 7/3)	#	
48	B-5	円削	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒と石屑、彫屑を多く含む	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	#	
49	C-4	—	彫部	子ナゲリ	ナゲリ	—	—	—	彫屑、彫屑、黒染めを多く含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	淡黄褐色 (2.5Y 7/2)	#	
50	—	—	彫部	彫部	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒と石屑、彫屑を多く含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	#	口縁部近く
51	C-3,4	円削	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.1~3mmの彫粒、小石と彫屑を多く含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	#	口縁部
52	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
53	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と彫屑と石屑を多く含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	にじみ褐色 (7.5YR 6/4)	#	
54	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (7.5YR 7/4)	#	
55	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	#	
56	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	#	
57	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を多く含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
58	D-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	#	
59	C-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒、心裏と伊泥を多く含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	#	
60	C-3	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	にじみ褐色 (10YR 7/3)	#	
61	C-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒、石屑を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	#	
62	D-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒、心裏と彫屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
63	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を含む	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	#	

図面番号	グリッド名	彫影	彫形	器面調整		文様		胎上	色調		焼成	備考	
				外面	内面	(底面)	外面		内面	外面			内面
64	B-5	円削	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	良好	
65	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	黄褐色 (7.5YR 7/4)	黄褐色 (5YR 6/2)	#	
66	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	#	
67	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 7/4)	淡黄褐色 (7.5YR 7/4)	#	
68	D-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/3)	#	
69	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.1~3mmの彫粒、小石と彫屑を多く含む	にじみ黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	#	
70	C-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.1~3mmの彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	#	
71	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
72	C-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	にじみ褐色 (10YR 6/4)	#	
73	C-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を含む	淡黄褐色 (7.5YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	#	
74	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 4/2)	#	
75	D-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	黄褐色 (7.5YR 6/4)	#	
76	D-5	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	黄褐色 (10YR 5/1)	#	
77	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	黄褐色 (10YR 6/2)	#	黄褐色(内面)
78	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	にじみ黄褐色 (10YR 7/3)	#	
79	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	#	
80	E-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑、彫屑を多く含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	#	
81	—	—	彫部	黄褐色	ナゲリ	—	—	—	1mm前後の彫粒と石屑を含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/4)	黄褐色 (5YR 6/2)	#	
82	C-4	—	彫部	黄褐色	ナゲリ	—	—	—	彫屑を多く含む、1mm前後の彫粒と石屑を含む	明黄褐色 (5YR 5/3)	黄褐色 (5YR 6/2)	#	黄褐色している
83	D-4	—	彫部	貝殻色紙	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒と彫屑、彫屑を多く含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	#	
84	D-5	—	彫部	ナゲリ	ナゲリ	—	—	—	0.5mm以下の彫粒と彫屑、彫屑を多く含む	にじみ褐色 (7.5YR 7/3)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	#	

図面番号	グリッド名	形	影	部	部面調整			文様		色		地	備考	
					外器面	内器面	(裏面)	外器面	内器面	胎土	外器面			内器面
85	—	—	口縁部	風化の爲不明 ヘラナナ?	ナ	ナ	—	—	—	0.1~2mmの砂粒、小石と黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (10YR 7/4)	12.0以下褐色 (10YR 7/4)	良好	
86	D-5	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	黒石が多く含む、0.5mm以下 の砂粒と黒石を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	*	風化が激しい
87	C-4	—	*	ヘラナナ?	ナ	ナ	—	—	—	0.1~2mmの砂粒、小石と黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	風化が激しい
88	D-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	
89	C-5	—	*	ヘラナナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/2)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	*	
90	C-5	—	*	ヘラナナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/2)	淡黄褐色 (10YR 6/2)	*	
91	C-5	—	*	ヘラナナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (10YR 7/2)	12.0以下褐色 (10YR 7/2)	*	風化が激しい
92	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	
93	D-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	*	
94	C-5	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	スス付着(外器面)
95	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	
96	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	*	
97	C-5	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	*	
98	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	石灰、黒石、黒石等を含む	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	ススの痕跡(外器面)
99	D-4	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	0.1~2mmの砂粒、小石と黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (5 YR 6/6)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	
100	D-5	—	*	ナ	ナ	ナ	—	—	—	1mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	褐色 (7.5YR 6/6)	12.0以下褐色 (7.5YR 5/6)	*	
101	E-4	円錐	底	ナ	ナ	ナ	ヘラナナ	—	—	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (5 YR 6/4)	明黄褐色 (8.5YR 5/4)	*	
102	C-2	角筒?	*	ナ	ナ	ナ	ヘラナナ	ナ	ナ	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (10YR 7/4)	12.0以下褐色 (7.5YR 7/4)	*	
103	D-5	円錐	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	淡黄褐色 (10YR 6/4)	淡黄褐色 (10YR 6/4)	*	
104	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	ヘラナナ	ナ	ナ	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (10YR 6/4)	12.0以下褐色 (10YR 6/2)	*	
105	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	0.5mm以下の砂粒と黒石、黒石 混在(風化)を含む	12.0以下褐色 (10YR 7/2)	12.0以下褐色 (10YR 6/2)	*	

図面番号	グリッド名	形	影	部	部面調整			文様		色		地	備考	
					外器面	内器面	(裏面)	外器面	内器面	胎土	外器面			内器面
106	C-5	—	*	底	ヘラナナ	ナ	ナ	ナ	ナ	—	—	—	—	良好
107	C-5	—	*	—	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	—	—	—	—	ススの痕跡(裏面)
108	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	—	—	—	—	中不注 炭化物付着(内器面)
109	C-4	—	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ヘラナナ?	ナ	—	—	—	—	骨(炭化物付着(内器面))
110	D-4	—	*	ヘラナナ?	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	—	—	—	—	炭化物付着(内器面)
111	C-3	—	*	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	ナ	—	—	—	—	

第V章 赤坂遺跡の調査

第1節 遺跡の立地

赤坂遺跡は、宮崎郡清武町大字木原字赤坂に所在する。

清武川と加江田川に挟まれたところには、丘陵及び台地が西から東へ延びている。その丘陵及び台地間には、清武川の支流である田上川、熊野川が東流している。田上川と清武川に挟まれた丘陵は、標高70mほどで独立丘陵状を呈している。この丘陵上には、小面積ながら舌状の台地がある。清武川を望む丘陵の北裾一帯には河岸段丘が発達し、一方、田上川を望む南裾にも小規模ながら河岸段丘が形成されている。赤坂遺跡は、丘陵の南西裾に形成された河岸段丘上に立地している。

赤坂遺跡周辺の遺跡は、丘陵東端の舌状台地上に縄文早期の田上遺跡、縄文早期及び平安期の小山尻遺跡、丘陵上には小山尻石塔群、赤坂遺跡の北150mには縄文早期、前期及び平安期の下田畑遺跡がある。また、東流する田上川沿いには、上流に山内石塔群、下流には縄文早期、前期及び平安期の入料遺跡、旧石器～平安期の浦田遺跡、縄文～平安期の西ノ原遺跡が点在している。赤坂遺跡周辺には、縄文早期、平安期の遺跡が多く存在している。学園都市遺跡群内においても同時期の遺跡が多く存在し、同遺跡群の一つの特徴と言える。特に平安期の遺跡が多く存在することは、赤坂遺跡の東の熊野地区が「延喜式」に記された「教麻(クマ)」駅の推定地であり、注目される。

赤坂遺跡は河岸段丘上に立地するが、当遺跡の基本層序は、第一層表土(耕土)、第二層黒色土、第三層砂質褐色土、第四層アカホヤ、第五層灰褐色土…となっている。第三層は2次アカホヤで、赤坂遺跡では第三層から縄文後期～平安期の遺物が、第五層で縄文早期の遺物が出土している。

第2節 調査の経過及び概要

赤坂遺跡は、昭和54年の分布調査の際、土師器散布地として確認された。土師器の散布は河岸段丘上の畑の西半に密な傾向を示すが、ほぼ全域にみられた。調査は、畑全域を対象とし、昭和56年11月19日から昭和57年3月20日まで実施した。

耕土は重機で除去する。耕土下の黒色土の残りは悪く、調査区北半では、耕土下が砂質褐色土で、河岸段丘の縁辺にあたる南半に黒色土は残る。遺物は、第三層砂質褐色土層で平安時代のへら切りの土師器環、須恵器を中心に縄文時代後期及び古墳時代の遺物等が若干出土している。平安時代の遺物は調査区西半に集中し、その部分で古墳時代遺物が出土している。また、縄文時代後期の遺物は、調査区中央部で出土している。また、第五層灰褐色土においては、縄文早期の遺物が調査区南半で出土している。

遺構は、平安期の掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1基、縄文早期の集石遺構4基が検出されている。その他、時期不詳の溝状遺構、土壇、粘土等も検出されている。

第3節 調査の記録

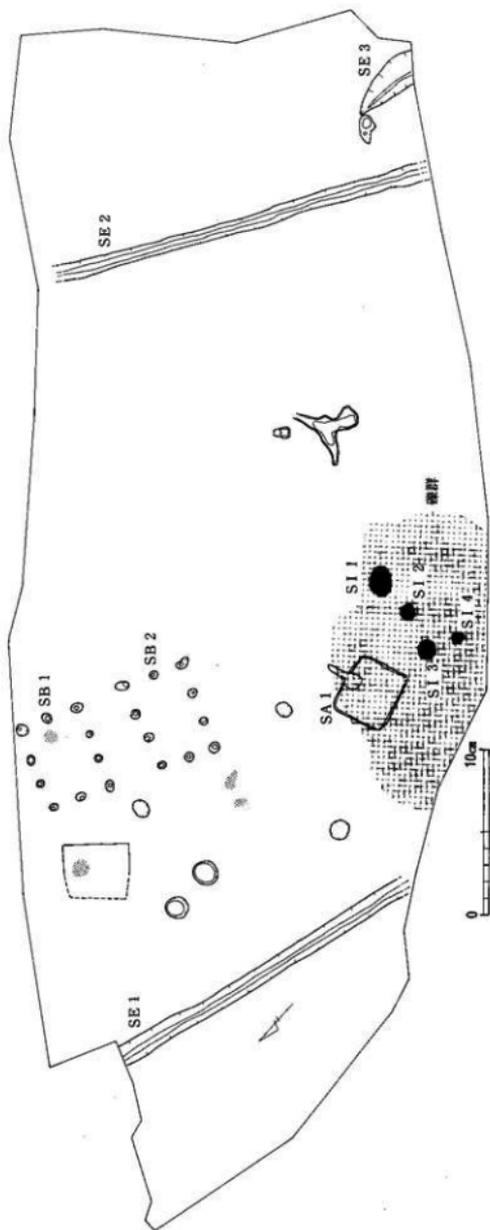
1. 縄文時代の遺構と遺物

遺構(第2・3図)

調査区南の第五層において、竪穴の焼けた角礫が長軸18m、短軸9mの範囲内に厚さ10cmほどの層をなしていた。礫群の中で特に礫が集中する部分があり、その下部から集石遺構4基が検出されている。集石遺構は、径1m前後の土塊を伴う。土塊内には焼けた角礫がつまり、埋土の中には木炭が含まれ、色調は黒褐色を呈している。集石遺構S I 2は、径1.1m、深さ20cmほどの円形の土塊を伴い、上層に竪穴の角礫がつまり、下部に長軸35cm、短軸12cmを最大とする河原石があり、配石されたものと考えられる。



第1図 周辺の地形図



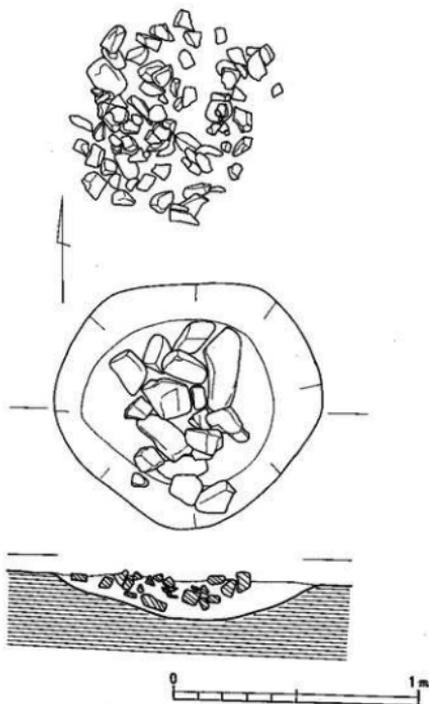
第2圖 遺構分布圖 (1/300)

遺物 (第5・6図)

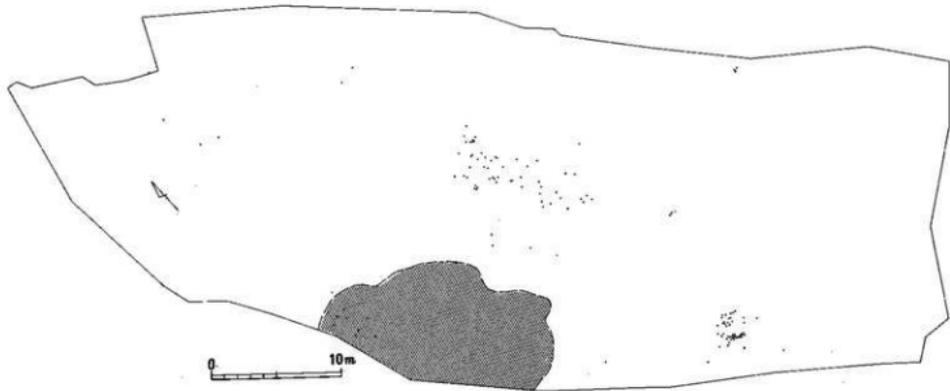
集石遺構が検出された第V層灰褐色土で遺物が出土している。礫群内では、底部、石鍬等が、その周囲では、撚糸文をもつ寒ノ神式、押型文土器などが出土している。また、集石遺構の東13mでは、貝殻文土器がまとまりをもって出土した。縄文後期の遺物は礫群の北において出土している。

早期の土器は、第5図1～8、11～13である。1・2は、集石遺構の北西13mで出土したもので、口縁部にヘラ様施文具でミミズバレ状の微隆起線文が施され、その下部に貝殻条痕文がみられる。3～5は貝殻条痕文土器で3はヨコナデにより先細りとなっている。12は、礫群内において出土したものであげ底となっている。

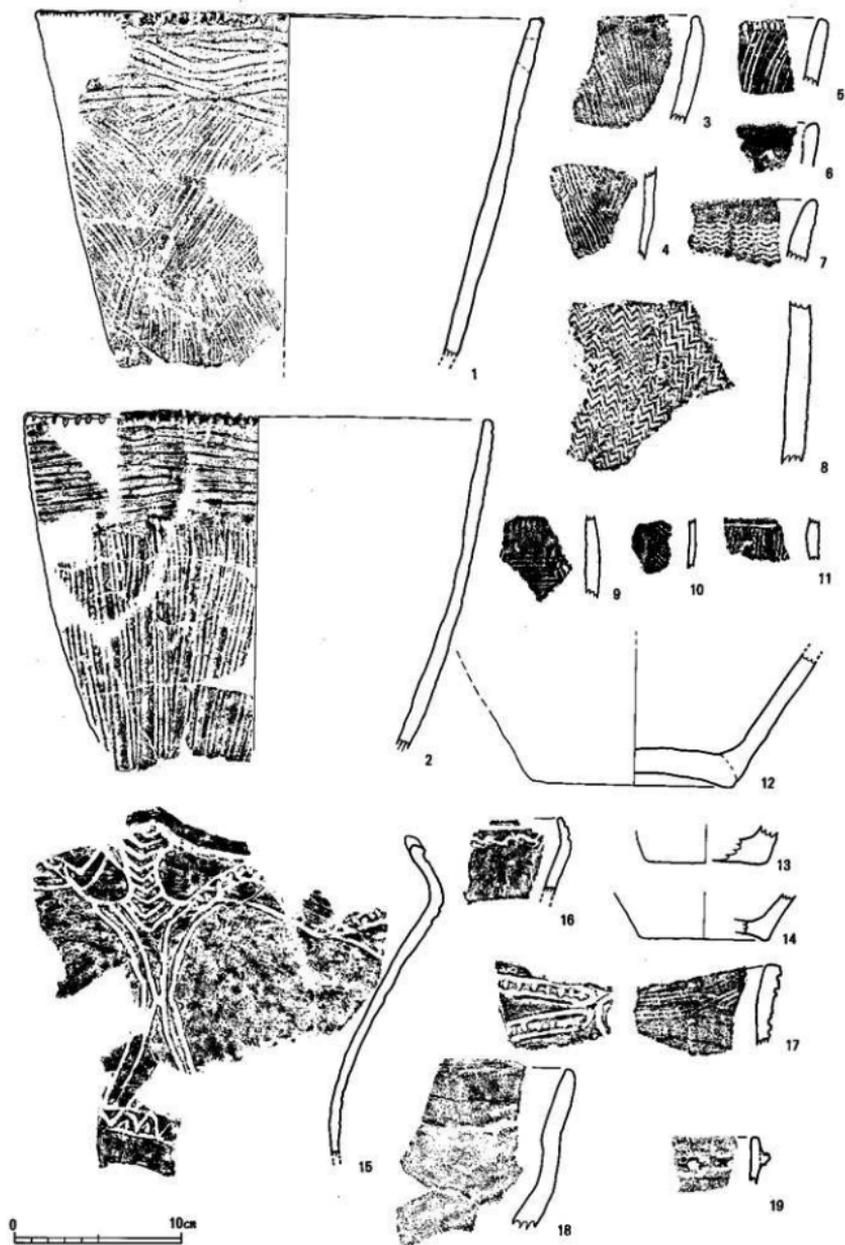
15はキャリバー状の器形で波状口縁をなす。赤褐色を呈し焼成良好な土器である。文様は口縁内傾部、波状口縁の頂部下位及び胴部中央部にヘラを施文具として、沈線文、刺突文、連続V字文、鋸歯文が施文されている。16も同様な口縁をなし、文様も類似している。14は15の底部と思われる。14～16は集石遺構の北で第3層砂質黄褐色土層で出土したもので県内では



第3図 SI 2実測図



第4図 縄文時代遺物分布状況図



第5图 縄文時代遺物実測図(1/3)

類例のない土器である。

17は、沈線文間に刺突文が施文され、後期のものである。18・19は晩期と思われるもので19は口縁部に刻目突帯をもっている。

石器は、石鏃（第6図1～4）、磨石（同図5）、打製石斧（同図6）、磨製石斧（同図8）が出土し、1～6が早期8は後期のものである。

2. 古墳時代の遺物（第6・7図）

古墳時代の遺物が、平安時代の遺物分布内で出土しているが、その量は少なく、また、遺構等は検出されていない。

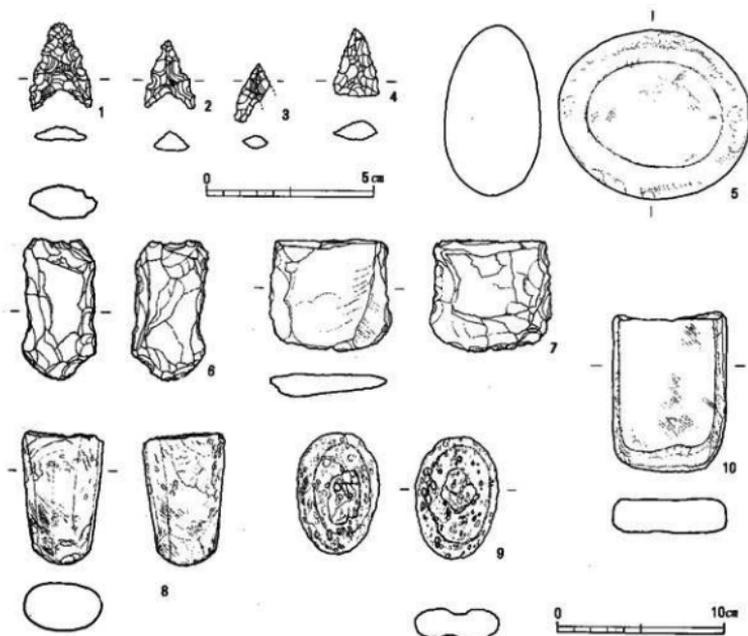
第7図1～5は、SA1・2間の西端部、平安時代遺物と同レベルの第Ⅲ層砂質褐色土で出土している。1は、口縁部が外上方にわずかに開き、最大径を胴中上位付近にもつ甕形土器である。2・3は高環で、3は坏下半部がほぼ水平で口縁部が開く。7は、SEIで出土したもので、刻目突帯をもつ甕の口縁部である。

第6図9の両面に凹みのある軽石製品、10の砥石はこの時期のものと思われる。

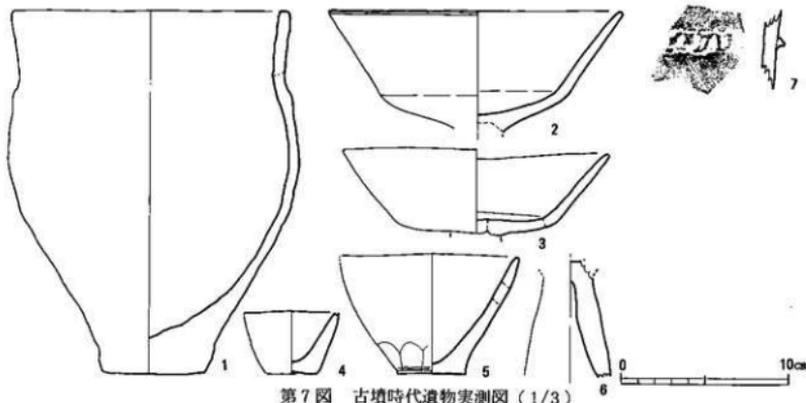
3. 平安時代の遺構と遺物

遺構（第2・9・10図）

検出された遺構は、竪穴住居跡1基（SA1）、掘立柱建物跡2棟（SB1・2）、である。掘立柱建物跡の北西2



第6図 石器実測図（1/3）



第7図 古墳時代遺物実測図(1/3)

mでは、西半のプランは確認されていないが、焼土を伴い、土師器環、甕などを出土する1辺4mほどの竪穴状遺構も検出されている。

SA1 (第9図)

平面形は方形で、長軸3.68m、短軸3.43m、床面積10.02㎡、壁高約21cmである。東壁中央部にカマドをもつ。カマドの本体は住居内にあり、馬蹄形に白色粘土で築かれている。火床幅は50cmほどで床面は5cmほど窪み、多量の焼土が堆積していた。煙道は住居外にあり、長さ1.5m、幅0.45mに掘られた土境内に白色の粘土で造られている。煙道の床は東へ向って低くなり、その東端にはスス溜めと考えられる掘り込みをもつ。柱穴は確認されていない。

遺物は、カマド周辺、カマド内及びスス溜め部で出土している。カマドの南70cmのところでは、内底に「大」の字がへら書きされた土師器環が出土している。

SB1 (第10図)

調査区西の北縁で検出された。3間×2間の独立柱建物で、規模は、5.18m×3.63mを有し、棟方向はN115.5°Eである。柱穴の径は50cm～85cm、深さ40～85cmの間である。柱穴は第Ⅲ層砂質褐色土層面で確認され、柱穴の埋土は、上部が硬質の暗褐色土、下部で黄褐色土となっている。東梁間中央のP9から40cmほど離れたところに、長径約80cm、短径65cmの楕円状を呈する焼土がみられた。焼土は、硬質の黄褐色土を床面とする土境内に3層にわたって堆積している。

遺物は、P6から須恵器片(第15図102)が出土しているが、この須恵器片は、南14mに位置するSA1出土のものと同接している。また、P5・P7からは土鍾が出土し、焼土内からは土師器片が出土している。

SB2 (第10図)

SB1の南約2.8mの位置で検出された。3間×2間の独立柱建物で、規模は5.37m×3.52mを有し、棟方向はN116°Eである。柱穴の径は50cm～75cm、深さは45cm～85cmの間である。

遺物(第11～15図)

出土した遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、土鍾などが出土している。

壺形土器は、口縁部が内彎ぎみに立ち上がる第11図2・3以外は、口縁部が「く」の字形に大きく外反している。

「く」の字形に外反する甕は、口径より20cmを境に2つに大別され、また、体部より、口縁部に最大径をもつもの（9, 10, 12, 27, 28, 等）口縁部径と体部最大径が同じもの（1, 11, 22 等）、最大径を体部にもつもの（5, 15, 23, 31等）の3つに分類される。坏は、いずれも底部へラ切りで、高台のつくものが数点ある。坏の法量は、大部分が口径13cm、器高4cm前後におさまる。皿は、口径14cm前後のもの13cm前後のものがあり、68は高台付皿である。70~75は内黒土師器である。体部は内燻して立ち上がり、調整はヘラミガキである。76~83は布痕土器で口縁端部は外傾し、口径は15cm前後である。84は緑釉陶器で体部径9cmを測る。

85~112は須恵器である。器種は、坏、甕、壺などがあるが、その量は少ない。87~89は坏で口縁部がわずかに外反する。96は大甕の口縁部でヘラ描による波状文がみられる。

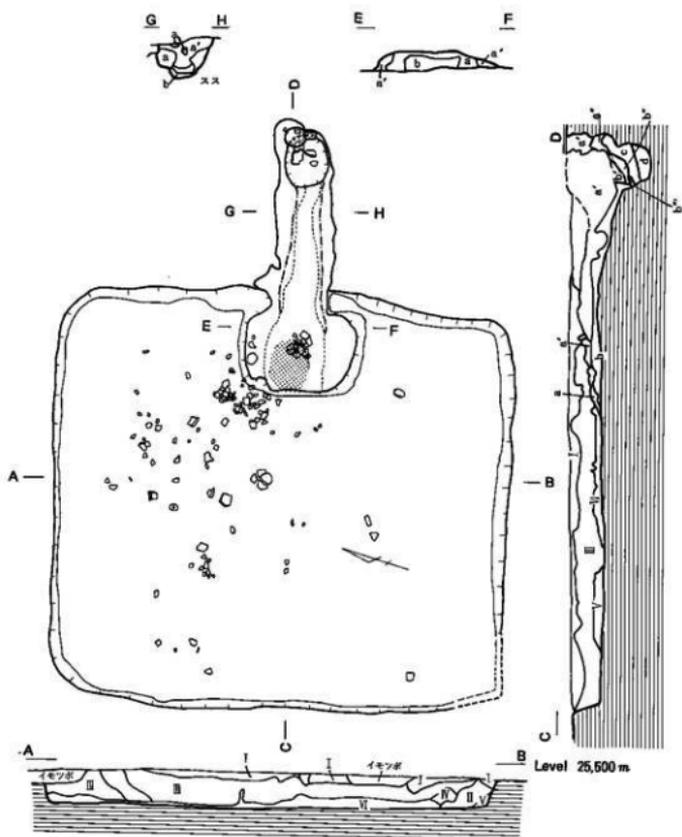
4. その他

時期不詳ではあるが、調査区東西で溝状遺構3条（SE1~3）及び土壌などが検出されている。SE1は、調査区の西縁を南北方向にほぼ直線をなして走る溝で、断面逆台形状をなし、上幅1.3m~1.5m、底幅30cmほどを測る。溝の掘られた第Ⅲ層は砂質の軟弱な土質であり、溝の断面形から、本来は上幅50cmほどの断面「U」字形の断面をもつ溝でなかったかと推測される。溝の埋土は、黄灰色の砂層などがレンズ状堆積しており、自然埋土であることを示している。遺物は、古墳時代の刻目突帯をもつ甕の口縁部、土師器坏などが出土している。

SE2は、調査区の東をほぼ南北に走る溝で、断面「U」字形をなし、上幅80cm、底幅30cmほどを測る。溝の底面のレベルは南へ急な傾斜となっている。溝の南端付近の埋土は、下部に鉄分の薄い層を数層含む砂層があり、この砂層から磨滅の著しい須恵器片が出土している。SE1でみられた黄灰色の砂層は、溝北部においてレンズ状に堆積している。

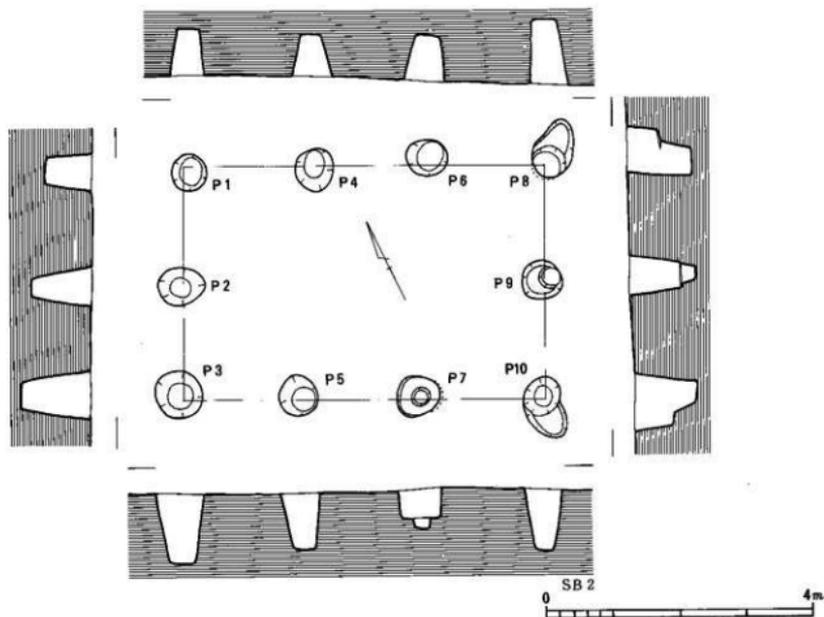
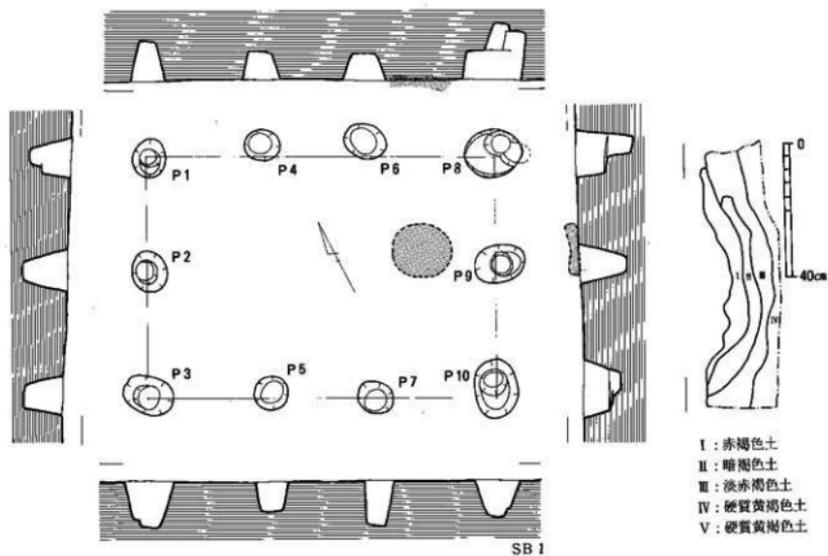
土壌は、調査区の西で5基検出している。径1m~1.5mを測る。土壌内から土器等は出土していない、竪穴住居跡の西6mで検出された土壌は径1.1m、深さ約15cmである。土壌内からは多量の木炭が出土している。



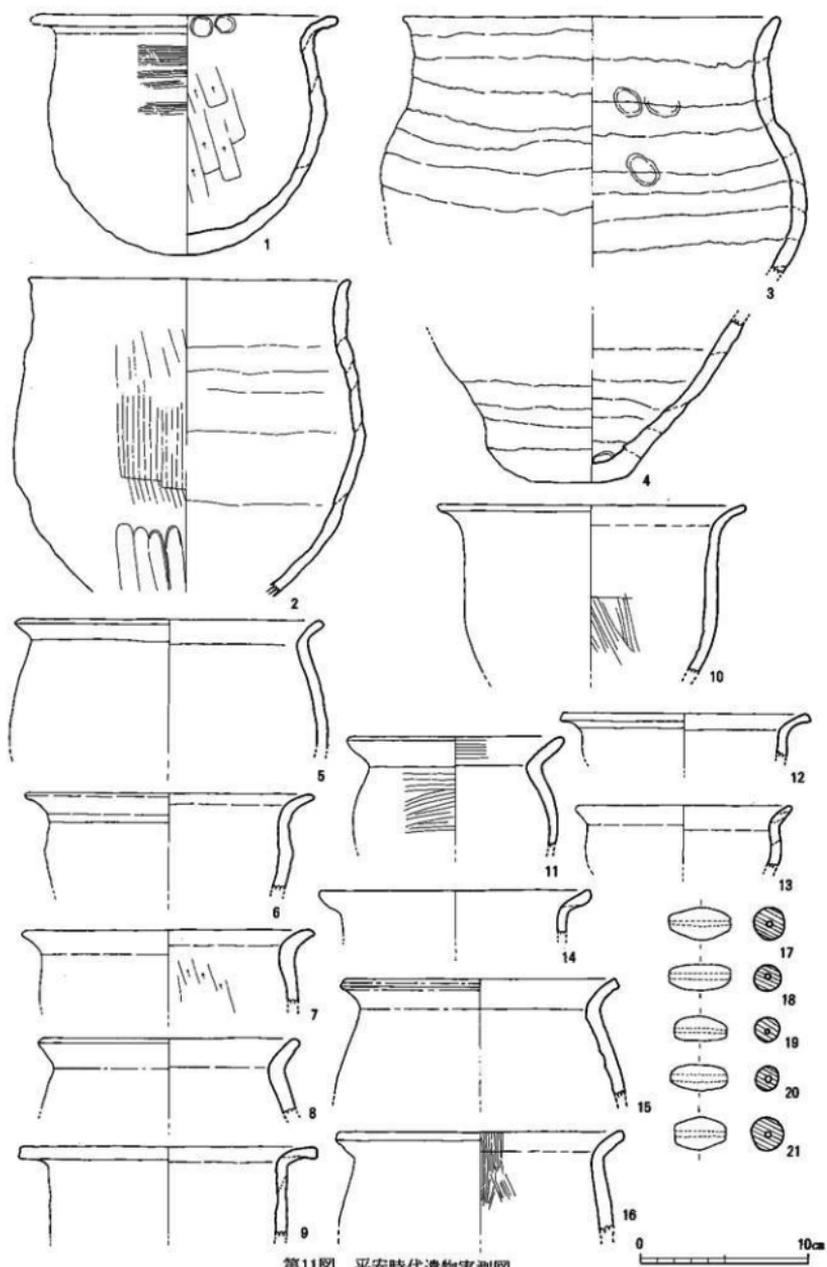


- | | |
|----------------------------|------------------|
| a : 粘土 | I : アカホヤを含む軟質褐色土 |
| a' : わずかに粘土を含む褐色土 | II : 暗褐色土 (やや硬い) |
| a'' : 粘土 (aよりわずかに粘土分が少くない) | III : やや硬質の褐色土 |
| b : ススを含む赤褐色焼土 | IV : 軟質暗褐色土 |
| b' : 淡褐色焼土 | V : 硬質灰褐色土 |
| b'' : 赤褐色焼土 | VI : 硬質褐色土 |
| b''' : 明褐色土塊を含む赤褐色焼土 | |
| c : 黒褐色スス | |
| d : 赤褐色土 (スス, 灰?) | |

第9図 SA 1 実測図

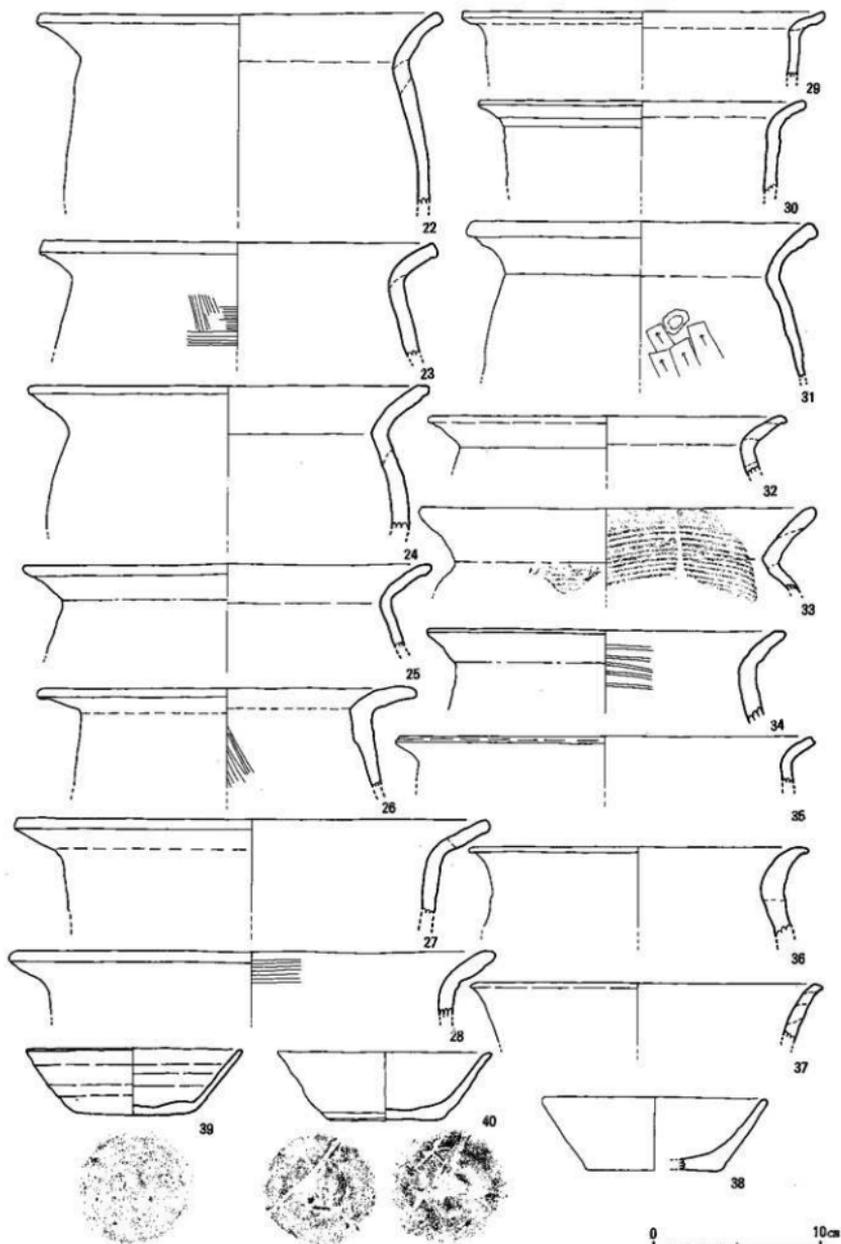


第10图 SB 1.2 实测图

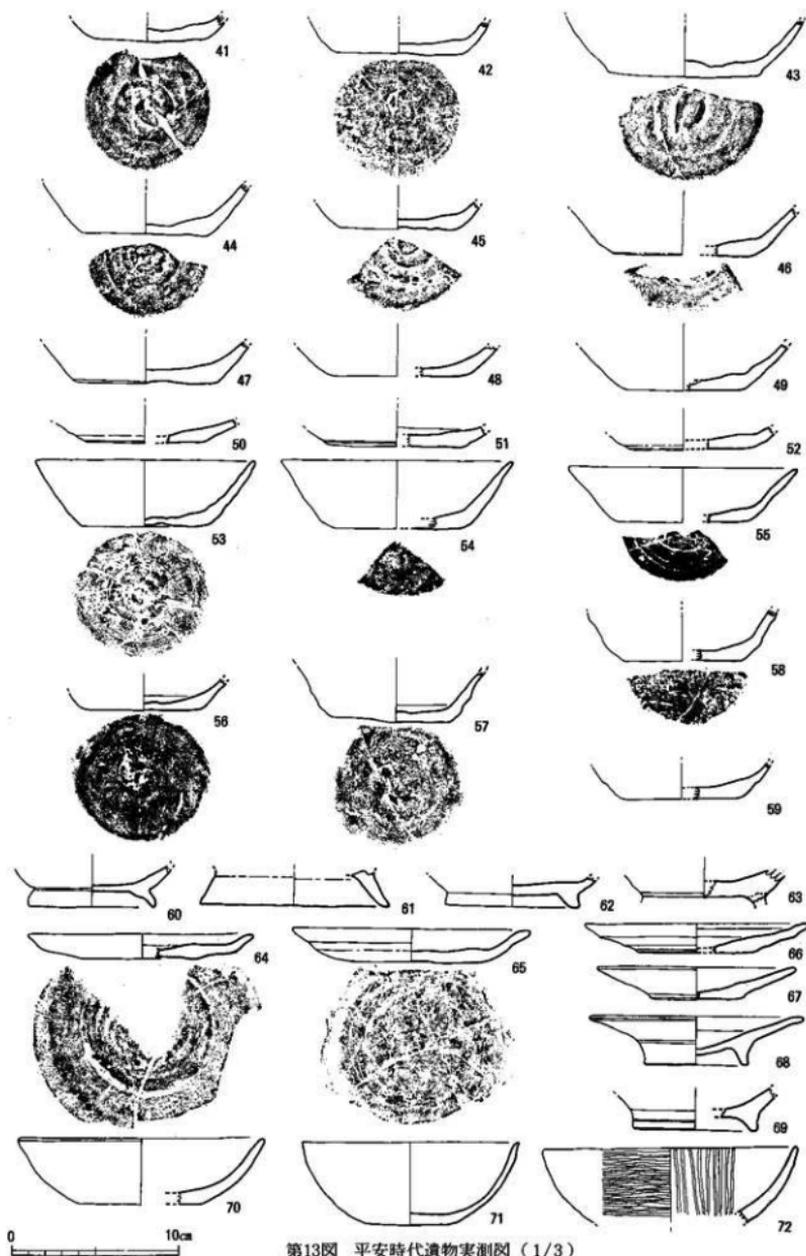


第11图 平安时代遗物实测图

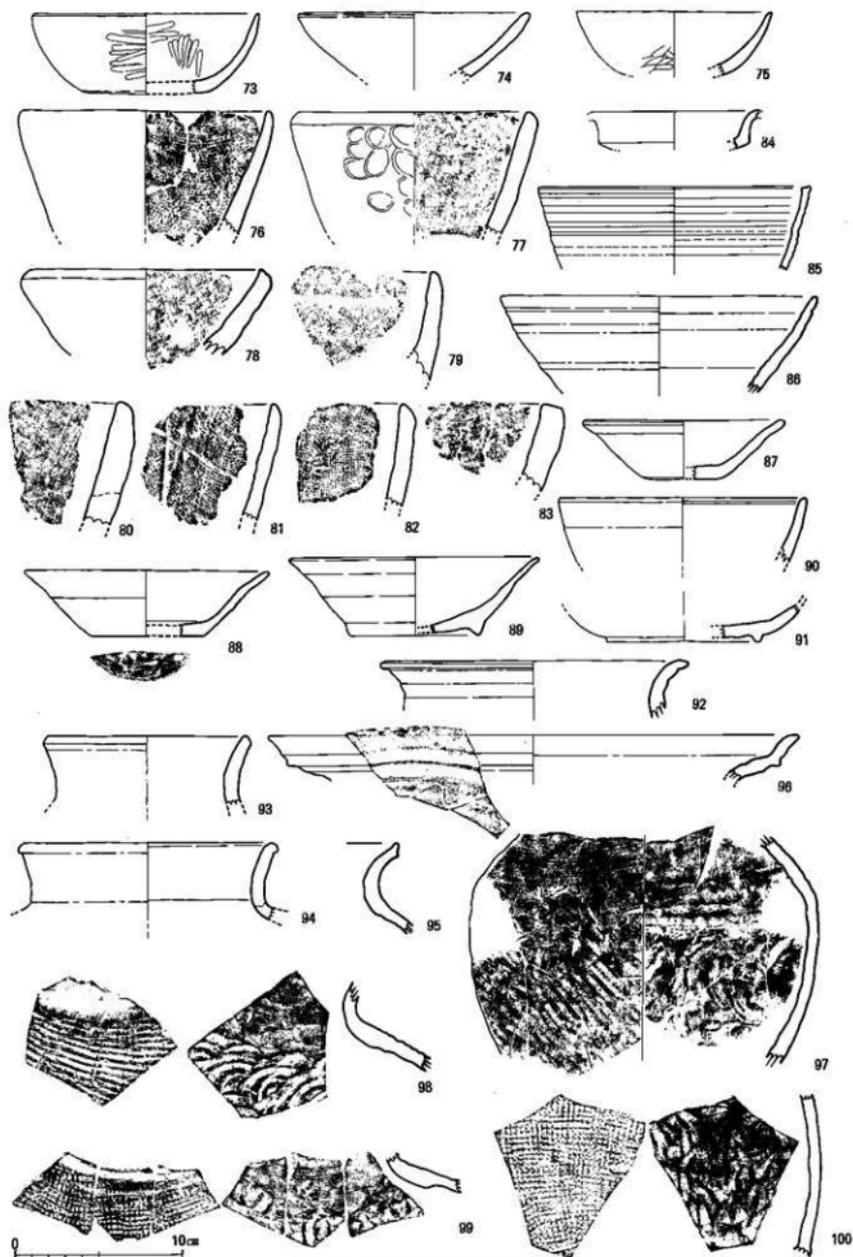
0 10cm



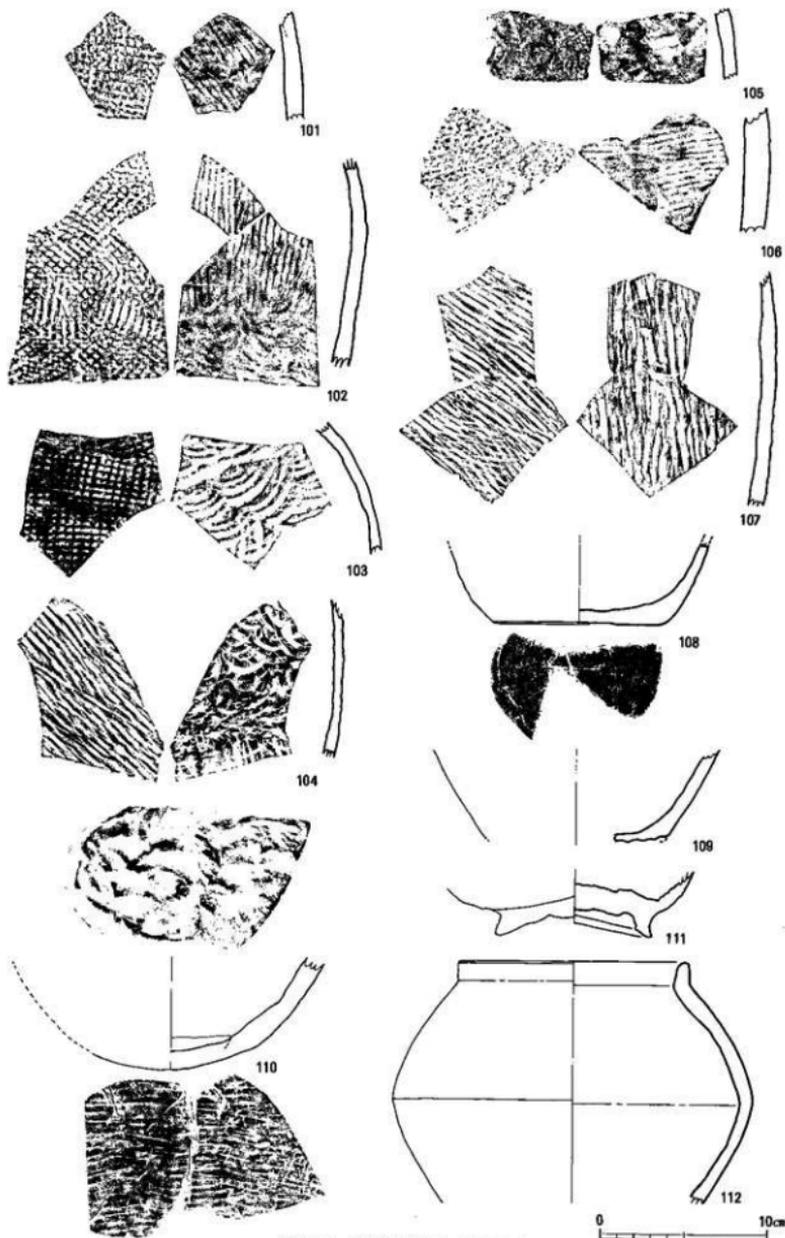
第12図 平安時代遺物実測図(1/3)



第13図 平安時代遺物実測図 (1/3)



第14图 平安時代遺物実測图 (1/3)

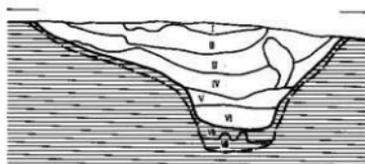


第15图 平安時代遺物実測図 (1/3)

第4節 まとめ

赤坂遺跡の調査より検出された遺構は、縄文早期の集石遺構及び礫群、平安時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡である。遺物は、この遺構に伴うもの他、縄文後期及び古墳初頭の遺物等が出土している。

集石遺構に伴う遺物は、山形押型文、燃糸文をもつ塞ノ神式が出土しているの



- I : 砂混炭黒色土
- II : 黄灰色砂層
- III : やや褐色味おびる黒色土
- IV : 褐色土を含む暗黒褐色土
- V : 褐色土
- VI : 黒褐色土 (黒色土混、半々)
- VII : 砂質褐色土 (自然層)
- VIII : 灰褐色土 (自然層)



第16図 SE 1 土層実測図

で、集石遺構は縄文早期後半のものとして推定される。この他集石遺構が検出された第V層の灰褐色土層で集石遺構の南東13mほどの位置で口唇部に刻みをもち、口縁部にミズバネ状の微隆起線文、その下部に貝殻条痕文をもつ土器⁽¹⁾が出土している。県内でこれに類似する資料は、清武町若宮田遺跡で押型文、吉田式、貝殻条痕文の塞ノ神式とともに出土している。若宮田出土の土器は、内面の調整に貝殻を使用し、ミズバネ状微隆起線文は貼り付けであるなど手法は異なるが、口唇部や胴部の文様及び文様帯は類似している。赤坂遺跡出土の土器は、当遺跡の第V層灰褐色土層で早期のその他の時期の土器が出土していないので、縄文早期後半のものと考えられる。

集石遺構は、長径18mほどの楕円状に分布する礫群の下部から検出され、その周囲からは検出されていない。礫群下において集石遺構の検出例は、新富町藤掛遺跡⁽²⁾、田野町芳ヶ追第1遺跡⁽³⁾などである。集石遺構は、礫群を伴わないものも県内各地で発見されているが、面的に調査された例をみると、これらはいくつかにグルーピングができる。芳ヶ追第1遺跡では、礫群が4群検出され、そのうちの1群からは集石遺構が検出され、また、礫群の周囲からも集石遺構が検出されている。その中で集石遺構の分布が粗になる地区においては土器やチップが多数出土しており、赤坂遺跡で見られる集石遺構とその東13mほどでの土器の出土状態に似ている。こうした例は、まだ少ないが、集石遺構の使用空間と日常生活空間とは区分されていたとも考えられる。

平安時代の遺構に伴う遺物は、須恵器、土師器、経軸陶器が出土している。須恵器は壺、壺、壺などが出土し、壺は肩の張らないタイプで、底部は端部が広がる高台付ものか出土している。土師器には、壺、杯、皿などあり、杯は全て底部切り離し手法がへう切りで、皿は太宰府出土の9～10世紀の高台付皿に類似している。壺は、口縁部が内彎ぎりに立ち上がるものや「く」の字形に外反あるいは屈曲するものがある。口径より小型と中型に分類され、また体部の張りによっても細分ができる。壺にみられる形態差は、単に壺のバリエーションな時期差を示すものなのかは判断できないが、赤坂遺跡出土の平安期の遺物は、平安中ごろとみて大過ないだろうと思われる。

掘立柱建物は3間×2間のものが2棟検出されている。この2棟の規模は、5.2m×3.6mで棟方向も同じ方向であることから、併存していたものと思われる。SB1の東半には、中央が窪む焼土がみられたが、このような例は、赤坂遺跡の北150mに位置する下田畑遺跡でもみられ、焼土はSB1に伴うものと考えられる。

調査区の東西で検出された溝状遺構からは、古墳時代の刻目突帯をもつ頭部や、土師器、須恵器が出土している。溝の埋土の上層にのる黄灰色の砂層は、15世紀後半、文明期の火山灰と言われる。この砂層は、堂地東遺跡でも溝状遺構の埋土でみられ、砂層の上の層からは、備前第V期の摺鉢が出土している。溝状遺構の時期については、砂層の存在から、平安期まで上げることは困難である。

(註)

1. 清武町教育委員会「若宮田遺跡」1980年
2. 新富町教育委員会「藤掛遺跡」新富町文化財調査報告書第2集、1983年
3. 田野町教育委員会「芳ヶ迫第1遺跡」田野町文化財調査報告書第1集、1984年
4. 横田賢次郎、森田 勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集2、1976年

(面高 哲郎)

表1 土器観察表

図番	通物番号	器形	器 名		文 様		胎 土		色 調		備 考
			外 形	内 容	外 形	内 容	外 形	内 容	外 形	内 容	
第5区	1	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着、底欠
	2	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	底、底欠
	3	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	4	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	5	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	6	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	7	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	8	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	9	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	10	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	11	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	12	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	13	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	14	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	15	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	16	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	17	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	18	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	
	19	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	

図番	通物番号	器形	器 名		胎 土		色 調		備 考		
			外 形	内 容	外 形	内 容	外 形	内 容			
第7区	1	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	2	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	3	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	4	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	5	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	6	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着
	7	浅鉢	口縁部	ナ	ナ	口縁部、胎土 剥離、ヒズレ欠損	1-2mmの石英、1-3mmの炭粉・砂粒を含む	黄	赤い黄褐色	良好	外、スス付着

図面番号	建 物 名	建物番号	区 画	区 画		地 区		土 地	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
第11区	1	1	1	口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	2-20mの屋根を含む	
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-19mの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	不 鋼	鋼 骨	3-3mmの屋根を含む	4と同一体 外周部部入付壁
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	不 鋼	鋼 骨	3-3mmの屋根を含む	2と同一体 内周部部入付壁
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	不 鋼	鋼 骨	2-6mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	2-3mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	2-3mmの屋根を含む	外周部部入付壁 内周部部入付壁
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	様・優先
第12区	SA.1	22	22	口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先

図面番号	建 物 名	建物番号	区 画	区 画		地 区		土 地	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		
第12区	27	27	27	ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	不 鋼	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-4mmの屋根を含む	大入付壁 様・優先
				ココナデ	ココナデ	不 鋼	鋼 骨	3-6mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	外周部部入付壁 内周部部入付壁
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				ココナデ	ココナデ	真 鉄	鋼 骨	0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
				第13区	76	76	76	物押上	物押上
物押上(一部分別)	物押上(一部分別)	真 鉄	鋼 骨					0.5mmの屋根を含む	様・優先
物押上	物押上	真 鉄	鋼 骨					3-6mmの屋根を含む	様・優先
物押上	物押上(風化)	真 鉄	鋼 骨					高層部、高圧、石炭を含む	1-3mmの屋根を含む
物押上	物押上	真 鉄	鋼 骨					0.5-5mmの屋根を含む	様・優先
物押上	物押上	真 鉄	鋼 骨					1-6mmの屋根を含む	様・優先
物押上	物押上	真 鉄	鋼 骨					1-3mmの屋根を含む	高層部を含む
物押上(風化)	物押上(風化)	真 鉄	鋼 骨					1-5mmの屋根を含む	様・優先
第14区	90	90	90	口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	真 鉄	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	
				口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	不 鋼	鋼 骨	1-3mmの屋根を含む	

図面番号	適用区	建物番号	種別	区別		構成	色別		給上	備考		
				外	内		外	内				
第14区	*	94	電	口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	中中積	黒 (2.5YR 5/6)	黒 (2.5YR 5/6)				
		95	*	口線部-ココナデ 部-平行タタキ	口線部-ココナデ 部-同心円タタキ部分のみナゲ	良好	黒 (N)	黒 (2.5Y 5)				
		96	*	口線部-ココナデ	口線部-ココナデ	*	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)		一般仕様 一部は標準工 品同種		
		97	*	部-ココナデ 部-縦方向の平行タタキ	部-ココナデ 部-ココナデ部分的に斜方向のナゲ	不良	黒 (2.5YR 5)	黒 (2.5YR 5)				
		98	塗	部-ココナデ 部-格子目タタキ	部-ココナデ 部-同心円タタキ	良好	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)				
		99	塗	部-ココナデ 部-縦かい格子目タタキ	部-ココナデ 部-同心円タタキ	*	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)				
		100	塗	部-縦かい格子目タタキ	部-同心円タタキ	*	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)				
		第12区	実測分	101	*	部-縦かい格子目タタキ	部-平行タタキの後部分にナゲ	*	灰黄 (2.5YR 5)	灰黄 (2.5YR 5)		
				102	*	部-縦かい格子目タタキ	部-平行タタキの後部分にナゲ	*	灰黄 (2.5YR 5)	灰黄 (2.5YR 5)		
				103	*	部-縦かい格子目タタキの後部分的にナゲ	部-同心円タタキ	*	灰黄 (2.5YR 5)	灰黄 (2.5YR 5)		
104	*			部-平行タタキのみナゲ	部-同心円タタキの後部分にナゲ	*	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)				
*	実測分	105	*	部-縦かい格子目タタキ	部-同心円タタキの後部分にナゲ	中中積	灰黄 (2.5YR 5)	灰黄 (2.5YR 5)				
		106	*	部-縦かい格子目タタキ	部-平行タタキ	*	黒 (10YR 5/6) 黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5/6) 黒 (10YR 5)				
		107	*	部-平行タタキ	部-平行タタキ	良好	黒 (10YR 5/6) 黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5/6) 黒 (10YR 5)				
		108	塗	部-ココナデ 部-ナゲ	部-ココナデ 部-ココナデの格子目ナゲ上げ	*	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)		「中」部のみ分注		
*	SA1	109	*	部-ココナデ 部-縦かい格子目タタキ	ココナデ	不良	灰黄 (2.5Y 5)	灰黄 (2.5Y 5)				
		110	塗	部-平行タタキ	部-同心円タタキの後部分にナゲ	*	黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5)				
		111	塗	部-ココナデ 部-ナゲ	ココナデ	良好	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)		黒色部 目立易しい		
*	SA1	112	*	口線部-ココナデ 部-ココナデ	口線部-ココナデ 部-ココナデ	中中積	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)	黒 (10YR 5) 黒 (10YR 5)				

図面番号	No	適用区	種別	色別	区別		構成	色別		給上	備考								
					内	外		内	外										
第14区	99	*	縦格子目	14.5	7.6	4.7	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	*	*	*	*							
													10.5	7.6	4.7	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)
													10.5	7.6	4.7	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)
*	91	*	高台目 縦格子目	9.2	5.2	3.2	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	*	*	*	*							
													10.5	7.6	4.7	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)	黒 (2.5Y 5)

図面番号	No.	種	材	形	種	法		色		調	防	土	成		調		製	備	考					
						口	口	内	外				内	外	内	外								
第13回	38			円		13.4	6.6			にぶい焼 (5.Y.R.)	にぶい焼 (5.Y.R.)	0.5mm以下の石英多量	良好	ココナゲ	ココナゲ				へら切り					
	39					12.8	6.8	4.15		焼 (5.Y.R.)	焼 (5.Y.R.)	0.5mm以下の石英・雲母 (黒) 多量	*	*	風	化		縦割内面に「丸」のヘラゴト	*					
	40					13.5	7.8	6.4		にぶい焼 (5.Y.R.)	にぶい焼 (5.Y.R.)	0.5-1mm以下の石英多量 1-2mmの砂粒少量	*	*	ココナゲ					*				
第13回	41					7.2				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英・雲母 (黒) を含む	*	ナ	ナ	ナ								
	42					7.05				にぶい焼 (2.5.Y.R.)	にぶい焼 (2.5.Y.R.)	細砂粒を含む	*	ココナゲ	ココナゲ									
	43					9.0				にぶい焼 (2.5.Y.R.)	にぶい焼 (2.5.Y.R.)	0.5-1mmの砂粒を含む	*	*	*	*				径、横光	へら切り			
	44					7.4				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	細砂粒を含む	*	*	*	*					径、横光			
	45					6.8				赤 (2.5.Y.R.)	赤 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英と細砂粒を含む	*	*	*	*						径、横光		
	46					8.3				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm以下の細砂粒を含む	*	*	*	*						径、横光		
	47					8.7				焼 (2.5.Y.R.)	焼 (2.5.Y.R.)	0.5-1mmの石英・砂粒を多く含む	*	風	化	風	化					径、横光	(7)	
	48					8.2				にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	1mm前後の雲母(黒)・石英を含む	*	*	*	*						径、横光	(7)	
	49					7.4				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm以下の石英・雲母(黒) を含む	*	*	*	*						径、横光	*	
	50					7.2				焼 (5.Y.R.)	焼 (5.Y.R.)	1mm以下の石英・雲母(黒) と1-2mmの砂粒多量含む	*	*	*	*						径、横光	風、光	
51					8.4				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5-2mmの砂粒多量含む	*	ココナゲ	ココナゲ								径、横光	へら切り(?)	
52					7.25				焼 (5.Y.R.)	焼 (5.Y.R.)	0.5-1mmの石英・石英・雲母(黒)を少し、砂粒を多く含む	*	風	化	風	化						縦割(黒)染、横光	へら切り	
53				円	12.0	7.5	4.0		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm以下の石英を含む	*	ココナゲ	ココナゲ								径、横光	へら切り	
54					13.7	7.2	4.1		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1-2mmの砂粒を含む	*	ココナゲ	ココナゲ									径、横光	風、光
55					13.5	7.95	3.25		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英を含む	*	ココナゲ	ココナゲ									径、横光	へら切り
56					7.5				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英と、1-2mmの砂粒を含む	*	風	化	風	化								径、横光
57					6.4				にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英多量	*	*	*	*								径、横光	
58					7.0				焼 (2.5.Y.R.)	焼 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英を含む	*	ココナゲ	ココナゲ									径、横光	*

図面番号	No.	種	材	形	種	法		色		調	防	土	成		調		製	備	考					
						口	口	内	外				内	外	内	外								
第13回	60				高台					赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の石英 1-2mmの砂粒を含む	良好	風	化	ココナゲ				径、横光				
	61					13.2				にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	0.5-1mmの石英・雲母 (黒) 多量	*	ココナゲ	*						径、横光			
	62					8.0				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm前後の石英と、1-3mmの砂粒を含む	*	ナ	ナ	ナ					径、横光			
	63									にぶい焼 (2.5.Y.R.)	にぶい焼 (2.5.Y.R.)	0.5-1mmの石英・雲母 (黒) を含む	*	風	化	ココナゲ						径、横光		
	64				圓	12.0	6.5	1.45		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm前後の石英・石英 1-2mmの砂粒多量	*	*	風	化						径、横光	へら切り	
	65					14.1	8.5	2.0		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5mmの砂粒を含む	*	ココナゲ	*								径、横光	
	66					13.1	7.2	3.0		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	0.5-2mmの砂粒多量 0.5mm以下の石英多量を含む	*	風	化	ココナゲ							径、横光	*
	67					11.6	5.5	1.90		赤 (2.5.Y.R.)	赤 (2.5.Y.R.)	1mm前後の石英、1-2mmの砂粒多量	*	*	風	化							径、横光	
	68				高台付圓	12.6	6.2	2.80		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)	1mm以下の雲母(黒)・石英多量	*	并製?	ココナゲ								径、横光	
	69				高台		7.4				にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	にぶい焼色 (2.5.Y.R.)	0.5mm以下の雲母(黒)・石英多量	*	ヘラヒキ	ココナゲ							内、縦割、横光	
70				高台付圓	14.4	7.0	3.95		赤 (2.5.Y.R.)	赤 (2.5.Y.R.)	1mm以下の石英多量	*	*	ヘラヒキ							径、横光			
71					12.8	5.2	5.0		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光		
72					15.0				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光		
第14回	73					12.3	7.45	4.80		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*						径、横光		
	74					13.5				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光	
	75					11.5				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光	
	76				縁飾圓	2.1				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	ココナゲ	ココナゲ							径、横光	
	77				縁飾圓	16.1				にぶい焼 (2.5.Y.R.)	にぶい焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光	
	78					16.5				赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光	
79					11.6	4.4	2.55		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光		
80					14.3	6.5	3.9		赤黄焼 (2.5.Y.R.)	赤黄焼 (2.5.Y.R.)		*	*	*	*							径、横光		

第VI章 小山尻西遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と環境

小山尻西遺跡は、清武川と加江田川に挟まれた南北丘陵の北側丘陵中にある。北丘陵を形成する三つの頂部のうち、もっとも低い標高約42mの頂部に位置し、東方向眼下に小山尻東遺跡、田上遺跡を眺め、はるか西南西の方向には山内石塔群が遠望できる。

大乗妙典供養塚は、この標高約42mの頂部が東側の次の小高い頂部へと続く橋梁状の地形の東端部にあり、塚の北側、南側は深い谷となっている。

第2節 調査の方法

板碑の遺立されている河原石で葺かれた盛土部は、東西1.2m×90cm、1.5m×50cm、南北3.4m×80cmの3ヶ所にトレンチを入れ、板碑が挿入されている基部を中心に河原石を取り去った。盛土部分より北東35mの平坦部にN1トレンチを東西12m×3.4m、13m×4m、南北8m×2mの3ヶ所に入れた。切株が多く不定形のトレンチとなった。盛土部分より南西40mの平坦部に十字型にS2トレンチを入れた。東西10m×1.5m、南北28m×1.5mである。

第3節 遺構と遺物

本遺跡では、遺構として大乗妙典供養塚をあげることができる。板碑の立っている小丘は地山を約40cm盛り上げた層(Ⅲ層)とその上層の丸礫を含んだ約30cmの層よりなっている。(第1図参照)丸礫は径3~5cm内外の比較的形状のそろった扁平な河原石で盛土最頂部で最高の堆積幅平均30cmをもちながら、周辺にゆくにしたがって、徐々にその堆積幅を狭めてゆき、末端部に至ってはほとんど表層面に散乱する。分布の範囲は、盛土最頂部、大乗妙典供養塚碑付近を中心として南北およそ6.5m、東西4.5mの楕円形に広がる。板碑を遺立する際、この30cmにも及ぶ河原石の層は、碑の安定に十分な効果をもたらしたと思われ、実際土壌と混じりあった河原石は基部をきつく圧迫して、掘り出すのにかなりの時間を要した。厚く盛土を被ったその景観は、古墳における墓石をみるようであり、同じような効果をねらったことを思わせる。又、河原石の多くが扁平な丸礫であるため、一字一石経の埋納が考えられたが、墨書石の埋納、散乱をみることはできなかった。

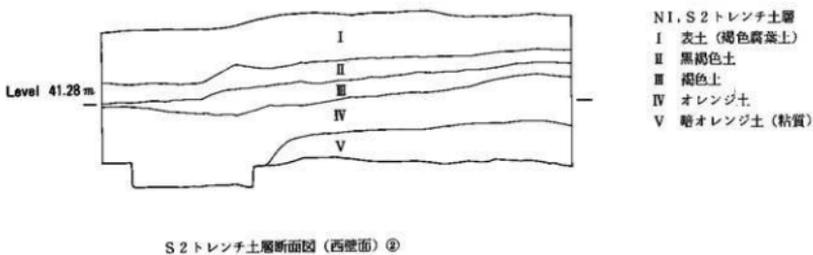
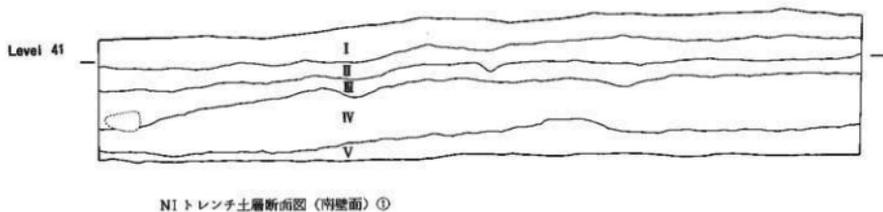
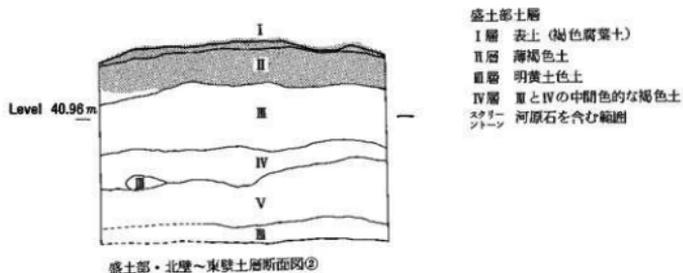
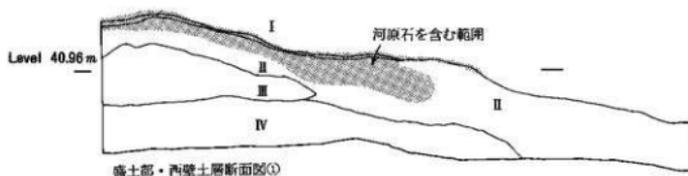
遺物

大乗妙典供養塚上より4基の板碑と塚を覆う河原石の表面上から一点の罫、素焼き土器と思われる数点の小破片が出土している。まず板碑について第4図にそって解説したい。

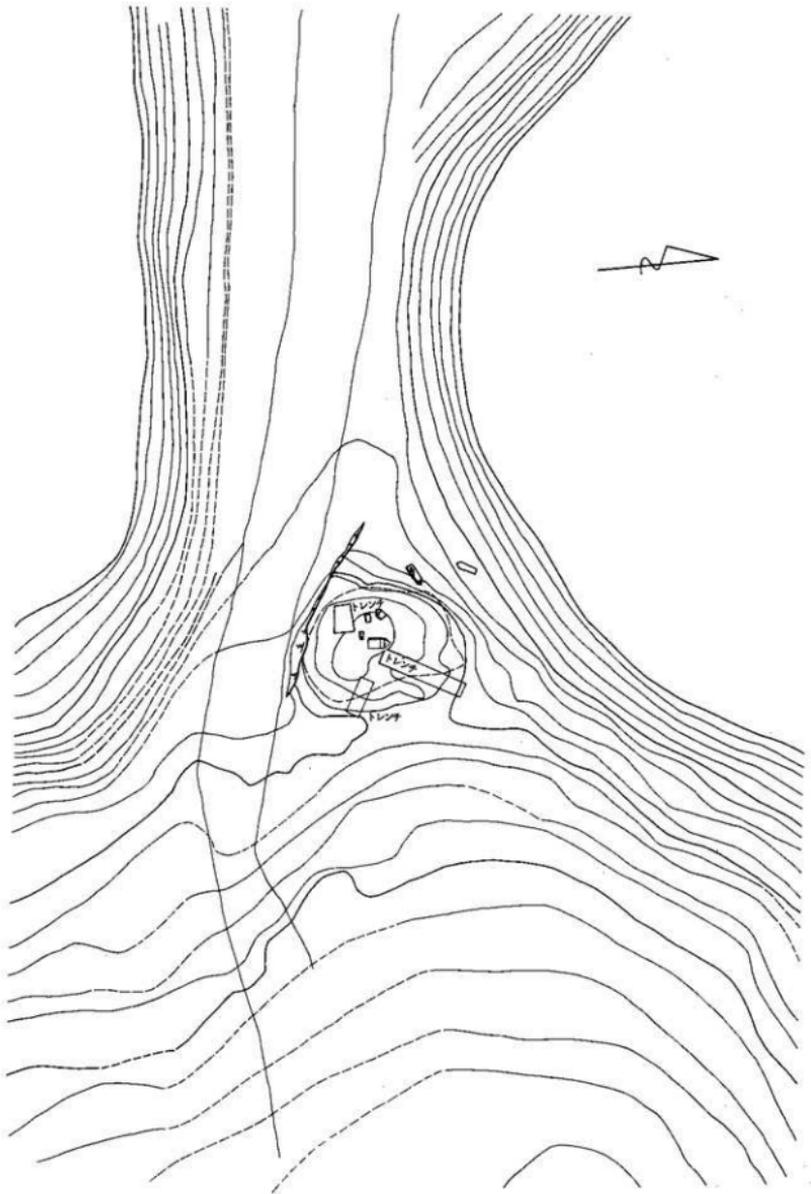
I 板碑(第4図I, 第5図)

Iは盛土のほぼ中心に位置し、北に傾いている。全高160.5cm(うち地中に36.0cm)、幅32.7cm(塔身部中央)、33.2cm(塔身部下部)、38.4cm(基部)、厚さ21.8cmを測る。これは小山尻西遺跡板碑のなかで、最も大型で完全な状態で観察できる唯一のものである。形状は全体に最も一般的なもので、頭部は正面観が底辺(羽込部上段)の二角でそれぞれ55度を測る三角形を呈し、平面観では、四方から緩線が直線的に一点に集まる四角錐形を呈する。ただし、四方から集まる緩線の中心は碑の中心軸よりやや前方にある。

板碑の形状の最も特徴的部分である羽込部は、一般的な形状であるところの二条の切り込みを斜方向に彫り出す方式からは、大きく逸脱しないものの独特の形状をもっている。それは切り込みが単に段をつけただけでなく、さらに深く沈線を刻することによって、各段をより明瞭に表現していることである。一段目の羽込みは3.5cm、二段目は3.0



第1図 土層断面図

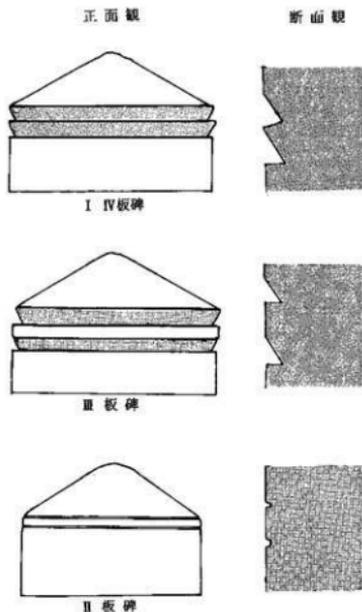


第2圖 大乘妙典供養碑塚周辺地形図

0 5m

cm、沈線は0.2cmを測る。羽込部から額部は14.8cmを測り、額部のほりだしはなく、単に深さ0.6cmの明瞭な沈線を正面、両側面にわたって刻している。塔身部は正面、両側面、背面すべてにわたって平滑に成形され、銘文を刻するのに供される。基部は下端より上部へ36.0cmを測り、平滑に成形されることなく荒削りのままで、塔身の横幅より5.7cmほど幅広く成形されている。これは造立時の安定を考慮したものとと思われる。

碑四面にはそれぞれ陰刻で次のような銘文がある。碑正面、額部には**不**(バク=釈迦)、**文**(マン=文珠)、**亮**(アン=普賢)の三尊種子を陰刻する。碑中央に、「奉讀誦大乘妙典一千部」とあり、その両側に「現世安穩 後生善処」の二行、すなわち、法華經草創論第五十九一十九一の中の下二句を刻する。以下に「施主敬白」とある。裏面中央に「干時大永六年丙戌八月廿八日」、「願以此功德」、「普及於一切」、「我等与衆生」、「皆共成仏道」と法華經を刻する。右側面には、額部に**亮**(ウン=普賢菩薩)、以下キヤ・カ・ラ・バ・アと大日如来真言を刻し、その右に「大願主海老原四郎兵衛尉妙為」、左に「本願権小僧都覚淳大法印勢舜」とある。左側面には、額部に**亮**(キリク=阿弥陀)、以下ケン・カン・ラン・バン・アンと大日法身真言を刻し、その左右に「若人求仏慧通達菩提心」、「父母所生身速證大覺位」と菩提心論を刻している。



第3図 羽込部形状模式図

II 板碑 (第4図II, 第6図II)

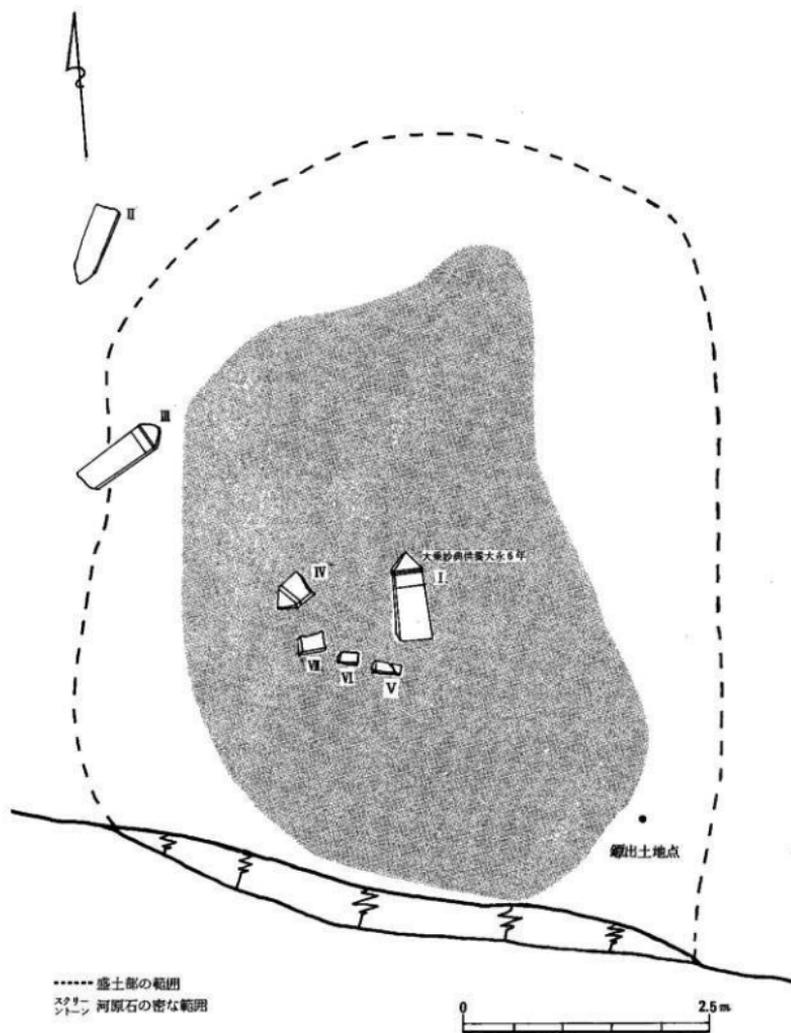
IIは小丘より北西に折れ落ちて、頭部を南西に向けている。現高89.0cm、横幅22.2cm(上部)、23.0cm(下部)、厚さ14.0cm~15.5cmを測る。頭部は正面観で底辺(羽込部上段)の二角がそれぞれ65°を呈する三角形で、碑の平面がそのまま頭部まで延長する。

側面観は各四点が一点に集まらないために台形状を呈する。羽込部は二条の沈線を側面までめぐらし斜方向の切れ込みはない。二条の沈線間は2.0cmを測る。額部も同じく沈線で側面にまでおよび、突出はない。羽込部との間に7.5cmを測る。額部面に墨書で一文字書かれてあるが、消えかけている。おそらく「喝」⁽³⁾と書かれていたと思われる。

塔身は正面、側面、背面すべてを平滑に成形して銘文面を形成しているが、陰刻はなく、墨書跡がかるうじて観察できる。碑表面の墨書はほとんど消滅しており、下記の数文字を確認できたにすぎない。正面に「空風火水地」「□□者為」、「九日」、「干時」、背面に「諸行無常是」、「生滅□□滅」と読める。

III 板碑 (第4図III, 第6図III)

IIIは小丘の北西端に折れ落ち、頂部を北東に向けた位置に倒れている。現高95.6cm、横幅26.0cm、厚さ17.2cmを測る。頭部は正面観で底辺(羽込部上段)の二角がそれぞれ55度を呈する三角形で、これもIIと同じく碑の平面がそ



第4図 大乗妙典供養塚図

のまま頭部まで延長する。側面観は背面の二辺がゆるやかにカーブを描きながら頭頂部まで伸びる形状である。

羽込部は上部の一段部と下部の二段部が直接つながらず、間に0.7cmほどの間隔を設けながら側面までめぐる。羽込は鋭く切りこまれる。額部は羽込部7.6cmを測り、突出なく沈線によって側面までまわりこむ。碑面は浸食が激しく、正面、背面ともに著しく荒れている。よって陰刻、墨書ともに判然としない。

IV板碑（第4図IV，第6図IV）

IVは小丘の中央西側に位置し、頭部を南西に向けて倒れている。塔身上部は現高46.5cm，横幅30.0cm，厚さ12.0cmを測る。頭部は正面観で底辺（羽込部上段）二角がそれぞれ40度を呈する三角形で、これも碑の平面がそのまま頭部まで延長する。

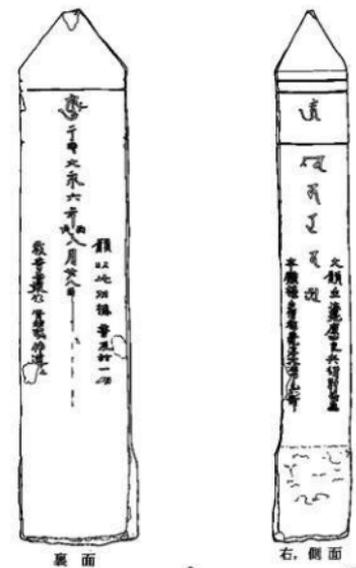
側面観は台形を呈する。従って頭頂は一点とはならず一線となる。羽込部は二段で1.7cmを測り、背面にまで及ぶが、背面は一段となる。額部は羽込部下段より下6cmを測り、背面にまで及ぶ沈線によって区画される。ただし、沈線は羽込部と同じように斜方向に彫り込まれている。

V・VI・VII基部（第4図V，VII，VII）

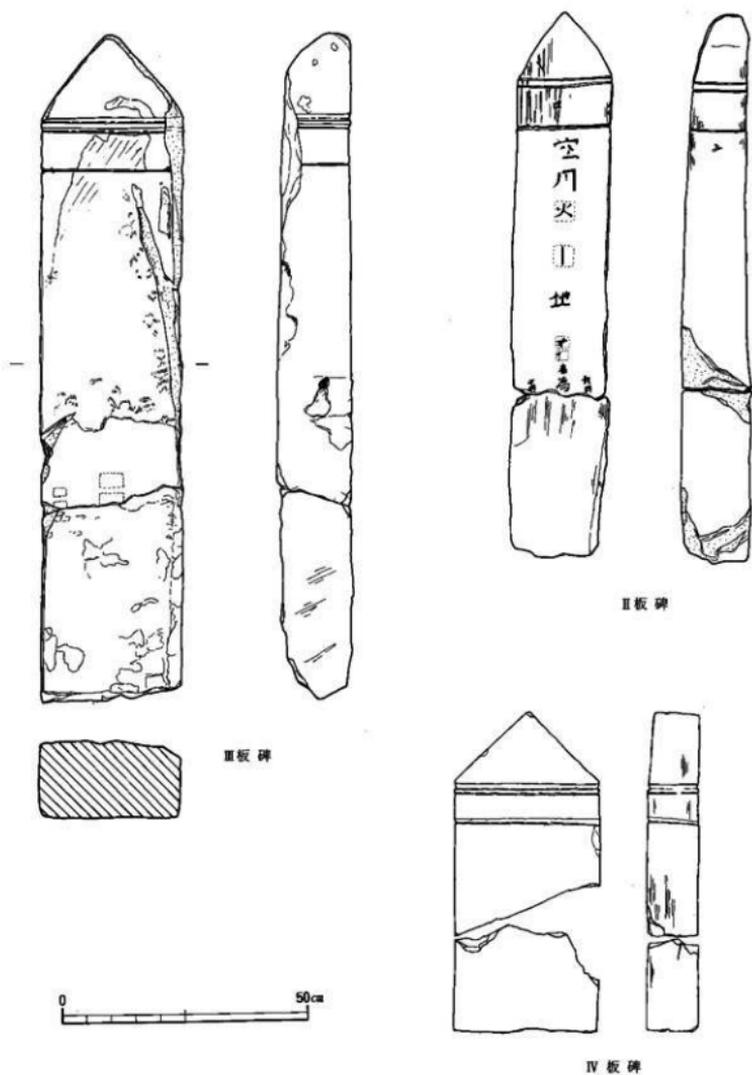
V・VI・VIIは折れ残った基部である。I板碑と若干のずれはあるものの東西に並列している。Vは現高19cm，横幅30.5cm，厚さ12.0cmを測る。VIは現高38.0cm，横幅24.0cm厚さ17.2cmを測る。VIIは現高39.0cm横幅28.0cm，厚さ20.0cmを測る。それぞれVで深さ10cm，VIで32cm，VIIで30cm地下に挿入されていた。ただし，Vは後の復元の結果，基部ではなく塔身の一部であった。

考察

上記の基部V・VI・VIIと塔身II・III・IVを復元した結果，基部Vと塔身IV，基部VIと塔身II，基部Vと塔身IIIがそれぞれ対応し完形となった。このことから，この小丘上には，四基の板碑が造立されていたことが判明した。ここで便宜的に四基の板碑を東から順に，A（I板碑—完形のもの），B（基部Vと塔身IVを接合したもの），C（同じく基部VIと塔身II），D（同じく基部VIIと塔身III）とした。これによって，復元全



第5図 小山尻西遺跡大聖妙典供養大永六年板碑実測図



第 6 图 小山尻西遺跡出土 II. III. IV 板碑实测图

長を測るとそれぞれ、A 160.5 cm, B 65.5 cm, C 127.0 cm D 134.0 cm となった。Bの全長は65.5 cmと他の三基と比較して極端に低い。横幅は30.0 cmを測るから全長と横幅の関係でみると、基だアンバラスである。基部Vをみると他の二つの基部のもっている特徴をそなえていないことがわかる。即ち、一般的に基部は正面、両側面、背面の全面にわたって平滑に調整されることなく、荒削の部分を残すのが普通である。また、造立後の倒壊を防ぐために、横幅を塔身幅より大きくとって安定を増すように成形されるか、逆に下端を鋭くして地面に挿入しやすく成形する。ところが、基部Vは塔身IVと横幅がほとんど変わらず、碑面は平滑に成形されている。実際、基部Vを小丘より掘り出す時、他の基部VI・VIIを掘り出す時より容易であった。

よって、基部Vとしたものは、塔身の一部が折損して残ったものと理解し、B板碑はその横幅から推定して少なくとも全長130 cm前後の碑であったと考えられる。また、このことから、A・B・C・D板碑の造立位置が、造立当時から不変であったと考えることは難しく、何度かの移動があったものとみなすのが妥当であると考えられる。

銘文により造立年代がわかるものは、A板碑のみであり、他は碑面に剝離して、著しく損傷するか墨書が消えて判読不可能であるため、碑の形状によってその造立時期を推測する他にない。この小丘上の四基の板碑中、A板碑がその大きさや各部の形状、銘文等によって中心的な位置を占めることはまちがいなさう。B・C・D板碑の頭部は、A板碑の頭部のように、一点に集まらず、各線が線に集まる形状で、これは古式の板碑にはみられない形状であり、B・C・D板碑の頭部形状は、A板碑より新しい形態である。羽込部をみると、BはAと同じく羽込部を斜方向に切り込む一般形状で、最も古式の板碑から江戸期の新しい板碑まで普遍的にみうけられる。Cは沈線のみで羽込部を表現する形態であり、板碑最盛期の最も簡略化した小形の板碑によくみられる。D板碑の羽込部は一段目と二段目之間隔を設けるタイプである。これは量的には数少ない。知る限りでは、A板碑と同時期、大永年間から江戸期にわたってみられる。

額部のはりだしは、A・B・C・D、いずれの板碑も表現されておらず、沈線のみである。一般的に額部は、突出度が大きいほど古式である。

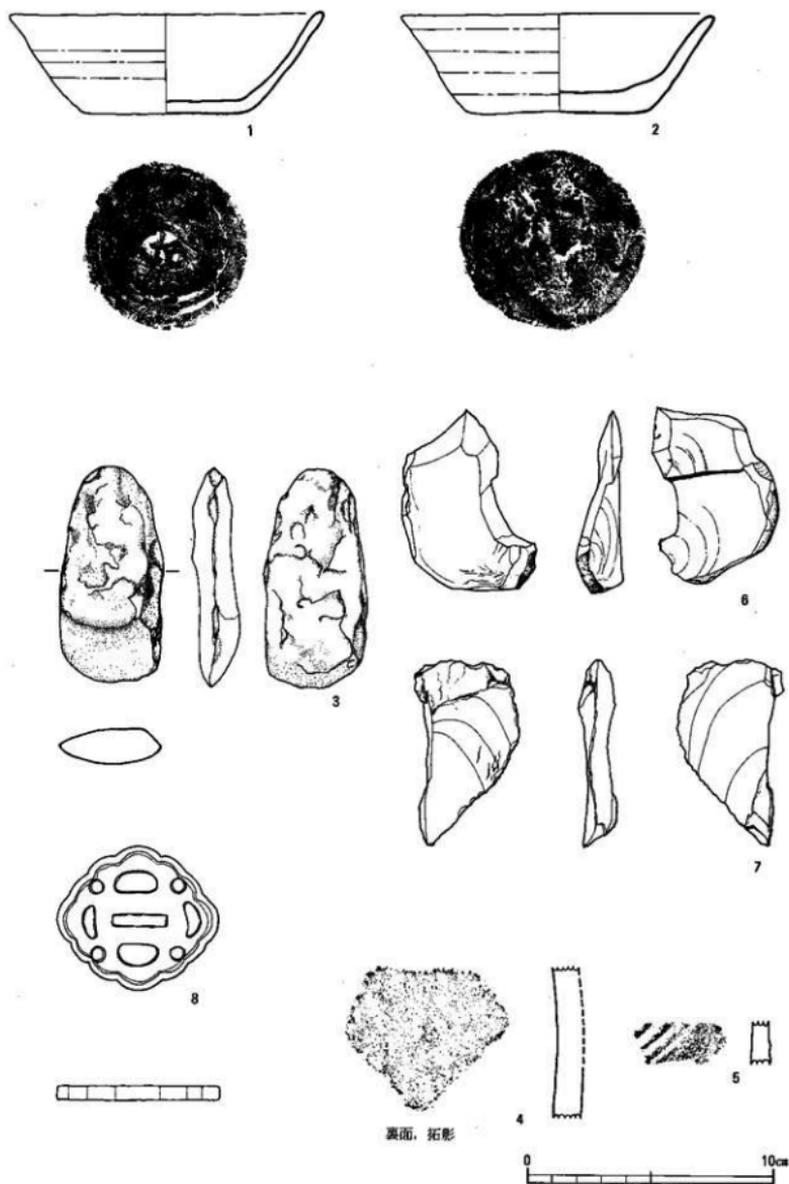
以上、形態上、B・C・D板碑はA板碑より先行するものではないと考えられ、B・C・D板碑の中では、D板碑が最も古い形状を有し、B・Cがそれに続くものと思われる。

その他の遺物

大乗妙典供養板碑より南西方向3 m、ちょうど河原石の範囲がきれる位置に、河原石混じりの表土から小型の粗製鉄地鍔物鐔が出土した。鐔(第7図8)の形は十二木瓜型で、長径6.6 cm、短径5.9 cm厚さは切羽台のところで3.6 cm耳部で4.5 cmを測る。これは切羽台の厚さが、實際より薄い中低といわれるもので、耳は土手耳となる。切羽台に銘はない。小柄榫孔、斧榫孔は卵形である。この鐔は盛土より出土したとはいえ、供献されたものとは考えにくいと思われる。その他、素焼き土器と思われる小破片が板碑基部付近から出土したが、磨耗して実測に耐えないものであった。

NI, S2 トレンチの遺物(第7図)

NI トレンチからは土師器の杯二点、石斧一点、縄文土器片二点、チャート製のチップ数点が出土している。土師杯はII層(黒褐色土)から出土し、二点は重なりあっていた。一点(第7図1)は口径12.7 cm、底径6.6 cm、器高4.1 cmを測り、底部からの立ち上がりは丸味をもって立ちあがる。底部、体部とも極めて薄い。もう一点(第7図2)は口径12.5 cm、底径7.2 cm、器高4.1 cmを測り、これも丸味をもちながら底部から立ちあがっている。底部は心もち上げ底となっている。ともにへう切底である。石斧と縄文土器片はIV層(オレンジ色土)下の粘質オレンジ色土中より



第7图 小山灰西遗址出土文物实测图

出土している。石斧(第7図3)は最大長8.8cm, 最大幅4.1cm, 最大厚1.65cmを測る短冊形の局部磨製石斧で、全面に磨耗が激しく鋭い面を残していない。縄文土器片はわずか二点のみの出土であった。一点(第7図4)は表面が完全に剝離しており紋様を観察し得なかった。胎土に大粒(6~7mm)の長石を多く含んで焼成は極めて不良である。もう一点(第7図5)も表面が磨耗し、かろうじて条痕を観察できる程度である。

S2グリッドでは同じくIV層より、銅片石器二点が出土し、土器の出土はなかった。第7図6は二次的な剝離が片面にみられ、刃部をつくりだしている。先端を鋭く調整しており、鏃として使用された可能性もある。第7図7は片面に細かな小剝離痕を有し刃部をつくり出している。下端に未加工の自然面を残している。

第4節 歴史的背景

本遺跡の大乗妙供養板碑が造立された頃、即ち大永年間の加納、木原、船曳、今泉、田野の五郷は伊東氏の支配下にあり、文安年間に伊東祐堯の所領となって以来、約130年後の天正5年(1577年)まで伊東氏の所領であった。当の伊東氏は、今の都城地方をめぐって島津氏と激しく覇を争い、あるいは内訌の最中にあった。日向纂記によれば、A板碑が造立される三年前の大永三年(1523年)には、7代伊祐が真幸の北原氏との戦いの最中に没し、子の祐充が伊東八代の統を嗣いでいる。大永四年(1524年)には敵対していた北原氏より領地の一部を返還され、北郷氏と結ぶ島津氏と一時的な和平の盟約を結び、暫時の小康状態に入った。続く大永六年(1526年)には祐充の命により、荒武氏を肥後に派遣し、大童刑部左衛門の乱を鎮圧せしめている。日向纂記は、中世が間断のない争いの連続であったことを語っており、このことは中世に造立された供養碑の銘文の中に、戦さに倒れた兵を供養したものが散見され、造立者も僧籍にあるものの他は、武士階級を思わせるものがほとんどであることを考えようとする。A板碑の碑面右側面にみられる海老原四郎兵衛尉も、武士階級であったことは疑いないが、海老原四郎兵衛なるものを文献中に確認し、特定することはできなかった。ただ、伊東氏に関する記事の中に、たびたびその姓をみることはできた。例えば、資料中より同時期の海老原姓をみると、日向纂記の中に「伊東氏の将、海老原隠岐守、長倉兼山ノ口城に配す」との記事、日向記巻第四「三俣御陣並合戦」の記事中に海老原志摩介為安、海老原弥二郎為長、海老原二郎三郎、海老原六郎太郎為用などの諸氏を、同じく「豊州衆依手替山東引事」(永禄5年)1562年の記事に海老原清左衛門尉をみる事ができる。しかし、前者は都城の和田梶山衆、後者は田野衆であり、清武周辺の海老原姓を確認できなかった。しかし、造立地が伊東氏の支配地であることを考えあわせると、この海老原四郎兵衛という人物も密接に伊東氏とかかわりのある者であろうと考えられる。もう一つ、時代は約70年後になるが、上加納坂に次のように刻された石碑が残っている。「慶長五年庚子十月朔日」「○岑浄江居士」「海老原次郎助廿八打死」一確かに海老原姓を名のる一族がこの地にいたことを確信できる資料であり、清武の地と海老原氏を結びつける一つの手がかりとなると思う。

〔註〕

- (1) 盛土南端は、重機によって削られており、さらに1~2m延びていたものと思われる。
- (2) 「二条線」、「羽きざり」と呼称されるが、ここでは「羽込み」とする。
- (3) 「鴨」以外に「咄」、「妙」、「貴」などを額部に刻するものがある。禪宗系である。

第5節 ま と め

小山尻西遺跡では、縄文・平安・室町の各時代に比定できる遺構、遺物を確認した。ここでは本遺跡の中心をなす大乗妙典供養塚について考察してみたい。

まず、大乗妙典供養碑の形状をみてみると、頭部、羽込部、額部、塔身部の面積はすべて平面であり、比較的曲面が用いられることの多い頭部構成でさえ平面を用いている。従って碑全体から受ける印象は極めて直線的、鋭角的で、県内の鎌倉、南北朝期の板碑のような大胆で雄渾な印象とはかけ離れている。本板碑近くに立地する山内石塔群の板碑の中にも、この板碑と同様の形態をとるものを散見するが、むしろこの板碑の直線的かつ鋭角的な形状は、宮崎市生日本勝寺に所在する福目板碑群に似かよっている。他の3基は、頭部、羽込部形状、そして全体から受ける印象も山内石塔群のものと大差を感じない。

碑面に記される銘文字数が多いことも經典供養碑の特徴の一つで、願主、願文の他、経文が碑正面ばかりか両側面、背面にまで及ぶことがしばしばである。

従って、銘文を側面までに記さなぐために、側面の厚みを大きくするものが現れる。碑面の横幅に対する厚みを扁平率⁽¹⁾として表わすならば、中には100%に近い値を出し、板碑というよりは柱碑とでも表現したいような形態をもつものが現れる。例えば、宮崎市大字古吉、大王寺境内にある永禄11年銘の法華經典一千部供養板碑は、総高119.7cm 横幅27.3cm、厚さ25cmで扁平率は実に92%である。

本遺跡の大乗妙典供養碑の扁平率は66%であり、「日向の金石文」⁽²⁾に掲載されている板碑（羽込部を有する九州型板碑とし、自然石板碑や、値の記載のないものは除外した。）82基の平均扁平率61%を上回っている。これはまた經典供養碑のみられない山内石塔群中の71基の扁平率55%をも上回る値である。

柱型の板碑が多い鹿児島県の例をみると、38基の平均的扁平率69%を示し、本遺跡の大乗妙典供養碑の扁平率に近い値を持っている。扁平率については板碑総高との関連をも考慮に入れながら検討すべきであり、今後の課題としたい。

大乗妙典供養板碑の碑面に刻されている大乗妙典とは、華嚴經、法華經、涅槃經等の大乗を説く教典の総称で、特定の經典をさすものではない。大乗妙典の説話を碑文に銘記する板碑としては、この小山尻遺跡の大永六年（1526年）の板碑が最も古いと思われる。ただし、板碑以外では明応五年（1496）銘記の変形宝篋印塔があって、これには、鎌倉誌大乗妙典三千部、同金剛經五千四十八巻とある。經典を明確にしたものとして、文安四年（1447）の六地藏碑があり、これが日向における經典供養碑の最も古いものである。銘文には華嚴南無一乗妙法蓮華經とある。

經典供養銘記の供養塔を一覧表にすると表⁽⁴⁾のようになり、これをみると經典供養碑26基の内、明らかに追善と考えられるものは三基で、残りの23基はいずれも本願主が生前に造立したものである。碑例として、鹿児島島の板碑をみると、総計70基のうち經典供養と思われるものが9基あり、うち2基が追善供養である。これによって、經典供養は逆修供養が多いと理解してもよいだろう。

本板碑の場合は、銘文中に特定の個人の追善を思わせる字句がないことから、願主本人の逆修碑か、あるいはこの時代によく行なわれた戦乱に倒れた不特定多数の敵味方を同時に供養して領地の平和を願う追善供養かと思われる。文献資料の中に經典供養の具体的な例をさがすと次のようなものがある。

「近年依騒動多人数亡ケレハ國家安康ヲ希ヒ為善根同八月晦日ヨリ九月八日迄都於郡六ヶ所ノ寺家ニテ法花妙典一万部誦シテフ其功德ニ依テ國中無為泰平ニ治リ其善近国ニ無雙コソ聞エケレ」日向記巻第四、「祐清佐土原御入城事」これは伊東氏の10代義祐が、天文5年（1536年）に行なった例でこれほど大がかりでなくとも、武士階級の間で經典供養はしばしば行なわれたようである。

以上のように經典供養碑の背景には、数日間をかけた法要という祈念に向かっている宗教的営みがあり、それを主催

できるだけ多大な経済力を有した人々の存在をも意識する必要がある。

次に供養碑の立地を考えてみたい。元来、板碑が造立される場所は寺社の境内、台地、丘陵、墓地、小径の辻などが多い。このうち寺社の境内が最もよく利用されるが、境内といつても大量にみられるところでは、寺院敷地内の山の斜面が供されるようである。例えば、日南市妖肥大道寺址永仁3年板碑、えびの市彦山寺址正中二年板碑のような古い年紀銘をもつものでも寺院境内であり、宮崎学園都市遺跡中の山内石塔群は丘陵斜面、宮崎市生目本勝寺題目板碑群は寺院敷地内の斜面を利用している。本碑の場合は丘陵上であるが、単に自然地形上に建てられたものでなく、人工的に盛土した上に河原石（玉砂利）を葺くという手の入った造立法をとっている。県内の大型でしかも造立時期の古い代表的板碑をみてこの様な例を知らず貴重な一例である。この盛土部はまた、保存状態がよく造立時の形態をよく残している。いつの頃かはわからないが、この丘陵は子籠（コゴモリ）と呼ばれ、供養碑の上に御光がさしていたという伝説が地元に残っており、人跡まれであったことが当時の状態にちかく維持できた原因であろう。盛土をしたうえ石造供養塔を造立するというのは、「飢餓草紙」がその初見であり、本来的な造立法であったと考えられ、そういった意味でも本遺跡の供養塚がもつ意味は大きいと思われる。

表1 宮崎県内経典供養碑一覧表

番号	年号	所在	供養碑種別	経典銘文	備考
1	文安四 (1447)	小 林 市	六 地 蔵 碑	法華貞設一千部	
2	明 応 五 (1496)	宮 崎 市 赤 江	変形宝篋印塔	隨着説大乗妙典三千部 同金剛經五千四十八卷	ア バ マ ン
3	天 文 二 (1533)	高 原 町	板 碑	奉説誦法華妙典	バ ン バ ン
4	天 文 四 (1535)	佐 上 原 町 止 瀬	板 碑	奉説誦大乗妙典一千部	バ タ
5	天 文 九 (1540)	都 城 市 志 和 池	石 碑	奉説誦法華經王五千部・六會經一藏 奉書法華經一字一石一萬八千四百本	
6	天 文 十 四 (1545)	東 諸 県 郡 本 庄	板 碑	奉説誦大乗妙典一千部供養	類 あり
7	天 文 二 十 (1551)	児 湯 郡 木 城 町	六 地 蔵 碑	奉為法華經一千部供養六地藏尊形因	キ リ コ ノ タ マ
8	天 文 二 十 一 (1552)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	奉説誦大乗妙典一千部	類 あり 堀・黙・心
9	永 祿 十 一 (1568)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	慶奉者護法華一千部為現当二世	円 相 ㊦
10	永 祿 十 一 (1568)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	護奉説誦法華一千部為現当二世也	円 相 ㊦
11	永 祿 十 一 (1568)	宮 崎 郡 清 武 町	無 縫 塔	奉書院大乗金剛經〇千以十八卷成就	
12	永 祿 十 一 (1569)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	欽奉者護法華一千部功德忙迎	
13	永 祿 十 二 (1569)	児 湯 郡 都 農 町	板 碑	〇〇大乗妙典一千部石志摩惠林宗智 三十三通忌也	キヤ (陽刻)
14	永 祿 十 二 (1569)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	奉説誦經王一千部成就得人無ノ上道之地也	円 相
15	永 祿 十 三 (1570)	宮 崎 市 住 吉	板 碑	奉説誦經王一千部の供養也	鈔
16	永 祿 十 三 (1570)	東 諸 県 郡 人 字 八 代 川 上	板 碑	奉説誦大乗妙典一千部成就之処	円 相
17	元 龜 一 (1571)	児 湯 郡 都 農 町	板 碑	奉書法華經大乗妙典一千部石志者 妙清大師二十五通忌也	ベ イ
18	元 龜 三 (1572)	宮 崎 市 赤 江	板 碑	奉説誦大乗妙典一千部	ア
19	天 正 三 (1575)	佐 上 原 町	板 碑	奉説〇誦大乗妙典	㊦
20	天 正 四 (1576)	宮 崎 市 住 吉	六 地 蔵 碑	奉説誦大乗妙典一千部	
21	天 正 六 (1578)	宮 崎 市 瓜 生 野	板 碑	奉説誦法華妙典 一千部供養	
22	天 正 六 (1578)	宮 崎 郡 清 武 町	板 碑	念仏五百遍、奉説誦普門品五萬	

番号	年号	所 在	供養碑種別	経典銘文	備考
23	天正七 (1579)	東諸県郡大字八代	板 碑	奉読誦大乗妙典一千部供養	内 相 類 あ り
24	天正十 (1582)	西諸県郡飯野	板 碑	奉供養法華一千部幻生童子無上證果故也	カ ン マ ン
25	天正十三 (1585)	児湯郡川南町	六地蔵碑	誦奉別誦大乗妙典一千部為戦死者各堂	
26	天正十五 (1587)	宮崎市大淀	六地蔵碑	〇〇経一卷一字一石埋之供養者也 如是所修之善根者願意僧都百初七日〇	
27	寛文元 (1661)	宮崎郡清武町	石 碑 (羽込部なし)	奉読誦大乗妙典二百部、二世安業所	
28	正徳四 (1714)	〃		誦奉読誦大乗妙典一千部	仏
29	享保十七 (1732)	〃		奉読誦大乗妙典一千部	

〔註〕

- (1) 扁平率は厚さを横幅で割った値に100をかけたもの、100%に近づくほど柱にちかく0に近づくほど板にちかい。
- (2) 瀬之口伝九郎「日向之金石文」(『宮崎県史蹟名勝天然記念物報告』第12輯、1942)
- (3) 「鹿兒島県の板碑」(『鹿兒島県文化財調査報告書』第5輯、1955)
- (4) 瀬之口伝九郎「日向之金石文」(『宮崎県史蹟名勝天然記念物報告』第12輯、1942)の他、「清武町の文化財」第1集～第4集に記載のものを中心に筆者知見のものを加えたが、ほんの一部にすぎないと思われる。
- (5) 「清武町の文化財」第4集、石造物、木版圖(清武町文化財保護審議委員会)昭56

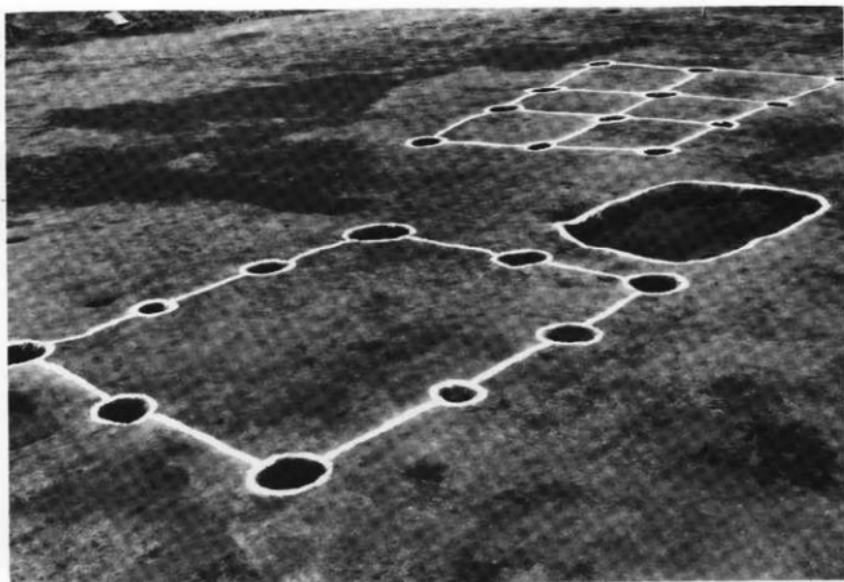
編 版 図



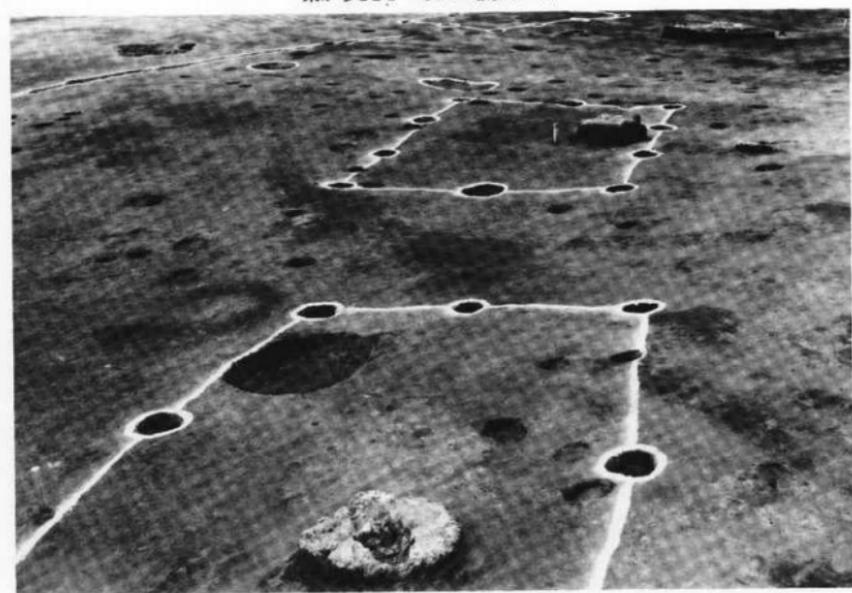
下田畑遺跡 遠景 (南東より)



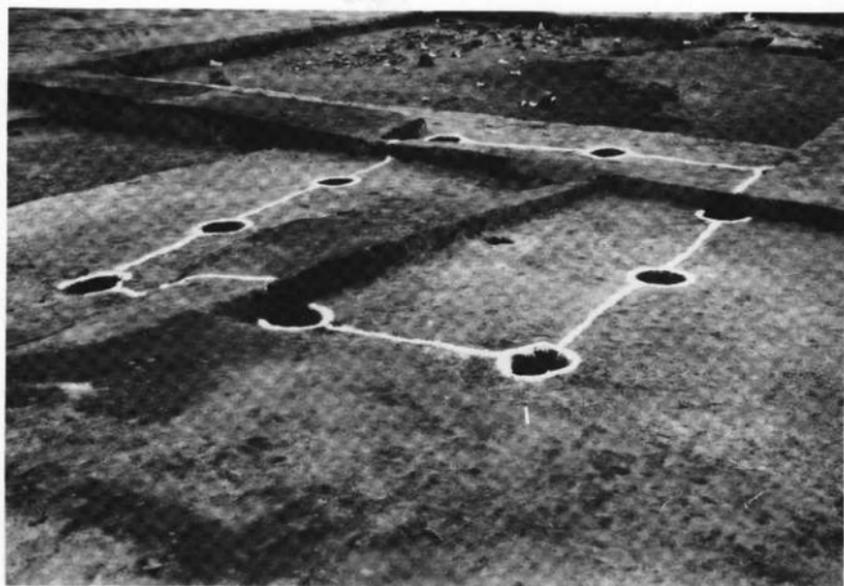
A区 遺物出土状況 (北東より)



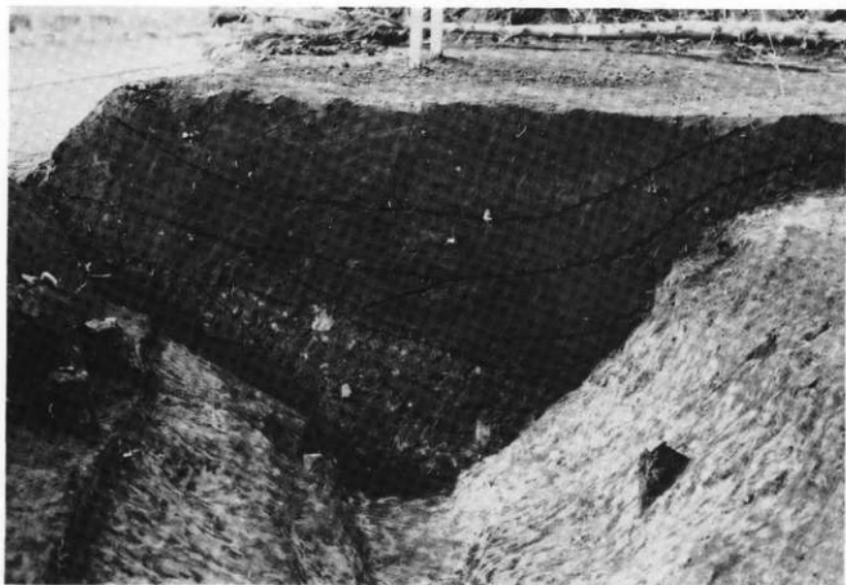
東からSB2・SB3 (南西より)



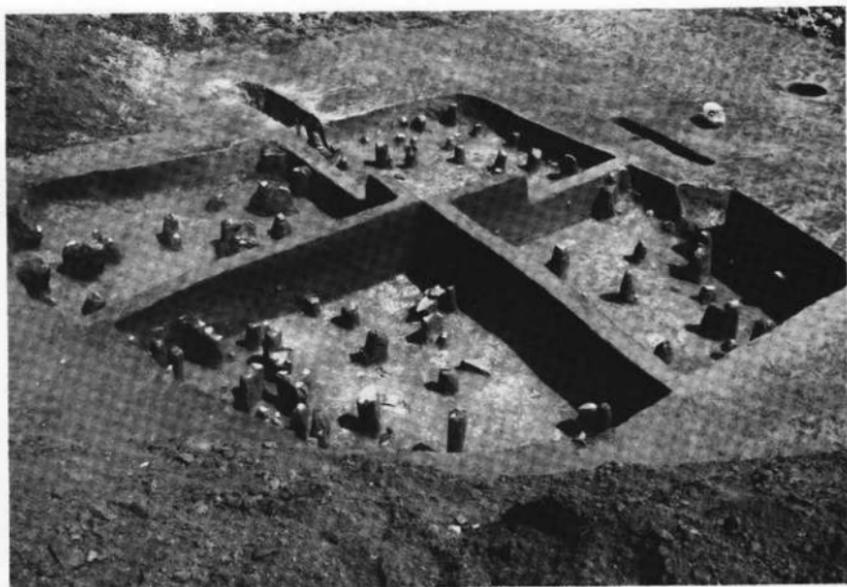
東からSB1・SB4・SB5 (南西より)



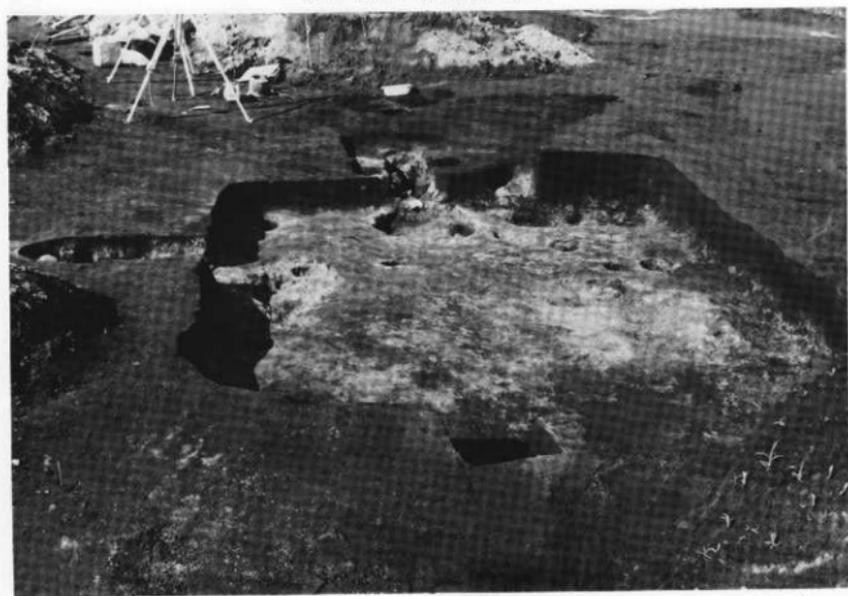
SB7 (南東より)



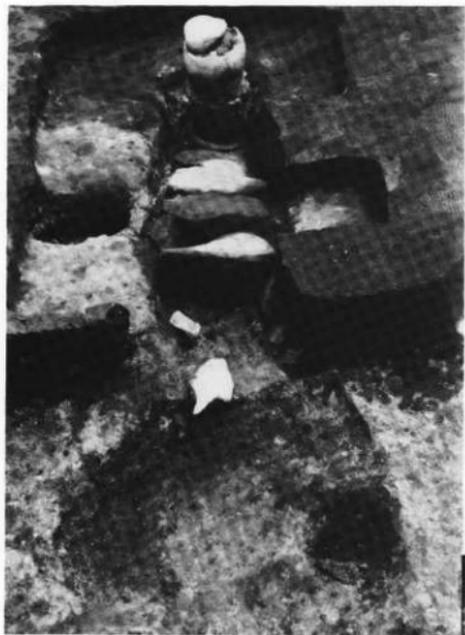
SE1 セクション



SA2 遺物出土状況 (南西より)



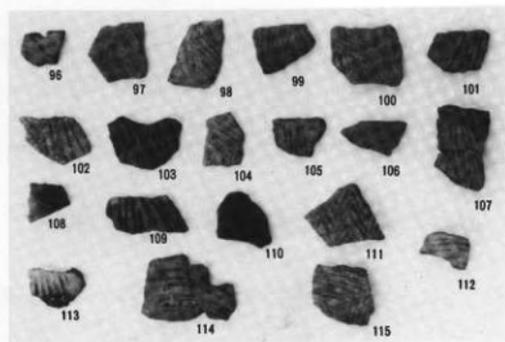
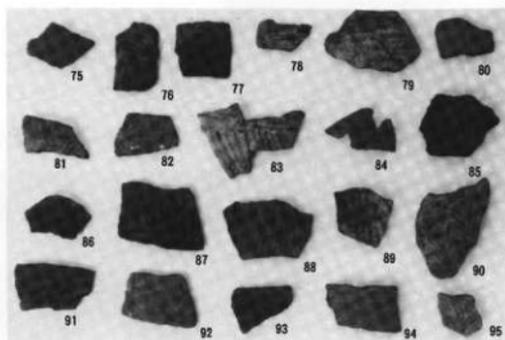
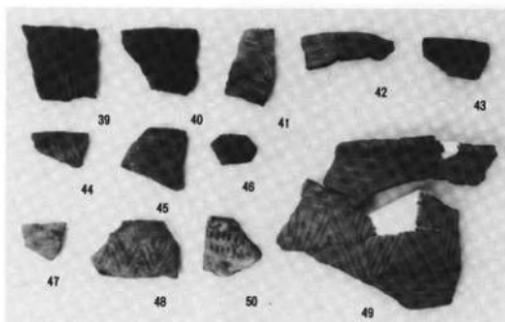
SA2 (北西より)

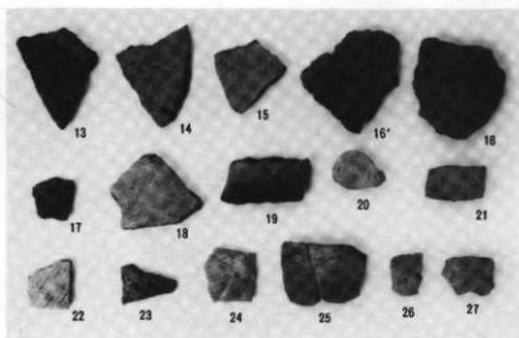
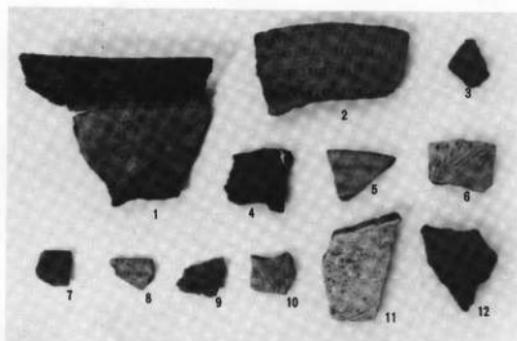
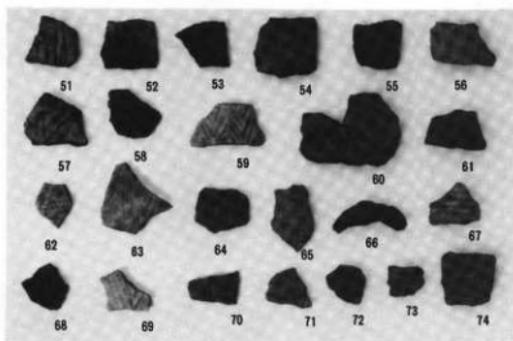


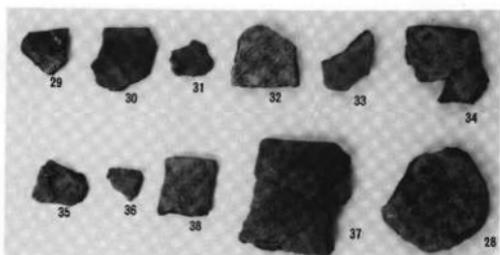
A 2 東カマド (西より)



SA 2 東カマド (西より)

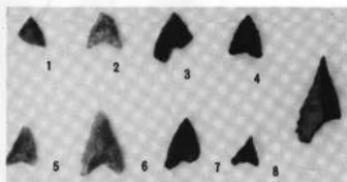






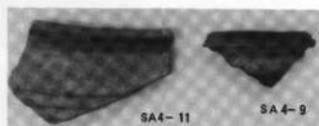
第9図

第38図



第4図

第2図



SA4-11

SA4-9



SA4-1



SA4-10

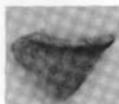


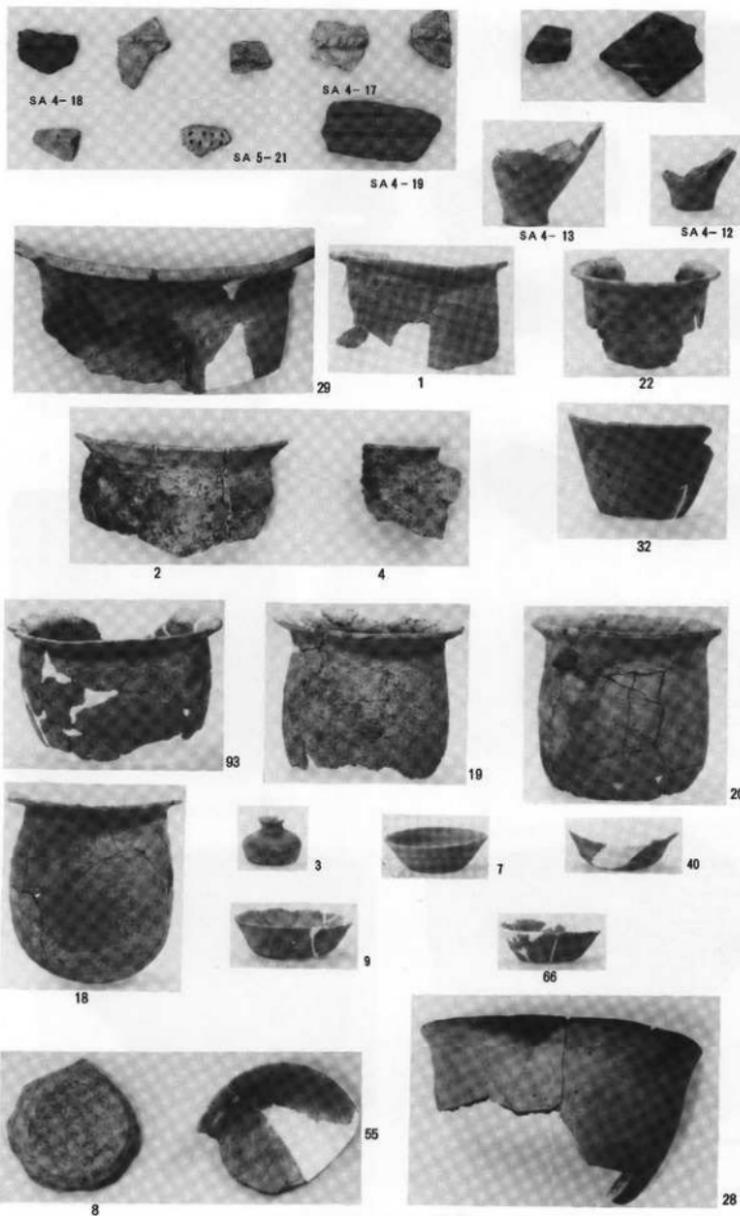
SA4-15

SA4-14



SA4





弥生土器・土師器

